

---

# 賢者の失敗

小聲早田

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

賢者の失敗

### 【Nコード】

N3112J

### 【作者名】

小声早田

### 【あらすじ】

失業中で切羽詰まっていた私。面接を受けに訪ねた会社で待っていたのは異世界から来たという胡散臭い自称賢者だった。見知らぬ城の庭園に放り出され、王子を狙う呪術師ではと疑いをかけられそうになった私は、咄嗟に年齢を誤魔化すが……。狡い主人公と癖のある男性達による甘くない逆ハーモニー物語です。

## 01 プロローグ

やわらかな線を描く噴水の飛沫は銀に染まり、寸分の狂いなく整えられた植え込みの頂きからのぞくギリシヤ神話の神々を模したかのような彫像は、そのあまりの繊細な表情に、吐息に触れられるのではと錯覚を起こさせる。加えて、夜の帷が降りて尚、芳しい香を放つ色とりどりの花々。優しい月の光に包まれた庭園は、文句なしに美しい。こんな時でなければ、カメラ片手にゆっくり散策したいものだ。そう、こんな時でさえなければ……。

今、私は追われていた。鈍く銀の光を放つ、西洋風の鎧に身を包んだ一団に。

一度発見されたのち、庭園内を闇雲に走り回り、鎧集団の目から逃れた一瞬の間に、植木の陰にとかくれた。それからただただ身を丸め息を潜めている。

ふと、幼い頃にした隠れんぼを思い出すが、これはそんな牧歌的なものではない。爽やかな夜風に乗って、殺気立った怒号と、腰に吊るされた剣が鎧にこすれる重く鋭い音が届く。視界の悪い中、木々の間を走り回ったせいで出来た無数の傷がひりひりと痛んだ。

まずいよねえ。

逃げ回る最中に、チラリと見えた白亜の建物は、お城としか形容のしようがないもので、当然ながら住人はやんごとなき身分の人々だろう。鎧集団は城を守る警備兵といった所か。

不法侵入で逮捕、裁判の後初犯で執行猶予。なんて展開にならないであろう事は、半ば思考を拒否した頭でも容易に想像がつく。よくて切り捨て御免、悪けりや拷問後処刑、なんて事もあり得そうだ。

あの馬鹿賢者。いや、自称賢者の薄情者め！ よりによってなんて所に放置するんだ！

私がこの事態を引き起こした男に胸中で悪態をついていると、耳

障りな足音と共に幾つかの明かりが近づき、私の潜む植え込みの手前で止まった。

「くそつ、見つからんな。いったい何処に逃げたんだ……………」

「さあな、だがそう遠くにはいつておるまい」

野太い男の声がすぐ側で聞こえる。

ああ、神様、仏様、ご先祖様、雷様、この際なんでもいいからお助け下さい。

少しでも動けば衣擦れの音で気付かれるだろう、逃げ出そうとする足を必死に留め、兵士達が去るよう一心不乱に祈ってはみたものの、信心のない願いが届くはずもなく、兵士達は一向に立ち去る気配を見せない。

「なあ、侵入者は例の呪術師だと思うか？」

「呪術師？ ああ、殿下を狙っているというフォルセルの呪術師か」

ばかりか、悠長に立ち話を始めた。その内容に冷たい汗が背中を滑り落ちる。彼らの言う、侵入者とはまず間違はなく私の事だろう。しかし、呪術師って何？ 殿下を狙うってどういうこと？ 全くかすりもしていない兵士達の憶測に腹の奥がきゅっと縮んだ気がした。もし、もしも、そんな危険人物と間違われたりなんかしたら……………拷問コース行きは免れそうにない。

どうしよう。どうしたらここから逃げ出せる？ 恐怖に目をつぶり、それでも必死に頭を働かせようと試みるが、地理も何も分からないこの場所から、退路など見出せるはずもない。駄目だ。逃げられる気がしない。せめて、その呪術師とやらが私と似ても似つかぬ手合いだったらいいのに。

「どうだかな……………知っているか？ その呪術師だが若い女らし

いな」

「その話なら俺も聞いた事があるぞ。なんでも20半ばの黒髪の女だとか」

「ほう、黒髪とは珍しい」

ふざけんなっ！

そう、思わず突っ込みそうになったのをぐつと堪えた。外見上の条件がぴったりだななんていくら何でも拙過ぎる。

「おいおい、本当か？ どこからの情報なんだ？」

「出所は知らんが、侍女達が喋っていてな」

「は？ なんで侍女共がそんな事を知っているんだよ」

そつだ！ 城を守護する兵士を差し置いて、なんで侍女がそんな事を知っているんだ！

「おまえ知らんのか？ 侍女達の情報網は馬鹿にならんだぞ。先日のベルイマン卿失脚も元はといえば侍女達の噂話がかきつけだそつだ」

発言を諷められ、侍女を軽んじていた風な兵士は絶句した後、呆然と呟いた。

「……………敵にまわしたくない相手だな」

「違うない」

おい、女の噂を信じるな。違う。違うよ。ベルイマン卿は知らんが少なくとも私は違うぞ。なんて迷惑な噂話をするんだ！ というか、侍女の教育なってないわ。上の身分の人間をつかまえて噂話にしちゃうってどうなのよ。

頭をかきむしりたくなる衝動に耐えつつ耳を澄ましていると、新たに下草を踏みしめる気配があった。

「見つからぬようだな」

低い、低い声だった。しかし、素晴らしく艶やかで品がある。男は明かりも持たずに、流れるような足取りで近づいた。

「ここはもうよい。他の搜索に当たれ」

なんて良い声だろう。状況も忘れて思わず聞き入ったその時、背後から伸びた腕に胸倉を掴まれた。かと思うと、あっという間にうつ伏せに引きずり倒される。

「うぐっ」

余りの素早さ、意外な方向からの力の作用に、心の準備をする間もなく強かに地面に打ち付けられる。呼吸が止まり、瞼の裏に白い星が飛んだ。左肩を手で地に縫いつけられ、背中には恐らく膝を衝かれているのだろう、全く持って身動き出来ない上に、さらにご丁寧に首に冷たい物が押し当てられる。

「動くなよ」

私の背に跨る人物は、ぞっとするような冷たい声でそう告げた。

いやいや、動きたくても動けませんってば。

## 02 扉(前書き)

この話のみ「日本語」  
『ノルティアの一言語となって  
います。

その日、私はとある会社の面接を受けに、バスと電車を乗り継いで某オフィス街へとやって来た。地下鉄の階段を昇ると日の光を受けて燦然と輝くビル群に囲まれる。

眩しい。地下の蛍光灯に慣れた目には強すぎる光に、思わず目を瞑り俯くと、手を翳して影を作りそつと顔を上げる。家を出てからというもの、また駄目なのではと幾度も萎えそうになる心を奮い立たせここまで来た。

折からの不況で勤めていた会社が倒産してからというもの、落ち込む間もなく、職探しに励んできたが、求職者の溢れた昨今、そう簡単に見つかるはずもない。

何度もハローワークに足を運び、求人紙のチェックも怠らず、面接も幾度も受けたが、全て空振り。失業手当も切れる寸前。焦る私の目にそれが飛び込んだのは昨日のハローワーク帰りに、黒ぶち眼鏡をかけた栗色の肩までの髪を一つに束ねた男性に貰った、見慣れぬ求人紙を見ていた時だ。

事務員の募集。余りの好条件、理想の募集に矢も盾もたまらず飛びついた。急いで家に帰り、電話をかける。出たのは、穏やかな声の若い男だった。

「訳あって急ぎの募集ですので、明日にでも面接にいらして下さい」

男は丁寧に、けれど何度も、急ぎである事、すぐにも勤めて欲しい事を切々と訴えると、面接の時間を指定し「お待ちしております」と電話を切った。

あまりの好感触に思わず首を傾げなくなる。これだけの好条件、焦らずとも幾人も応募があるだろうに。まるで貴方に決まりましたと言わんばかりの対応だった。何やら引っかかりを覚えたが、よ



ようやく差し込んだ希望の光に浮かれて、私はそれを記憶の片隅へと  
おいやってしまった……迂闊な事に。思い出しもしなかったのだ。

掲載されていた住所を頼りにたどり着いたのは、6階建てのまだ  
新しい小ぢんまりとしたビルだった。1フロア毎に1社から2社が  
オフィスを構えている。その最上階を借り切っているのが、私の目  
的地であるFOR社だ。

エレベーターから降りると、短い廊下を挟んで？FORのプレー  
トがはめ込まれた、至って簡素な作りのドアがあった。

私は小さく深呼吸するとドアをノックし、緊張を押し殺した声で  
「失礼します」と告げる。

ドアを開けると目に飛び込んできたのは、一面の緑と1人の男だ  
った。

え？ 疑問が形になる前に男が口を開く。

「ようこそシルヴァンティエへ！」

満面の笑みを浮かべた男が目の前にたらされた赤い紐をひくと、  
頭上を覆う青々とした葉を茂らせた木々の一枝に結ばれた極彩色の  
くす球が割れ、色とりどりの紙切れが降り注ぐ。

鬱蒼とした森に囲まれた小さな泉の前に立つ男の背後で、地を震  
わす轟音と共に盛大に花火が上がった。

私はあんぐりと口を開け、ドアノブを握った姿勢のまま、固まっ  
てしまった。

ここ、ビルの中だよね？

打ち上がった花火が火の粉となって静かに地に落ちる頃になって、  
ようやく私は体を動かす事に成功する。

「すみません。部屋を間違えました」

簡潔に、感情を込めず、そう言うと、踵を返して元きたビルの廊

下へと足を踏み出そうとする。しかし、背後から伸ばされた男の手に肩を掴まれ阻まれた。

「間違いじゃありませんよ。お待ちしていました。榊恵子さん」

聞き覚えのある声。男は昨日の電話の相手であろう。残念な事に間違いではなかったらしい。名前を呼ばれ、首だけ振り返り、男の顔を凝視する。

にこやかな笑みを崩さぬ男の髪は金色で、その瞳は明るく澄んだ青い色をしており、顔立ちも日本人のそれとは違う。何より異質なのはその衣服。肩から足首までをすっぽりと覆う生成りの一枚布は、両肩の少し下からスリットが入り、どうやらそこから腕を出し入れするらしい。21世紀の日本では、ちょっとお目にかかれないデザインだ。

コスプレ好きで、斬新なりフォームが趣味の外国人。そう、例えばオフィス街のビルの一室に空間の奥行きを歪めて森を造ってしまふような。そうだ、そうに違いない。というかそういう事にしよう。我ながら苦しい解釈を無理矢理飲み込み、

「ソーリー。アイドントスピークイングリッシュ」

素晴らしい日本語発音で告げると逃亡を図るべく前を向く。君子危うきに近寄らずだ。

「僕、日本語で喋ってますよね？」

「ソーリー。ソーリー。アイ」

「日本語、喋ってますよね？」

振り向きもせずに答えた声は途中で遮られた。

肩に置かれた男の手には、さして力がかかっているようでもない

のに体が動かない。  
すぐ傍に立つ男に僅かな恐れが生まれた。

「やだなー。大丈夫ですよ。別に獲って食おうって訳じゃないんですから」

私の怯えを敏感に感じ取ったのか、男は和やかな声で言う。

「さあ、とりあえずお入り下さい。業務内容について説明させていただきます」

こうして私はなす術もなく、現代日本のオフィスビルから、森の広がる部屋の中へと引きずり込まれていった。

見上げればどこまでも高い青い空。白い雲が、緩やかに風に流されていく。地面は下草がびっしりと生え、靴越しにその柔らかい感触がした。辺りを木々に囲まれたその空間は森の中以外の何ものでもない。

ビルの中にいるはずなのに……わけが分からない。私の頭はフリーズ寸前だ。

無事に帰れるのかな。そう考えてハツとする。そういえばドアはどうなってるんだろう。慌てて振り返ると、扉の閉まったドアが其処にあった。そう、ドアだけが森の中にポツンと佇んでいるのだ。ドアを支える壁も柱もない。その可笑しな光景に脱力する。

視線を戻せばいつの間用に用意したのか、男の前には小さなテーブルと椅子が置かれていた。テーブルの上には、菓子の載った皿とティーカップが2客あり、湯気をたてている。

「お茶が入りましたので、どうぞ此方に。お座りください」

いつテーブルを用意したのかとか、どこでお湯を沸かしたのかとか、なんかもう色々と考えてるのが面倒になってきた。ドアはあるんだし、あそこから帰れるのだろう。差し当たって危害を加えられる事もなさそうだ。私はため息をつく、椅子に腰掛けた。その様子を見て、男は目を細めると向かいの席に座る。

「はじめまして。僕の名はルードヴィーグ。大賢者をしています。趣味は諸国漫遊。特技は異界渡りです」

わあ、突っ込みどころ満載で突っ込む気も失せるわ。

「そうですか」

「ああ、そんなサラッと流さないで下さいよう。大賢者を名乗れるのは僕ぐらいなんです。異界渡りだってそうそう出来る事じゃないです。もっと、こう驚いて欲しかったんですけど」

「へえ、それはすごいですね。吃驚しました」  
「棒読みで言われても嬉しくありません」

どうしろっていうんだ、この男は。演技臭く拗ねられて頭痛がする。

「どうぞ召し上がってください。ミリラで採れた茶葉で淹れました。癖がなくてまるやかで、僕のお勧めのお茶です」

こちらの事などお構いなしに、男はころころと表情を変える。どうやら遊ばれているようだ。

「……………」

「こゝろ」

「頂きます」

怪しい人間に勧められる飲食物程、口に入れたくない物はない。しかし、賢者に笑顔で強要され、渋々口に含む。

確かに美味しい。澄んだ琥珀色の液体は渋みの少ない紅茶のような味がした。が、いくら美味であるうとも飲みたくないものは飲みたくない。眉間にしわを寄せてちびちびと舐める様にお茶をすする。そんな私の様子を見て、ルードヴィーグはくすりと笑みをこぼした。

「どうです？ 美味しいでしょうか？ さあ、こちらの菓子もどうぞ………いえ、ダイエツト中ですので遠慮しておきます………」

ひきつった笑顔でそう答えると、私はカップに両手をそえてうつむいた。誰が食べるか。

また、強引に進められるのではないかと思っただが、男は「そうですか？ 残念ですねえ。美味しいのに」と意外なほどあっさりと菓子を引っ込める。

それからは、暫しのティータイムとなった。賢者は何を考えているのか分からない笑顔で焼き菓子を頬張り、私はこの場から逃げ出す方法をひたすらに考えてお茶をすする。そうして賢者のカップからあらかたお茶が消えた頃、彼は静かに口を開いた。

「恵子さんは、自分が暮らす世界とは違う世界が存在すると思った事はありませんか？」

突拍子もない事を言い出す。違う世界ね。SFでよくあるやつ。なんといったか、確か、

「パラレルワールドってやつですか？」

「うーん、惜しい。少し違います。時の流れのみが存在する、まじうかたなき無の中から一つの世界が産声をあげた時、同時に幾つも

の世界が誕生したのです。それらは互いに交わる事無く平行に、今日まで独自の時間を歩んできました」

壮大だな。そして少しどころか全く違うな。

「僕は、その平行して存在する別の世界から来たのです」

「はあ」

「信じていませんね？」

信じるも何も、まず理解出来ないのですが。

「今、僕たちがいる此処もその別世界なのですよ」

悪戯っぽい笑みを浮かべて言われ、思わず腰を浮かした。ビルの中に森があっただけで充分許容範囲を超えているというのに、別世界だって？何という所に足を踏み入れてしまったのか。

「大丈夫ですよ。ちゃんと恵子さんの世界に帰してあげますから」

「今すぐ帰してください」

「まあまあ、そう慌てずに。何も恵子さんに危害を加えたりしませんし。ただ、一つ仕事を頼みたいだけなのです」

「お受け出来ません」

「にべもないですねえ」

当たり前だ！ 私は未知の世界に対する好奇心も探究心も持ち合わせていない。天下太平、平穩無事がモットーなんだ。

「なんと言われても、仕事を引き受けるつもりはありませんので。では失礼します」

冷たく言い捨てた私に、ルードヴィーグは軽薄な笑みを浮かべた。

「そう言われましても、もう色々としちゃいましたし」

「はい？」

軽い口調で不気味な事を言ってくれる。

「色々つて、何をしたんですか？」

『僕の言葉が解りますか？恵子さん』

「え？」

今のは、一体なに？ ルードヴィーグの口から紡がれたのは、耳に馴染みのない言葉。英語でない事だけはわかったが、どこの国の言葉かも分からない。なのに

「解ります。 どうして……………」

「ふふ、お茶に少しばかり細工させて頂きました」

「細工？」

「僕の血を媒介に術を組み、僕の知識と経験を基にノルティアで使われている幾つかの言語をあなたに与えました。あ、ノルティアっていうのはこの世界の大陸の名称です」

仰っている意味がまいち解りませんが？ 怒りも忘れ呆然としている私に賢者は言葉を続ける。

『同じ言葉で喋れますか？』

問われ、頭の中に複数の言語が浮かび上がった。なんだこれは。私の知らないはずの言葉ばかり、なのにすべて分かる。浮かんでは消える言葉達。その内の一つが同じものと理解して、言葉を返した。

『喋れます……「うっ……」ですか？』

聞き取りには苦勞しなかったが、発声は少々難しい。知識はあっても口や舌が思うように動かないのだ。

『そう、お上手ですよ。慣れるまで少しかかるかもしれませんが、すぐに上達するでしょう。どうです？便利でしょう？僕のオリジナルの術なんです。いやあ、これを開発するのは少々骨だったんですよ』

何故か照れたように言う賢者に、私はもはや返す言葉がなかった。

「では、本題に戻ります。恵子さん、あなたにはこの世界で探しモノをして来てほしいのです」

「探し物？ 何を？」

「それは、追々と。ああすみません。どうやら時間切れのようです。それでは健闘を祈っています」

「は？ ちよっ……………」

無責任極まりないルドヴィーグの言葉と同時に、視界が霞んだ。突如として濃霧が発生したように、辺りが白くなり 気が付いた時には、美しいなんと豪華な庭に1人で佇んでいた。



抵抗を恐れての事なのだろうが、容赦なく地面に押し付けられた背中の重みのお陰で、息もままならず声も出せない。乱れた髪が顔を覆い目配せも不可だ。

反抗の意志無しってどうやって伝えりゃいいの？地面を叩けばレフェリーストップでも入るのかい？

窒息という予定外の方法により生命の危機に晒されていると、首の後ろに何かが触れ、僅かな痛みが走った。

「術は封じた。少し弛めてやれ」

美声の主の言葉に、かかる力が僅かに緩んだ。

「ゲホツゲホ、ヒュー」

待ち焦がれた酸素に喉がおかしな音を出す。何時か苦しい呼吸を繰り返し落ち着いた所で、私はそつと顔を上げた。

目に飛び込んだのは、金に近い薄い茶の長い髪を持つ、その低い声にはやや不釣り合いな中性的な美貌の男だった。目が合った瞬間、男の顔に驚きと当惑が広がる。

「子供ではないか……ユハ、離してやれ」

子供？ 誰が？ まさか、

眉根を寄せた男の茶色い瞳を呆然と見つめっていると、首筋に当てられていた鋭利な刃物がひかれ、次いで、背後の人間 恐らくユハと呼ばれた人物だろう。の手が、肩から腰、更にはスカートに包まれた足を軽く叩くように移動していく。

どうやらボディータイツクらしいと気がついたときには、一通り調べ終えて満足したらしい大きな掌が、脇に差し入れられていた。そのまま、ぐっと強引に抱き起こされる。反射的に、振り向こうとして、全く力が入らない事に気づかされた。四肢どころか体幹のそれさえ失った体は、空気の抜けたバルーン人形のようにくたくたと崩れ落ちそうになる。

「参ったな」

慌てて肩を抱きこみ、背後から覗き込んできたのは、はっとするほど鮮やかな一对の緑の瞳だった。

「大丈夫かい？ お嬢ちゃん」

そう、こちらの様子を問う声は、押さえつけられていた時の冷たいものと同じ人物とは到底思えない、暖かく気さくなものだ。

先ほどまで噂話に興じていた兵士の一人が、松明を掲げた手を寄せてしゃがみこむと、緑眼の男の顔が炎に照らされる。精悍な造りをした男の、右の耳は潰れ引き締まった右頬には斜めに走る刀傷と思いき痕が残されていた。せつかく男前なのに非常に惜しい。しかし、当の本人は微塵も気にしていないのだろう。癖のある赤みがかった茶色の髪を短く刈り隠そうともしない。

「なんと、本当にまだ子供ですね」

「12、3といった所でしょうか？何故このような所に……………」

息を整えつつ用心深く辺りを見回す私を見て、鎧の兵士が次々に口を開く。

あの、子供って私の事でしょうか？ もう25の歴とした成人なんですけど……………。2、3歳若く見られる事はあったけれど、一回りも下に見られるなんて初めてだよ。というか有り得ないでしょう。

どうみても。人種の違いの成せる技なのか？

呆れて男達を見回すが、ふざけているわけではなさそうだ。私を取り囲み皆一様に眉をひそめ、困惑の表情を浮かべている。対処に困っているのだろう。

これはひよつとしたらチャンスなのかもしれない。

殿下とやらを狙う20半ばの黒髪の女呪術師 本来な

らば一致してしまう条件が、子供だと思われる事によって外れるのだから。

あのルードヴィグという男が、こいつらの関係者ならいい。ここで重用されている権力者なら、あいつの話をして、多少なりとも疑いを晴らす事ができる。しかし、私にはあのへボ賢者が、この場にいる人間と繋がりがあるとは思えなかった。あれば、私一人をこんな場所に放置して姿をくらまさないだろう。

むしろドアを開けたら別世界でした。等という奇妙奇天烈な話自体、さっぱり信じてもらえない可能性が高いのではないだろうか。異なる世界の存在が公に知れ渡っていて、行き来が比較的自由に出来るのであれば、今頃世界間交流が盛んに行われているはずだ。だが、そんな話は聞いた事もない。そういえば、あの賢者を名乗る男も、「異界渡りはそうそう出来る事ではない」と口にはしていないか。つたか……………。

よし、ここは一つ誤解したままでいてもらおう。幼気な子供の振りをして、探りを入れつつ現状把握といこうじゃないか。

私は半ば自棄っぱちな前向き思考で己を奮い立たせると、怯えた目で彼らを見回した。

「おじさん達だれ？」

「お前、歳は？」

こちらの質問を無視して、美声の主が訊ねる。些か面食らったものの、逆らう気などさらさらない。長いものには巻かれる主義だ。

「……………13歳」

「名はなんという？」

「……………榊、恵子」

「サカキ「ケーコ」？ 聞かぬ名だな。何故このような場所にいる？」

何故って、こっちが聞きたいぐらいだよ。

子供と思っているにしては随分と容赦がないと感じるのは、文化の違いのせいなのか、それとも職務に対する熱意から来るものなのか、今ある知識だけではいかんとも判じ難い。

どうか後者でありますようにと祈ると、くしゃりと顔を歪めて見せてから、素早く目元を両手で覆った。いざ、泣く子には勝てぬ作戦だ。

「お母さん、どこ？ 怖いよ。助けて、お母さん」

大根役者も真つ青なクサイ演技は、しかしながら及第点であったらしい。周囲の困惑はみるみる深まり、背後の男があやすように背中を叩きだす。今が夜でよかった。

とんとんと背中を打つリズムが心地よい。緑目男の厚意に身をゆだねながら、私はさらに激しく泣いた。泣き続けた。結果、

「泣くな」

低く落とされた声には、戸惑いとため息が混じっていた。

「うわーん、お母さん」と駄々をこねるように延々と泣き伏す25歳の女に、さすがにイラツときたらしい。その気持ちはよく分かる。

「まずは傷の手当てを。ユハ、この者を医務室へ。落ち着いてか

ら話を聞くとしよう。衛兵、サウルに次第を取り次げ。皆を持ち場に戻らせ、隊長に私の部屋へ来るように伝えよ」

それだけ言うと、金茶の髪の方はさっさと踵を返して歩き出してしまう。

男の命に対し「はっ」と短く返事を返した兵士達が、此方を気にしつつも慌てた様子でそれぞれ違う方向へと駆けて行く姿を、指の間から捉えて、ほくそ笑んだ。

勝った。  
だが油断は禁物だ。敵はまだ残っている。

「立てるかい？」

気付かわしげに訪ねる、1人残ったユハという青年に、黙って頷き立とうとして……立てなかった。これが俗に言う、腰が抜けるという現象なのだろうか？ 腰というよりは、膝が笑って力が入らないような気もするが。

呆然としていると、私の異変に気付いたらしいユハが「ちょっと失礼するよ」と呟く。どうする気なのだろうと、目を瞬いた時には、私の体はふわりと宙に浮き上がっていた。

抱き上げられたのだと分かった次の瞬間、人生初のお姫様だったとか、その相手が二枚目だとか、何だかいい匂いがするとか、そんな感慨をすっ飛ばして私の胸を占めた事はと言えば、涙の痕がないのをどうやって隠蔽するかという色気もへったくれもない切実な問題だった。

## 04 偽り (2)

いくら夜とはいえ、こども至近距離ではやはり気づかれてしまう危険性は捨てきれない。私は硬い感触を返す胸板に額を押し付けると、素早く袖で頬をぬぐった。赤みがさすであるうぐらいに強く擦っている、抱える腕に力がこもる。

「手荒な真似をして済まなかったね。てっきり不届き者が侵入したと思ったものだから」

いえいえ私は真つ当な一市民ですよ。不届き者がいるとすれば、それはパツパラ賢者の方です。      なんと返したのか。胸中

で奴を罵りながら、ひりひりと痛む顔を上げて、困ったように微笑んで見せた。

「俺はユハ＝サリオラ。サカキちゃんといったか、不思議な趣の名だね。けど、美しい響きだ」

私の笑みに呼応するように浮かべられた笑顔のなんと人好きのすることか。若干気障ったらしい感がないでもないが、近所にこんな兄ちゃんがいたら、おば様方に大人気間違いなしだろう。

結構な重量のはずなのに、ユハの足取りは重さを全く感じさせない軽快なもので、回された腕は頼もしく安心感がある。

鍛えているのだろうか。いや、そもそも人体の構造が違うのかも。外見は同じようだけれども、血は緑とか、実は変温動物だとか。……………舌が二又に分かれていたらどうしよう、などと阿呆な考えに浸っている間に、庭園を抜け、城へと続く階段に差し掛かっていた。

磨きぬかれた、光沢のある乳白色の石造りの廊下は、中央に臍脂

色の絨毯が敷かれ、床と同材の壁には、等間隔に揺らぎのない煌々とした灯りが灯されている。松明やランタンなどが似合いそうな建物なのに、その灯りはまるで蛍光灯の様で違和感があった。

長い長い廊下の幾度目かの角をまがり、右手に現れた扉の前でユハは立ち止まった。扉には文字が彫られ、金色の墨が流し込まれている。

「第二医務室」全く見た事もない、唐草模様を彷彿とさせる文字の意味が、何故かすんなりと理解出来た。へっぼこ賢者のいう言語能力には、文字も含まれているらしい。

ユハは私を抱いたまま、背中に廻した手で器用に扉を叩く。程なくして中から扉が開かれた。

顔を出したのは、白衣には違いないが少々袖や丈に余剰のある衣服　僧衣を真つ白にしたような衣装に身を包んだ、伶俐な顔つきの中年の男だった。

ユハの腕の中にいる私を認めると、「あちらへ」と奥に並べられたベッドの一つを示す。シーツの白が目につく室内は、診察室というより保健室を彷彿とさせるつくりで、手前に向かい合わせに配置された椅子が2セット、窓側には天井からカーテンを吊り下げて独立させる事が出来るつくりのベッドが4台設えてある。壁一面を占める薬品棚には茶色いビンがずらりと収められていた。

丁寧にベッドに横たえられ、居心地の悪さを感じて身を起こそうとすると、ユハに目で制された。

「大丈夫だよ。彼は優秀な医師だ。見た目は怖いけどね」

茶目つ気たつぷりに言われても、本人を前になんと返せばいいのかわからない。言われた当の本人はユハの軽口など少しも気にするそぶりも見せず、手際よくベッド脇の台に医療品らしきものを並べている。

準備を終えた男は、私の様子を一瞥して、僅かに頭を下げた。

「サウル」クラウゼと申します。見たところ重篤な傷はないようですが、全身に細かな傷があるご様子。衣服を脱いで頂きたいのですが宜しいですか？」

医者の前で裸になるのに抵抗を感じる歳でもないが、関係のない人間にその様子を眺められるのは気持ちのいいものではない。頷くのを躊躇っていると、私の胸中に気づいたのかサウルがカーテンの端に手をかけて背後を振り返った。

「ユ八様、カーテンを閉めさせていただきます」

「ああ、これは失礼。よろしく頼むよ　　っと、すまない。サウル、ちよつと来てくれないか」

踵を返しかけたユ八が、何かを思い出したようにサウルに声をかける。ちらりと怪訝な色を覗かせてユ八に視線を送ったサウルは、自身の身も外側に置いてからカーテンを引いた。

象牙色のカーテンに二人の影が映し出される。視界の遮られたベッドの上に寝かされて、私は急に広い空間に取り残されたような心細さに囚われた。

何を話しているのだろうか？　ぼそぼそと交わされる声は小さく、内容を聞き取ることはできない。

ややして、カーテンの合せ目を潜って姿を見せたサウルの眉間には深い皺が寄せられていた。

「お待たせいたしました。衣服を脱いで傷を見せて下さい」

その目が何か問いたげに、私を見る。一体どうしたというのだろうか。

上着を脱ぎ、のろのろとシャツのボタンをはずしていると、顕に



なつた胸元にサウルの視線が向けられる。

そうして、漸く理解した。疑われているのだと。

考えてみれば当然のことだ。いくら非力な子供でも、警備の厳しい城の庭園にポツと現れたら怪しいことこの上ない。むしろ子供の方が奇怪に過ぎるというものか。

傷の手当てとは建前半分、身体の検分が目的だったのだ。危険物の所持を疑われているのか、年齢を疑われているのかは分からないが、さすがに医者に体を見られては歳もバレよう。下手な嘘で自分の首を絞めることになってしまった。

どう言い繕おうかと考えながら、袖から腕を抜き、ボロボロになったストッキングをおろした所で、それで結構ですと、手を止められる。

下着姿になつた頃にはサウルの顔は元通りの無表情に戻っていた。男は淡々と傷の様子を確認しながら、ベッドサイドに置かれた瓶を手にとると、箸のような棒で、中からひとつまみの真っ白い綿を取り出す。

薬液を染み込ませてあるのだろうそれは、冷たく湿り気を帯びており、傷に触れると軽くしみた。傷は主にストッキング一枚で露出していた足に集中しており、他は顔、首筋、腕に少々。顔以外の全ての傷に薬を塗り終えると、サウルは器具を置いた。

「肋もみてくれないか、痛めたかもしれない」

カーテンの向こうからユハが声をかける。取り押さえた時のことを言っているのだろう。あの時から体を捻る度に鈍い痛みがあった。ユハの言葉に「分かりました」と頷いて、サウルは私の腹部に掌をあてる。と、軽く力を加えた。途端に痛みがはしるが、我慢できない程でもない。

「僅かですがひびが入っているやもしれませんね。念の為術をかけ

ておきましょう」

痛みに眉をしかめた私を見て、サウルは掌をかざす。

何をするつもりなのか、とんと見当がつかずに、ただぼうつとその手を見つめていると、驚いた事に、ぼんやりと淡い光が漏れ始めた。胸にじんわりと熱が広がり、吸い取られるように痛みが引いていく。

私は目を見張った。今、目の前で繰り広げられている現象が、理解できない。あの光は何で、私の体にどんな変化が起こっているというのだろう。彼は魔法使いなのだろうか？ この世界には魔法が存在するのだろうか？ 二つの世界を行き来するという賢者の力には驚倒させられたが、これにも十分びっくりだ。

麻酔のように痛みを麻痺させているだけなのか、傷を癒しているのか、何にしる便利な事に変わりはないが、どこか空恐ろしいような気もする。光を湛えた手を顔に伸ばされて、思わず仰け反ってしまった。

「ご安心を」

顔を強張らせた私を見て、極々小さな声を落とすと、サウルはかさついた掌で軽く顔を撫でさする。彼なりの気遣いらしいその言葉に、私は不思議と安堵して力を抜いた。

「終わりました」

そう告げられて、確かめるように頬に手をあてる。つるりとした質感を返す肌に驚いた。さっきまで確かにあったはずの細かな切り傷がなくなっている。どうやら痛みをとるだけではなく傷そのものを治してくれたらしい。どうせなら手足の傷も治してくれればいいのに、という無遠慮な考えが頭を過ぎったが、注文をつけられる立

場でもないので口には出さなかった。

私が服を着終わるのを待って、サウルがカーテンを開けた。

「どうだ？」

待ちかねたように聞くユハ。

「腹部と顔の傷に癒しの術をかけましたので、1日2日倦怠感があるかもしれませんが」

よく分からないが二人の会話から察するに、魔法は万能ではないようだ。軽い傷は自力で治した方がデメリットが少ないという事なのだろうか。

「他は問題ないかと存じます」

「そうか。世話をかけたな」

サウルの言葉を聞いて、ユハはほっとしたような、それでいてどこか拍子抜けしたような表情を浮かべて私を見た。

ゴミとなったストッキングを丸めて握り締め、沙汰を待っていた私は、ぽかんと開けそうになった口を歪めて作った笑顔で、二人の男の顔を眺めていた。

え？ 問題、……………ないの？

かくして、年齢詐称はバレていなかった。

傷の手当てを終えた後、今日は時間も遅いことだし疲れただろう、話は明日にでも、と客間らしい部屋に通された。桶に張られた湯で顔を洗い、タオルを絞って簡単に体の汚れを落とすと、肌触りのいいワンピースのような寝間着を渡される。

こんな状況で眠れるか！ と思っていたのに、ベッドに横になった途端熟睡していたらしい。小鳥の鳴き声に目を覚ましてみれば、空はすっかり白んでいた。自分で思っていたより肝が太かったようだ。

昼下がりの穏やかな一時、ベッドの上でプリンのような口当たりのいいお菓子を噛みこなして味わっていた。鮮やかな青い色が食欲を削ぐが、味は良い。豪華な部屋に美味しい食事。待遇はとても良い。

ユハとサウルの意思の疎通が不十分で両者の間に齟齬が生じている。という事態も考えてみたのだが、目覚めてから間をおかずして診察にやってきたサウルが、土産にと持ってきた可愛い絵本をみてそうではないと思ひ知る。いや、幼児じゃないんですけど。それともこの世界では、13才の少女は絵本を読むのが当たり前なのだろうか？

願ったりの展開なのだろうが、心中は複雑だった。全くモテなかった訳じゃないし、それなりの経験もあるつもりだ。若干凹凸に欠けるとは思っていたが、キャミソール姿を見られて気付かれないなんて、女としてのプライドはもはや粉々だ。

空になった器に匙を置くと、息を吐いて天上を仰ぎ見た。尋問をされるでもなし、ただぼんやりとベッドで過ごして無為に時間が過ぎていく。これからどうしよう。昨日サウルが言ったように、何を

するにも億劫だ。匙を指ではじくと、からんと空しい音がした。

扉を叩く音に、ふと意識が浮上した。いつの間にか眠ってしまったらしい。窓の外は赤みを帯びた夕刻特有の色に変わっていた。

コンコン                      コンコン

「……………はい」

一定の間をおいて鳴らされる音に寝ぼけた頭で返事をする。

「サウルです。診察にまいりました」

男の内面を表わすような静かな声が聞こえた。

「どうぞ」

寝起きのせいか、術の影響か、随分と体が重い。私が大儀そうに体を起こす間に、サウルは扉をあけて室内へ入ると、ベッドのそばの椅子へと腰掛ける。

「体調はいかがですか？」

「少しだるいです」

本当はすごくだるいんです。

「そうですね。今しばらく我慢なさって下さい。明日には楽になるでしょう。」

そう言うとサウルは手際良く脈をとり、傷に薬を塗りながら話し

を続ける。

「神官長殿が話を伺いたいと仰っているのですが、よろしいですか？ お辛いようでしたら明日にさせていただきますが」

神官長………って何故？ 私は初めて耳にする言葉に眉を寄せた。賢者のおかげでもちろん意味は分かる。神職に就いている者達を取り纏める長だ。分からないのは、私に会いに来る理由だ。城を警備している兵達の長が会いに来るならまだ分かる。しかし、神に仕える人間が、私のような不審人物になんの用があるというのだろうか。ここの宗教的理由から、御被いにくるとか、入信を勧めにくるとかならまだいいが、神妙な顔で「最後のお祈りに参りました」なんて言われた日にはたまったものではない。腕をすべる冷たい綿の感触も相まってぶるりと身震いした。

サウルはみるみる青ざめる私の顔を目にしても、何事もないように、すぐに視線を傷へと移す。

「ご心配なされる事はありません。こちらにいらっしやるに至った経緯を聞かれるだけでしよう」

サウルの言葉を信じるならば、最悪の想像は外れているようだが、経緯の説明とかわれてもな。その経緯がとんでもないから困っているんじゃないか。私はがくりと項垂れた。

嫌だなあ。何て言ってはぐらかそう。是非とも先延ばしにしたいものだが、体調万全の時より今の方が好都合かもしれない。話の流れが悪くなれば、具合が悪い振りをして逃げるといふ手が打てる。

「わかりました。お会いします」

内心の打算をおくびにもださず私は努めて弱々しく頷いた。せい

ぜい健気な少女を演じるとするか。

サウルが出て行きしばらくすると2人の男がやってきた。1人はよく覚えている。一際高い長身と派手な緑の瞳の持ち主ユハだ。

「やあ。具合はどうだい？ ああ、そのままでもいいよ」

ベッドから降りて、挨拶をしようとした私を、笑顔で押し留める。相変わらずの好青年ぶりだ。

爽やかなユハの隣に立つのは、純白の衣服に身を包んだ、長い金茶の髪に濃い茶色の瞳をもつ男だった。地味な色合いなのに、全くもって地味に見えないのは、その美しい容貌のせいだろう。

ユハが暖かな春の日差しを思わせる人物なら、彼は厳しい冬の朝を思わせる。澄んだ空気は非情なまでに冷え切り、吐いた息さえ白く凍らせる。訪れを無視して、暖かな布団に包まりやり過ごしたい。そんな、容赦のない雰囲気纏った人物だった。

「この方は、エイノギルデン神官長だよ」

この男が。

「話をききたい」

そう言って一歩前へ進み出たのは、昨夜、庭園で出会った美声の主だった。夜空の下、ゆらゆらと形を変える松明の明かりで垣間見ただけだが、その美貌は見間違いようがない。

彼が神官長なのか。勝手に敵めしい老齡の男を想像していた私は驚いた。随分と若い。寿命が短いとか、切実な人材不足とか、実は

神官長というのが想像したような地位ではないのかもしれないが、この世界が超実力主義という可能性もある。

ここは禪を締めてかからなければならぬだろう。私は深く呼吸をするとペこりと頭を下げた。

「……………はい。あの……………いえ、なんでもありません。よろしくお願ひします。」

怯えてみえるようにと、無力であると分かるようにと、出した声はか細く震えを帯びていた。

「まずは今一度名を確認したい」

「榊恵子……………です」

「歳は？」

「……………13歳」

「生まれは？」

「……………日本です」

矢継ぎ早に繰り出される質問に間を置いてゆっくりと答える。

不慣れな発音は難しく、頭の中で言語を変換しなければならぬ為にただでさえ時間がかかる。そのうえ、迂闊な発言も出来ないことあつては、どうしても返答には手間取つた。

「国名をきいている」

人の苦勞を露知らず、冷たい声が降つてきた。辺境の村の名だとも思つたのだろうか。

彼らの来訪を知らされてから、私は迷いに迷つていた。どこまで眞実を話し、どこから出たら目で通すべきかを。あまりに嘘八百を並び立てては後々矛盾が生じない自信もなく、13にもなつてあれ



もこれも分からないではおかしい。いつその事、記憶喪失という事にしておけば良かったとも思ったが、万が一記憶を取り戻す魔法があるとお手上げだ。

「国の名前、です。とても……小さな、島国だから」

あんたが知らないだけよと、言外に滲ませる。

「ほう。それは失礼した」

すつつと瞼を下げ、皮肉げに口元を歪めたエイノの態度は、誰がどう見ても非礼を詫びている様には見えないだろう。どうやら、お綺麗なのは顔だけらしい。

「何故、昨晚城の中庭にいた？」

「……………」

エイノは早々に核心の質問を投げかける。

「どうやって侵入した？」

続けざまに質され、私は目を伏せた。室内を重い沈黙が満たす。

ユハからも助け舟はやってこない。私は小さく息を吸い込むと、とつとつと話し出した。

「わから……………ないんです。どう……………して、あんな所に……………いたのか。ここがどこなのか。私……………何もわからないんです」

掛布を手繰り寄せて、きつく握りしめる。深く俯き、大急ぎで最後に目にした通帳の残高を思い出した。とうとう6桁を切ってしまう

った悲しい通帳を。今日の夕食はモヤシ、明日もモヤシ。明後日ももちろんモヤシだよ。食卓を彩る白一食の膳がまざまざと目に浮かぶ。出てこい涙。目頭が熱くなり目が潤みはじめる。よし、今だ！ 私はそつと顔を上げると、男を見つめた。

「ここは……………何処なんですか？ 家に……………帰り……………たい」

頭の中で流れる物悲しいBGM。頬を伝う涙。決まった。

「解せぬな」

しかしエイノは表情一つ変えず冷たく吐き捨てる。目の前の男が一瞬にして白衣の悪魔にしか見えなくなつた。お前に人の心はないのか？ やはり同じなのは外見だけで、緑色の血が流れているのか？

「……………本当なんです！ いつも通り、過ごしていただけなのに、私だって、……………何が何だかわからない！」

実際、そうだ。ただ面接に訪れただけだというのに、何故こんな目に遭わねばならないのか。上手い言い逃れは思いつかないし、泣き落としは効かないし、スッピンだし、プリンは青いし！ もう散々だ！

苦心して流した涙は止まる事を知らず、後から後から滲み出では頬を濡らす。ヒステリックに喚き立てて号泣する様に怯んだのか、エイノは視線を逸らすと、額を押さえてため息をついた。

「埒があかぬ。二ホンといったか。地図を持って来させよう。二ホンとやらが何処か示せ」

私はしゃくり上げながら頷いた。……………精密な世界地図を持

。うがごうげんたてて

06 偽り (4)

エイノの言葉をうけて、扉の外に向かって何やら指示を出しに行っていたユハが、戻って来るなりハンカチを差し出す。

「どうぞ」

なんて爽やか。なんて紳士。爪の垢を煎じて隣の冷血漢に飲ませたいわ。

「ありがとうございます」

受け取ると、優しく頭を撫でられた。

「心配しないで。エイノはこう見えて、とても優しいからね。彼に任せれば大丈夫だよ」

ははははは、説得力のない慰めをありがとうございます。その優しいエイノさんに心底嫌そうな顔で睨まれていますよ。

忌々しげにユハから私に視線を戻し、エイノが問いかける。

「ここが何処かわからんと言ったな。では何故この国の言語を解する」

最もな疑問だ。

「この…言葉は、この国でしか話されていないのですか？」

「この国及び、周辺の2国のみで公用語として使用されている。ここが何処かなど大凡の検討はつくのであろう？」

「…わかりません」

「何故？」

「この言葉は…父に習いました。父は…言語学者で…異国の言葉を研究しては気紛れに私に教えてくれたのです」

苦しい言い訳だが仕方ない。明らかに顔立ちも名の響きも違う、ましてやここは何処状態の私が、言葉を話せる理由が他に思い浮かばなかった。

しかし、この設定には利点もある。万一、阿呆賢者にこのまま放置された場合、数多くの言語を話せるという点を利用しない手はない。そのための下地作りだ。

「奇妙な学者もいたものだ。…：…此処はノルティア大陸。シルヴァンティエ国の王都キノスの王城だ」

信じているのか、いないのか、まあ多分信じていないのだろうけど、幸いにも突っ込まれる事もなく、やっと此方の情報を仕入れる事が出来た。地名が分かった所でなんの役にもたたないけども。

「分かるか？お前は王のおわす、城の庭園に忽然と現れた、この意味が」

大問題だよな。そっち側してみれば、警備に穴があるって事になるんだもんな。

「そんな事…言われても、私、わかりません」

顔を歪ませ、今にも泣き出しそうな私と、そんな私に尚も厳しい視線を送るエイノの間にユハが入る。

「まあまあ、エイノ。怯えさせちゃ駄目でしょ。ごめんね。エイノは術式面での警備統括者だから気が立つちゃっててね」

ナイスフォローだユハ。何度も泣くのはしんどいんだよ。

ユハの言葉にエイノがまた嫌そうな顔をした時、扉が軽くノックされた。

「地図がきたみたいだね」

ユハの手によって、広げられた地図は当然ながら見た事もない形をしており、かなり大雑把な代物だ。正確な世界地図などないのだからと容易に想像できた。良かった。これなら誤魔化しがききそう  
だ。

描かれているのは一つの大陸と小さな島々。大陸の中央をでかかど陣取っているのが、この国のようだ。周りには大小様々な国々がひしめき合っている。自国を誇張して描かれているのだろうか。そうでなければ大変な大国という事になる。

「分かるか？」

「私の…知っている地図と大分違うので、間違えているかもしれないが、多分、この辺り…かな？」

この辺り、と適当に地図の東の端に位置する群島を差し示すと、ユハの眉が僅かに寄せられる。

「……ごめんなさい。本当に知っている地図と違うので、分からないんです」

そのなんとも言えない表情に下手を打ったかと慌てて誤魔化した。

「地図は地方によって随分と違うみたいだからねえ」

要領を得ない私を庇って、一人頷くユハ。

「まあいい、暫くは監視下で生活してもらおう。衣食住は保証する。体の回復に専念しろ。また話を聞きに来る」

一方的に告げるとエイノは足早に去っていった。神官長様はお忙しいようだ。

「まだ、体も辛いだろうに済まなかったね。何も心配せずに、今はゆっくり休んで。大丈夫、悪いようにはしないよ」

「はい。ありがとうございます」

暖かいユハの言葉に、礼を言う私の声は震えてはいなかったか。見知らぬ地図をみて、改めて世界が違うのだと思いきらされた。

今になって急速に不安が胸に広がる。ユハはやさしく背中をなでると、そつと部屋を出て行った。

1人になると一層の不安が胸をしめる。知っている人が誰もいない世界。私の事が分かる人もいない。何も分らない。こんな所でこれからどうしたらいいの……。と一晩メソメソと泣き伏し、開き直った。

言葉は通じる。当面の衣食住は確保済み。当てにならないが賢者の存在もある。そういえば、「探し物をしてほしい」とか言っていたな。全くもって何を探せばいいのか見当もつかない物を探す気など、さらさらないけれど。そのうち迎えにやってくるかもしれない。当てにはしてないけどね。なんとかなる。と、思う。いや、思おう。それにしても、こんなに泣いたのはいつ以来だろう。歳を重ねるにつれ、涙腺も乾いていくものだと思っていたけれど、結構泣けるものだな。

気分はすっきりしたけれど、泣き通したおかげで脛が腫れて酷い顔になっており、朝食を運んできた侍女さんが、あわてて氷嚢を持ってきてくれた。

脛がましになったところで、着替えを渡される。長袖のシャツと、ふんだんに布が使われたポリウームのある膝丈のキュロットスカート。スカートと同じ丈の貫頭衣を羽織り、胸のすぐ下で幅広の布でしめる。全体的に淡い色合いで纏められた服は、なかなか可愛いというか可愛らしすぎる。これ、子供服だ。明らかに子供服だ。この世界にやってきて、未だかつて膝丈の衣服を着ている人に出会った事がないもの。

兵士やユハは動きやすそうな細身のズボンをはいていたし、サウラやエイノは踝丈のビラビラした衣装だし、侍女さん達も負けず劣らず丈の長い貫頭衣を身に着けている。至ってシンプルながら、すべらかな布地のそれは着心地がよさそうで、私もそれが着たかったよ。そりゃ、この服も子供が着たら似合うんだろうけどさ、25の



女の着る服じゃないよ。なんの罰ゲームだよ。こつちの人からみて本当に可笑しくないのだろうな？実は私の嘘を判っていて嫌がらせしてんじゃないの？

鏡を前で引きつった笑いを浮かべる私をよそに、侍女さんは「まあ、可愛らしい」だの「お似合いですわ」だのとご満悦だ。

この格好では誰にも会いたくないし、部屋からも出たくないが、そもいかない。今日は神官長殿の部屋で協議という名の尋問があるのだ。ああ、嫌だ。嫌だ。

身支度を終えると、侍女さんに促されて部屋を出た。外には屈強な2人の兵士が扉を挟むように立っており、彼らに先導されて神官長の元へと向かう。

日の光の差す中、初めて城の中を移動した。隅々まで手入れが行き届いた城は、正に豪華絢爛。国民の税金で、なんて贅沢な。けしからん。なんて思ってしまったのは世知辛い日本で暮らしていた者としては、仕方のない感覚だろう。

日差しは柔らかく、暖かで眠気を誘う。日本でいえば春なのだが、ここに四季があるのかどうか。

回廊の窓から覗く花。至る所に彫られたレリーフ。前に行く兵士が身に着けている素材の分からない鎧。何もかもが物珍しく、忙しなく辺りを見回してしまう。もっと眺めていたかったが、程なく目的地についてしまった。またあの唯我独尊男と会話をしなければならぬと思うと気が重い。

中に入るとエイノは、奥に置かれた大きな執務机に向かい書類にペンを走らせている最中だった。

「そこへ座れ」

此方を見もせずという。私は部屋の中央に置かれた所謂応接セツトのソファ―に腰掛けそつとまわりを見回した。白を基調とした美しく整えられた部屋は、恐ろしく殺風景で主の性格をよく表してい

る。今日はユ八はいないのか。緩衝材の不在に益々気が重くなった。待つこと数分。エイノは未だ、書類の処理中だ。呼びつけておいで、待たせるな！ 仕事が終わってから呼び出せば良いものを。苛立っているとは扉を叩く音が聞こえた。

「入れ」

エイノの声で扉が開かれ侍女さんが入ってくる。そして次から次へと目の前のテーブルに菓子を並べ始めた。テーブルの上を菓子で埋め尽くすと、侍女さんは一礼して出て行った。

シヨッキングピンクだったり、黄緑だったり可笑しな色をしているが、鼻孔をくすぐる香りは甘い。何故こんな色の食べ物があるにも美味しそうな匂いを発しているのか。謎だ。

つつい菓子に見入っていると低く笑う声が聞こえた。見ればエイノが執務机から立ち上がり此方へとやってくる場所だった。

「好きなだけ食べよ」

笑いをかみ殺し私の向かいに座る。

これが、ふん、このくらいの菓자에食いつきおってこの田舎者めが。くくくくくつ。という笑いならしくりくるのだが、子どもの悪戯を見つけた親のような、仕方のない奴だな。くくくくくつ。といった好意を含んだものだったから驚きだ。

なんだなんだ？ 一晩で随分と態度が軟化したぞ。それに私はお菓子が食べたくて見ていたわけじゃないんだけどな……まあ、いただきますすけど。

手近にあったカエル色のケーキに手を伸ばす。味はモンブランだった。私が2個目のケーキに取り掛かったとき、お菓子には手をつけず、お茶を飲むエイノが静かに話し始めた。

「人や物の瞬時の移動。これは過去に例がないわけではない。文献によるとおよそ1000年前、かの大賢者ルードヴィーグは自在にこれを行い、あらゆる場所に姿を現した、とある」

え？今何か聞き捨てならない言葉を聞いたような……。何が？

あ~~~~~!!

ゲホツゴホツゴフツ。答えに思い当たった途端に盛大に咽た。

「どうした」

ゲホホホツゴツホゴホ。問われても、咽て応える事が出来ない。大賢者ルードヴィーグって……あの馬鹿もそんな名前じゃなかったか？

エイノが呆れた視線を向けた。

「落ち着いて食べる」

違う、がつついてむせたわけじゃないぞ。ゲホホツ。あー、苦しい。ひーひーいいながらお茶を一口飲みよつやと落ち着いた。

「1000年前、ですか？」

「そうだ。よもやルードヴィーグを知らぬわけではあるまいな」

「いえ、知っています」

多分。と心の中で付け足す。

「ルードヴィーグは自らの意思で移動を可能としていたが、お前の場合はなんらかの要因によって、空間にひずみが生じ、もといた地とこの地を結んでしまったのではないかと思われる。心当たりはな

いか？」

心あたり。ありますよ。ありますけど、ああ、もう頭がグチャグチャでおかしくなりそうだ。

「すみません、わかりません。何も変わった事はなかったと思うけど、よく、覚えてなくて」

こちらでは人の寿命は1000年を超えるのか？同姓なだけなのか？大賢者ルドヴィーグというのが一種の称号のようなもので代替わりするのかもしれないし、あの馬鹿がルドヴィーグの名を騙っているのかもしれない。分からん。聞きたい事だらけだが、しかし下手に聞いて墓穴を掘ってはたまったものではない。

「そうか」

そういったきりエイノは黙り込んでしまった。私が飛ばされてきた原因について思索に耽っているようだ。

居辛いな。話しかけるのも気が引けるし。とりあえず菓子でも食べとくか。エイノは手を付ける気がなさそうだし、どういふ風の吹き回しか知らないが、私の為に用意してくれたものである以上は頑張って食べねば。

私が3皿目の、ピンクと紫の斑模様のチーズケーキ風味のものを胃に収めた時、思考の海から浮上したらしいエイノがやっとこちらを見た。

それからは質問攻めだ。身分や親兄弟の事から、日本という国についてまで事細かく聞かれた。嫌な汗をかきつつ、ノラリクラーリと適当に答える。言っただけいいか、判別のつかないものについては子供なので分からないとかわした。

開放される頃には疲労困憊していた。が、思わぬ収穫も得た。賢

者ルードヴィーグの名。日本に帰る糸口のほんの一端を見つけた気がした。

エイノの部屋で菓子と質問責めにされてから、はや10日。私は平和な毎日を送っていた。投獄されるとか、よくてももつと厳しく取調べを受けるものと思っていたのに。

私に対する諸々の疑いは晴れつつあると思つていいのだろうか。相変わらず扉の外には監視の兵士が立っているけど。

毎朝サウルの診察を受け、2日に1度土産を持って訪ねてくるユハの相手をし、昼食後は健康の為に中庭をのんびりと散歩。3時のおやつを食べながら侍女さん達と世間話をする。というのが、この10日ばかりの日課だった。侍女さんは全員で3人。金髪の髪をいつもすつきりと纏めている理知的な印象のアイラ。同じく金髪のフワフワの髪が魅力的なニスバディのマリヤツタ。栗色の髪を内巻きロールにした天然系のトゥーリ。彼女達がローテーションを組んで、食事の仕度やら部屋の掃除やらをしてくれている。

サウルやユハとの会話は気疲れするが、侍女さん達との話はとても役に立つ。女性というものは古今東西お喋り好きなようだ。1を聞けば10答えが返つて来るのだから、どんな些細な事でも知りたいたい私にはもってこいだ。

侍女さん達曰く。ここ、シルヴァンティエはその地図通りという程ではないものの、大陸で1、2を争う大国である事。現王は賢君の誉れ高く、武芸に秀でた世継ぎの王子がいる事。その王子が一粒種である事。人間の寿命は日本よりやや短い事。エイノは異例の若さで神官長という地位についた事。ユハは将来有望な近衛兵である事。エイノに言い寄った美貌で名高い、さる貴族のご令嬢がこつぴどくふられた事。ユハには不特定多数の女性の影がある事。エイノが女嫌いである事。ユハは……と、かなりどうでもいい情報が多いのはご愛嬌。妙齢の女性が集まれば、嫌でも話題はそうなる。とりあえず2人が女性に人気があるというのはよく分かった。

それにしてもこの完全なるお客様扱い。常に監視の目があるものの、快適すぎて恐ろしい。しかし、いつまでもこのままという訳にもいくまい。毒蛇になりそうで、何も言い出せずにいたが、そろそろ行動せねば。

昼食前、夜中になると髪の毛が伸びそうな西洋風人形を携えて、ユハがやってきた。

厳しい訓練と近衛の激務の合間を縫って来てくれているとマリヤツタは言っていたが、本当なのかね。来る度に違う匂いがしてるんだよなあ。

「わあ、かわいい。ありがとう」

心にもないお礼を言って笑顔で人形を受け取る。本当は苦手なのだが。この手の人形は捨てたら呪われそうで処分に困る。

「気に入ってもらえてよかった。サカキちゃんと同じ美しい黒髪が気に入ってね。つい買ってしまったんだ」

13歳の子供にいう世辞じゃないよ。どれだけ守備範囲広いんだこの人。ユハの台詞にお茶を持ってきてくれたマリヤツタが、羨望の眼差しを私と人形に向ける。その視線に妬みがみえないのは子供と思われているからか。

「今日は一緒に昼食をとろうと思ってね。遅めにきたんだ。かまわないかい？」

疑問系だが、この場合私に拒否権はない。

「はい。あの、実は私、ユハさんに相談したい事があるんです。聞

いてもらえますか？」

「俺でよければ、喜んで。嬉しいね、こんなかわいい子に頼りにしてもらえるなんて」

…………… イイノとは違った意味で疲れる。

この日の昼食は前菜と白身魚の香草焼きとサラダ、野菜スープにパンだった。昼から豪華な食事だが、質素でいいからお米が食べたい。味噌汁が恋しいよ。あらかた料理を食べ終えた所で、私は切り出した。

「私の… 今後の事なのですが、街に出て、働いて生活できたらいいなって思っています。それで、私は父から教えられて、幾つかの言語が分かりますから、通訳みたいな仕事に、その、今すぐは無理でも将来的につきたいんです。図々しいお願いだとは思っていますが、どこか紹介してもらおう事は出来ませんか？」

言っと、ユハはニヤリと笑った。

「そんな事じゃないかと思ったよ」

え？なんで分かったのだろう？

「部屋を訪れるたびに、通貨や物価、社会情勢に交易に特産品。なんて質問ばかりされちゃあね。何か考えているのだろうなとは思っていたんだ」

自立に向けて、それとなく聞いていたつもりだったのだが、バレバレだったのだな。



「さて、少しきつい事を言うよ」と前置きしてユハは言葉を続ける。  
「君は、君の言うとおり、語学には堪能かもしれない。だが、君はこの国の人間とは少々容姿が違う。毛色の変わった者、ましてや成人もしていない少女が独りでやっていける程、市井は甘くないんだよ」

む、やはりそうなのか。街には色んな人種がいて、私も目立たないかもしれない。と思ったのだが、そうなら皆が皆、私の年齢を見誤る筈もないか。

「君の年で働いている者もいるが、本来ならば、まだ学業に勤めている時期だ」

「そうなんですか……。でも、私はここには親も居なければ、お金もないし、この先どうしたらいいのか」

「孤児の集まる施設が幾つかあってね。本来ならば、そこに入る事になるのだけでも、必ずしも環境が良いとは言えない。サカキちゃんのような育ちのいい子には少々きつい所だ。何より、君のような目立つ容姿の子がいけば、金にものを言わせて無体を働く愚か者が出るだろう。そうとわかっていて入れるわけにはいかないしね」

育ち、良く見えるのか？年齢の割りに落ち着いているからとでも思われているのかね。しかし八方塞がりだ。疑いが晴れて後、どうやって暮らしていけばいいのか。不安を覚えているとユハは微笑んで言う。

「心配は要らない。君が成人して独りでもやっていけるようになるまで、神官長も俺も責任を持つつもりだ。その変わりといってはなんだが、時々話しを聞かせて貰いたい。サカキちゃんは非常に貴重な出来事の生き証人なんだよ」

「……はい。ご迷惑をかけてすみません。よろしく願います」

私はユハの申し出を有り難く受ける事にした。他に選択肢なさそうだしな。歳の事など色々と制約を受けるのはもどかしいが、そうも言っでいられない。意地を張って街に出て、金持ちの慰み者になるなんてゾツとする。

「君の待遇が決まるまで、もう少し待っていてほしい」

そうユハは言い。昼食会はお開きとなった。

今日も暇だ。サウルに貰った本も読み終わり、何もする事がない。最初にもらった本は幼児向けの絵本だったが、歳若い女性の喜ぶものがわからなかったので、とは本人の言だ。読み応えのあるものもいいとお願いとすると、冒険ものの小説を持ってきてくれた。邪悪な呪術師にさらわれた美しい乙女を助けに行く騎士の物語は、少女向けに恋愛要素が入っているのが憎らしい。

あー。暇、ひま、ヒマ。ここの住人達の朝は早い。日の出と共に起き出し、日の入りと共に家に帰る。健康的だが、おかげで昼までの時間がすこぶる長い。朝食が終わって2時間程しか経っておらず、昼食まではまだまだ時間が余っていた。食べる事ばかり考えているようだが、他に楽しみがないのだから仕方がない。

此方に来た当初は、物珍しさと慣れぬ環境での生活の緊張も相俟って刺激的だったが、行動範囲が限られている中で10日もすると慣れてしまい退屈だ。日々の忙しさから逃れる為に、ゆっくり過ごすのと鄙びた観光地にやって来たものの、すぐにやる事がなくなつて暇を持て余している旅行者の気分だ。

窓際に置かれた椅子に腰掛け、部屋の窓から庭園の水辺で遊ぶ、美しい金色の鳥をただポケットと眺めていた。庭に出てあの鳥に餌でもあげようと思ひ立ち、テーブルの上のお菓子を取りに席を立つて、凍り付いた。

テーブルの上には菓子と共に、一枚の紙片が無造作に置かれていた。見覚えのないその紙にはただ一言。『街へ行け』と書かれていた。

日本語で。

いつのまに。いや、それよりも、誰がこの紙を置いたのか。紙に

書かれた字は妙に角張っていて、日本語を使い慣れぬ人物が書いたと思われた。思い当たる人物は1人しかいない。賢者だ。だが仮に賢者が犯人ならば何故こんなまどろっこしい真似をするのか。別世界に渡ったり、私にこちらの言語を与えたりと、出鱈目な力をもつ賢者ならば、城の警備をかくぐつて会いに来るなど朝飯前ではないのか。姿を現せない理由でも在るのだろうか。

もし、賢者以外の人物が犯人ならば、その意図は何だろうか……駄目だ、さっぱり分からない。分からないが、誰が仕掛けたにしても、街に出れば接触を計ってくる可能性が高いだろう。

どうしたものか……。危険はおかしたくない。けれど、日本へ帰るチャンスかもしれない。でも、怪しい。しかし、この期を逃してはいけない気もする。いくら考えても堂々巡りで結論は出ない。

第一、街に出して貰えるのだろうか？1人では無理だろうな。監視がつくだろう。さしたる理由もなしに街に出たいと希望しても叶えられるかは甚だ疑問だ。強行突破は不可能だし、する気もない。そもそも街に出るだけなんて簡潔すぎるだろ。日時の指定もなしに、どうする気なんだ？そうだ、別に今日じゃなくてもいいんじゃないか？明日出来る事を今日やる必要はない！

その昔、友人から『石橋を叩いて渡らない』と評された性格は変わっていない。切羽詰まっていたとはいえ、思い切った結果がこのざまなのだ。もう少し様子をみよう。

私は紙切れをポケットに突っ込むと、当初の予定通り菓子を持って小鳥のもとへと向かった。お目当ての金色の小鳥は既に姿を消していたが、小さな茶色の小鳥達を見つけて餌を撒く。色といい、丸っこい形といい雀に似ていて、なかなか愛らしい。庭園を訪れる鳥は人に馴れており、サウルが差し入れてくれる本に継いで私の暇つぶしの対象となっていた。

呑気に鳥達と戯れて過ごし、餌が無くなったところで部屋に戻る。昼食まではまだ時間があった。様子をみようかと決めたもののやはり気になりポケットから紙切れを取り出した時、部屋の外から足音

が聞こえて、慌ててポケットに戻す。ノックの音に返事をする、  
エイノとユハが入ってきた。

何故このタイミングで……。ユハはともかく、エイノが部屋へ来るのはこの世界へやって来た翌日に詰問されて以来の事だ。

やましい事をしたわけでもないのに、私の心臓は跳ね上がった。  
彼らが訪れたのは、ポケットの紙切れと関係があるのだろうか？自然にしなければと思うのに顔が強張るのを止められない。おざなりに挨拶をすませると、ユハが微笑んで言う。

「街へ行ってみないかい？」

「へ？」

思わず間の抜けた声を出してしまう。なんだった？

「ずっと城の中では退屈だろう？気晴らしに街へ出ないかい？この国の事を知って貰っておいた方がいいしね。それには街を見るのが一番だと思っただよ」

「はあ」

駄目だ。頭が回らない。

「こないだ俺が言った事を気にしているなら心配はいらないよ。今日は強力な護衛が二人つくからね」

どういうことだ。何故今？おかしいだろ。

どこか愉しげなユハと違い、エイノは傍目にも不機嫌なのが分かる程の仏頂面だ。しかも時折私に向けられる視線が、なんとも表現し難いものなのだ。一番近い言葉をさがすとすれば、憐憫だろうか。

「さあ、準備をして。せつかくだから昼食は街でとろう。混み始め

る前に行こうか」

この人、優しげに聞いてくれるが、いつも決定権はこっちには与えてくれないんだよなあ。

生まれて初めて馬車というものに乗った。子供の頃、シンデレラを読んで憧れていた時期もあっただけにちよつと嬉しい。道が舗装されていればもつと嬉しかったんだけどな。

私は酔わないように小さな窓の外に意識を集中させていた。流れる景色はとつても目にやさしい。なにせ緑ばかりだから。城のすぐ外に街があると思つていたのだが、兵士や神官、一部貴族の宿舎や屋敷があるという区域を抜けてから、十数分、馬車はずつと森の中を走っている。

「サカキちゃん、熱心に眺めているところを悪いね。もう少しで街に出るから、そろそろカーテンを引いてくれるかな」

その声に視線を馬車の中に戻せば、相も変わらず不機嫌なエイノと、愉しげなユハがいた。

ユハのいう強力な護衛とは彼らの事だったのだ。なんで、この2人なんだよ。仮にも神官長と近衛だろうに。何故来る。暇なのか？ そうなのか？

「お前は目立つ。街中ではフードを被ってもらうからそのつもりでいる。いらん厄介事には巻き込まれなくなろう」

おお、今日初めて喋ったな。無愛想エイノ神官長。そんなに嫌なら来なければいいのに。小娘の監視ぐらい、いつもの兵士に任せておけばいいものを。と思つてふと気が付いた。

「あの、エイノさん。具合が悪いんですか？ 顔色が良くないような……。一度馬車を停めたほうがいいんじゃないですか？」

その言葉にエイノは眉を寄せて不愉快そうな顔をし、ユ八面白げに口元に笑みを浮かべた。

「いらぬ世話だ」

「気にしないで、サカキちゃん。エイノは少し仕事を立て込んでいて疲れているだけだから」

ならなんで来たんだよ。疲れているなら城で休んでろ。やっぱり、腑に落ちない。わざわざこの2人が付いてきた事といい。メッセージが来た後の絶妙のタイミングでの街行きといい。街に何があるんだろう。嫌な予感を覚えながら私はカーテンを閉めた。

数分後一度馬車が大きく揺れたかと思うと、その後は格段に乗り心地が良くなった。どうやら舗装された道に入ったようだ。程なくして馬車が停まった。

「着いたようだ。サカキちゃん、フードを被ってくれ」

ユ八に言われ、服の上に羽織った薄茶色の外套のフードを目深に被った。この外套も膝丈である。子供服は膝丈に限る、という法律でもあるのだろうか。

いつもよりポリウームの少ないスカートに、全体的に地味な色合いでまとめられた服に着替えさせられたのだが、街娘、もとい街の子供風の衣装なのだろうな。いつもの服より数段落ち着いている。普段からこの服にしてほしいものだ。もちろんエイノやユ八も動きやすそうな簡素な服に着替えていた。

「どござ」



先に下りたユ八に手を差し込まれる。子供相手にも手を抜かない男だ。少し怯んだものの断るのも大人気ないかと思ひ手を重ねた。こういう事をされるとむず痒いんだけど。なにせ慣れてないもので馬車を降りると、石畳が敷かれレンガ造りの建物が並ぶ、異国情緒たつぷりな街並みに思わず見惚れた。しかしよく見ると、建物は古びており、人気はなく閑散としている。まるでヨーロッパの田舎を写した絵はがきのような光景だ。これはこれで趣があつていいものだが、洗練された城の様子から、規模の大きな活気溢れる街並みを想像していたのに、以外に貧乏国家なのだろうか。

「寂れていてがっかりした？」

「いえ、そういうわけじゃないですけど」

顔に出ていたのか。慌てて言い募るがユ八は笑って答える。

「ここは街の外れでね。この馬車では少々目立つから、預けて行くんだよ。大通り沿いにいい店があるから、そこで食事をとろう。少し距離があるが、此処からは徒歩になる」

馬車は黒塗りで家紋も何もなく地味に設えてあるものの、使われている素材は全て一級品。流れるようなフォルムも実に美しくその上質さは隠しようがない。来る途中、すれ違った馬車はその殆どが質素な造りのもので、それとは明らかに違った。金持ちの貴族が乗っていますよと宣伝しているようなものだ。嫌でも人目を引くだろう。

「大通り周辺はそれは賑やかだからね。はぐれないように気を付けて」

へいへい。子供扱いだな。と思つてから苦笑する。子供と思つて

いるのだから当然か。

「行くぞ」

常に私を気遣うユハとは対照的に、言うなりさつさと歩き出すエイノ。もちろん歩調は自分本位だ。あんたはもうちつと周りに気を使え。二人を足して2で割ったら、それは均整のとれた人間が出来る上がるに違いない。日本人女性としては決して低くない身長の私だが、こちらでも長身の部類に入るだろうエイノとは、基準となるコンパスが全く違う。小走りとまではいかないものの、いつもの5割り増し速く歩かねばついて行けない。競歩のような状態だ。

「エイノ、女性に合わせるよ」

すかさずユハがフォローに入る。

チラリとユハを睨むように見た後、僅かに歩調を緩めるエイノ。2人の関係は謎だ。地位はエイノが格段に高いが、ユハの接し方は弟に対する兄のソレのようだ。エイノも嫌そうにしながらも文句を言う事もなく従がっているし。そういえば2人の年齢を知らないな。20代半ばから後半だろと思うが、今度侍女さんに探りをいれてみよう。

歩き始めて結構な時間がたっていた。本当に遠いな。以前から運動不足だったが、最近の軟禁生活でさらになまっていた私には結構な距離だ。少し前から人通りも増え、商店なども見かけるようになったおかげで気がまぎれるけど。

色とりどりの果物や、不思議なデザインの衣服。用途の分からない小物を並べた雑貨屋のような店もある。当然の事ながらどれも日本では見た事のないものばかりで、興味を引かれた。

一軒一軒見てまわりたいなあ。食事がすんだらお願いしてみよう

かな。まずは腹ごしらえだ。急な予定変更のおかげで昼食の時間はいつもより遅れている。朝食が早いからお腹がすいて仕方がない。もう少ししたら腹の虫が鳴るのじゃなかるうか。

「疲れたかい？もう少しだからね」

横を歩くユ八が私の顔を覗き込んだその時。甲高い嘶きが聞こえた。続いて何かを猛烈な勢いで石畳に叩きつける音がする。なんだ？なんだ？辺りを見回すが、音の正体は分からない。慌てふためく私や周囲の人々とは対照的に、エイノとユ八は冷静だった。

エイノがざわめきの広がる道の先を見つめゆったりと手をかざし、ユ八が素早く私を背に庇った。2人が見つめる先の角から葦毛の馬が姿を現す。何かに取り憑かれたように暴れ狂い、悲鳴をあげ逃げ惑う人々を混乱に陥れていた。まさか平成も間近に産まれて、街中を走る暴れ馬にお目にかかる事になるとは思わなかった。なんの時代劇だよ。生きていると色んな経験をするものだ。

ふと馬が標的を定めるように此方を見たかと思うと、一目散に駆け出した。逃げなればと思う間もなく、恐ろしいスピードで迫り来る。

「エイノ！」

危ない！と叫ぼうとして私は信じられない光景を目にする。エイノが掲げた指の先、何も無い空間に馬がぶつかって倒れたのだ。まるでそこに頑丈な壁が存在するかのよう、鈍い派手な音を立てて横倒しになる馬。すかさずユ八が駆け寄り、なおも起き上がって暴れようとする馬の手綱をひく。

慣れた手つきで馬を御するユ八に胸をなで下ろした時、唐突に体が宙に浮き視界が反転する。何が起こったのか分からず呆然としていたら、後方へ向かって猛スピードで体を持って行かれた。

「うっ」

腹に食い込む堅い感触に呻き声がもれる。体勢を立て直そうとも  
がくが、腰に回された何かに自由を奪われ、一定のリズムで腹に当  
たる衝撃に、顔を上げる事も儘ならない。激しく揺れ動く視界に眩  
暈を起こしながら、誰かの肩に担ぎ上げられているのだと、漸く理  
解した時、大きく体が揺れた。角を曲がったのだ。僅かに顔が傾き、  
視界の端に、此方を見て膝を着き苦しげに眉を寄せているエイノと、  
未だ興奮状態にある馬の手綱を握り締め、悔しげな視線を送るユハ  
の姿が映った。

そして、私は2人の視界から消えた。

11 反抗期の（2）

私を担いだ人物。男なのだろうが、細身で上背もなく、決して恵まれた体格ではないにも関わらず、スピードを緩める事なく街中を走り続けていた。どのくらいの時間がたったのだろうか。ほんの数分のようにも、数十分のようにも感じる。揺さぶられ続けた頭は激しく痛みを訴え、歩を進めるたびに肩が容赦なく腹に食い込み、今にも吐きそうだ。空腹時で心底良かったと思う。目には生理的な涙が溜まり、気が遠くなってきた。いつその事気絶したいよ。

ふいに周囲の人々のどよめきが大きくなった。人通りの多い道に出たようだ。「誰か、助けて」と大声で叫びたいのに、蚊の泣くような声しか出ない。

「お前！何をしている」

男と分かる低い怒声が耳に届いたのは、そんな時だったから、まさに天の助けに聞こえた。私を担いでいた人物が急に立ち止まり、弾みで頭をその背中に強かに打ちつける。痛い。もうちょっとそつと止まれ。

「昼日中から誘拐とは、いい度胸だな」

威勢のいい声が響いた。担がれたままの私には声の主の姿は確認できないが、おそらく誘拐犯の進行方向に立ちふさがっているのであらう。

「たたききら……くそつ」

何かを言いかけた男は、忌々しげに舌打ちをすると叫んだ。

「誰か！警備兵を呼んでくれ。早く！」

男の声に、人々の中から呼応する声が聞こえた。良かった助かりそうだ。

「歯を食いしばれ」

はい？

楽観しかけたその時、間近ではそりと呟く声があった。距離からして私を担いでいる人物以外には考えられない。何故？と思ったのも一瞬の事で、

「ぎゃ〜〜〜」

放り投げられました。砲丸投げの玉のごとくに。無理無理、受け身なんてとれないし。

事故に遭うとスローモーションのように全てがゆっくり見えるという話しをよく耳にするが、本当だったのだな。石畳に舞う土ぼこり、口に手を当て目を見開いている女性、守るように子供を抱きかえた母親、店の窓から顔をだした店主、銀色の仮面をつけた男。視界は目まぐるしく変わっているはずなのに、その一瞬一瞬がはっきりと目に写り、青い空を舞う小鳥が見えた時、一気に時間の流れが元に戻る。背に走る衝撃に息が詰まった。地面に落下したのだとそう思った。あれ？でも、思ったより痛くない。堅いっちゃ堅いけど石畳の堅さではないような……。

「つう……」

首を捻っていると、頭の直ぐ上で男の呻き声がする。見上げれば、

まだ年若い男の顔があつた。私は尻餅を着いた男の上に乗っていたのだ。受け止めてくれたのだろうか。誰だか知らないがいい人だ。

「あつ、まて」

痛みに顔をしかめていた男が、何かに気付いたように顔をあげた。つられて見れば、栗色の髪を揺らして走り去る男の後姿が見えた。慌てて腰を浮かそうとするものの腹の上には私が乗っている。動きが遅れたその間に、栗色の髪の男は雑踏の中へと消えていった。姿が見えなくなるその間際に、此方を振り返った男の顔についた仮面を私は確かに見た。投げられた時に見えた仮面の男。あの仮面は見間違いだと思つたのに。

間違いない。あれは 昔懐かしい特撮ヒーローのものだつた。何故、特撮ヒーロー。仮面というよりお面だな。別世界のファンタジックな町並みを走り抜ける、チープなお面をつけた男なんてシユールな。

「おい、怪我はないか？」

今だかつてないほど混乱している私に、頭上から声かけられる。お面男の追跡を諦めたらしい男が訝しげな表情で私の顔を覗き込んでいた。今の声、さつき啖呵をきつてた人か。投げられた私を身を呈して庇ってくれたというよりは、お面男に私を投げつけられたと言つた方が正しかったのかもしれない。

「あの、有り難うございます」

どちらにせよ助けられた事に変わりはない。お礼を言うと男は僅かに頬を染め照れくさそうにソツポを向いた。おや、思ったよりも若そうだ。そう思って改めて男をみやる。先程のお面男と比べる

と各段に立派な体躯だが、ユハのように完成されているわけではない。張りのある瑞々しい肌に、澄んだ瞳。何よりその若々しい表情に未だ少年と言える年頃だと気がついた。17、8ぐらいだろうか。こちらに顔を戻した少年が私を見て眉を寄せた。しまった。投げられた時にフードが外れてしまっている。しかし見慣れぬ顔立ちだからといって何もそこまで顰めつ面をしなくても。少々凹みながらフードを被ろうとするとその手を止められた。私の動きを止めた少年の手はそのまま首に滑り込み髪を持ち上げる。いきなり何をするのか。お面男から助けられていなければ、少年でなければ、問答無用で振り払っている所だ。

「お前、嫌なものをつけているな」

そう言つと少年は首の後ろを柔らかく撫でた。

「わわっ」

少しかさ付いた指先の感触に思わず声が出た。ゾワツとしたぞ。

「これでいい」

「はっ」

満足気に頷く少年。君は良くても私は良くない。今の行動の意味を聞こうと少年を見つめると、少年は視線を外してぶっきらぼうに言う。

「とりあえず、どいてくれ」

その言葉で、往來の真ん中で座り込んだ少年の上に乗ったままの体制である事を思い出した。逐一見ていたのだらう人は心配げな眼



差しを向け、事情を知らぬ通行人は眉を顰めて小声で囁きあっている。

「まあ、こんなところで、なんて破廉恥な。まだ子供じゃないの」「本当ですわ、まったく最近の若い者ときたら」

その囁きが全部聞こえているから、余計に居た堪れない。それにしても最近の若いものゝ云々は世界を股に掛けて言われているんだな。

慌てて少年の上から降りるが、担がれていたせいで受けたダメージはまだ回復していなかった。ふらつく足を必死に踏ん張り、なんとか立ち上がる。

「じきに警備兵が来る。面倒だから俺はもう行くが………お前、どうする?」

「あ、私も行きます」

警備兵とやらの役割が警察と同じだとしたら、事情聴取になるだろう。ヒーローお面男の事を聞かれて、上手く誤魔化せる自信がなかった。

「おっと」

フードを被りなおすと、少年の後を付いていこうとしてよるけしてしまう。ああ、もうもどかしいな。自由に動かない足に苛立っていると、少年が私の傍までやって来て、やおら手を差し出してきた。えーと。手をひいてくれるって事かな?意味を図りかねて動けない私をみて、少年は雑な仕草で私の手を取ると歩き出した。前に行く少年を見れば、耳の辺りが仄かに色づいている。

初心でかわいいなあ。と思つて、潰れた会社で私の指導を担当し

てくれた人を思い出した。年下の男の子を「可愛い」と思ったらそれは、おばさん化の第一歩だと力説していた先輩を。ちなみに次の段階は、便秘だと思っていたポッコリお腹が実は贅肉だと気付いた瞬間。だそっだ。

## 12 反抗期の (3)

少年に手を引かれ露天が立ち並ぶ一角へと移動する。誰かと手を繋いで歩くなんて、何年ぶりだろうか。導くように前を歩いていた少年が隣に並んだ時、私は先程の疑問を口にした。

「あの、首に何かあったんですか」

「あー、まあ。気にするな」

言いづらそうに言葉を濁す少年に「そう言われると余計に気になるわ!」とは突っ込めない。なにせ恩人なのだから。

「お前、家はどこだ?送ってやる」

話題を変えるように少年に言われ、言葉に詰まった。城って言うていいものだろうか?黙っていると何やら誤解したらしい少年が慌てて言い募る。

「いや、言い辛いならいい。事情もあるだろうしな。だが、さっきの奴の事が気になるんだ。おかしな面をつけていたな………新手下攫いか。しかし、あんな奇妙な面は初めて見るな」

困惑顔で思案する少年。知らない人が見たらさぞかし珍妙に映るだろうな。

お面の男はメッセージを寄こした人物と同一人物だろうか?私はお面は私へのメッセージではないだろうかと考えていた。ついていけば何かしら得られたかも知れない。だが、お面の男は賢者ではなかった。華奢な体格も男にしては高めの声も賢者のそれとは全く違う。付いていった先に何かあるのか、私を荷物のように扱った

拳句、邪魔が入れば放り投げてしまつような男だ。碌な扱いを受けないのは明白ではないか。ならば城で軟禁生活を送っていた方がマシだ。

「また狙われないともかぎらん。頼れる奴はいるのか？」

問われてエイノとユハの顔が浮かんだ。私を探しているかな。お面男の仲間だと思われていなければいいが。

「はい。……はぐれてしまいました」

「そうか。なら俺も探してやる」

「えっ、でも……」

間髪いれずに返されて戸惑う。このまま同行して大丈夫だろうか？ 一見、人を騙す事を知らない真っ直ぐな人間のようだが。親切過ぎる気もする。

逡巡していると、盛大にお腹が鳴った。お昼を回ってかなり経つうえに歩き回ったおかげで空腹だ。しかも出店から得も言われぬ香ばしい香りが漂ってきているのだ。知らぬ世界に飛ばされて、誘拐されかけてもお腹はすくんだ。ああ私の体は今日も正常だ。

「くっ、はははははっ」

今の音が聞こえたのだろう。少年は声を上げて笑い出す。屈託のない笑い方は幼くて好感がもてるが、ここは聞こえなかったフリをしるよ。じっと睨んでいると、腹を抱えて笑っていた少年が目涙を溜めつつ言う。

「悪い」

「気にしてませんから」

「怒るなよ。先ずは何か食うか。食いたいものはあるか？」

「いえ、別になんでも……あつ！あの、やっぱり食事はいいです。連れを探さない」と

お腹はすいているし、食べたいのはやまやまだが重大な事を忘れていたよ。

「お前な、腹が鳴るほど空腹のくせに、何を言っているんだ。時間が惜しいなら、食べ歩けるものを食べ。倒れたいのか」

お節介な少年だ。

「そうではなくて、その、お金を持っていないんです」

そう、私は全くの一文無しだった。街へ来るにあたって、何かあるだろうとは思っていたが、空腹ではぐれる事になるうとは。ただ飯食らいの居候の身でお金をくれとも言えないしな。自由になるお金が欲しいよ。ああ、働きたい。

「なんだ、そんな事を気にしていたのか。俺が奢るぞ。ほら来いよ」

正直に薄情すると少年は拍子抜けした声を出した。

手を掴んだままさっさと歩き出そうとする少年にたたみかける。

「いえ、結構です。返すあてもないし、あなたのような年下の子に奢ってもらうわけにはいきません」

今が食つや食わずの生命の危機に瀕しているような状態ならご相伴に与るが、エイノとユハに会えさえすれば、食べ物にありつけるし、最悪城まで歩けばよいのだ。年下の少年にたかるのは社会人と

しての矜持が許さん。

「お前……俺を何歳だと思っているんだ？そう変わらんだろうが」

気分を害したように言われて、額に手を当てた。そうだね。私は子供に見えるんだったね。すっかり失念していた。

「今のは言葉のあやというかなんというか」

「俺はもう、15だ」

胸を張って告げる少年を思わず凝視してしまった。15!？この体格で？15歳といえば、まだ思春期真っ盛りの中学生じゃないか。何を食べて育ったら、こんなに発育がよくなるのか。

「お前は？」

「……13歳です」

「13?もう少し上かと思ったが……。だが、なら問題ないだろう。俺が奢るって言っているんだ。素直に奢られておけ」

「……はい」

納得がいけないが仕方がない。実年齢をバラしてエイノやユハとかち合ったら厄介な事になりかねないしな。

「行くぞ。そっぴや名前を聞いていなかったな。俺はイサークだ」  
「榊です」

出店で売られているのは大抵が食べ歩けるものだった。煮込んだ肉や野菜をパンに挟んだものや、串にさして焼いた肉、揚げた野菜に調味料を塗したものなどなど、そのどれもが食欲をそそる匂いを競うように発している。

私はなるべく安価そうなものを探してイサークに買ってもらう。

城で出されるものとはまるで違う質素なファーストフードなのに、この上なく美味しく感じるのは、空腹のせいばかりではないだろう。

お喋りに夢中な少女達を追い抜き、大胆な色使いの衣装を纏った蠱惑的な女性の鳴らす楽器の音色を聞きながら、だみ声で客を呼び入れる腹の出た店主から飲み物を受け取る。大きな荷物を担いだ若者の横をすり抜け、フードを被った血色の悪い男が番をする店を覗き込めば液体の注がれた大小様々な瓶が並んでいた。お菓子を待つて駆け回る幼い兄弟をかわし、後からやって来た父親らしき男性が子供達を捕まえてお灸を据える様子を微笑ましい気持ちで眺めた。

大きく息を吸い込み深呼吸をする。久々に味わう雑多な雰囲気には浮かれていた。城の中は壮麗で美しく、典雅で堅苦しい。肩が凝るのだ。一般庶民の私には。

街並みも人も何もかもが日本とは違うが、今の私の気持ちを一言であらわすならこれだ。

娑婆だぜ！ヒヤッホー！

### 13 反抗期の（4）

人通りの多い道から逸れて路地裏に入り、私はイサークと先ほど買った飲み物を飲みながら歩いてきた。とりあえずエイノ達と別れた場所まで行ってみようという事になったのだ。とはいえお面男に担がれての移動だったから、さっぱり道を覚えていないし、辿り着けるか疑問だけだ。

口の狭い袋状になった植物の葉だという容器に、ストローのように中が空洞の茎をさして飲むジューズは、シルヴァンティエでポピュラーなものなのだそう。幾つかある種類の中から、イサークはさっぱりとした味のを、私は桃のような甘い香りのするものを選んだ。容器に移す際にちらりと見えたジューズの色は、想像を絶するものだったけれども見なかった事にしよう。

「随分と甘い匂いだな。そんな甘ったるいモノよく飲めるな」

酸味のあるものが好きだというイサークは、飲んだ事がないらしい。

「匂いほど甘くないですよ。後味はさっぱりしていて飲みやすいです。飲んでみますか？」

イサークに飲み口を向けながら尋ねる。

「えっ……………」

あ、固まった。

ひょっとして回し飲みはタブーな文化なのだろうか、失敗した。



「えーと、すみません。冗談です」  
「いや、……はは、そうだよな」

拍子抜けしたような、ホツとしたような、なんとも言えない表情のイサーク。気をつけねば。

どこか上の空なイサークに街の事等を訪ねながら歩いていると、少し離れた建物の陰に揃いの服を着た数人の男達がたむろしているのが見えた。男達は輪を作るように立ち、何かを取り囲んでいるようだ。何をしているのかと覗き込む。

「いやっ」

短い女性の悲鳴が聞こえた。男達の間隙から茶色い外套を着た人物が見える。その人物が上げた声なのだろう。

1人の女性を数人の男が取り囲む。なんとも嫌な構図だ。男の1人が乱暴に女性のフードを剥ぎ、頤に手をかけ顔を上向かせる。不埒な行動をとるのではと危惧したが、男は舌打ちを一つすると直ぐに女性の顔から手を放した。

「いくぞ」

仲間の男達に言い。歩き出す。

げげ、こつちに来るよ。絡まれたら嫌だな。顔を顰めていると、イサークが素早く動き、私を近くの建物の壁に押し付ける。私の顔の横に肘から手首までを付き、そつと体を寄り添わせた。私が彼らの死角になるように。じつと彼らが通り過ぎるのを待つ。幸いにも彼らは一つ手前の角を曲がっていく。

安堵の息を吐くイサーク。緩やかなカーブを描く金色の髪が頬をくすぐった。精悍な顔立ちをしているが、間近でみると僅かに幼さ

が残っていて、なるほど15歳なのだと実感する。10年もすればさぞや男前になるのだろう。こんな弟がいたら嬉しいだろうな。しげしげと見ていると、イサークがうるたえた様子で離れた。

「こ、これは。違うからな」

何が違うのか。首を捻っている私を置いて、イサークは顔を背けて早足で歩き出した。慌てて後を追いかける。

「今の人たちはなんだったんでしょう？制服みたいなのを着ていたけど」

「もう少しこの国の事を知った方がいいぞ。あいつらは兵士だよ」

呆れたようにいうイサーク。たしかに、この国で暮らす上での超基本知識だな。

「兵士ですか。随分と偉そうでしたね」

「袖口に赤いラインが入っていた奴がいただる。あいつは貴族だ。下級だけだな。貴族社会で肩身が狭い思いをしている分、自分より下と思った奴には威張り散らす。嫌な奴らだ。」

いや、あいつらだけじゃないな。貴族なんて皆ろくなものじゃない。偉そうにふんぞり返って民から金を巻き上げるのが仕事なのだからな」

急に饒舌になったイサークに戸惑う。貴族に恨みでもあるのだろうか。地面を睨みつけていたイサークがふと思いついたように、顔をあげ私を見た。

「お前、この国の王子を知っているか？賢君と名高い現王の息子でありながら、凡庸な才しか持たない腑抜けだ。そんな奴でも王子っ

てだけで、いい服を着て上手い飯を食って、毎日贅沢三昧だ。まったく羨ましいご身分だぜ」

イサークの目に宿った暗い影に目を見張る。吐き捨てるように言うその声に自嘲めいたモノが混じっているのは気のせいだろうか。先程までの快活な様はどこへいったのか。余程王侯貴族が嫌いなのか。この先物騒な考えを持たなければいいが。それに侍女さん達は武芸に秀でた王子だと褒めていたけどな。ああ、ひよっとして筋肉バカなのか？

それはさて置き、私の所思はイサークとは違った。

「私は羨ましいとは思いませんけど」

言つと、イサークが不思議なものでも見るような顔つきで私を見る。

「産まれた時から将来を決められて、お城で堅苦しい生活をしなければならいなんて息が詰まりそうです。そりゃ、庶民に比べれば贅沢はできるかもしれませんが、誰よりも重い責任を負わなければいけない訳ですし。凡庸なら尚更辛いでしょうね」

優秀な過去の王と比べられ、美辞麗句を並べ立てた家臣は、その腹の内で嘲笑を向けていたりするんじゃないかなろうか。私ならまず耐えられん。

「そう……か」

「しかも毒殺とか暗殺の危険に日々晒されて、跡継ぎを成す為に、何人もの女性を相手にしなけりゃならなかったり、寵姫同士の諍いに板挟みになったり。しかもしかもクーデターや革命なんて起こった日にはギロチンで首と体がおさらばですよ！拳げ句の果てには類

い希な馬鹿として歴史に名が残って、名前が長かったりしたら、覚えにくいんだよ。バーカって、後生の子ども達に恨まれて……」

ああ、想像するだに恐ろしい。

「いや、そこまで酷くないと思うのだが。まだ若いし、これから周りの評価も変わるかもしれんし……。」

顔を引きつらせるイサーク。なんだ、貶めたかと思えば庇うのか。一体どっちなんだ。

その後「それに名前も長くないし」だのと呟いていたイサークだが、少しの沈黙の後、伸びをすると晴れやかな笑顔を見せた。

「まあいいか。お前、面白い奴だな」

おお、元のイサークだ。いいね、その笑顔。うんうん、子供が深く考える事じゃない。

今から悩みすぎでは二十年後の毛根が心配だ。

## 14 反抗期の (5) (前書き)

流血はしませんが、一部暴力表現があります。苦手な方はご注意ください。

## 14 反抗期の(5)

調子を取り戻したイサークと談笑しつつ路地を進む。一時は途絶えていた人通りが再び増え始めた。だが先ほど出店の並ぶ通りで見た人々とは少々様子が違う。ふんだんに布を使った衣装に身を包み一人静かに、或いは恋人と思しき人物と肩を並べて歩いていた。

よくよく見れば、ちらほらと商店があるのだが、どの店も看板も掲げずひっそりと営業しており、商売けが見られない。興味をそそられて窓際に飾られた商品を除き見れば、大粒の宝石をあしらった装飾品が並んでいた。高そうだ。

富裕層向けの宝石店か。どおりで。

「何を見ているんだ？」

一人納得していると、私の視線の先に気付いたイサークが窓から店の中を覗き込んだ。ああ、と悪戯っぽい顔を浮かべる。

「好きだよなあ。女はこういうの」

好きか嫌いかと言われれば好きだが、身に着けると何だか違和感がかして、結局仕舞い込む事が多いんだよなあ。見るのは好きだけど。眼福。眼福。あ、あの琥珀色の石のついた首飾りなんか可愛いな。トウーリに似合いそうだ。

「あれが気に入ったのか？ここで待っている」

「へ？あの、ちょっと……」

言うなり、引き止めるまもなくイサークは扉の中へと入っていく。私は呆気に気を取られてしまっていた。もしか、買いにいったん

じゃあるまいな。この店は高いぞ。まさか、ね……と思ひ窓から覗くと、私が見ていた首飾りを店の人らしき、美しく着飾った女性が持つて行くのがみえた。マジで？

店から出てきたイサークの手には包装も何もされていない先程の首飾りがあつた。

「やるよ。今日の礼だ」

お礼をしなくてはいけないのはこつちなだけど。と戸惑う。しかし問題なのはそこではない。首飾りは15才の少年がポンつと買える値段ではなかつたはずだ。

金持ちのボンボンなのか？いや、違う。と私の直感が告げていた。改めてイサークを眺め回し、その手に目が止まつた。質素な服に擦り切れた靴。整えられていないラフな髪型。飾り気のない笑顔。至つて普通の街の少年だ。

だが、その手についた堅い皮膚の膨らみは何なのか。それと同じものをつけた人物を知っている。最後に見た彼の姿は暴れ狂う馬を押さえ込むところだつた。そう、ユ八だ。ユ八の手についた堅い皮膚。あれは剣胼だつたのではないか？近衛兵として厳しい訓練を絶やさないと生きていたユ八。そのユ八に負けぬ胼を手にもつ、この少年は一体、誰だ？

言いようのない気持ち悪さが足元から這い上がってくる。

紙切れに書かれた日本語の文字。覆面の誘拐犯。都合よく現れたイサーク。わからない。わからない。この世界に来てから何度となく繰り返した言葉が、頭の中で渦巻いていた。

「つけてやるよ」

イサークの手に導かれてクルリと回転させられる。私は人形のようにならなかつた。

首飾りが背後に立つイサークの手によって首に巻かれ、彼がその留め具を付けるべく私の髪を左右によけた。首筋に私のものではない髪がかかる。イサークの柔らかな髪の感触。その感触に身震いする。

その時、見知った人影が視界の端に入った。私をみて、安堵の表情を浮かべたユハがそこにいた。私はこの時どんな顔をしていたのだろうか。この後にユハがとった行動は私のせいだ。

微笑みかけたユハは直ぐに表情を消すと、人間がこれほどの速さで動けるのかと驚嘆する素早さで此方に走り寄り、私には目もくれずに背後にいたイサークの腕を掴む。振り返った時には、イサークはユハによって、肩を押さえ付け腕を捻りあげられ地面に倒されていた。

ユハが口の端を僅かに上げる。その酷薄な表情におののいた。夜の庭園で私を押さえつけた時もこんな表情を浮かべていたのだろうか。

「ユハさん、待って！」

悲鳴に似た声が喉をつく。

『こりゅ』

音が聞こえた。

実際にはそんな音などしなかったかもしれないし、したとしても小さな音で私には届かないものだったかもしれない。しかし私の耳には確かに聞こえたのだ。人体を破壊する禍々しいその音が。

「うわああああ」

イサークの声がこだました。体を丸めて痛みに耐えるイサーク。その傍らに立つユハには何の感情も見られなかった。呻くイサークを眺めた後、ゆっくりとした動作で懐に手を入れ、何かを取り出す。



それが短剣だと直ぐに気づいた。止めなければと思うものの、体は動かず、声もでない。

「さて……」

これから、ユハが何をするのか、考えたくもない。

ユハはイサークの耳の横にそれを突き立てると、髪を掴み顔を上げさせた。そこで初めて何故彼が耳の横に剣を突き立てたのか理解した。イサークがそれを目で認められる場所だったのだ。

「自分の力を計り間違えるなよ」

冷やかな声で告げるとユハは髪を離し立ち上がる。次いでイサークも肩を押さえて起き上がり、ユハを睨みつけた。

「あの、ユハさん。彼は私を助けてくれた人で……」

ひっかかる所はあるが、助けてもらったのは事実だ。恐怖に縮む喉を叱咤し、ユハの誤解を解こうと進み出る。が、次に彼のとつた行動に唾然とした。

ユハは片膝をつくと、恭しく首部を垂れた。イサークに向かって。

「御無礼を致しました。気付かずした事とはいえ許される事ではございません。処分は如何様にもお受けする所存にございます。殿下」

殿下、殿下、殿下  
皇太子・皇族などの敬称。思わず言葉を繰り返して、意味を考えてしまう。

王子様、か。そりゃ、この首飾りぐらい買えるな。そつと首に揺れる宝石に手をやる。純粹な好意であったものを勘ぐってしまった。

「お前……神官長付きの近衛の者か。よい。事情は分からぬが、この者に危機が及ぶと考えての事であろう。立て。人目がある」

痛みのためか、眉をしかめ、冷や汗を流すイサークに言われてユハはやつと顔をあげ立ち上がった。

「触れる事をお許し頂けましたら、肩をはめさせて頂きますが」  
「……許す」

ユハはイサークのそばに移動すると「失礼いたします」と肩に手をかけた。その間イサークは歯を食いしばり、一言も声を漏らさなかつた。見ていただだけの私が呻いちゃったけどな。

#### 14 反抗期の (5) (後書き)

脱臼って痛いですかね？子供の頃に何度かした時は泣くほど痛かったです。自分で肩を外しちゃう人もいますよね……。イサークが此処まで痛がっているのは手荒に外されて痛めてしまったという事で。

15 反抗期の（6）

ユハに連れられて街中の宿の一室に移動する事となった。宿の中でも上の上ランクだろう。城と違わぬほどの豪華さだ。泊まるわけでもないのに、勿体無い。まあ、仮にも王子を場末の安宿には案内できないのだろうが。

ユハはエイノや城の兵に連絡を取るために部屋を出ており、今はイサークと2人きりだ。

私は、柔らかいソファーに身を沈めて呟いた。

「王子様だったんですね」

「悪かったな。黙っていて」

向かいに座ったイサークは。ばつが悪そうに顔を背け、目を合わせようとしない。白い布で吊られた腕が痛々しかった。肩は、はめなおしはしたものの筋を痛めたらしい。城に戻ってサウラの治療を受けることになるそうだ。

ふと暗い目をして語るイサークの姿を思い出した。ああ、あれは自分の事だったんだな。

「いえ。それより聞いたのと違いますよ」

「何がだ？」

「王子様の事です。全然、凡庸で腑抜けで後生に渡って語り継がれる筋肉馬鹿じゃないじゃないですか」

「俺はそこまでいっていないぞ」

あれ？そうだったっけ？

「まあまあ、それは置いといて」

不服そうに睨まれたが無視して話を続ける。

「さつきは、申し訳ありませんでした」

「何を謝る事があるんだ？」

「私と一緒にいた為に怪我をさせて。……ユ八さんを、止められなくて」

ずっと気になっていたのだ。ユ八に気圧されて一步も動けなかった事を。

「ああ、気にするな。あいつが女子供に止められる奴にみえるか？ そついや、ユ八とはどういう関係なんだ？ 何故神官長の近衛がお前をさがしていた？」

「ちよつと、壮大な迷子になりました、ユ八さん達に保護されたというか、なんとというか」

「は？ なんだそりゃ」

「まあ、色々と事情があるんです」

「ふうん」

イサークは納得がいかないといった顔をしていたが、私が強引に話を打ち切ると、追求してくる事はしなかった。

「ユ八、か。噂に聞いた事はあつたが、噂通りの奴だな。賊と間違えたとはいえ、躊躇なく肩をはずしやがって」

「………………。噂って、どんな噂なんですか？」

「お前、ユ八とこれからも付き合があるのだから？ なら、聞かんほうがいいぞ」

「聞かない事にします」

精神衛生上よろしくない事は聞かないに限る。世の中知らない方が幸せな事っていっぱいあるよね。

「ところで、王子様は何故、一人で街にいたんですか？」

「うっ、それは、その。あれだ！市井の生活を知り見聞を広めるのも王太子としての重要な勤めでだな」

しどろもどろに言い募るイサークに冷たい視線を送る。

「家出ですか」

「違うぞ！」

むきになって否定するところが怪しい。

イサークはため息を一つ落とすと観念したように話し出した。

「最近、俺の事を狙っている奴がいるという噂がたってな。安全の為に、城で軟禁生活になった」

フォルセルの女呪術師か。そいつのせいで私はこんなロリ服を着なければいけなくなったのだ。

「唯一同年代の友人と会える学院にも出席出来なくなって、鬱憤がたまっていたんだ。それで、ちよつと、息抜きに忍びで街に出たら、奇怪な面をした怪しい奴に担がれているお前に会ったというわけだ」  
息抜きねえ。どうみても常習犯だが。私はイサークの堂に入った姿を見て思っていた。

しばらく後、ユハがエイノと数人の兵士と共に戻ってきた。兵士達は中に入る事はなく、扉の外で見張りを務めている。

エイノの顔は未だどこか精彩を欠いており、お面男にさらわれた時に見た苦しげな表情を思い出す。やはり体調がよくなかったのだ。そんな中、私を探してくれていたのだと思うと申し訳ない気持ちになる。

イサークの前にくると2人は跪いた。

「この度はユハが御無礼を働き、誠に申し訳ございません」  
「良いと言ったはずだ」

エイノの言葉に面倒そうに答えていたイサークだったが、ふいにその目が鋭く細められる。

「エイノ、サカキに術をかけたのはお前か？」

「はい」

「神官長ともある者が何故あのような術をかけた。あれは外術ぞ！」

恫喝するイサークは、覇気に溢れた王者の風格を漂わせていた。その眼光は対峙する者に畏怖を覚えさせる。質素な服を纏ってなお、溢れる気品と威厳。

なんだ、本当に聞いたのと全く違うじゃないか。誰が腑抜けだった？イサークの豹変ぶりに、正直驚いた。とてもまだ15才の少年には見えない。人懐っこい犬と違っていたら狼の子供だったのだな。安心した半面、おねーさんはちょっと寂しいよ。

「お言葉にございますが、必要とあらばどの様な術でもかけましよう」

「必要だと？サカキにそんな必要があるとは思えんな」

「この者は先日、王宮の庭に突如現れた者にございます。例えどれほど非力な存在であったとしても、疑わしき点がある限り見逃

す事は出来ませぬ。王家の御為、ひいては国の為に、万難を排する事が私共の務めかと」

恭しくも飄々と返すエイノ。まあ、このくらいで動揺するタイプじゃないか。

「あの、術って何の事ですか？」

こんな場面に割り込むのは勇気がいるね。置物よろしく黙って傍観していたかったが、穏やかじゃない話の内容が私に関係するものだと思うと口を挟まずにはいられなかった。

問うとイサークに気遣わしげな視線を返される。目の前で話しておいて、それはない。気になって夜も眠れなくなりそうだ。

「教えて下さい」

「……サリの術だ。お前の首の後ろに術印があった」

「あつ」

私は思わず声をあげていた。お面男から助けられた直後にイサークに撫でられた所だ。そして庭園でユ八に取り押さえられた時に僅かな痛みを感じた場所でもある。あの時に、何かされていたのだな。

「それで、一体どういった術なんですか？」

「サリの術は、対象者の監視を目的としたものだ。対象と離れて監視をする場合に使う。大凡の位置と……行動が分かる。俺は使った事がないので詳しくは分らんが、対象者の動きが地に落ちる影の如くに見えるらしい」

なんだったって？



「昔は貴族間で腹の探り合いをするのに使われたようだが、様々な諍い事を引き起こしたうえに、術の悪質性が強い事から禁じられた。その後使用は一部の罪人に限られる事になったのだが、術者と対象が離れては精度が落ちるため一定の距離を保たなければならぬのと、術者の負担が大きく、継続して術をかけると3日と保たなかった。たので今では廃れている術だ」

イサークの説明を私は半分しか聞いていなかった。

影で見えるだと？それは、なにか？便秘でトイレに籠もっていた事や、賢者を思い出しては枕をサンドバッグに使っていた事や、風呂でドリフを振り付で熱唱していた事や、慣れぬ器具を使つてのムダ毛の処理まで、影とはいえずべて見られていたという事か！？その術で見られる影の映像の精度が知りたい。どこまで分かるんだ……。エイノの顔色を窺うが、その顔にはいささかのうしろめたさも悔恨の情も見られない。

「この、変態、ムツツリ、悪魔、ロリコン、覗き魔、二度と私に顔を見せるな！ドS神官」

と罵れたらどんなにすつきりする事か。しかし、それが出来る程子供ではない。今すぐエイノの前から逃げ出したかった。というからお前が姿を消せ。

「へえ、そんなんですか、それを十日以上も……それはそれはお疲れ様です」

眩暈を起こしそんな憤りを押し殺し、絞り出すように呟いて口を閉じた。口を開いたら何を言ってしまうか分からなかったから。

本当に知らない方が幸せな事は多い。

## 16 反抗期の（7）

帰りの馬車の中は重苦しい空気に包まれていた。イサークはユ八が手配した兵士に回りをびっしりと囲まれた重装備の馬車で一足先に帰城しており、馬車の中は行きと同じメンバーだ。

私はだんまりを決め込み全身で拒絶を示している。エイノは瞑想に耽り、ユ八は笑顔を絶やさない。その笑顔がニコニコではなくニヤニヤに見えるのは私の被害妄想だろうか。

いきなり城の真ん中に現れた私が悪いのは解る。厚遇してもらっていると分かっているつもりだ。元より文句を言える立場ではない事も。だからといって、笑って許せるほど広い心の持ち主ではない子供と思っただけとはいえず女に対してとる方法なのか？

エイノは謝罪をするでもなく、悪びれるふうでもなく、いつも通りの態度を貫き通していた。それがまた腹立たしい。せめて、笑い話として振ってくれたら対処の仕様があるものを。

ああ、そういや、サウルに気付かれなかった事にショックを受けて、バストアップ体操もやったつけない。一昔前に流行ったウォーキング体操もしたはずだ。

この10日間にやった奇行を思い出す度に、槌に打たれた杭のように地面にめり込んでいく気がする。もう、首の下まで土の中だ。

さぞかし変な奴と思われた事だろう。今朝、久方ぶりに会ったエイノの視線の理由が分かった気がした。

城につき馬車から降りようとすると、すかさずユ八が手を差し出す。どんな時でも紳士に徹する姿勢はいつそ敬服するが、人にはそっとしておいてほしい時もあるんだよ。溜め息を殺して渋々手を重ね踏み台に足を乗せた。

その手が軽く握られたかと思うと、僅かにユ八に引き寄せられた体が傾ぎユ八の胸に額をつく寸前で踏みとどまるが、更に力を込め

られて、しなだれかかるような体勢になってしまっ。

何をするのか。抗議しようと思つて顔をあげると、思つていたよりずっと近くに緑の瞳があつた。驚き慌てて俯くと、耳にユハの唇が微妙に触れ、息を吹き込むように囁かれる。

「君はエイノに助けられたんだよ」

助けられた？私が、エイノに……？

動けぬまま考えを巡らせていると、ユハは「大丈夫かい？気をつけて」と何事もなかったように振舞う。他の人からはバランスを崩した私をユハが支えたように見えただろう。

意味を聞きたい。視線で問うが、しかしユハは微笑みを返すばかりで語るうとはしない。説明する気はないという事か。爽やかなお兄さん面をして意地の悪い男だ。

馬車の踏み台が軋む音がして振り返ると、後から出てきた、エイノと目が合ってしまった。

「あの……」

気まずい。ユハに言われた言葉が気になって、声をかけてしまつたが、何と続けよう。

助けてくれた？何から？影の映像でどこまで見ていた？仕方がなくした事？少しは疑いが晴れた？お面男の事を尋ねないの？体は大丈夫？聞きたい事は山ほどあつたが、思考は空転して言葉になる前に崩れていつてしまう。

エイノの感情を読み取ろうと探るように瞳を覗き込んだ。長い金茶色の睫毛に彩られた瞳は複雑な色を宿していて、しかしその全てを強固な意志という盾が覆い隠している。宿で再開した時にうつすらと額に汗が浮いていたのを見た。体調の悪い中、お面男にさらわ

れた私を探してくれたのだろうか。

顔からも声からも瞳からさえも感情を遠ざけているが、本当は優しい人なのかもしれない。そんな気がした。

心配をかけた事を謝ろう。そして、話し合えばいい。私はエイノに一步、歩み寄る。

エイノが口の端に薄く笑みを浮かべ真っ直ぐに私を見据えた。美しい光沢を持つ真っ直な長い髪が肩から零れ落ちる。エイノの動きに合わせて滑るようになめらかに動くその髪に触れてみたいと思っただ。本当に綺麗な人だ。

形のいい艶やかな桜色の唇が優美に動き言葉を紡ぐ。

「詫びる気はない」

それはそれはそれは冷やややかに言い放つと、話は済んだとばかりにエイノはユハと共に城の中へと消えていった。

うおおおおおー。やっぱリム力つく。話し合えば分かり合えるなんて幻想だ。錯覚だ。奇麗事だ！冷たくみえて実は優しいだなんて一瞬でも思った自分の馬鹿さ加減に呆れるわ。血の色緑の蜥蜴男に感情なんかあるもんか。

いつの間にか馬車も去り、残されたのは私と私につけられた監視の兵のみとなっていた。

怒りに震える拳にそつと手が添えられる。ぎよつとして見れば、お髭がダンデー！なおじ様兵が私の手を取り、何かを握らせた。そつと開いてみるとどどめ色の飴玉が一つ。おじ様兵士は哀れむような目をして、頭を軽く叩いた。

慰められたみたい……。子供仕様だけど、ジーンときたよ。

#### 余話

精神的にも肉体的にも限界を感じる一日だった。

城の中の与えられた部屋で、椅子に座ってだらしなく頼杖を付き、

てきはきと食事の仕度を整えていくアイラを何とはなしに眺めていると、トウーリが部屋へと入ってきた。

「あら、トウーリ。どうしたの？今日はもうあがりでしょう？」

アイラが驚いた声で尋ねる。

「ちょっとね。それよりサカキ様。今日は街で大変な目に遭われたと聞きましたわ。お怪我はございませんの？」

「大丈夫です。怪我はしていませんから。……トウーリさん、情報速いですね」

この城の侍女の情報網は一体どうなっているのか。帰ってきてからまだ一時間と経ってないんだけど。

「どこから仕入れてくるんですか？」

「サウル様からですわ」

サウル？イサークが治療を受けたはずだから事情は知っているだろうが、サウルが侍女さん達と無駄口を叩くとは思えないのだが。

「トウーリとサウル様は、恋人同士なのですよ」

不思議に思っていると、アイラが笑いながら教えてくれる。

へえ、トウーリとサウルが。って、ええ！？トウーリとサウルが恋人！？

パンツとペチコートの間違って用意したり、保湿用の香油を芳香剤と勘違いして振り撒いちゃう天然のトウーリと、冷静沈着を絵に描いたようなサウルが……。歳だっけかなり離れているよなあ。

「それにしても恐ろしい賊がいたものですわね。殿下にお怪我を負わせるなんて。許せませんわ!」

怒りも顕にまくし立てるトゥーリ。

あー、そういう事になってるんだ。ユハがお咎めを受けないようにとの配慮かな？

「あの、王子様の様子はどうですか？」

「ええ、治療を受けられてもうすっかりいいみたいですわよ」

そうか、良かった。私はトゥーリの言葉に胸を撫で下ろした。

しっかし、トゥーリとサウルがねえ。どんな会話をするんだろうか。想像できん。愛を囁く時も無表情そうで怖いな。ベッドの中でも……いや、止めとこう。

男女の仲って奥が深い。今日一番の謎だ。

17 ユハという男(前書き)

副題と関係ない話に……

## 17 ユハという男

街での騒動から3日が経っていた。私は相も変らぬ退屈な日々を過ごして……はいなかった。

「サカキー。遊びに来てやったぞ」

元気いっぱい声を張り上げて部屋にやって来たのは、この国シルヴァンティエの王太子こと、イサークだ。街で会った時とは違い、上品で質の良い衣服に身を包んでいる。緩やかなカーブを描く金の髪が、青を基調とした襟首の詰まった服の肩で散り、白い布帯の上には宝石の埋め込まれた飾り帯が巻かれている。濃いブラウンの長靴は手入れが行き届いており、もちろん磨り減ってなどいない。腰には飾り帯の他に頑丈そうな皮のベルトも巻かれ、見栄えよりも実用性を重視した飾り気のない長剣が吊られていた。これで赤いマントでもはためかせたら絵本に出てくる王子様そのものだ。

イサークに続いて二人の近衛も部屋へと入ってくる。私につけられた監視の兵は扉の外に立ち、部屋に立ち入る事はなかったが、この近衛たちは常にイサークの3歩後ろに影のように従っていた。口を開く事は一切ないが、こいつらが曲者なんだよ。

「土産だ。お前が煩く注文をつけるから迷った」

「ありがとうございます」

素っ気無い仕草で手のひらサイズの包みを手渡される。ピンク色の柔らかな紙を伝わって丸く小さな物が中で転がる感触がした。お菓子だろうか？勧められる前にさっさとソファに座り、自室のように寛ぐイサークに礼を言い、向かいの席へ腰を下ろす。

包みをテーブルの上で広げると、中から甘い香りのする小石程の



茶色い物体が転がり出た。

「これって……」

「最近、城下で流行っている菓子だそうだ。変な色だが味はいいぞ」

菓子を一粒つまみ顔の前へともってくる。この匂い。この色。口の中へいれて驚いた。

「チョコレートだ」

この国に来て色々な菓子を出された。プリンやモンブラン、チーズケーキやバナナに似た味の菓子はあったが、チョコレートは初めてだ。しかも、色がまとも。

「ちょこれいと？お前の国ではそう言うのか？」

「ええ、私の知っているチョコレートという菓子と全く同じ味があります」

色がね。同じだよ。色が。

「これは、カツオという菓子だそうだ」

「カツオっていうんですか。本当にチョコレートと似ていて、懐かしい味です。ありがとう。イサーク」

色がね。懐かしいよ。色が。

「気に入ったのなら、また持ってこよう」

嬉しそうに笑顔を見せるイサーク。街の宿屋でエイノと対峙していた時の恐ろしいまでの覇気はどこへやら。あの時は確かに勇猛な

狼に見えたのに、こうして見るとワンコだな。

しかし、この2日間イサークのおかげで疲れた。

1日目、つまり街で会った翌日にやって来たイサークは、前日にサウルに術をかけられた影響で倦怠感があるはずなのだが、全くそんな素振りはなく元気そのものだった。これが若さというやつか。と驚いたが、さらに土産に持ってきた品に驚嘆した。精巧な細工の施された腕輪は大小様々な宝石が散りばめられており、街で貰った首飾りとは比べ物にならない程の一品だったのだ。首飾りでさえ手に余っているというのに。なんて面倒なものを。

こんな高価な物は受け取れないと何度も丁重にお断りして返す事に成功すると、次は王子様ではなくイサークと呼べとのたまう。すると、それを聞いた近衛達がものすごい視線を向けてくるのだ。

「ならん。殿下に対してその様な無礼。お前のような何処の馬の骨とも分からぬ奴が殿下の御名をみだりに口にするなど以ての外！」

近衛たちの目は間違いなくそう語っていた。押し問答の末に、2人きり（とはいえ近衛がいるから実質4人だけ）の時は、イサーク。それ以外の時は王子様もしくは殿下と呼ぶことになった。近衛達は思いつきり不服そうだったけどな。

帰りがけにどんな土産ならいいのかと問われ、無難に「花なら」と答えたのだが、説明が足りなかった。次の日、抱えきれないほど大きな花束を携えてやってきたイサークを見て頭を抱えなくなった。しかし生花をつき返すわけにもいかず、侍女さん達が大慌てで馬鹿でかい花瓶を持ってきて活けてくれたのだが、テーブルの上を陣取ってしまい邪魔な事この上なかったのだ。

床に花瓶を置いてはどうかと指摘したら、「殿下に頂いた花を、とんでもない」と一蹴された。その時の近衛たちときたら、視線だけで人が殺せたら私はもうこの世にはいないだろうな。

一室に飾るには大層な花束。それがテーブルの上にドドンと飾ら

れた様はまるでホテルのロビーのようだった。

アイラが機転を利かせて、小さい、といつても普通サイズの花瓶を大量に用意し小分けにして花を飾ってくれ、テーブルを占領される事態からは脱したが、部屋中に飾られた花に、「どこの結婚式会場だよ」と独りこつそりと突っ込みをいれていた。

そんな訳でイサークの来訪は、ありがた迷惑だったりする。本人に悪気が無いのがまた困るのだ。歳の近い暇つぶし相手が城内にいて嬉しかったのだろうか。

そりゃあ、嫌われるよりは好意を持たれる事は喜ばしい事だが、その示し方が……さすが純粹培養の王子様。ちよつと感覚がずれている。いや王宮内では当たり前前の感覚で、私の方が彼らからずれているのかもしれないが。とにかく私とはかなりずれているのだ。小ぶりで！値のほらないものを！としつこく念押しして、今日のカットとなった。やれやれと息をついたのもつかの間で。

「今度俺の部屋に来ないか？」

さらりと爆弾発言をかましてくれる。やめてくれ。私の平穩の為にやめてくれ。

近衛兵達に、「今すぐ断れ。失礼のないようにな！」と目で脅されておすおすと口を開いた。

「いやいや、そんな滅相もない」

「なんでだ？」

ムツとして言い返されて、言葉に窮する。答えは至って簡単「あなたが王子様で私は厄介ごとには巻き込まれたくないから」なのだ。が、イサークは飽く迄友人として対等に接しようとしてくれているのだ、そしてそれを私にも望んでいる。それがわかっていながら、そんな心無い台詞は言えない。

「えーと、それはですね、私の国では結婚前の女性が男性の部屋を訪れてはいけない事になっているからです」

「結婚前……って、お前まだ13だろうが。なら最低でもあと5年は男の部屋に入っただけいのかんのか？」

「いえ、私の国では女性は16歳から婚姻が可能ですから、あと3年ですね」

「ふうん。なら仕方ないな。じゃあ、庭で飯でも食わないか？西の庭の花が見頃だったはずだ」

王子の言葉に衛兵達を伺うと、不本意そうながらもかすかに首を縦にふる。OKが出たようだ。

「それなら、喜んで」

「よしっ、じゃ明日昼前に来るからな」

そいふとイサークは晴れやかな笑顔を見せた。

かわいいな。気骨が折れるがイサークの笑顔には癒される。その笑顔に反比例する後ろの近衛ズのしかめっ面がなければいいのだが。

18 ユハという男 (2) (前書き)

若干の性的表現があります。苦手な方はご注意ください。

イサークの訪問を受けるようになった事以外にも変わった事がある。行動出来る範囲が増えたのだ。以前は城の自室とその前にあった庭だけだったが、城の一定範囲と、城壁の向こう側、兵士や神官の詰め所や宿舎のある地域にも立ち入りが許可された。

この地域、かなり広大な敷地なのだが、その周囲を更にグルリと第2の城壁ともいえる高い壁が囲っていた。つまり城は2重の壁で守られている事になる。

壁と壁とに挟まれたその場所の事を第2区域、略して2区といい、街まで距離がある事から、簡単な店舗などもあつてなかなか楽しげな所なのだ。

そこを散策するのが目下の楽しみとなっており、イサークが帰った後、昼食までの暇つぶしにと今日も2区へと出かけた。

街に比べたら当然見応えはないが、それでも城の中よりは自由で活気がある。監視の兵士は付いてくるが、立ち入りの許可を得ている場所ならば基本的に自由にさせてくれるし、王子の近衛達と違って感じの良い人達だしな。

今日の監視兵さんは先日飴玉をくれた髭の兵士と、何度か顔を見た事がある20代半ばの真面目そうな人だった。密かに前者をライアン、後者をクリフトと命名している。

店は昨日廻ったので今日は裏手の探索だ。店舗の並ぶ場所を通りぬけると、白一色の服に銀系の織り込まれた帯を身につけた人が目に付くようになる。あの服は確か、神官服だったかな。

裾を踏んで転びそうな踝丈なのだが、颯爽と歩く彼らに感心してしまう。

同じような丈の服を着たエイノやサウルを見る度に思っていたのだが、用を足す時はどうするのだろうか。帯に挟むのか？裾を帯に

挟んだ間の抜けた格好のエイノを想像してほんの少し溜飲が下がる。サリの術の恨みはまだまだ薄らいではない。

神官達の居住区らしい其処を過ぎると、垣根と簡単な門があり兵士が立っていた。どうやらここからは兵士達の居住区になるようだ。行き交う人々から女性の姿が消える。飾り気の無い無骨な建物や、大勢の兵士が汗を流す訓練場を眺め歩いた。兵士達は皆一様に屈強な体つきで、平均的日本人男性よりもはるかに大柄だ。

こんな場所を女が……訂正、子供がフラフラしているのが珍しいのか、時折視線を向けられる。彼らにかかれば私など一溜まりもないだろう。1人では余りふらつきたくない所だ。ライアンやクリフトがいるから安心していられるが、それでも足は自然と速くなり、気付けば所々に木々の茂る静かな場所へと出ていた。

へえ、こんな所もあるんだ。遠くで兵達の声はするが、気になる程でもなし散歩にはもってこいだな。下草に混じって咲く野花を愛でつつ歩を進めると、微かに人の声がした。兵士達の怒声とは違う、甘い響きの混じった声に誘うような女の笑い声が呼応する。

これは、まずいときに通りかかったな。引き返したいが、後ろのライアンとクリフトが気に掛かる。13歳ってこの声音の意味が分かるものだろうか？当時の自分はどうだった？うーん思い出せん。全く分からない歳じゃないと思うが、察しが良すぎるのも変だろう。気付かない振りをして通り過ぎるべきか。

迷っていると、囁き合う声に濡れた音が混じり始める。

ああ本格的によるしくない。

自然に振る舞わなくてはと思うのに忍び足になってしまふ。後ろの2人の足音もいつの間にか静かなものへと変わっていた。さぞかし困っているだろうな。3人揃ってソロソロと歩いていると、木立の向こうに睦合う男女の姿が見えてしまった。

予想通り、お熱いキスの真っ最中だ。豊かな長い金の髪を背に垂らした女は、タイトなドレスの上にシヨールを羽織っており、腰の括れから下はその肉感的な体のラインが顕になっている。男の顔は

葉の影に隠れ見えないが、服装から兵士なのは間違いないだろう。女の腰に回された男の手が背中を撫で、這い上がる。唇が僅かに離れ女の口から官能的な溜め息が漏れた。女は潤んだ瞳でねだるように男を見つめ胸にそわせた指を怪しく動かす。しかし、なかなか応えようとしない男に痺れを切らしたのか、女は男の頬に手を添えりと軽く踵を浮かせた。再び唇と唇が触れ合うかと思われた。

「ごほんっ」

私は後ろから聞こえた、あからさまな牽制の咳払いに体を小さく揺らした。自分が立ち止まって見入ってしまった事に気がついて赤面する。簡単なキスシーンならば、しょっちゅうとはいかないが何度か見た事はあるが、生で他人の濃厚な所謂ベロチューを見たのは初めてだったので、つい、ね。彼氏いない暦2年半。半ば乾きかけた私には刺激が強すぎたよ。

おそらくライアンの方だろう、が鳴らしたその音に、濡れ場を繰り広げていた男がおもむろに此方へと向き直る。木陰になっていたその顔が見えた。赤茶の髪に緑の瞳、右頬に走る傷。

おまえか！ユハ。

見ず知らずの他人のキスシーンならいざ知らず、知り合いのそれは生々しいものがある。

ユハはさりげなく女から体を離すと、今しがたまでの情事など無かったかのように涼しげな笑顔を見せた。

「やあ、サカキちゃん。珍しい所で会ったね」

キスシーンを見られた事についてはスルーですか。それにしてもぬけぬけと。ちょっとは照れるなり、うるたえるなり、したらどうなんだ。



「こんにちは。ユ八さん。お邪魔しちゃったみたいで、ごめんなさい」

努めて無邪気な声を出す。

「いや、いいんだよ。丁度君と話したいと思っていた所だ。昨日は殿下がいらっしやっついて会えなかったからね。クリスタ、今日はこれで。会えて嬉しかったよ」

あっさりと別れの挨拶を告げるユ八に、女は一瞬拍子抜けした顔をするが、直ぐに艶やかに微笑んだ。

「私もよ。連絡まってるわ」

軽く手を振ると私達が来た方向へと歩き出す。この姉ちゃん、あの兵士達の中をその格好をして1人で来たのか。度胸が据わっているな。

クリスタと呼ばれた女が私の側を通った瞬間、一陣の風が吹き肩に掛かるシヨールがフワリと舞った。体にフィットしたドレスの広く開いた胸元が瞬間頭になる。

……………ん？その胸元に内心ある事を訝っていると、背後で慌てふためく気配がする。見れば、ライアンとクリフトが顔を赤らめて女性から目いっぱい視線を外していた。おいおい、クリフトはともかくいい年のライアンまで。

19 ユ八という男 (3)

「綺麗な方ですね。彼女ですか？」

悩ましげに尻をくねらせ歩き去るクリスタを見送りながら聞く。

「昔のね」

昔？今現在の彼女は別にいるって事か？ああん？

剣呑な私の雰囲気、ユ八は肩をすくめておどけてみせた。

「そんな顔をしないでくれないかな？今は恋人はいないよ。クリスタは以前王宮に勤めていたんだが、暫く王都を離れていてね。先日戻って来たばかりなんだよ。その挨拶をしに来てくれただけさ」

へえ。久しぶりの再開に盛り上がってあんなった、と。元カノとよりを戻すつもりなのかね。マリヤツタが泣くな。彼女、ユ八に思いを寄せているようだからなあ。こんな軽佻浮薄な男、苦勞するのが目に見えているのに。

「それはそうと、サカキちゃん。随分と殿下に気に入られたようだね」

「はあ。まあ……そうなんですかね」

気に入られたというか、懐かれたというか、遊び相手にロツクオンされたというか。

「女性にはさして興味のない御方だったのに、3日も続けて通われるとは随分な入れ込みようだ。諸侯のご令嬢方はさぞかし羨んでい

る事だろうね」

軽く笑って言われるが、それこそ私が危惧している事だ。次期国王である王太子殿下に近づく身元不明の女なんて、権力争いに携わる者達には邪魔なだけの存在だろう。後ろ盾も何もない私がそんな連中に睨まれて無事でいられるだろうか。私の胸中を知ってか知らずかユハは爽やかな笑みを浮かべている。その笑顔に裏があるのではと感じるようになったのは何時からだったか。面白い事になったとでも思っているのではなからうか。

しかし、ここでユハに会えたのは幸運だったかもしれない。どうしても確かめたい事があったのだ。イサークの訪問が今後も続くとなると、今度はいつユハと話せるか分からないしな。

「ユハさん2人だけで話がしたいのですが……」

ライアンとクリフトを気にする素振りを見せるとユハは片眉を上げて笑みを深めた。

「おや、内緒話かい？いいね。向こうに打って付けの所があるから其処で話そうか。君達はここで待っていてくれ。大丈夫だ。俺が責任をもってお守りするよ」

責任をもって監視するの間違いだろ。

「ついておいで」

「すみません、すぐに戻りますから」

無言のまま心配そうな表情で私を見つめるライアンに言いおくと、私はユハについて歩き出した。ユハ信用ないな。あの場面を見た後じゃ尚更か。

前に行くユハの背中のは広い。訓練を抜け出してきたのか何時もの近衛の服ではなく、訓練場にいた兵士達が着ていたものと同じ細身のシャツとズボンを身につけており、鍛え上げられた肉体が服の上からでも見て取れた。見上げる程の長身に、精悍な顔立ち、背筋をスツと伸ばし颯爽と歩く姿は確かに格好良い。引き締まったお尻の線は見ていて惚れ惚れする程だ。マリヤツタ達の気持ちも分からなくはないが……。しかし引退して体を動かさなくなれば、素晴らしい筋肉は贅肉に変わり、立派なメタボになりそうだ。歳を取って介護が必要になったりしたら高すぎる身長も厄介だろうしなあ。ああ、でもあの太い首も好きだな。腹筋なんか余裕で割れているんだろうな。一度こっそり裸体を見てみたいものだ。

後ろにいるのを良い事に無遠慮に体を観察しているとユハが苦笑し振り返る。

「なんだか熱い視線を感じるね。可愛い娘こに見つめられるのは嫌いじゃないが。残念な事に目的地についてしまったよ」

連れられてきたそこは、東屋というのも烏澁がましい小さな休憩所があった。周囲に木々はなく、僅かな下草が生えているのみ。身を潜められるような物陰が無い為、人に聞かれたくない話をするには持ってこいだ。

石のベンチに座ろうとするとユハが素早くハンカチを敷く。……  
こういう事する人本当にいるんだ。

「どうぞ、お姫さま」

「は。ありがとうございます」

思わず引きつった笑いが漏れてしまう。薄い青色の上等そうなそのハンカチを汚さないか気になって座り心地が悪いんですけど。

「さて、どんな秘密の話をしてくれるのかな？」

まるで子供のような好奇心を含んだ目をして、それはもう楽しいな笑顔を向けられた。

「このあいだ、馬車から降りる時に言われた言葉を自分なりに考えてみました。私の考えを聞いてもらいたいです」

「いいよ。聞こう」

長い足をゆつくりと組み、笑みを浮かべたまま私を見つめる。

「私はエイノさんに助けられた。それはサリの術をかける事によって助けられた。そういう事ですよね？」

「そうだね」

「宿で殿下は言っていました。サリの術の使用は一部の罪人に限られていた、と。一部の罪人とは単独犯ではなく複数犯………例えば組織立った強盗団などの罪人ではないかと思っただんです」

「続けて」

「ずっと不思議だったんです。城という侵入者があつてはならない場所に侵入した私を、何故牢に入れないのかと。私が子供だから温情をかけたというのもあるかもしれませんが、

一番の理由は私を泳がせて仲間を見つけ出す事にあつたんじゃないですか？サリの術とは、見つけ出した罪人を囿に、背後に控える者達を一網打尽にする為に使われていた術。違いますか？」

「さあ、どうだろうね。仮にそうだとして、どうしてそれが君を助けた事に繋がると思うんだい？」

「街で、仮面の男に攫われた時に、一時私はあなた方の目の届かない所にいた。実際は違ったけど、私はそう思っていた。その時の行動をエイノさんが術を使って見ていたから、私への疑いが薄れた」  
「なるほど、筋は通っているね。全て君の仮説が正しかったとしよ

う。それで君はどうしてその話を俺にしたのかな。俺に何を望んでいる?」

「教えて欲しいんです。私が今現在、何をどの程度疑われているのか。これから、どういう扱いを受ける可能性があるのか」

何が可笑しいのかユハは小さく声を上げて笑った。

「俺に内部事情をばらせというわけか」

「お願いです。教えてください!」

大げさでなく命がかかっているかもしれないのだ。必死に言い募る私にユハは残酷な笑みを見せる。

「それで俺にどんなメリットがあるっていうのかな?」

19 ユハという男 (3) (後書き)

ユハがどんどん黒くなってきました。

20 ユ八という男 (4)

初めて見た頃と変わらぬユ八の笑顔が、今は全く違って見える。

この腹黒。

無いと思っっているんだろうな。自分の利益なんて。取引出来る材料も持たない小娘と侮りやがって。

「黙っています」

「何を？」

挑むように睨みつけるとユ八は面白そうに聞き返す。

「あの時、ユ八さんがイサークの肩を外した時。 気付いて

いましたよね？王子殿下だと」

ユ八が私を見つけた時には、イサークは私の背に立ち首飾りの留め具をつける為に屈んでおり、ユ八からイサークの顔は見えなかつただろう。しかし腕を取り、地面に押さえつける前には確認出来たはずだ。

必死だったから、咄嗟の事で気付かなかった。なんて言い訳は聞く気はないぞ。

肩を外す前に見せたユ八のあのゾツとする笑顔には少しの苛立ちと嘲り、隠しよの無い好奇心が見えた。それに「自分の力を図り間違えるな」という台詞。あれはユ八とイサークの力の差を示し抵抗しても無駄だという意味の他に、自分の身を守りきれなかったイサークに、1人で街に出る資格は無いという皮肉が込められていたのではないか。

さて、どうするか。ユ八の様子を伺っていると。



「……………くつくつ…あつははははははつ」

ユハは堪え切れないといった呈で大声を上げて笑い出した。

「君は頭の良い子だね。それに勘もいい」

あつさり認めちゃったよ。いいのか。それで。

「俺の負けだ。殿下の心を掴んでいる君と、一介の近衛に過ぎない俺とじゃ、俺に勝ち目はないだろうね」

本当にそう思っているのか？なんなんだその余裕は。どうにも居心地が悪い。難物相手に喧嘩を売ってしまった気がするがあとの祭りだ。

「さて、君に掛かっている容疑だが。殿下から何か聞いていないかな？」

「イサークを狙っている者がいる、という噂があると聞いた事があります」

「そう。サカキちゃんはその容疑者の1人に上がっているんだ。なにせ時期が時期だったからね。実しやかに黒髪の女呪術師が殿下を狙っている噂が広がって程なくして君が城の庭園に突如として現れた。それまで噂を信じていなかった者も君に懸念を抱かずには居られなかったのだろうね。牢に入れて拷問に掛けよと言う者もいたようだ」

「うわあ、やっぱり。いきなり自白強要とかこの馬鹿だよ。せめて調べてからにして欲しい。」

「勿論、君のような少女にそんな大それた事が出来るはずがない、

という者も多くいてね。その筆頭がエイノさ。尤もエイノの場合は少々見識が違うが」

どう違うというのだろうか？

「以前に術式面での警備統括者だという話しをしただろうか？城の周囲には常時16名の術士が術を張っているんだ。君を見つけた当初はエイノも君が噂の呪術師である可能性を考慮してサリの術をかけたようだが、後から術を見直しても何処にも侵入の痕跡が認められなかった。術に綻びも齎さずに、人為的に突破するのは不可能だ。というのがエイノの言い分だ。そして、そんな事を遣って退ける力のある人間が、いとも感単に警備兵に見つかる筈がない、とね」

私を信じているのではなく、自分を信じているんだな。物凄く納得だ。

「この見解には説得力があり、殆どの者がエイノに賛同した。しかし、強力な協力者がいるに違いないと譲らない者もいて、サリの術を継続する事を条件に君に一定の自由を与えよう。という事になったんだよ」

「では、サリの術を継続したのはエイノさんの意思じゃなかったんですね？」

うーん、エイノって悪い人じゃないのだろうか。どうも掴めないわ。

「それはどうかな。エイノも術の継続には諸手を揚げて賛成していたからね」

「どうしてですか？」

やっぱりロリコン覗き魔どS神官なのか？

「純粋な好奇心だろうね。エイノはサカキちゃんがまた突発的にどこかに移動する可能性があるかと思っっているんだよ。瞬間移動の謎を解明したいんじゃないかな」

……………マッドサイエンティストタイプだったのか。エイノの立ち位置はよく分かったが。

「ユ八さんは？私がイサークの命を狙う呪術師だと思っっていますか？」

「いや、9割方思っていないよ。殿下を狙うなら街でいくらでも機会があつた筈だろう？まさか標的の顔も知らない間抜けな暗殺者がいるとは思いたくないからね」

おい、あとの一割は何なんだ？ここって突っ込むべきなのか……………。

「サカキちゃんの今後の扱いだが、今のところ心配はいらない。君に手出しするのは殿下がお許しにならないだろう」

だから、今のところって何なんだ。スッキリしない言い方だな。

「心強い味方を得たものだ。これが全て計算の上でなら……………面白いのだけどね」

ユ八はお得意の爽やかな笑みを浮かべるがその瞳は笑っていないか。不穏な緑の瞳に射竦められて言葉が出ない。怖いよ、ユ八。

「さて、そろそろ戻ろうか。余り遅くなるとあらぬ疑いをかけられ

かねない」

蛇に睨まれた蛙の如く身動き出来ない私の手を取ってユハは帰路を促す。

無言で下草を踏み分けて歩き、ライオン達の姿が遠くに見えた頃、私はふと、さつき見たクリスタの胸元を思い出して口を開いた。気を呑まれたままだと思われなくなかったのかもしれない。

「クリスタさんは止めたほうがいいですよ」

「おや、どうしてだい？」

意外な内容だったのかユハは興味を引かれたように私を見る。

「彼女、夫がいるんじゃないですか？」

「ああ、いるかもしれないな」

あっさり返されたよ。いてもいいのか。でも。

「子供もいますよ。それも赤ん坊が」

その言葉にユハは虚を突かれた顔をする。そういう顔初めてみたな。

「それは、いただけないね」

ユハの低い声を聞いた時、こちらに気付いたライオン達が駆け寄ってきた。相当心配していたみたいだな。

21 ユ八という男 (5)

翌日、イサークと昼食の約束をしている日がやってきた。

アイラとマリヤツタは朝から走り回り忙しそうだが、私は暇だ。

まだ2時間はあるな。鳥に餌でもあげるか。

テーブルのお菓子を一握り持ち部屋の扉を開けると、大きな箱を幾つも抱えたアイラとマリヤツタが立っていた。

「サカキ様、どちらへ行かれるおつもりですか？本日は殿下との昼食会ですよ」

「へ？だってまだ時間じゃないですよね」

素っ頓狂な声で問えば二人に信じられないといった顔をされる。

「何をおっしゃっているのですか。今から衣装合わせですよ」

「選ぶのに手間取ってしまいました。さ、急ぎましょう」

は？今から？イサークと庭で昼食をとるだけでしょうが。呆氣にとられていると鏡の前に立たされて、次から次へと服を合わされる。やれこの色は違うとか、目の色に合わせてとか、少し大人っぽくとか、この帯にはこの靴でしょ。なら髪はアップで。髪飾りはと好き勝手に弄繰り回され、出来上がった姿に私は絶句した。これは……。

ゴシツクロリータ

ちよつと違うかもしれないが、それ以外の表現が浮かばない。

胸元の開いた白いシャツはフリルとレースとリボンで飾り立てられ、スカートは微妙に色の違う黒いオーガンジーのような布地を幾重にも重ね、これでもかという程ボリュームを出したもので、勿論膝丈。胸の下に結んだ帯と靴は嫌味の無い紫色。両サイドの髪を残

しりボンと共に纏め上げられた髪には宝石の付いた髪飾りが挿し込まれている。

この格好で、出歩け……………と？

「さあ、仕上げといきますよ」

立ち直れず呆然としている内に、薄く化粧を施される。

「どう？」

「いいわね。背伸びをして大人っぽく振舞う少女の危つい色気が出ているわ」

「そうね。普段とのギャップが大事なのよね」

最早私を無視して品評を始めるアイラとマリヤツタ。

何故、そんなに気合が入っているんだ。鏡に映る姿を見て、私は盛大にため息を落とした。

「サカキ……………」

今日も元気いっぱいに声を上げて部屋へやって来たイサークは、しかし私の姿を見るなり呆けたように口をポカンと開けて止まった。

「イサーク？」

「え。や、あの……………」

呼びかけると視線をさまよわせ分かり易く狼狽える。

「その格好」

「何も言わないで下さいよ」

みなまで言うな。無理があるのは重々承知だ。

「いや、似合ってる」

「……………」

私を見てポツリと言うとまた視線を外し明後日の方を向く。その顔も首筋も真っ赤で、どうやらお世辞ではなさそうだ。

反応おかしいだろ。女25歳。お肌の曲がり角に差し掛かり夕方には、ほつれい線も気になる今日この頃。こんなどビラビラのゴスロリが似合ってたまるか！

謙遜などでは決してなく、日本の街中をこの格好で闊歩すれば10人中8人は何事もなくすれ違った後、後ろ指を指して「ちよつと無理でしょ〜」「いい歳して馬鹿じゃないの」と小声で囁きあい。後の2人には完全無視されるレベルだ。

恐るべきは異世界人ビジョン。

「ただ、ちよつと……………」

イサークは言いよどむと決して此方を見ないまま告げる。

「胸が開きすぎじゃないか？」

益々赤くなるイサークに不覚にも萌えた。

「誤解の無いように言っておくが、俺は別に……………変な目で見たりはしていないからな」

なんだ。可愛いな。こんなささやかなモノで良ければどうぞ好き  
なだけ見てくれ。

「あー、何言ってるんだ俺は」

イサークは髪をかき乱し途方に暮れる。その様をもう少し眺めていたかったが、後ろの近衛ズが顔を青くしたり赤くしたりと忙しそうなので卒倒しない内になんとかしようか。

「確かに少し開き過ぎかもしれませんが。アイラさん、シヨールを下さい。はい、その薄紫なので。イサーク、行きましようか」

アイラが手際よく差し出したシヨールを羽織りイサークの近くに寄る。

………アイラ、その今にもガツポーズをしそうな顔つき何とかした方がいいよ。

西の庭園は、小さな白い花が咲き誇り、やさしい香りに包まれた素晴らしい所だった。花々に囲まれたテーブルに着くと、美味しそうな料理が運ばれてくる。厨房からは距離がありそうなのに、熱々の状態で出てくるってすごいな。

「今日はこんな素敵な場を設けて頂いてありがとうございます」

「いや、俺が強引に誘ったようなものだ」

「でも、嬉しいですよ。私なんかの事を気にかけてもらって」

面倒だとも思ったが、部屋で1人寂しく食事を取るより余程気も晴れる。近衛ズも普段よりは距離を取り、その渋い面持ちも然程苦ではなかった。

この服だけは耐え難い苦行だけだな。今も、誰が何と言おうが、私は13歳。ゴスロリが超似合う美少女！と自分に言い聞かせて何とか耐えている。



イサークの口数はいつもより少なかったが悪い沈黙ではない。頬を撫でる風が気持ちいい。穏やかな気持ちで食事は進んだ。

「悪い」

食後のお茶が運ばれ、メイドさん達が姿を消すと、途端に口調を重々しいものに変えたイサークの唐突な謝罪に驚いた。やるせない彼の表情に胸を衝かれる。

「俺がお前に近づく事で嫌な思いをさせる事もあるかもしれん。だが今のお前の状態ではこうするのが一番いいと思ったんだ」

無邪気になつていてくれるだけだと思っていた。暇つぶしの相手なのだ。だが、彼は思っていたよりずっと思慮深い人間だったようだ。思慮深く、情け深い。

臆することなく真っ直ぐに見つめられ、そのてらいの無さに憧憬を抱いた。

「俺が守ってみせよう」

ああ、まただ。無邪気なワソコに見えたかと思えば、気高く勇猛な狼の側面を見せられる。イサークの真摯な瞳に心臓を鷲掴みにされた気がした。

いったい、どちらが彼の本質なのだろうか。

21 ユハという男 (5) (後書き)

奇麗に着飾って、あら別人。のお約束展開です。少々ずれてますが、ちよっとイサークに頑張らせてみました。

## 22 ユ八という男 (6)

西の庭園からの帰り道、私は足早に自室へと戻っていた。この姿でなるべく人に会いたくないから。なのに、ああ。こんな時に限って、何故会うんだ。一番会いたくない人達に。

もっと遠くから分かっていたら回り道をして回避したというのに、角を曲がったところでバツタリと出くわしては、気付かなかった振りも出来ない。

「やあ、サカキちゃん」

「こんにちは」

「確か今日は殿下との食事会だったか。可愛いね。よく似合っているよ。なあ、エイノ」

「……………そうだな」

ちょっと待て、なんだその沈黙は。その嫌そうな言いかたは。内心どう思っているかがお世辞の一つも言うのが世の常識だろうが。

「サカキちゃんが黒を着ると神秘的な感じがするね」

ユ八、お前はちょっと黙ってる。

顔を強張らせ荒む私に、エイノは感情のこもらない声で告げる。

「近く、お前の処遇が決まるだろう。だが、案ずる事はない」

そんな口調で案ずるなど言われても、無理だ。もうちょっと詳しく説明する気は……………ないだろうな。

案の定、エイノは自分の言いたい事だけを言うと、さっさと行ってしまった。エイノの後に続いたユ八が後ろ手にヒラヒラと手を振

つてみせる。いいけど、今日はもう突っ込む気力もないから。

翌日、朝早くから自室前の庭をぶらついていると、爽やかな笑顔を引っ提げてユ八がやって来た。早いな。イサークとかち合わぬように時間を変えたのだろうか。

「少し歩こうか」とのユ八の誘いに2人で庭を散歩する事になった。一昨日のやり取りなど無かったかのように、ユ八の態度は変わらず紳士的だ。歩調に気を配り、穏やかな笑みを絶やさず、段差があれば手を差し出す。

狸め。

「殿下との食事はどうだった？」

「楽しかったですよ。花も綺麗でしたし」

「そう、それは良かった。殿下は今後の事について何かおっしゃっていたかい？」

「……………イサークが私に近づく事でおこる弊害を心配していました」

「そうか。殿下は君の事を大切に思っているらしいからね」

そう、なのかな。

「サカキちゃんは殿下の事をどう思っているのかな？」

「いい王子様じゃないですか？純粋で思慮深いし覇気もある。ただ……………少し自己評価が低いというか、自分という存在を軽んじているように感じます」

父王へのコンプレックスからか。一人で街に出るといった無茶は若さ故の無謀ばかりが理由ではないと思えた。何より自分を狙っている呪術士ではと疑いをかけられている私に、この様に情をかけるべきではないのだ。

「くくくくくっ」

って人が真面目に質問に答えているというのに何を笑ってるんだ。

「ああ、ごめん。本当に君は面白いね。そういう意味での質問じゃなかったのだけど」

じゃあ、どういう意味なんだよ。

「十代の少女とは思えぬほど鋭い事を言うかと思えば呆れる程に鈍くもある。サカキちゃんを見ていると退屈しないよ」

背中を冷たい汗が流れる。ヤバイ。早くもぼろが出つつあるのか。

「ああそつだ。君の言ったとおりだったよ」

戦々恐々としていると、思い出したように言われて首をひねる。

「赤子がいた」

クリスタの事が。

「どうして分かったんだい？」

「勘です」

違うけど。クリスタの胸元を見たときに気がついた。短大を卒業後すぐに結婚した妹が、念願の子供を授かり半年前に出産したのだが、赤ちゃんを見に行った時に散々ばやかれたのだ。胸が張って大変だと。赤ちゃんにお乳をあげる時に見た胸元は僅かに左右の大きさが違い血管が青く透けて見えていた。クリスタの胸は妹の胸と同

じだったのだ。

「勘、ね。女性の勘は恐ろしいね。彼女には振られてきたよ」

「仕事が速いな。……………つて振られた？」

「振ったんじゃないくて、ですか？」

「俺は女性を振った事は一度もないよ。いつも振られるのさ」

……………それは、

「最低ですね」

言うべきではない言葉だと思ったが、言わずにはおれなかった。

クリスタは兎も角、本気でユ八を思っていた女性も居ただろうに。

冷たくなじってやったというのに、ユ八の唇は愉しげな笑みを形作る。その表情に腹が立って更に続けてしまった。

「別れる時ぐらい悪役になったらどうなんですか？」

「そっだね」

嫌悪感も頭に吐き捨てた言葉に、ユ八は柔らかく答える。

その声音にハツとした。

「すみません。余計な口出しを」

「いいんだよ」

言ってユ八は艶やかに笑った。

「あと数年経てば、悪役になってもいいと思える女性が居るかもし

れないな」

緑の瞳が私を見据える。穏やかな日の光に照らされて、エメラルドのように混じり気のない澄んだ緑ではなく、様々な色が複雑に入り組んだ緑なのだ。気がついた。その神秘的な翡翠の如き瞳に絡め捕られ、目が離せなくなる。ユ八が私の髪をまるで愛しいものに触れるように優しく一房手に取るのをただぼんやりと感じていた。緑の瞳が私の目を捕らえて離さぬまま、ユ八は手の中の髪にそっと口付ける。

もう降参したい。この男にどうやって勝てるというのか。心の中で白旗をあげる私に、ユ八は極上の笑みを見せる。  
ユ八の前では、どうやら私は蛙になるより他はなさそうだ。

#### 余話

庭でユ八と別れ、部屋に戻ると複雑な表情をしたトゥーリが出迎えた。

「先ほど殿下が見えられたのですが……」  
が？

「窓からサカキ様とユ八様の姿を御覧になりました、その、お帰りになりました」

「……………うっ」

トゥーリの言葉の意味を理解するのにたっぷり10秒はかかった。あのこっぴどくかしいシーンを見られたのか？

なんだろう、この落ち着かない気持ちは。まるで居もしない弟にラブシーンを見られたような居たたまれなさに、一日中苛まれる事

になつた。



## 23 後見人

イサークはパツタリと訪ねて来なくなった。イサークの使いだと言うものが、毎日菓子や花を届けにくるが本人が顔をだす事はない。しかも、イサークばかりかユ八まで来なくなったのだ。来られては面倒だが来ないとちと寂しい。女心は複雑だ。

しかし、ゆっくりと考える時間が出来たのは良かったのかもかもしれない。

立て続けに起こる出来事に流されてばかりだったからな。だから、ユ八の思わせぶりな態度に翻弄されたりしたのだ。

冷静になって考えてみると、あの行為は犯罪スレスレだ。第三者の視点から見て20代後半の男が13歳の少女に対してあんな行動をとったらどう思う？ ドン引きだ。日本でやれば確実に人生が変わると思う。しかも本気でないのだから性質が悪いとしか言いようが無い

結論。ユ八からは全力で逃げるべし。

あの緑の瞳がいけない。あれさえ見なければなんとかなる、と思う。

イサークは……普通の少年なら良かったのに。歳の離れた友人として付き合っついていきたかった。

でも違う。彼は王となるべく産まれ育てられた人間だ。会いに来なくなったのも自分の役目を終えたと思ったからだろう。私を助ける為に、私がイサークに目を掛けられている。と周囲に知らしめる事は充分に出来た。

そう判断してこれまでの生活に戻ったのだ。

少し寂しいがそれが双方にとって最良なのだと思え止めた。

気になるのはエイノだ。接する機会が少なく不確定要素ばかりだが自己の興味を追究するタイプとみた。

サリの術は許しがたいが、それによって助けられたのは確かなよ

うだしここは一先ず水に流してやろうじゃないか。ユハの言葉を信じるなら私の事を黒髪呪術師だとは疑っておらず、尚且つ人体の瞬間移動等に興味がある。ルードヴィーグについても詳しくそうだし、お近づきになって損はなさそうだ。

でも忙しそうなんだよな。先日聞かされた処遇の事も気になって執務室を何度か訪ねたがいつも不在だった。アイラによれば指揮から実務までを幅広くこなしている為多忙さは半端ではないらしい。完璧主義っぽいからな。

これからどうすべきなのか悩むが道が見出せない。私に出来る事は限られている。

悶々としていた私は、今日の担当がライアンとクリフトである事を思い出し、気晴らしに2区をふらつく事にした。ライアンとクリフトだからといって特別な何かがあるというわけではないのだが、当番につく回数が多い為何となく気安い。会話を交わした事もなければ、名前も知らないがある種の信頼関係が出来つつあると感じていた。

2区へ来ると迷った末に、前回の探索とは反対側、貴族達が住まう屋敷がある方へと足を踏み入れた。

はー。お金かかってそうだな。私は感嘆のため息をもらした。

広い庭を備え意匠をこらした贅沢な造りの屋敷がゆつたりとした間隔をあけて並び、美しく整備された通りには街路樹が植えられている。超高級別荘地のようだ。実際これは別宅になるらしい。領地を持つ貴族達が数年に一度、領地を離れ王都での職務につく際に使用するのだとトゥーリに教えてもらった。参勤交代みたいなものだろうか。

人通りは極めて少なく、兵士を2人引き連れた異色の容貌の私は目立つ。怪訝な顔をしたり、中にはあからさまに距離をとるものも

いる。ライアンとクリフトも居心地が悪そうだ。

もう帰ろうかな。まだ来て間もなかったが、どうやら歓迎されぬ場所に足を踏み入れてしまったようだ。

戻ろうとすると、1人の青年が此方を見つめているのに気が付いた。上質の服に気品ある佇まい。ここに住む貴族のようだ。

目が合うと、笑みを浮かべて近づいてくる。

「こきげんよう」

「こんにちは」

「君、名前は？」

「……………サカキと申します」

先に名乗るのが礼儀だろう。なんて台詞、一度言ってみたいが現実では言えないものだ。

青年はクスリと小さく笑いを漏らした。その人を見下した笑みに嫌なものを感じる。

「やはりね。君がイサークを誑かす黒髪の小悪魔か。どんな美女かと会えるのを楽しみにしていたのに興ざめだよ」

初対面の人間に喧嘩を売られた時ってどうしたらいいんだろうか。初めての経験で分からないな。とりあえず。

「そうですが、それはお気の毒でしたね」

流す事にした。

「失礼します」

「ちよっと待て」

興ざめした人間に何故しつこく絡もうとするのか。

「お前、知っているのか？お前に関わったせいでイサークが何と言われているのか」

相手にする気などなかったのに、憎々しげに言われた言葉に足が動かなくなる。私を庇ったせいでイサークに不利益が生じたとなれば捨て置けない。ただでさえ王の器たるかと苦悩している節があるというのに、この上煩わしい思いを増やしたかと思うと胸が痛んだ。

「なんと、言われているのですか？」

聞き返すと青年は満足気に唇を吊り上げた。

「神官長の近衛と正体不明の女を取り合っている。そう言われているのだぞ」

なんでやねん！

ハリセンがあれば青年の頭を思いつきりはたいていたかもしれない。いや、スリッパのほうがいいか。

## 24 後見人 (2)

「それは誤解です」

はあく。どうしてそうなるんだ。彼らがもう私の部屋を訪れていないのを知らないのだろうか。宣伝が過ぎたのかもしれないな。

「私とてイサークがお前のような卑しき者にうつつを抜かすとは信じられなかったが、この目で確かめてきたのだ」

確かめた？

「お前、何も知らないのか？………ついて来い」

首を捻る私に青年は不愉快そうに眉を潜めた。

青年とは関わり合いになりたくはないし、ユハからは全力逃亡と決めたばかりだが、恩人であるイサークに迷惑をかけて知らん顔は出来ない。それにどういう事が気になるしな。目で確かめるってなに？決闘でもしてるっていうのか？まさかねえ。ないない。イサークはともかくユハに限ってそれはない。とは思うが百聞は一見にしかずというし、結局この嫌味な青年に大人しく従う事にした。

「ついたぞ」

「ここは………」

そこは以前側を通りかかった兵士達の訓練所だった。土ぼこりの舞う中、各々手に手に槍や剣を持ち訓練に励む兵士達。手の中の武器を交わす度に硬質な音が鳴り響く。汗で濡れた髪。低い掛声。鍛えられた肉体。

ああ、なんて　　むさ苦しい。筋肉質な体を眺めるのは好きだが、これだけ大量にいるとその一言に尽きる。

「あそこだ」

青年が指差した方を見やれば、訓練所の片隅に人の輪が出来ていた。近づくが筋肉の壁に阻まれて見えない。

「どけ」

苛立った青年の声に、前に立っていた兵士が泣く子も黙る形相で振り返る。しかし、青年を認めるなり慌てて脇に避けた。名のある貴族なのかね。それにしても嫌な奴だ。

避けてくれた兵士に目礼すると、輪の中を覗いて、目にした光景に愕然とする。

本当にしてるよ。決闘。

輪の中にはイサークとユ八がいた。それぞれ手に重量感のある剣を構え向き合っている。肩で息をする苦しげな顔のイサークに対しユ八は余裕の表情だ。

「なんで……」

と思つて、よくよく見れば剣の刃は潰されているし、二人とも簡単な鎧を身につけている。決闘というか、訓練だな。でも何故ユ八と？ユ八はエイノの近衛だろうに。

「十日ほど前、イサークが突然剣の稽古の相手にあの近衛を指名したのだ。以来毎日この調子だ」

十日ほど前といえば丁度イサークとユ八が来なくなつた頃だ。

「あの近衛は稽古の相手には適さない。剣の型が変則すぎるからな。たとえ刃を潰した剣でもまともに入れば無事では済まないとわかっていながら、イサークはあの者に固執している」

確かに、ユハは丁寧に剣を教えるようなタイプではないだろう。しかしだからと言って、それが私の取り合いにどう繋がるのか。飛躍しすぎだと思っただが。

「あの近衛、お前の元に足繁く通っていたらしいな。その時間を潰すためにイサークが兵士の訓練場に自ら足を運び指名しているのではないのかと噂されているのだ」

え？ハツとして青年の顔を見たとき、周りの兵士が一斉に歓声をあげた。どちらを応援しているともつかないその咆えるような声に視線を輪の中に戻せば、手にした剣を振り上げユハに斬りかかるイサークが見えた。ユハはイサークの剣を鮮やかに受け流しつつ足をかけ体勢を崩した上で背を柄で打ち付ける。イサークは地に倒れながらも体を回転させ素早く起き上がり再び剣を構えた。荒い呼吸を繰り返してユハを睨み据える。

ユハを見るイサークの瞳にうつる感情は何だろうか。

焦り？憎しみ？それとも

嫉妬？

なんて事だ。やはりイサークはあの場面を見ていたのだ。髪に口付けるユハを。それを拒まぬ私を。

「見る、誇り高きシルヴァンティエの王となる方があのようになににまみれて」

冷や水を被せられた気分だ。それもダムいっぱいなの。  
まずい。まずいまずいまずい。ユハの事をドン引きだなんて言えないぞ。

そうと知って思い返せば、気付かされる。自分に向けられた眼差しに潜む熱を、声に隠された甘い響きを、何故今まで見落としていたのか。

ああ、そうか。15歳の少年にとって25歳の女などおばさんだと、恋情の相手になるわけがないと、思い込んでいたんだ。イサークにとっては13歳の少女だったというのに。最低じゃないか、私。

「お前のような身元も不確かな下賤の輩が気を掛けていただけの存在じゃないのだぞ」

いや、でもあの年頃の子の気持ちなど移ろいやすいものだ。一時的な気の迷いかもしれない。ああ、それにしても15歳ってどうだろ。青少年保護育成なんとかの範疇だっけ？日本ではないのに、日本の法律が頭を過る。いやいや法律がなくても駄目ですよ。倫理的に。

「間違つてもイサークとの未来など夢見ぬ事だな。おい、聞いているのか？」

ああ、もう煩いな。人が考え事をしているというのに、耳元でブチブチと。お前は夏の夜の蚊か何かか？そっぴや名前なんだっけ？聞いてないな。もうモスキーとでいいか。ぴったりだ。連れのダニーがないのが惜しいが。

とりあえず、この場はイサークに気付かれぬうちに撤退したほうがいいだろう。打ち負かされている姿を見られたと気付かれたら傷つけてしまつかもしれない。モスキーとに目で合図を送ると私はそっと輪から離れた。



25 後見人 (3) (前書き)

やっとエイノ登場

25 後見人 (3)

もう最低だ。まさか自分が少年を惑わす悪女のポジションに立つとは思わなかった。この世界に来てからというもの想定外の事だらけで思考がついていかない。いや、別世界に来るといふ事自体想定外もいとこなのだけど。

どうする？嫌われるのは簡単だろう。思いっきり嫌な女を演じてやれば良いのだ。しかしその結果、イサークの庇護を失っては………。

今は未だ駄目だ。狡いなあ。ああ、やっぱり最低だ。どつぷりと自己嫌悪にはまり込む。隣ではモスキートが何やら喚いているが、雑音にしか聞こえなかった。

「お前、わかっているのか！」

歩きながらおざなりに相槌をうつっていたのだが、腕を掴まれ、一際大きく怒声をあげられて仕方なく向き直る。

「存分に身にしみました。ご助言痛み入ります」

手を胸に腰をおり、嫌味な程うやうやしく対応すれば、モスキートの顔が屈辱に歪んだ。

平素ならばこんな対応はしなかったろうが、今の私には無理だった。売られた喧嘩なら、一ダースでも二ダースでも買ってやりたい気分だ。

「1」のっ」

あ。殴られる。振り上げられた手に、目を瞑りこそしなかったが

これから来るであろう衝撃に顔を顰め身を固くした。

歪めた視界が突如として真っ白になり、ムスクに似た甘い香りに包まれる。柔らかな感触が頬をくすぐった。

「この者が何か？ご無礼を働いたのであれば後見を勤める私の非にございます。お叱りは私が承りましょう」

耳のすぐ側で聞こえた声は低い。浪々と紡がれる、思わず聞きほれる程張りのある艶やかなその声に、エイノだと気がついた。ということは視界を覆うこの白い物体はエイノの神官服の袖か。頭の上から膝下辺りまでをすっぽりと包み込まれ、やっぱりこの長い袖でトイレはどうするのだと、場違いな疑問が湧いた。

「つつ。エイノか。……………しっかりとそれを躡けておくんだな」

ついにお前からソレ呼ばわりですか。悔しげに捨て台詞を吐き出すとモスキートが離れていく気配がした。しかしエイノが腕を下げる気配はない。

あのー、いつまで私はこの中なのでしょうか。

「どうした。あのような態度。お前にはそぐわないのではないか？」

困い込まれたまま耳元で諭すように言われ、美声にぞくりとする。その声で耳元で喋るな！というか、なんでこのタイミングで優しくするんだ。いつものように高慢に接してほしい。

「気を静めよ」

だからっ、その声は反則だろう。喋るな。口を近づけるな。頭を動かすな。首筋に髪があたる。

「……………すみません」

ぐらぐらと揺れる頭で、身じろぎも出来ずそう呟くと、ようやく開放される。

振り向きエイノの顔を見るのが恐ろしい。あの茶色い瞳に暖かな感情が浮かんででもすれば、どうなるか分からなかった。

「サカキ」

背を向けたまま動かない私に柔らかく声かけられる。

えーい、儘よっ。

意を決し振り返るとエイノを見上げた。

っ

ハイ、大丈夫。いつもの冷え切った目でした。無駄に疲れたわ。

「庇っていただいて、ありがとうございました」

お礼の言葉が事務的なものになってしまったのは許してほしい。

「お前の存在は今や特異なものとなりつつある。気をつけるのだな」

こちらの胸中など無頓着に感情の薄い顔で淡々と告げられる。

「はあ。エイノさんはどうしてこちらに？」

まさかエイノまでユハとイサークの様子を見に来たのだろうか？

「資料をとり屋敷に戻ったのだが」

何故そんな事を尋ねるのかといった顔で返され気付いた。マッチヨな兵士の姿は消え周りを行くのは白い服を着た神官ばかり、何時の間にやら神官達のテリトリーに足を踏み入れていたようだ。

「ところで後見ってどういう意味ですか？」

さっき言ってたよな。モスキートに後見がどうのこうのと。

「私がお前の後見人となっただけだ」

だけって、そんな話聞いてないんですけど。

「いつまでもお前をただ城に住まわせておく訳にも行かぬのでな。後見をたて保護、指導する事になった。その後見人に選ばれたのが私だ」

人選ミスでしょ。いきなりの事に二の句が次げない。

「2、3日後には私の屋敷に越してもらおう。そのつもりでいろ」

今日も自分の用件を言い終えるとエイノは去っていく。

いや、お近づきになりたいとは思っていたけども。

エイノと同居。……………胃が痛い。

25 後見人 (3) (後書き)

エイノのターンまで長かった……。

26 後見人 (4)

石造りの建物は全体的に白っぽく、無機質で冷たい印象をうける。木々に覆われたそこは外界から隔絶された一個の空間のようで、この屋敷の周りだけが違う時の流れに身を置いているようだった。苔むしたベンチと風にふかれて可憐に揺れる野の花のみが訪れるものを迎え、時折聞こえる鳥の囀りが僅かばかりの慰めをもたらす。

なんとというか、浮いているな。

少し先には神官達が行きかう宿舎があるというのに、この周囲だけ人っ子一人いないってどういうこと。

今日からお世話になる神官長エイノ宅は、予想に反して寂れていた。城ほどとはいかないだろうが、数多居る神官達の長の屋敷なのだしもう少し瀟洒なものだと思っていたのに。

恐る恐る扉の前に立つと、ノッカーを叩き家人の招きを待つ。

……………誰も出なかった。

指定された時間に来たというのにこの扱い。本当に気を配らない男だ。

どうしたものかと後ろのクリフトを振り返るが、困惑した顔を返されるばかりで埒が明かない。試しに取っ手に手をかけてみると、盛大に軋む音がして扉が開いた。油ぐらいさせ。

これからの生活に大きな不安を覚えた。

あ、中は意外と、きれ……………い？扉から顔を覗かせ見渡せば、外観から想像したほど酷くないが。うーん、生活観ゼロだな。悪い意味で。

飾り棚の上には花瓶が置かれているが其処にあるべきはずの花がなく、通路に敷かれた絨毯は変色していて何時の物か分からない。

辛うじて掃除はしてあるようだが、飾り気は皆無だ。

どうしよう？扉開いちゃったけど。外で待つものなんだし入ってもいいかな。思案していると壁際に置かれた長いすに目がとまった。あそこで待つか。

足を踏み出し一歩二歩と進むと、突如として現れた光の壁に阻まれる。驚き後退しようとして硬いものが頭にぶつかった。

まさか！

慌てて振り向けば思った通り後ろにも、更には両サイドにも光の壁が出現していた。

閉じ込められたよ。何これ。防犯用の罠？理解不能の現象だがちよつとやそつとの事では驚かない自分がいる。鍛えられたものだ。

壁を叩いて扉の外に居るクリフトに助けを求めるが、音が吸収されているようで応答がない。私は早々に諦めて床に座り込んだ。

石の床から冷えが登ってくる。次の生理が辛くなったらエイノを恨んでやる。いやそんな事よりも尿意を催す前に帰って来て欲しい。何もする事がない。よしっ枝毛でも探すか。おもむろに髪を手取るが枝毛は一本も見つからない。毎日アイラ達が香油を揉み込んで丁寧に梳つてくれていたおかげだろう。水仕事をしていない為手も艶々している。残業も飲み会もない規則正しい生活で肌の調子もいい。なんて健康的。

……………働きたいなあ。

働いて地に足をつけて安定した生活を送りたい。身分とか陰謀なんてのは無縁の場所。ああ、駄目だ。弱気になっっているな。どうもイサークの気持ちを知ったあの日から心がブレていけない。

何も考えぬよう曲げた膝の上に額を置いて目を閉じた。視界が暗くなると急速に眠気に襲われる。昨晩は遅くまでサウルに貰った本を読んでしまい余り寝ていないのだ。今回の本は領地の女性を毒牙にかけては手ひどく捨てていた残忍で横暴な若き地方領主が、異国から来た姫君に恋をし、悔い改めて賢君に生まれ変わるといったシヤフリヤール王とシエハラザードを思わせるストーリーだ。存外に



乙女ちつくなチヨイスに驚かされるが、トゥーリの趣味かもしれな  
いな、と思うに至った。

眠い。欠伸をかみ殺せば目に涙がたまる。

不意に甘い香りの風が頬をなげ僅かな衣擦れの音がし顔を上げると  
エイノと目があった。いつの間に。お前は忍者か。

「泣いておるのか？」

戸惑いを乗せた声で問われる。欠伸のせいですと訂正するのも間  
抜けな気がして、無言で立ち上がった。

「驚かせたようだ。すまぬな」

白く滑らかな手が伸ばされ目尻にたまった涙を優しく拭われる。

微かな、本当に微かな安心させるような笑みにギョツとした。何だ  
これ。別人？エイノの皮を被った何かに化かされているのか？

「遅くなった。屋敷を案内しよう」

しかし次の言葉の前には何時もの冷めた表情に戻っていた。良か  
った。エイノだ。冷たい顔に安堵するのも妙な話だがエイノにはそ  
の顔でいてもらいたい。今は特に。

屋敷は十二分に広がった。人が居ないから尚更広く感じる。必要  
最低限の使用人しかいない為にアイラ達が交代で来てくれる事にな  
っているらしいが、必要最低限の人数がいるかも怪しいものだ。何  
せ使用していないと思しき所は埃が積もっていたしな。きれい好き  
なアイラが見れば悲鳴をあげて雑巾掛けに没頭しそうだ。

エイノの部屋と私の部屋は近い。屋敷に入り向かって右の最奥が  
私の部屋になり、間に2部屋を挟んでエイノの部屋となる。食堂や

風呂など生活に不可欠な場が全て屋敷左手にある為何をするにもエイノの部屋の前を通る事になってしまふ。夜遅くに徘徊したら苦情を言われそうだな。気分は姑と同居する新妻だ。

荷物、といつても確固として私の持ち物だと言えるのはユ八に貰った小物ぐらいで衣服は貸与されていると考えているのだが、は予め運び込まれており私は特にする事もない。

部屋が多少狭くなり扉の前に兵が立たなくなった事ぐらいしか違いはなく、引越したという実感はわかかなかつた。

部屋の椅子にエイノが座つて居なければ。

なんでこの人此処にいるんだ？人の部屋でお茶を飲んでいる？口を開く事もなく黙つて茶を飲むエイノの対処方法が分からない。

どうしよう。話をして情報を得たいと思うが2人きりになると会話に詰まる。

「あのっ」

空になったカップを置いたエイノに意を決し話しかけた。

「礼拝の時間だ。私はもう行くが屋敷の中は好きなように過ごせ。外に出るときは兵を付けよ」

能面のような表情で告げ去っていくエイノ。お近づきになるのは果てしなく困難な気がする。

26 後見人 (4) (後書き)

舅じゃなくて、姑。

## 27 後見人 (5)

眠ってしまった。

ノツクの音に重い瞼をあげれば、部屋の中は西に傾いた日に赤く染められていた。寝すぎだろ。昨夜更けまで未だ慣れぬ字を追っていた目を休めようと、少しの間だけ横になったつもりだったのに、おかしな時間に眠ったせいか体はだるく、鈍い痛みが頭を覆っていた。

「サカキ様。食事の仕度が出来ておりますが」

扉の外からの呼びかけに應えてでると、初老の男性が立っていた。エイノに部屋に案内された折にお茶を運んできてくれた人だ。いかにも執事然とした佇まいに迷うことなくセバスチャンと名付けた。この屋敷に来てから、エイノと彼しか見ていないのだが、まさか一人で全て賄っているんじゃないな。

「明日からは城から侍女が参りますが本日は私がお世話を努めさせていただきます」

「どうも、お世話になります」

お互いに軽く頭を下げ挨拶を交わす。

案内された食堂には誰もいなかった。てっきりエイノと同席すると思っていたのだが。聞けばエイノはこの所帰りが遅く、暫くは1人での食事になるとの事だ。正直ホツとして、そんな自分のため息が出た。一緒に食卓を囲むという親しくなる絶好の機会を失して喜んでどうする。お近づきになるう計画は早くも頓挫の兆しをみせていた。

セバスチャンは寡黙な人物だ。食堂に案内され、食事が終わり部

屋に戻るまで、此方からの要望や質問に応える以外に口を開く事はなかった。お喋りが好きな訳ではないが、余りに一日中言葉を口にしないと早く呆けてしまいそうで心配だ。早く明日にならないかな。アイラ達の姦しさが妙に恋しかった。

眠れない。何十回目かの寝返りを打つてとうとう私は寝る事を放棄した。昼間にあれだけ寝たら当然か。十代の頃は幾らでも眠れたのにな。こんな所でも歳を実感する。

ベッドから降りると、月明かりを頼りにランタンに火を灯し昨晚の続きを読み始めた。しかし幾らかも読み進まない内に、体の冷えに気付く。昼間は暖かいとはいえ夜はさすがに少々肌寒い。熱いものが飲みたいけど、どうしたものか。暫く思案した後そつと廊下に出た。炊事場にいけばお茶ぐらい沸かせるかもしれない。

部屋よりも数度気温の低い廊下を手で体を擦りながら進む。2部屋目を通りすぎた所で前方の部屋から明かりが漏れている事に気が付いた。エイノの部屋だ。まだ起きているのだろうか？足音を殺してそつと部屋の前を通り過ぎようとした時、軽い軋み音をたてて扉が開いた。

「どこへ行く」

寝巻きの上にローブを羽織ったエイノが顔をだす。

「……………私が通れば分かる様にセンサーでも仕掛けてあるんじゃないだろうな。充分ありえるぞ。」

「ちょっと眠れなくて、お茶でも飲もうかと……………」  
「部屋へ入れ。私が用意しよう」

何故か部屋へ通されました。エイノの。いえいえ、そんな結構ですと、断ったのだが、こちらの話を聞かずさつさと部屋を後にする

エイノに仕方なく部屋のソファに腰掛けて帰りを待つ。エイノが帰ってきたら即効でお茶を飲み干して退散しよう。

部屋は本に支配されていた。壁一面を書棚が占め、テーブルや執務机、ベッドのサイドテーブルといったあたりとあらゆる場所に本や書類が置かれている。不思議なのは部屋を照らす明かりだ。揺らぎのないその光は城の廊下で見たものと同じで明らかに火ではない。これも魔法なのだろうか。明るくていいな。私の部屋にもつけて貰えないだろうか。

ポーッと辺りを観察していると、カップを二つ盆に載せたエイノが帰ってきた。盆をテーブルに置くと私の横に腰を降ろす。向かいのソファは本に占領されていたから横に座る事になったようだが、微妙な距離に身を固くした。エイノは子供だと思っただけに留めていないのだろうか、こちらとしては深夜に男性の部屋で2人きりという認識の上に、この距離は辛いものがある。

「サルミにパロを入れたものだ。気を安らげよう」

サルミは乳製品っぽい飲み物で何度か飲んだ事があるが、パロとは何だろうか？勧められたカップを手にとり匂いを嗅げば、微かに甘い香りがした。

「いただきます」

口に含むとパロが何なのか気付く。酒だ。私、下戸なんだけど……。しかし滅多にない好意を無碍にするのも気が引けて飲む事にした。アルコール度が高くないことを祈ろう。

エイノが持つカップからはパロがかなり強く香っている。顔に似合わず飲兵衛なのかもしれないな。

静かな部屋に茶を飲み、息を吐く音だけが重なる。早く飲み終えてしまいたかったが、熱々に温められたサルミは冷めにくく飲むの

に時間がかかる。

苦戦しつつも半分程飲み終えた所で、ふとテーブルの端に置かれた一冊の古びた綴りに目が止まる。

違和感があった。

紙ではない何かで出来たその最初の文を何とはなしに読み上げる。

「我…ここ…警告、す？」

汚れや滲みで読めない箇所があるが、どうやら何かの警告文らしい。更に読み進めようとした時、エイノが性急な動作でカップをテーブルに置いた。衝撃で中身の液体が飛び跳ねテーブルに滴を落とす。

「これが読めるのか!？」

初めてエイノが声を荒げるところを聞いた。

綴りに目を戻し、臍を噛む。字が違ったのだ。シルヴァンティエで使われているものと。

先ほど感じた違和感の正体はそれか。自分の迂闊さを呪った。

## 27 後見人 (5) (後書き)

余談ですが、シルヴァンティエ独特の固有名詞は人名辞典から拝借しています。

なので「サルミにパロを入れたものだ」といった文は「鈴木に田中を入れたものだ」みたいな事になっているのではないかと、想像して笑ってみたり……。



28 後見人 (6)

「続きは？何と書いてあるのだ？」

興奮したエイノに両肩を掴まれる。痛いんですけど。

未解読の古文書のようなものなのだろうか？そういうは無責任男は自分の知識を元に言語を与えたと言っていたな。馬鹿だ阿呆だと思っていたが、一応賢者らしき知識もあったのか。

言語能力を活かしたいとは考えていたが、

「何でも読めましてよ。なにせ賢者の知識がありますもの。崇め奉りなさい。オーッホッホッ」

などとふんぞり返る気はなく、近隣諸国との交易における通訳等で細々と暮らしていきたいのだが……。夢見ている平穩な一般庶民の生活が、また少し遠ざかってしまった気がする。

取り敢えず手を離せ。

「エイノさん、痛いです」

今にも肩を揺すりだしそうな勢いのエイノにか細く訴えた。

「すまぬ。続きは？分かるのか？」

「父の書齋で似た文字を見たことがあって、その一文を覚えていただけなんです。合っているかどうかも分かりませんよ……………」

「似た文字……………ヴィルヤか？いや、ヒルヴォネンかもしれぬな。待っておれ」

人の話を聞いているのか？エイノは居ても立ってもおられぬ様子

で素早く立ち上がり、部屋を出て行く。隣の部屋から何やら物色しているらしき音が聞こえてきた。

うーん参ったな。今更、後は分かりません。と言っても解放してくれそうにないな。あの様子じゃ。とはいえ、安易に全て解読してしまうのは危険だろう。またおかしな疑いをかけられては困る。頻繁に使われている単語を2つ3つ拾って翻訳し、後はわからぬフリをしようか。

私は綴りを手に取り簡単に目を通した。

『我…此処…警告す…歴…闇に身を…魔…り…ゴールドベル  
…暦4…6年。…物は白髪…者……フォル…ルの従…  
…て姿を現……幾年……月を経……その容……る事なく、人な  
……強……力を……い、神をも恐れ……行の末に繁……極みに…  
…た我が祖国を滅亡……追いや…た』

傷みが激しく解読不可能な部分が多い。しかし分かる単語から推察するにどうやらある国の終焉についての記述のようだ。次のページには如何にして祖国が滅んでいったのかが書かれているようだが、これもまた読める部分の方が少ない為憶測の域を出ない。

冒頭のくだりを幾度か読み返していると気にかかる所を見つけた。フォル…ル。一字分からない箇所があるが、聞覚えのある響きだ。分からねぬ場所に当てはまる字はセではないのか。

## フォルセル

此方に来てから呪われたように、その名がついてまわる。

フォルセルの呪術師とはどういった存在なのだろうか。これが書かれたのが何年前なのか分からないが、随分と古くからフォルセルの名は存在しているらしい。地名や国名を指していると思っていたがどうも違うようだ。何らかの組織名だろうか？

考え込んでいるとエイノが腕の中に本を積み上げて戻ってきた。

「参考になり得る文献だ。足りねばいくらでも持ってきてこよう」

寒さぐらい耐えて部屋に籠っていればよかった…………。

分かる文字を分からぬフリをして、資料と照らし合わせ解読しているように見せかける。といのは面倒で退屈な作業だ。自然と瞼が下がる。パロの影響もあるのだろう。体が重く本を持つ手に力が入らない。眠りへと引きずり込まれる意識の中で、体が宙に浮くのを感じた。頬にあたる暖かな感触と、耳の側で刻まれる心地よいリズムにひどく安心して、私は闇色の繭の中へ沈んでいった。

顔に当たる朝日の眩しさに目を覚ました。ベッドの上に身を起し、しばし固まる。

ここ、どこだ？ああ、そっかエイノの屋敷に引越したんだっけ……………  
………つて、やっぱりここどこだ！？割り当てられた自分の部屋じゃない！

見渡す限りの、本、本、本。

嘘でしょ。エイノの部屋じゃないか！なんたる不覚。

衣服に乱れはない。体に変調はない。ベッドに染みはない。はあ、心臓に悪い。慌てふためき貞操の無事を確認してからエイノの姿が見当たらないのに気が付いた。どこだろうか？眠ってしまった私にこの部屋を明け渡して他の部屋で休んでいるのだから？気が利かないようにみえて、紳士じゃないか。

自分の部屋へ戻ろうとベッドを降りて、ソファに見えた茶色い物体に足が止まる。肘掛に寄りかかりエイノが眠っていた。居たのか……………。

他の部屋で眠るなり、私を起こすなりしてくれればいいものを。寝入ってしまった自分を棚にあげて、安らかな寝顔を見せるエイノ

に文句を垂れる。

しかし、ベッドを占領して風邪をひかれては寝覚めが悪い。私は毛布を手にとると、エイノを起こさぬようにそっと体にかけた。

長い睫が白磁の肌に影を落とし、絹糸のような髪が朝日を受けて金に輝いていた。眠っていると冷たい印象もいくらか薄らぎ美しさが増す。傾国の美女だな。男だけど。声を出さなければ美女で充分通るだろう。

声は好きなんだけどなあ。カラオケに行ったらヤ〇トをリクエストしたくなるほどの低音なのに。

「顔がなあ。これじゃなければ………本当に奇麗。見れば見るほど腹が立つわ」

無駄な美貌だ。顔の良さを利用する気もないようだし。そこいらの美女より美人な男に何の需要があるのか。

「随分な言われようだな」

独り言に言葉を返され愕然とする。眠っているとばかり思っていたのに。目をむいて凍りつく私にエイノは身を起こすと人の悪い笑みを浮かべた。

「くくっ、この顔を褒める言葉は飽きる程聞いてきたが、そのように言われたのは初めてだ」

えーと、怒ってらっしゃる？

「お前とは気が合つやもしれぬな。私もこの顔には嫌気がさしておるのだ」

いや、合わないと思います。

「なるほど、ユハの言うとおりお前は興味深い」

新種を発見した（悪の）科学者のような目でこっちを見ないで下さい。どうやって逃げようかとまごついていると、けたたましいノックの音と同時に取り乱したトゥーリの声が聞こえた。

「エイノ様！エイノ様！起きていらっしやいますか？大変でございます。サカキ様のお姿が見当たりません！」

え。

「問題ない。ここにおる」

ぎゃー。何を言うんだ。少しは考えろ。

立ち上がったエイノが扉をあけた。部屋の中にいる私を見て顔を真っ青にするトゥーリ。

誤解してるよね。その顔は。

29 後見人 (7)

「エイノ様にそんなご趣味が……だから今まで浮いた話があり  
でなかったのね。人はわからないものですね」

茫然としてぶつぶつと独り言を呟くトウリーの背中を押して自室  
に連れ込むと、昨晚の事を1から10まで微に入り細に入り懇切丁  
寧にじっくりと説明した。その結果。

「まあ、そういう事でしたの」

わかって貰えた。

「でも、本当に何もなかったのですか？」

……………だろうか。

「エイノ様程魅力的な方はそうはいませんわ。侍女の中にも憧れて  
いる者は多いんですのよ。サカキ様はどう思っているかしやるん  
です？」

どつて……………体液が緑っぽいとか、夜中に脱皮してそうだと  
か、世界征服を企まない悪の科学者ならぬ神官とか。色々。

「でも、お歳が離れていらっしやるし、私はお勧めいたしませんわ」

いや、だから違つて。

再度見当違いもいいところだと言い含めると、余計な誤解を招きた  
くないから内密にと諄いほど念押しをしておいた。でも心配だ。ト

ウーリだし。

エイノの屋敷に居を移しても、私の生活に大きな変化はない。

朝食をとり、散歩をして昼食。2区の散策と読書にこる寝。夕食後は風呂に入り就寝……とはならず、眠る頃になるとエイノが訪ねてきて部屋へ案内される。それだけが唯一変わった点か。

エイノの部屋に泊まってしまった翌日の晩、解読の続きをと、部屋を訪ねてきたエイノに渋い顔をしているところ提案された。

「ユハに働きたいと言っておったそうだな。お前の知識があれば可能だが、異質を嫌う者もおれば過ぎる好奇を持つ者もおろう。私に雇われたと思うてみぬか？無論報酬は払う」

そういつて提示された金額はシルヴァンティエの通貨価値に疎い私からみても破格だと分かるものだった。

そうとなれば断る理由はない。寧ろ喜んでやらせていただこう。古文書と覗めつこをしているだけで大金を貰える。こんな美味しい仕事はない。欲しいものも気兼ねなく買えるし、将来独立する時の為にも貯蓄は必要だ。

出来るだけ解読を引き伸ばしてがっばり稼ごう。そう心に決めた。エイノと共に深夜に解読を始めて、報酬の他にもう一つ得るものがあった。知識だ。エイノと私の間にある部屋は書庫らしく膨大な数の蔵書があるようだ。残念ながら私が入る事は禁じられているが、エイノが資料にと持つてくる本から様々な事が分かった。この地にシルヴァンティエが建国される数百年前、ゴルドベルグという国があったらしい。高度な文明をもっていたとされるゴルドベルグは、ある時突如として歴史からその名を消す事となる。その謎の手がかりが記されていると目されていたのが、あの綴りだったというわけだ。どういった経緯からエイノがゴルドベルグの滅亡に興味を持ったのかは知らないが、妄執していると言ってもいいほどの熱の入れ

ようだった。

眠い。解読の手伝いを始めて4日目、昼食後に襲ってきた眠気に勝てず、昼寝をしようと部屋に戻ると、思いもかけぬ人物が居た。

「イサーク!? びっくりした。何時きたんですか?」

「ああ……ちよっと顔がみたくなくて、な。久しぶりだな……」

私の顔をみるなり目を逸らして、歯切れの悪い口調で言うイサークは、白地に金と銀で刺繍をされた丈の長い豪華な衣装に身を包んでいた。両肩の飾りからはこれまた純白に白糸で複雑な文様を縫いこまれたマントがさがっている。普段は頬や肩を彩っている金の髪は額から後ろに流して整えられており、すっきりと輪郭を出したその髪形のせいか何時もより大人びて見えた。王子としての正装だろうか? 余りに見事な刺繍に惚れ惚れと見入っていると、イサークが歩み寄ってきた。私の前まで来ると真剣な面持ちで見つめられる。

「サカキ、困っている事はないか? ……俺に、言いたい事は?」

ある。私が実は25歳であなたを騙した上に気持ちを知ってもなお利用しようとしている酷い人間だと。言わないけども。

「何もありませんが。どうかしたんですか?」

「いや、ないならいいんだ」

苦しげに耐えるようなイサークの表情が気にかかった。何事かあったのだろうか? イサークの言わんとしている事を掴もうとして、足りないものに気付く。

あれ? 何か忘れているような……。あ、金魚の糞がない。

いつもイサークにくっ付いている近衛達がないのだ。扉の前に



もいなかった。そのうえイサークのこの格好。まさか。

「イサーク、近衛はどうしたんですか？こっそり抜け出てきたんじゃないでしょうね？」

「え？いや……………そうだ」

「また、無茶を。そんな事をしては近衛達に絞られますよ」

私が。

「ああ、そうだな。そろそろ不味いな」

焦れるような、もどかしいような、鬱屈とした空気を纏っていたイサークだが、諦めるように頭を一つふると憂いを帯びた青い瞳を細める。

「元氣そうで安心した。俺に力になれる事があればいつでも言うてくれ」

少しも安心していないだろう笑顔を見せるとイサークは部屋を後にした。

「やあ、サカキちゃん。変わりはないかい？会えて嬉しいよ」

「こんにちは、ユ八さん」

今朝、唐突に昼食と一緒にとるとエイノに宣言され、食堂に来てみればユ八の姿があった。ユ八に会うのも久しぶりだな。エイノを迎えに来る所を見た事は何度かあったが、遠目で挨拶を交わす事もなかった。

「ユ八、昼食まで間がある。先に資料を揃えよ」

「はいはい。人使いが荒いね」

それって近衛の仕事なのか？

ユ八は茶化すように文句をいいながらも、部屋を出て行く。あの書庫にいくのだろうか？私には立ち入りを許されぬ場所だ。嫌そうにしながらもユ八を信用しているのだろうか。

なんとはなしにユ八の出て行った扉を眺めていると、書類に視線を落としたままエイノが口を開いた。

「サカキ。今夜は帰りが遅くなる。私の部屋でまっしておれ」

「……………分かりました」

今夜もか。何時も遅いのに、更に遅くなるって何時になるのだろうか。この頃お肌の調子が気になるんだけどな。美味しい仕事だけど毎晩はちよつと辛い。座りっぱなしで腰が痛いし。

「寝入らぬようにな。お前に眠られては何も出来ぬ」

エイノは顔を上げると僅かに口の端を歪めて皮肉げに笑う。

もうパロは飲まないし、言われなくても寝ませんよ。あのパロ、あとからトウーリに聞いたところによるとかなりアルコール度数の高いものだそうだ。食前酒が供される事もあったから飲酒については緩い国だと思ってはいたが未成年者にきつい酒入り乳飲料を勧めるな。

それにしても、腰が痛い。ああ、マッサージ機が欲しい。握り拳をつくって腰を軽く叩くが効果はなかった。

「痛むのか？」

「ええ、ちよつと腰がだるくて」

「そうか……なら今日はよい。あの日から毎晩だったな。無理をさせたようだ」

「いえ、私は昼に休んでいますから。エイノさんこそ大丈夫なんですか？」

昼間は神官職をこなし、夜には古書の解読だ。相当疲れも溜まっているはずだ。本来ならばとつくに終わっている作業を引き伸ばしまくっている私としては非常に後ろめたい。

「私の身を案じる必要はない。自分の意思でやっている事だ。気の進まぬお前に無理を強いた上に体調を崩されては後見人として」

その時、エイノの言葉を唐突に轟音が遮った。部屋全体を振動させているのではないかというほどの音を立てて扉が開いたのだ。驚き見れば、壁にぶつかり激しく揺れている扉の奥に、片足を上げたイサークが立っていた。足で扉を蹴破ったのだろうか？作り物のように無表情でありながら目には狂暴な怒気が宿っており、その異様に戦慄が走った。

「イサーク？」

こぼれ出た私の声に弾かれた様に、イサークは部屋へと飛び込むと腰から剣を引き抜きざまにエイノに駆け寄る。流れるような隙の無い動作で切先をエイノの首に突きつけた。

「エイノ。どうということだ。俺はお前にこんなまねをさせる為にサカキの後見に推したわけではない！」

「仰る意味がわかりませぬな」

剣を突きつけられても、エイノの表情は変わらない。

その場しのぎにでも、ちょっとは下手に出ようよ。

「黙れ！白を切るか。話は全て聞いた。首を落とされたくなければ、今すぐにこの国から消えうせる」

激昂したイサークの剣を持つ手に力が入るのがわかった。脅しではなく、本当に斬り捨てるつもりなのか。

「イサーク。どうしたっていいんですか。落ち着いてください」

エイノが斬られる所も、人を斬るイサークも見たくはない。

「これが、落ち着いていられるか！……………つくそつ。サカキ。来い」  
「へ？ちよつと、まっつて」

イサークの剣幕に戸惑っていると、方手に剣を提げたままのイサークの腕が腰に回され小脇に抱えられる。私は宅配物か。抗議の声を上げたかったが、鋭い光を放つ剣が気になって何も言えない。

イサークは私を抱えたまま、廊下に出ると外に通じる扉へと歩き

かけ、しかし2、3度たたらを踏むと思いとどまったのか、進路を変えた。

なすがままだった私は何処へ行く気なのかと顔をあげ、柱の影に隠れる人影に気付いた。薄く笑みをうかべ此方を伺っている男。

ユハめくくくく。お前近衛だろうが！何で隠れてるんだ！

睨みつけるがユハが出てくる気配はなく、その間にもイサークは足早に歩き私の部屋の前に立った。

中に入り、後ろ手に乱暴に扉を閉めると、ベッドの上に私を放り投げる。肌触りのいいシーツの上で幾度か跳ねた後、ようやく揺れがおさまった。床じゃなくて良かった。

イサークは剣を傍らに投げ捨て、崩れるように床に膝をついた。

一体全体どうしたっていうんだ。ご乱心か！？

「すまん。俺が守ると大口を叩いておきながら、お前をこんな目に……」

俯き怒りに肩を震わせて、苦しげに吐き出すイサークを見ていられず、ベッドから降りるとそつと肩に手を置く。念のため、さりげなく剣を遠ざける事は忘れない。

「イサーク、落ち着いてください。私なら大丈夫ですから」

「俺の前で強がるな！」

顔をあげたイサークに強い口調とは裏腹に、すぐる様な目で見つめられる。青い瞳が不安げに揺れ、捨てられた子犬を彷彿とさせた。うっ、かわいい。その柔らかな金色の髪をワシワシと撫で回したい衝動に駆られた。

待て待て、今はそんな場合じゃない。何か誤解があるとしたか思えなかった。こんな短絡的な行動はイサークらしくない。

「強がるも何も、本当に大丈夫ですから」

「何故だ！？合意の上だったとでもいうのか？」

合意？何の話なのかさっぱり分からん。話を聞いたって言うていたな。扉の外でエイノとの会話を聞いていたのだろうか。そして怒った、と。何に？直前の会話を思い出す。

あ！

そうか、イサークは私がただ働きでこき使われていると思っているのだな。これは誤解を解かねば。それにしてもちよっと怒りすぎじゃないか？

「イサーク、誤解ですよ。エイノさんはちゃんと報酬を払ってくれています」

「サ、カキ……………」

イサークの顔は目に見えて青ざめて、私の名前を呟いたかと思うと乱暴に抱きしめられた。容赦のない力に息が詰まる。

「い、さーく。くるし」

「……………こんな事になると分かっていたら、いつその事、俺が！」

イサークが？

「俺が……………お前を……………」

私を？

イサークが言葉を続けようと唇を動かしかけたとき、扉が開いた。

30 後見人 (8) (後書き)

イサークは隠れろ。

続きも一気上げたかったのですが、改稿していたら力尽きました。おやすみなさい。

### 31 後見人（9）

扉の影からユ八が顔をのぞかせる。私と目が合うとニヤリと笑んだ。

「失礼、ノックはしたのだけどね」

その声に振り返ったイサークは、剣をとろうとして床に手を這わせた。だが剣は私が遠ざけておりとどかない。その隙に、ユ八は滑るようにイサークに近寄ると背後から腕を絡めて首を締め上げた。仮にも王子に。いいのか、そんな事して。

「離せ！ぶ……れい……もの」

「サカキちゃんは、ここにいてくれ」

がっちりと首を押さえ込んだまま、ユ八は暴れるイサークを部屋の隅へと引きずっていく。足が時々宙に浮いているんだけど。呼吸は出来ているのだろうか……。

イサークの耳にユ八が小声で何やら吹き込むと、宙吊りになっちなお抵抗を続けていたイサークが、ピタリと動きを止めた。力を漲らせ強張っていた体が見る間に緊張を解く。次いで、顔を真っ赤に染め、一瞬私を見たかと思うと、すごい勢いで顔を背けた。

なんだ、その反応は。何か私が悪い事をしたみたいじゃないか。ユ八に腕をとかれたイサークは、暗い声音で、「エイノに詫びに行く」というと私の近くへ歩み寄る。

「悪い」

目を合わせぬままボソリと呟き、側に落ちていた剣を手にとり扉



へと向かった。ノブに手をかけると険しいがどこか疲れた表情でユハを振り返る。

「二度と戻れぬ僻地に送られなくなければ、余計な事は言っな」

そっぴい残し部屋を後にした。

廊下に行く足音が遠ざかったのを確認してから、私は口を開いた。

「ユハさん、どういふことですか？説明して下さい」

「殿下の言葉を聞いていながったのかい？飛ばされたくはないのだが。まあ、大人になればわかるよ」

大人？何だそのピンクな表現は。ん？ピンク？アダルト？…毎晩…腰…無理を強いる…。

「は~~~~~」

私は顔を抑えて長い長いため息を吐いた。そっぴい事か。そりゃ、報酬を払っているなんて言葉は逆効果だよな。しかし、そっぴい方向に間違えるかね。どういふ思考回路でそっぴいになったんだ。恋する少年を甘く見ていた。

「おや、わかったようだね」

意外そっぴいに片眉を上げるユハに、再度小さくため息を吐いた。13歳なら分かるでしょ。いや分からんか？ああもう、面倒だ。

「そのぐらい分かります！子供扱いしないでください。私、もう子供じゃありません」

どうだ。絶対に子供しか吐かない取って置きの台詞だ。それにしても。

「ユ八さん、さっき柱の後ろに隠れていましたよね？なぜすぐに出てこなかったんですか？」

助けてと目で訴えたというのに、無視したね？

「殿下の弱みを握っておくというのは、俺のようなしがない近衛にとっては魅力的な事だと思わないかい？」

ユ八は爽やかに笑んで言う。その微笑と言葉の内容が合っていないぞ。

「さて、そろそろ食堂に戻ろうか。あちらの話も済んだだろう」

済んだかもしれないが、今私と顔を合わすのは嫌なんじゃないか。戸惑い俯く私の頬にユ八は手を添え上向かせる。稚氣と老猾さの混じった緑の瞳が間近にあった。

「こういう時はね時間を空けるものじゃない。時が経てば経つほど羞恥と後悔が襲ってくるだろうからね」

それは一理ある。けど本当にそう思ってた言っているのだろうか？ただ単に高みの見物をしたいただけなんじゃないのか？ユ八を相手にすると穿った見方をしてしまうのは私の責ではないだろう。しかし早くこの状況から脱したかった私はユ八と共に食堂に戻る事にした。

食堂の中は静まり返っていた。変わらぬ様子で書類に目を通すエイノと、青い顔で肩を落として頂垂れるイサーク。

イサークは私の顔をみると、その顔を瞬時に赤く変える。何かを言おうとして、唇を噛み視線を外した。ちよつと面白いかも。慌てふためくイサークを可愛いと思つてしまふ。本当に悪女になりそうだ。

「イサーク。すみませんでした。無理やり解読の手伝いをさせられていると勘違いさせたみたいで。でも、私の意志でもありませんから、心配しないでくださいね」

そういう事にしておこう。私の言葉にイサークは顔を上げて無理矢理作つた笑みで応えた。

「え。いや、そう。そうだったのか。悪かつたな。くだらん事で要らぬ真似をして」

「いえ、心配して頂いてありがとうございます」

これで丸く収まる。ところがそうは問屋が卸さなかつた。イサークは思い出したように眉を顰める。

「だがサカキ、よかつたのか？ 男の部屋には入れないと言つていただろう？」

忘れていた。言いましたね。確かに言いました。言いましたとも。なんて事を言つたんだ。どうするよ。

人間焦ると碌な言い訳を思いつかない。苦し紛れに思わず放つた一言は、

「そのつ、エイノさんは、もうおじさんだから！」

だった。もうちよつとマシな言い訳があつただろうに。おじさん

だから何だっというんだ。鏡の前に座って一晩中自分に説教をした  
い。

自分の馬鹿さ加減にげんがりしていると、パサリと乾いた軽い音  
が聞こえた。見ればエイノがテーブルに落としたらしい書類を何気  
ない動作で手に取る所だった。能面を保ってはいるが、その姿には  
哀愁が滲んでいる。しまった微妙な年齢だったんだな。

「そ、そうか」

イサークは気遣わしげな目をしてエイノを見るが、口元は緩んで  
いた。

納得、してくれた……………のか？

追記

マリヤッタがメイド仲間から聞いた話によれば、その晩ユハの部屋  
からは押し殺した笑い声が延々と聞こえていたらしい。

31 後見人 (9) (後書き)

後見人終了です。次話は第4の男が登場する予定です。また少しお時間を頂きます。

どっちにしようかな。この光沢のある紺色もいいし。こっちの深緑も燦し具合が渋くて捨てがたい。私はエイノから支給された報酬の一部を手に2区にある店に来ていた。装飾品を扱う店の前で、髪留めを選び始めてすでにかなりの時間が経過している。今日の警護担当であるライアンはまだ終わらないのかと言いたげな顔だ。女の買い物は長いんだよ。

数ある候補の中から2択までは絞ったもののどちらにするかが決まらない。右手に紺色、左手に深緑の髪留めを持ち眉を寄せて考えていた。

「これなんかどうだい」

頭上から声が掛けられたかと思うと、太い筋張った腕が私の直ぐ右側を通って商品の並んだ棚に伸ばされる。小さな黒い石が埋め込まれた銀色の髪留めを大きな手が拾いあげた。

突然の腕の出現に驚き半歩左に飛びのき斜め後方を見上げれば、爽やかな笑みを湛えたユハがいた。

「サカキちゃんの黒髪に映えるよ」

そういつて手の中の髪留めを示す。

それね。いいとは思っていたんだけど、少し高いんだよな。懐は暖かいがそれでも高々髪留めに出すにはちと勿体無い金額だ。

「これをもつらよ」

悩む私を余所にユハはさっさと店主に告げて硬貨を手のひらに落

とす。

「まいど。『ひいきに』」

店主は笑顔で答えた。

「他に見るものは？付き合っよ」

「いえ、今日は髪留めをみたら帰るつもりでしたから  
「そうか、それじゃあ送っていいっ」

紳士的に申し出られては特に断る理由も思いつかず、私はユハと並んで歩き出した。

「ユハさん、さっきのお金、自分で払います」

ポケットに入れた袋から硬貨を取り出そうとすると、やんわりと手で止められる。

「俺が選んだんだ。払わせてくれないかい」  
「でも」

後々他の事で倍返しになりそうで嫌なんだよ。

「子供は遠慮するものじゃないよ」

「……………はい。ありがとうございます」

粘ったところでお金は受け取ってもらえそうにないな。私は諦めて好意に　　本当に好意なのだろうか　　甘える事にした。

今日のユハは五分袖のシャツにユツタリとしたズボンという非常にラフな格好だ。頭になっている肘から先につい目がいつてしまう。

想像していたよりも幅のある頑強そうな腕は細かな傷が幾つもついていた。節の目立つ太く長い指に短く切られた爪。筋が浮いて見える手の甲はよく日に焼けていた。ふとエイノの白く滑らかな手を思い出す。同じ男性なのに随分と違うものだ。

屋敷の前まで来るとユハは先ほどの髪留めを取り出した。

「ありがとうございます」

手のひらを出して受け取るうとすると、ユハは口の端をあげて悪戯っぽい笑みを見せる。

「後ろを向いて。つけてあげるよ」

絶対にごめんだ！と、きっぱりはつきり言ってみたい。

「そんな。いいですよ。後で自分でしますから」

「贈った物を身につけている所を見たいと思う男心を汲んでほしいね」

これだから自分に自信のある男は嫌なんだ。何を言おうが絶対に引かないな。せめてもの抵抗に嫌そうに引き攣った笑顔で応えるが、そんなものが通用する筈もなく、私は後ろを向かされていた。一見無骨そうな大きな手が妙に慣れた手つきで髪を掻き揚げる。硬い指先が、耳を、うなじを掠めて髪の中に差し入れられる度に体が緊張に強張った。この、猥褻スレスレ人間め。一回り以上も年下の少女に不道德な行為を教えるな。心の中で悪態をついてみても、優しく繰り返される行為に次第に緊張がほぐれ体の芯に暖かく甘い痺れが熾りはじめる。それを悟られたくなくて、口を開いた。

「今日はどうしてあそこに？何時もなら剣の稽古の時間ですよね？」



イサークとの。

「よく知っているね。その様子だと、俺の剣の相手が誰かも知っているのかな？」

「ええ、まあ」

髪を撫でつけながらユハが小さく笑いをもらした。

「サカキちゃんの情報網もなかなかのものだね。殿下は新しく教師が増えてね。稽古の時間が減ったんだよ」

それでユハが野放しになっていたのか。

「おかげでやっと時間が取れるようになったのさ。さあ、出来た」

髪留めをとめる小気味よい音がしてユハは手をおろした。

「いいね。似合っているよ」

「ありがとうございます」

見なくても分かる。綺麗に纏まっているだろう。短髪のユハが何故長い髪の扱いに長けているかは考えるまでもなかった。

「ユハさんって、髪を纏めるのにとっても慣れていらっしやるんですね」

とつてもその部分を強調しておいた。

「これは、手厳しいね」

面白そうに唇をあげて、ユハは「けれど」と続ける。

「サカキちゃん程魅力的な髪的女性はいなかったよ」

誰だよ。こんな危険人物を野放しにしたのは。

「では、私はこれで」

急ぎ回れ右をして屋敷に逃げ込もうとして、ユハの碌でもない楽しげな笑顔に気付く。ああ、なんだか嫌な予感がする。

「ああ、そうだ。今日殿下が此方に来られるそうだよ」

「え？いつですか？」

「今だね」

そう言っただけをずらしたユハの後ろには、苦虫を噛み潰したような顔のイサークが同じく渋い顔をした近衛を引き連れて立っていた。ユハよ、いつから気付いていたんだ……。

「こんにちは。イサーク。えーと、勉強の時間じゃなかったんですか？新しく教師がついたと聞きましたか」

間男との密会を見られた気分になってまづのは間違いなくユハのせい。

「早く終わったんだ。それで」

言葉を切ったイサークはユハを睨みつける。

「剣の稽古をしようと思いいユ八を探していた」

「私ですか。よろしいのですか。彼女のもとをお訪ねになったのは？」

「いや、ユ八お前を探していたのだ。行くぞ」

強い声で告げるとイサークは身を翻した。ユ八とイサークの会話を無視してひたすらに近衛と目を合わせないように努力していると、背中越しに声をかけられた。

「サカキ、その髪留め。誰に貰ったか知らないが似合わんな。今度もっとお前に相応しいものを持つてくる」

その言葉に、ユ八は口もとを歪めた。屈辱からではなく、笑いをかみ殺して。イサークが見ていなくて良かった。お願いだから喧嘩ならよそでやってくれ。

世の中、そこへ至るまでの過程が分からなくて結果的に自分が置かれてしまった状況への理解に苦しむ事は間々ある事だ。しかし今回のこの状態は彼が何を思いこようになったかが手に取るように分かった。けれどあえて言わせてほしい。どうしてこうなったんだ、と。

開いた窓から吹き込む風は外に咲く花の香りを存分に含み、少し気温の高い室内を冷ますと同時に心を安らげてくれる。雲ひとつない空に昇った太陽はまだ頂上には辿り着いておらず、これからの室温の上昇を予想させた。

もう少し窓を開けたほうがいいかな。私は椅子から立ち上がると窓辺へと近寄った。背後で同じく席を立った人物が此方へと近づいてくるのを感じる。鍵に手を伸ばした私の後ろに寄り添う様にしてその人物は私より先に、長い腕を伸ばして鍵に辿り着いた。カチリと軽い音がして開錠された窓をその腕が片手で軽々と開けた。此方の窓は重い。ガラスが分厚いせいかサツシの問題なのかは知らないが、私ならば両手で、尚且つ体重をのせて踏ん張りやと引く事ができるほどだ。なのに片手でいとも簡単に開けられては、力強さに感動するより、力の差への憤りが先にたつ。しかしその感情を押し殺し、私は背後に佇む人に感謝を述べた。

「ありがとうございます。イサーク」

距離の無さに振り向く事も憚られ、前を向いたままのお礼になってしまった。近い。近過ぎるぞ。背後霊じゃないんだから……。

「いや、いい風だな」

ようやく後ろから横へと立ち位置をずらすとイサークは髪を乱す風に目を細めた。私と違って細く柔らかな金色の毛が風に遊びもつれ合う。玉になったら解くのが大変そうだ。

「教師の方はまだですかね」

「ああ、間もなく来るだろう」

ここは、いつぞやイサークと昼食を共にした西の庭園近くにある一室。私はここで、イサークと共に授業を受ける事になっていた。安全面の確保が難しく通えなくなった学院とかいう所で受けていた一般教養を、新しく教師を雇い城内で教えを請う事になったらしいそれに私も強制的に参加させられてしまったのだ。

分かるよ。ユ八が私にちよっかいを出すのを阻止したかったんだよね。それにはユ八のフリーの時間を潰すか、私を拘束するかしかないと思ったんだよね。その気持ちはよく分かる。相手がユ八だしね。歳の差を慮っても心配だったんだよね。

だからって、どうして10歳も年下の少年と一緒に今更授業をうけなければいけないのかな？こちらら脳の機能も衰え始めて久しい身だ。今から、何も知らないこちらの世界の歴史や地理や作法や諸々の一般教養を詰め込もうたって限界ってものがあるんだよ。一般常識的な事まで余りに何も知らないとボロが出るでしょうが。3日に2日、午前中だけとはいえ気が重い。

独占欲というよりは保護欲に近いのではないかと思うイサークの行動に痛む頭を押さえた。

「申し訳ありません。遅くなりました」

慌しい足音と共にノックもなしに部屋へと入ってきたその人は、入り口の段差に躓き転んだ。手に教材を持っている為か単にどん臭

い為か、恐らく後者のような気がするが、見事に顔面から着地する。あまりな登場の仕方に呆気にとられる私の横でイサークがため息をもらす。ひよっとしていつもこんな感じなのか？

「すすす、すみませんっ。遅れた上にこんな醜態を曝してしまつてほ、本当に申しわけありません。ああっ眼鏡がないっ。すみませんすみません」

転んだ弾みで飛んでいった眼鏡を手でまさぐり探しながらその人は忙しく謝り続ける。ようやく手にした眼鏡をかけ立ち上がると、すました素振りで軽く握った拳を口元に、コホンと喉を鳴らした。もう遅いと思うんだけど。

「殿下、遅くなりまして申し訳ありません。早速授業を始めさせて頂きます。あれっ？ああっ！そ、そういうば今日からでしたね」

ようやく私が眼に入ったらしい。パタパタと足音を立てて私の前にやってくると、笑顔を浮かべて手を出した。つられて右手を差し出せば、握手をした手を軽く上下にふられる。

「はっ、はじめまして、僕はレーヴィ＝カヤン。サカキさん……です。ね？殿下からお話は伺っています」

「榊恵子です。よろしく願います」

手を握られながら、私は彼から目が外せなくなっていた。肩ほどまでの茶色い髪を左耳の下で一つに纏め、眼鏡の奥で優しく私を見つめる瞳は深い青。年の頃は20代前半だろうか。控えめな笑顔に少しおどおどとした喋り口調。乾いた手はヒヤリと冷たく心地よい。握られた手が離れていくのが哀しくて、私は小さくため息を漏らした。

レーヴィ＝カヤン、彼を著す言葉はズバリ、普通。中肉中背で、美しくも醜くも無いありふれた顔立ちに、ありふれた声。街なかですれ違っても気付かないだろう存在感の薄さ。村人Aに相応しい善人で臆病そうな性格。

すなわち 超好みだった。長身のイサークやエイノ、ユハやその他兵士と違い顔を見るのに首も疲れないし、教師という危険や策謀とは無縁の平穩な職もいい。少々そっかしい所があるようだが、まだ若いしきつとこれから落ち着くだろう。欲をいえば年上の方が良かったが、彼は結婚するならこんな人、と常々考えていた人物像にすこぶる近かった。

恵子＝カヤン。うん。いい。文化の違いはあるだろが彼ならば不味い料理を出しても嫌な顔をすまい。

「ごめんなさい、あなた。今日の料理少し失敗しちゃったの。こっちの食材の扱いは難しくて……。どうかしら？」  
「美味しいよ。慣れない生活で大変だろうによくやってくれているね」

うへへ。いい。……いや、良くない。大丈夫が自分。気が早いにも程がある。我にかえると阿呆な妄想に頬に熱が上がるのが分かった。最近接するのが灰汁の濃い面々ばかりできつと疲れていたんだな。思わず夢想せずにはおれぬ程好きな普通の青年レーヴィ。けれど、ユハの例もある、一見いい人それでも騙されてはいけない。でも、もしこのままの人物なら。勿論ゴーだ！

「おい。サカキ。サカキ？」

密かに決意を固める私にイサークが心配そうに声をかけた。

レーヴィは第一印象通りの人物だった。優しく小心でどこか抜けている。鮮烈な緑の瞳も、深く艶やかな声も、心を揺さぶる激情もない。身構えず、意識せず、罪悪感も覚え、レーヴィと接する時は気を抜く事が出来た。他人に言わせれば私のこの感情は恋ではないかもしれない。けれど私にはこのぐらいの気持ちが大度良い。身を焦がす恋より、穏やかな日常！ビバ平凡！

「西にリザラス、東にザナルデツリ、北にキュイ、南にツイメン。この4国が主にシルヴァンティエと国境を接している国だね。今現在はどの国とも友好関係を保ってはいるが、二十数年前まではキュイとの紛争が度々あったんだ。その殆どは小競り合い程度で収まっていたようだけれど。今この国にとって一番重要なのは南のツイメン。4国の中では最も小さな国だけど更に南のジャスラという国でとれる良質の鉱石を加工する技術が確立されていて豊かな国だ。ちなみにジャスラの南にはドレジャー山脈があつて、それを超えると騎士の国として名高いバジエドルがある。バジエドルの鬼神の話聞いた事はない？不敗の騎士団を率いる一騎当千の猛者で、黒鬼と呼ばれる事もあるらしいね。剣の道を志す者には生ける伝説とも言える存在だそうだよ。僕も昔憧れた時があつてね……」

昼前の暖かな光の降り注ぐ部屋の中、机を挟んだ向かいの席で広げられた紙に簡単な地図を書きながらレーヴィは穏やかな声で説く。その声を聞いていると 眠くなる。それはもう猛烈に。緊張を強いられない相手ってなんて素敵。私は欠伸をかみ殺しうつとりとレーヴィを見つめた。野暮ったい服に冴えない眼鏡が良く似合う。適当にひつつめただけの髪が母性本能をくすぐった。

イサークは次の予定の為に退席し、今はレーヴィと2人だけの言



わば居残り授業中だった。いや、何故かライアンが部屋の片隅に立っているから厳密には3人だけれど。イサークがいる間は部屋の外で待っているライアンら護衛兼監視の兵士達だが、イサークがいなくなると共に部屋の中へと場所を移す。なんだろうな。2人きりにさせない配慮か？

邪魔者が一名いるとはいえ、この時間は貴重な勝負時だ。さり気なくレーヴィの事を聞き出し、己をアピールする。13歳と思われる事には大きな障害だが、レーヴィを兄のように慕っている素振りや醸し、情を得ようと目論んでいた。今すぐ恋愛対象にはならな

いだろうが、紫の上いりませんか？作戦を決行中だ。

この数日で得た情報によると、レーヴィは23歳。独り身で恋人もいない（ここが重要だ）。地方出身の貧乏男爵家の三男坊で、貴族の子弟の家庭教師をしていたところ、今回イサークの教師にと白羽の矢がたつたらしい。思わぬ大抜擢に本人も周囲の人々も驚嘆したというが、野心の欠片も持たぬ質朴なレーヴィの人柄が買われたのだろう。しかし臨時の為、イサークが学院に戻る時には御役御免になるそう。限られた時間の中でレーヴィの心を掴むのは至難のわざだが、このさい同情でも何でもいい、その時にどうにかして私も連れて行って貰えないだろうか。授業内容を脱線し、楽しそうにバジエドールの騎士について話すレーヴィに相槌をうちながら、考えをめぐらせていた。

「あ、あれ。すみません、話が逸れましたね。今日はこのぐらいにしておきましょうか。お腹もすいたし」

自分の話に熱中してしまった照れくささを隠すように頭を撫でながらレーヴィは授業の終了を告げる。

「ありがとうございます」

「それじゃあ、また明日。よろしくお願いします」

身元の不明瞭な生徒である私にもレーヴィは腰が低い。教材を纏めると深々と礼を取った。その謙虚さがまたいいんだ。

「レーヴィさん。お昼ご飯一緒に食べませんか？」

部屋を後にしようとするレーヴィを追いかけ声をかけた。

「サカキ様。エイノ様がお話があるそうですわ。急ぎ屋敷に戻られませんか？」

どこから沸いて出たトウリ。突然かけられた声には私はまたかため息をついた。何故かレーヴィに近づこうとすると、何かしら邪魔が入るのだ。ええい、時間がないっていうのに。

「残念ですね。また今度ご一緒しましょう」

人の良い笑顔を浮かべて去っていくレーヴィを涙を呑んで見送った。

エイノめ。くだらん話だったら覚えてるよ。

「今宵は城詰めとなり帰れぬ。屋敷には術をかけていくゆえ、以前のように囚われたくなければ出歩くな」

昼食をとりつつ書類に目を通していたエイノは一度顔をあげるとそう言ったきり、また書類へと意識を戻す。

「えーと、用件はそれだけですか？」

急いで戻った為ぜいぜいと肩で息をしながら確認する。だったら誰かに伝えてくれたら済む話じゃないか。私の不機嫌さが伝わったのだろうか、エイノは再び顔をあげると方眉を上げた。

「そつだ。そつ急ぎ戻らずとも良かったが？トウーリには言伝を頼んだはずだ」

とうとうとうとうりりりりりり。お前の仕業か。いつもの天然なのか？それともわざと？どうもトウーリ達侍女3人衆はレーヴィの事を快く思っていない節があるからな。

「術にかかっても直ぐには屋敷に戻れぬかもしれぬ。気をつけよ」  
「わかりました」

私はため息をつきながら返事を返した。ごめん、エイノ。八つ当たりだ。

風呂上がりは冷たいサルミに限る。湿った髪が夜着を濡らさぬよう肩にタオルをかけ、風呂場から自室までの廊下を炊事場で失敬したサルミを飲みながら歩く。エイノがいたら到底出来ない行儀の悪さだ。今夜はエイノは帰らないし、アイラやセバスチャンも私が風呂に入る前には帰った。今私はこの広い屋敷に独りきりだ。屋敷が広すぎて少し寂しい気もするが、元々が気ままな1人暮らしの身だ。久々に味わう気楽さに自然と口元が綻ぶ。タオルで髪を拭きつつサルミをちびちびとやりながら、エントランスまで来た所で扉に目がいった。コンビニがあればなあ。ポテチが食べたい。夜の早いシルヴァンティエでは当然店は閉まっているし、そもそもエイノの術で外には出られない。扉や窓といった外部に通じる場所には初日に私が引っかけた術がかかけられているらしい。警備の兵を嫌うエイノが外からの侵入者を防ぐ為に私が来てからは夜間のみかけているというが、私を外に出さない為なのではないかとも思えた。呪術師とは疑われていなくても信用されているわけではない。それに13歳には夜遊びなど厳禁だろうしな。仕方がないが……たまには夜の外出もしてみたい。ため息一つ、扉から目を逸らすと自分の部屋へと向かった。

部屋の扉を開けると夜気を含んだ風が濡れた髪に冷やりと纏わりついた。外気に晒された部屋に疑問を抱く前に部屋に佇む人物が目に入る。

どうしているんだ。こんな時間に人の部屋に。しかもまた近衛をまいてきたな。

月明かりに緩いカーブを描く金の髪が淡く映し出されて、日の光の下では明るく澄んでいる青い瞳が、おぼろげな光しか届かぬ今は深く陰りを帯びて見えた。明かりも点けずにイサークは部屋の中に立っていた。扉が開いた事に気づいているはずなのに、その目はぼ

んやりと遠くを眺めている。

「イサーク」

部屋に入り手近な台にサルミの入ったカップを置いて声をかけると、今やっと気づいたというように、ゆっくりと顔をもたげてこちらを見た。

部屋を訪れた訳を問おうとして気付く。

「どうやって入ったんですか？ エイノさんが術をかけていたはずでは……………」

それに窓の鍵を開けた覚えもない。夜風に吹かれて揺れるカーテンを見て立ちすくむ。窓の枠には僅かに土が付いている。ここから侵入したのは間違いないだろう。

「俺にはエイノの術は効かん。王家の血は特別でな。神官の使う術など容易く解除できる」

答えるイサークの声は心なしか掠れていた。そういえば、街で出会ったときにサリの術を一撫でで消し去っていたっけ。思わず首の後ろを撫でさすると、イサークは口の端を上げた。

「そうだ。サリの術も解除しただろ？……………サカキは知らんだろうが、神官長たるエイノが10日を過ぎれば継続の難しいサリの術も、俺ならば一月でも一年でもかけ続けられる。それも対象への強い制約付でな」

言いながら悠然と広い歩幅で歩みよったイサークにあっという間に距離をつめられる。伸ばされた右手が冷たく濡れた髪を潜り首筋

に触れた。解除された時と同様に首の後ろを撫でられて、今度は声が出なかった。ただ喉が引き攣り体が震える。

何を!?

反射的にその手を叩き落とそうとするが叶わない。少年とはいえ大柄で完成されつつある肉体の持ち主であるイサークの腕は私の力でどうにか出来るものではなかった。逆に弾かれた手の甲が痛む。私を見下ろす瞳を力を入れて見つめ返した。イサークに抱いた怯えを気取られぬように。イサークが間違わぬように。

「くっ、そんな顔をするな。冗談だ。力はあっても制御がきかんだ。技術のいる術はほとんど使えん」

こんなに歪んだ苦しげな顔をして笑う少年だっただろうか。何が彼を追い詰めた？

イサークは首筋から手を抜くと濡れた髪を一すじ摘む。

「冷たいな。風邪をひくぞ」

誰のせいだと思っっているんだ。手から髪が零れ落ちいつもの口調で軽く言われて気を緩めかけた。その隙をつくように震えが走るほどに色気を含んだ掠れた声で囁くように問われる。

「あいつの、どこに惹かれた？」

レーヴィの事か。

イサークの前では気をつけていたのに。いつ気付いたのだろうか。それとも誰かがチクツタ？アイラ達かライアンやクリフト？まさかなあ。

「あの男が好きなんだろう?」

是と言えはどつするのか。イサークの纏うけだるく艶めいた空気が部屋を満たしていくようで息苦しい。薄い月の明かりが心を惑わすように思えて何気ない素振りを装いランタンに火をつける為に動いた。

「何の話ですか?」

すげない口調ではぐらかすが心臓は早鐘を打っていた。早く、点け。

「まあいい」

火が灯ると同時にあたかも明かりから逃げるようにイサークは窓辺へと向かう。窓枠に腰と片足をかけると私ではなく、扉へと顔を向けた。

「案じずとももう戻る。風邪を引かんようにな」

続けて私を見ると、一言告げてイサークは窓の外へと身を翻した。月明かりに照らされた背中が暗闇に溶け込むと私は扉に向かいノブを回す。予想通りの顔を見つけてほっと息を吐いた。

「エイノさん」

と、ユ八まで。明かりを掲げ凝然と立つエイノと、腕を組み壁に背をもたせかけたユ八がいた。

「術が解かれたので様子を見に来たのだが、やはり殿下であられたか……来い。熱いものでもいれよう」

何を思っているのか。感情の読めぬエイノに促され彼の部屋へと通される。ユハと私を残してエイノは炊事場へと向かった。

ユハはソファアの上を占領している本を無造作に拾い上げ腕に積み重ねては、執務机へと乱雑に移動させる。そんな適当に置いて後でエイノが怒らないだろうか。うわ、雪崩がおきそうだ。倒れそうで倒れない絶妙なバランスで積み上げられた本に眉を顰めていると濡れた髪の毛のせいなのか、クシャミが出た。ちと寒い。部屋に戻って何か上着をとってこようかな。迷う私にユハは素早く自身の帯を解くと上着を脱いで被せた。

「そのままでは風邪をひくね。これを着て」

肩にかけられた近衛の制服はぶかぶかで、袖を通さずに中から胸元を合わせて前を閉じた。暖かい。

「ありがとうございます」

上着からは微かに男の匂いがした。今日は甘い匂いじゃないんだな。勤務中だったようだから当然といえば当然なのだろうが女の存在を感じさせない時もあるのだと、ちらりとユハを見れば長袖のシヤツから鎖骨が覗いて……小さな赤い印が見えた。前言撤回だ。そんな目立つ所につけさせるな。上着を着ていれば見えない位置なのだろうが、訓練中の薄着時だと丸見えじゃないのか。

半眼で首下を眺める視線に気付いたユハが私を見据えて、わざと



らしい程にゆつくりと目を細め口角を上げる。うつ、何故私の方がうるたえて顔を逸らせないといけないのか。上着を付き返して部屋から出ていきたい。視線を戻せず明後日の方を見続けていると、小さく笑う声が聞こえた。

「男の部屋に入っではいけないのだったよね。人の部屋とはいえ夜更けに男と二人きり、という状況はいいのかな？」

からかい混じりに言われてぶちんときた。

「若い男の人とはいけないと言われていますが……。ですから、ユ八さんは大丈夫だと思います」

ふん、13歳からみればあと数年もたてば起床時に加齢臭のしそうな20台後半の男などオヤジだオヤジ。自分は例外だと思ふなよ。まあ、私もおばさんになるのだけど。自分で言った言葉に自分でダメージを受けたぞ。

「言ってくれるね。俺もおじさんの部類に入るのかい？」

ユ八は肩をすくめて苦笑してから、己の首に手を這わせ情交の跡を誇示するように撫でた。

「けれど、青臭い男よりも経験を積んだ男の方が危険を伴う事もあるよ」

微笑むユ八の緑の瞳にのせられた挑発的な色を見て、私は今回も惨敗した事を悟った。むきー。腹が立つ。一回刺されたらいいと思ふんだ。袖にした女の人に。心の中で地団駄を踏みながらエイノが早く戻るように祈り扉を見つめた。

ほどなく盆にカップを3つ載せたエイノが戻り安堵する。私には暖めたサルミを、自身とユハに琥珀色の液体の入ったカップを置き、エイノはソファに座る。その際執務机を見て眉を顰めたが何も言うことはなかった。

冷えた体に熱いサルミが沁みる。プライドが高く人に無関心そうでありながらエイノは意外と家庭的だ。よく分からない人だな。

「厄介な事だ。もう少しご自分の立場を心得ておられるかと思っただが」

唐突に口火を切ったエイノは浅くため息を吐いた。

「何か、あつたんですか？」

「妃候補を定めるよう強く進言されておられる。近く大礼がある故な」

「大礼？」

「つてなに？」

「四年に一度行われる儀だ。聖獣に国の繁栄を祈願するのだが、その際に聖獣の世話役となる女性達の中から正室や側室がたつ事が多いのだ」

四年に一度つてオリンピッククみたいな。というか聖獣つてなに？玄武とか白虎とか龍とか麒麟とかが実在しちゃうんだろうか。

「殿下はじきに16歳になられる。四年後の大礼時にはご正室を迎えられている可能性も高いのでな、此度の儀に皆目を血走らせておる。それに辟易されている事はわかっていたが、このような行動に出られるとはな」

結婚相手を絞るようには迫られて苛立っているって事が。

「俺は、いい傾向だと思うけどね」

呆れを滲ませたエイノに、ユ八が口を開いた。ユ八の口からイサークを庇う言葉が出るとは驚きだ。

「殿下は今まで欲が無さ過ぎたのさ。王たる者、私欲を抑え清廉であれと言うが果たして本当にそうかな。欲のない人間など空虚な人形に過ぎない。我を通して欲する事も知らぬ者が国を掌握出来るとは思えないな。以前の殿下なら言われるままに波風の立たぬ無難な相手を選んだだろう。だが今は違う。サカキちゃんを手に入れたいともがいているんだ。随分と面白みのある方になったじゃないか」

「理解できぬな。妃は後ろ盾のある者を選ぶべきであろう。その地位にないものを強引に取り立てても軋轢をうむだけだ」

「正室は無理でもバリス候辺りの養女に入れば側室にはなれるし後ろ盾もつく。殿下がそれを望んで諸侯を押さえつけられればね」

「だが、殿下はまだ15歳だ。心が変わらぬわけがなからう。若さゆえに盲目的な想いに囚われてそれがわかっておられぬ。成人された後にも変わらぬ想いを寄せる者がいるならその時に愛妾として迎えばよいではないか」

二人の言葉に眩暈がした。あの。私の意志はどうなってるんでしょうかね。付き合ってられんわ。討論を続けるエイノとユ八に就寝の挨拶をするとさっさと自室へと戻った。何としてでもレーヴィの心をつかんで城を出ようと決意を新たにベッドに潜り込んだ。

眠い。昨晚の騒動のおかげで寝不足だ。エイノとユ八に見切りをつけて早々に引き上げたものの、イサークの事が気になって寝付けなかった。目を閉じるとあの苦しげなそれでいて艶やかな掠れた声  
が延々と耳の奥でループして、なけなしの良心を苛んだ。友人のよう  
に弟のように思っていたのにイサークはそれを許してはくれない  
ようだ。

この先どうなるのだろうか。悶々と一晚を過ごし僅かな睡眠の後に  
重い頭を引きずって目覚めた。レーヴィに会いたい。会って人  
畜無害な笑顔が見たい。胸を締め付けられるような激情をぶつけら  
れる事のない穏やかな時間の中に身をおきたかった。

冷たい水で顔を洗うと、ほんの少し気分が上向いた気がするが、  
膝丈の衣服に袖を通し朝食の席に着く頃にはまた滅入り始める。1  
時間もすればレーヴィに会える。気の抜ける優しい声が聞ける。だ  
けど…………。

「よお、サカキ」

「おはようございます。イサーク」

もれなく悩みの種であるイサークもついてくるんだよな。元々が  
イサークの為の教師なのだから当たり前だが。

「今日もいい天気だな。暑くなりそうだ。窓を開けておくか」

窓を開けると、鬱陶しそうに首の詰まった服の襟元のボタンを外  
し、整えられた髪を手櫛で乱す。イサークはいつもと変わりなく見  
えた。人懐こいワンコのような明るい笑顔に飾りのない態度。どう  
やら杞憂だったようだ。含みのないその様子に私は大いにほっとし

て身構えることなく普段通り接する事にした。

きつと昨日は周りの人間にお嫁さんの事で責められて煮詰まってしまうていたんだな。大人びた立派ななりをしていてもやはり中身は15歳、不安定な時期なのだろう。よしよしお姉さんは若気の至りをいつまでも気にするほど尻の穴の小さい人間じゃないぞ。

胸のつかえが下りると、途端に前向きになるのだから人とは現金なものだ。私は清々しい気分でイサークとたわいない会話をしつつ、レーヴィを待った。

早く来ないかな。いつも時間ぎりぎりに賑やかな足音を立てて駆け込んでくるレーヴィが待ち遠しい。

今日もレーヴィは息を切らしてかけて来た。ずり落ちた眼鏡を左手でなおし乱れた服装を整えると教材を広げ始める。その様子を緩みそうになる口元を引き締めつつ見守っていると、ふいに頬に触れるものがあつた。硬い皮膚を持つ大きな手が頬をなで、導かれるように顔をあげた先には目を細めたイサークの顔。

「昨晚は悪かつたな。風邪をひかなくてよかつた」

へ？

「髪はちゃんと乾かして寝たか？」

頬の手が耳の横を通り髪をすく。

は？

甘い花の香りのする風が窓を超えてイサークの指に絡んだ髪をほどいた。

「濡れた髪も美しかったが、風になびくさまもまた美しいな」

ええ!?

なにになになになに? 誰? 誰これ? イサークだよな? ワンコだよな? そりゃたまに狼になるが、こんな事をさらつとしかも人前で言うてしまうタイプじゃなかっただろ。

清々しく晴れた青空に雷の音を聞いた気がする。いや、もちろん空耳なのだけど。晴天の霹靂ってこういうこと?

愕然として身動き一つ出来ない私に向かって、イサークは追い討ちをかけるように口の端をあげて薄く笑む。

その笑顔に含まれた毒に総毛だった。

言葉は甘いし表情も艶っぽいんだけど、目が、なんというか怒ってる? うん、怒ってるね。何に……… ってやっぱり昨晚の事を流そうとした私の態度に怒っているのだろうか。しかしどこでこんな責め方を覚えたんだ。ちょっとユハに似てきたんじゃないのか? 勘弁してよ。

それにレーヴィがね、見てますよ。教材の準備に忙しいふりをして、懸命に存在を消す努力をしながらちらちらと。ああ、そうか。レーヴィに対する牽制もきっちり入っているのか。

やられた。

何も知らない他人から レーヴィから見れば幼い恋人同士の甘い語らいに見える事だろう。

弁解する? いや、まだ始まってもないレーヴィに対して何を弁解するのか。いつその事正直に気持ちを話して、って13歳じゃそれも無理だな。せいぜい恋に恋する女の子が身近な大人の男性に理想を映して微笑ましい勘違いをしていると取られるのが関の山だ。もし、25歳だと打ち明けたら……… どこからどうみても性悪の尻軽じゃないか。打つ手なしだ。

それからの時間はいたたまれないものがあつた。

まるで普段通りだといわんばかりに屈託のない笑顔をみせるイサークの青い瞳が私を見る時には微かに陰りを帯び、その度に身がすくむ思いを味わわれた。

朗らかな大型犬は怒らせると怖い。いや、もうワンコではないか。刻一刻と少年から青年へと変貌を遂げるイサークの貴重な瞬間に立ち会っていることを喜ぶべきなのだろうか……。

虎の尾ならぬ狼の尾を踏んでしまったのかもしれない。

はあ………………。  
イサークが部屋を出ると私は思わず大きく息を吐いた。

「お疲れですか？サカキさん」

「え、ええ」

もの凄く気疲れしました。

「今日はこれで終わりにしましょうか。疲れている時は頭に入りませんしね」

そう言っただけ教材を片付け始めるレーヴィを恨めしく思う。イサークとの関係を通り越して自分でくれたらいいのに。そうしたらやっぱり否定出来るんだが。自分から言い出したんじゃないや不自然だしなあ。しかし、レーヴィにそんな気はなさそうだ。そりゃそうだよね。好き好んで王子の恋愛事情に首を突っ込みたがるのは権力欲に塗れた貴族と侍女さん達ぐらいだろう。

さて、どうやって巻き返したのか。対策を練りつつ自分の荷物をまとめ終わると、イサークが開けた窓を閉める為に席を立った。今日も本当にいい天気だ。雨が少ないように思うが、水不足にはならないのだろうか。

両手を窓枠にかけて力を込めて引こうとすると、遠くの木の上で何かが光った。日の光を反射したのかな。けどあんなところで何が？不思議に思っただけ目を凝らした瞬間。トスツ。背後の机の上に置かれた本が奇妙な音を立てる。

えーと。今のって。何？

振り返れば本の上に長い一本の棒が突き刺さっていた。これは、



あれだな。正月によく見かけるやつ。その実用的なもの。  
つまり、矢。

それが窓の外から私のすぐ横を通って背後の本に刺さったわけで。

「伏せて！」

思考が追いつくより先に、声が飛んだかと思うと机を飛び越えたレーヴィに腕を捕まれ床に引き摺り倒される。腕にレーヴィの指が食い込んだ。痛み思わず身じろぐと頭を肩と肘で強引に押さえつけられる。額をついた胸は規則正しい鼓動を刻んでいて、いつもより低い落ち着いた声が聞こえた。

「大丈夫。じつとして」

これって、所謂初スキンシップ!? やったー。と思える超ポジティブ思考が欲しい。

これって、所謂暗殺未遂ってやつですか? 自覚した途端に全身に嫌な汗が噴き出し心臓が猛スピードで動き出した。

内部の異常に気付いた扉の外の兵が部屋へと入って来たが、「止まって！」というレーヴィの警告に足を止め、本に刺さる矢を見つければ顔色を変えるとすぐさま他の兵に緊急事態を告げる。一気に外が慌しくなるのが分かった。この場所に来たあの夜のように重い金属音が響き緊迫した声が飛び交う。

私はレーヴィの腕の中で襲い来る恐怖に耐えていた。ほんの少し立っていた位置がずれていたら。そう思うと頭にすべての血が集まったかのように熱が昇り圧迫されて痛みを覚えた。反対に体は冷え切って寒気が走り肩が震えるのを止める事が出来なかった。レーヴィはそんな私の腕を変わらぬ痛みまでの力で掴み、覆いかぶさるように抱え込んだまま微動だにしない。

目をつむると気を失えるのではないかと思う。だから何も見たく

はなかつたが目を開けていた。暗闇に囚われている内に事が進んでしまうのが怖かったから。

やがて腕をつかむ力が弱まっていき、気付けば周囲を大勢の兵が取り囲んでいた。その中の一人が進み出ると膝をついて私と顔を合わせる。ライアン………見知った顔に泣きたくなつた。ライアンは厳しい顔でレーヴィイから私の腕を受け取ると脇の下から支えて立たせてくれる。寄りかかったままよると進み部屋を出ると、丁度ユハが駆けてきた所だった。今度はライアンからユハの手に渡され、抱き上げられた。ああ、これもあの夜と同じだ。

「怪我は？」

問いに頭を振って答えると、「良かった」と、優しく微笑み歩き出す。

笑みを崩さぬユハに壊れ物を扱うように優しく腕の中に納められではいるが、全身から発せられる興奮と威圧感が触れ合った体から服越しにも突き刺すように伝わった。固い胸板、太い腕、乱れぬ呼吸。緑の瞳は苛烈で冷徹な光を宿らせ時折向けられる視線に怯えた。守られている相手にさえ恐怖を感じるのは、命の危険に晒されたシヨック故か、それとも単純にユハという男に対して抱いているものなのか。

数度掌を握っては開くといった動作を繰り返し、つま先の感触を確かめ力が入るのを確認してからユハに訴えた。

「降りしてください。自分で歩きます」

周囲の様子から襲撃者はまだ捕まっていないと推測した。今、再度襲われたら、ユハの両手を塞いでいるこの格好はまずい。そう思った。痛みは苦手だし自分の身は可愛い。いざという時にユハの枷になつては守れるものも守れぬだろうという至極利己的な理由なの

だが。

「だめだよ」

ユハは私の言葉をどう受け止めたのか優しく拒否する。駄目ですか。

「お願いします。降りしてください」

再度の訴えは笑顔だけで黙殺された。

懇願した所でユハが願いを聞き入れてくれない事などよく分かっている。分かっているけど言わずにはおれなかった。妨げにならぬように、それになにより……………緑の瞳から少しでも距離を置けるように、ユハの体に触れずにすむようにしたかった。

けれど結局、抱きかかえられたまま城の中の一室に運ばれると、ベッドに降ろされる。ユハはベッドの縁に腰掛けた私の前にかがみ込むと、靴に手をかけた。

ぎゃー。何をする！慌てて足を引つ込めようとする私の足首を素早く掴むとユハは難なく靴を脱がせた。なんとというか、本当に色々と手馴れてらっしゃる。抵抗を諦めた私のもう片方の靴も脱がせると、膝をついた姿勢のまま下から見上げられた。

「少し横になったほうがいいよ。すぐに侍女がやってくるからね。目を閉じて、休んで」

拒否を許さぬ優しい口調に馬鹿みたいに素直に頷いた。だって怖いんだもんね。

「いい子だね」

髪を撫でるとユハは窓の側に立った。

そしてライアンが扉の前に立つ。………うん、ずっといたんだね。ライアン。忘れていたよ。髭のおじ様兵士ライアンはほんのりと頬を染めて呆れたような眼差しをユハに送っている。

いい年なんだから照れないでくれ。赤面したいのはこっちだよ！

どれくらいの時間がたったのだろうか。横になって目を閉じてみたものの高ぶった神経は一向に収まらず眠りが訪れる気配はなかった。瞼の裏を見つめる事に飽いてうつすらと目を開けてみれば、窓の外に意識を集中しているユハの姿が見える。引き結んだ口元に何時もの笑みはなく、研ぎ澄まされ凜とした姿に吸い寄せられるように見入ってしまう。広い肩幅が背筋の良さで更に強調されて、近衛の制服が憎らしい程に似合っていた。

何をしても様になる出来すぎた男だ。ユハに弱みってあるのかな？女好きなところか？しかし幾ら女たらしでも女に溺れるタイプではないだろうし弱みとは言い難い。一つぐらいあるだろうとは思うのだが。うーん。思いつかないな。可愛げのない男だと再び目を閉じようとした時、ふと左手の指が繰り返し動かされている事に気がついた。右の掌を左肘に左の掌を右ひじにまわし低い位置で組まれたその左手の人差し指が僅かな動きではあるが一定のリズムで右肘に打ち付けられていた。その仕草に、ユハの苛立ちに気付く。

そういえばどうしてユハはここにいるのだろう。エイノの近衛だよね。襲撃者が捕まっていない今、標的ではないにしても城にいる誰しもが危険なのではないだろうか。

「ユハさん。エイノさんの護衛に行かなくていいんですか？」

起きていると思わなかったのかユハは驚いたように眉を上げ私を見た。

「あの、誰か他の方に代わられてはどうですか？」

今のユハにはどこか言葉をかけ辛い。いつもより鋭い緑の瞳が無

性に気になった。控えめな声音で言うとユハは微かに口元を緩める。

「俺が護衛では不満かな？」

「そういうわけでは………心配なんじゃないんですか？エイノさんの事が」

だから、苛立っているんじゃないのだろうか？

「サカキちゃんは察しがいい子だ。けれどよすぎるのも考えものだね」

言いながらユハは歩み寄ると、ベッドに腰かける。ベッドが軋む音がしてシーツと共にユハの重みに沈んだ。安定の悪くなったそこから私が身を起こすのを待ってユハは口を開く。

「俺はエイノの身の危険を心配しているわけじゃないよ。防御はエイノの十八番だしね」

では何を？

「二度目だからね。城への侵入を許してしまったのは」

一度目は私か。エイノの術者としての資質が問われる事になるのだろうか。

「結界に穴があるという事になると、サカキちゃん、君も不味い事になるよ」

「え？」

思いもよらぬ言葉に驚き声を上げていた。

「絶対の守りを誇っていた城に突如君が現れた。結界の指揮を執っていたのも、先頭に立って君を庇ったのもエイノなら、殿下の寵を受けた君の後見についたのもまたエイノだ。そして今度の襲撃。場合によってはエイノと君の立場はかなり危ういものになるだろう」

「まっってください。狙われたのは私ですよね？それで何故」

「狙われたのは本当に君かな？今日は晴天だ。室外のそれも距離のある木の上から暗い部屋の中に立つ人物が誰か果たして狙撃者には判別できたのだろうかね」

「……………イサークが狙われたということですか？」

「そういう可能性もあるという事だよ。殿下を狙う黒髪の呪術師、エイノなら結界に穴を開け城内へ招きいれる事が出来る。呪術師はまんまと殿下を籠絡し襲撃の隙をつくり、そこへ第3の仲間が現れて、しかしほんの手違いから標的を違えてしまう」

「ちよつ、ちよつと待つてください！仲間にイサークと間違われて命を落とすところだったっていうんですか。そんな間抜けな！私が呪術師ならもっとと上手くやりますよ！！」

何だそれは。強引にも程がある。声を荒げる私にユハは変わらぬ態度で答える。

「分かっているよ。サカキちゃんには他にいくらでも機会があったけれど、そう思わない人間もたくさんいるんだよ。ここにはね」

はあ？何だよ。頭に豆腐でも詰まっているんじゃないのかそいつ等。

「エイノは少々複雑な生い立ちだね。地盤が磐石とはいえないし、君も知つての通り他に合わせる事を知らない男だから快く思っていない者も多い。その者達からしてみれば真実などどうでもいいんだ

よ。エイノを神官長の座から引き摺り下ろせればね」

「そんな……………」

呆れて二の句が継げなかった。権力争いか。こんな時まで。

「生かしたまま、捕らえられればいいんだが」

そう言つてユハは窓の外へと視線を移す。

その横顔を見て疑問が沸いた。なら、ユハも襲撃者搜索に加われ  
ばいいじゃないか。なのに何故ここにいる？本当は私の事を疑つて  
いるのではないのか？胃が締め付けられるような不快感に襲われる。  
気持ち悪い。腹の底から湧き上がる吐き気に似た憤りに唇を噛み俯  
いた。

「傷がつくよ」

頤に指をかけ私を上向かせると、ユハはかみ締めた下唇にそつと  
親指を当て食い込んだ歯から唇を開放する。

「君は、本当に察しいい……………」

悔しかった。信じてもらえない事が。信用を築けつつあると思っ  
ていたのに、こんな事で簡単に崩れていく。

伏せたくなる目を見開いて精一杯の虚勢をはった。笑みをかたど  
った唇とは対照的な全く笑っていない緑の瞳を見つめ返す。どうす  
れば何を言えば分かつてもらえるのだろうか。唇に当たる指から伝  
わる熱にもどかしさが募る。

コホンッ

ユハと私の間にあつた緊張を破るように咳払いが聞こえた。

うん、ごめん。また忘れてた。ずっといますよね。本当にすみま



せん。

頬を染めて軽蔑しきった目でユハを見つめるライアンに心の中で  
侘びを入れつつ、なるべくユハを視界に入れないようにして布団に  
横になると狸寝入りを決め込んだ。恥ずかしすぎる。

ベッドの中でもんどりうってまわりたい程の気恥ずかしさが薄らいだ頃、アイラが盆に飲み物の入ったカップをのせてやってきた。気丈なアイラは私に余計な懸念を抱かせない為か務めて明るく振舞うが、私を気遣うその行動の端々に隠し様のない動揺や不安が見て取れた。後ろ髪を引かれる様子ながらもユハにやんわりと促されアイラが部屋を後にすると、また3人だけの静かな時間が訪れる。仕方なく再度ベッドに横たわり眠れはしないと分かつてはいたが目を閉じた。

時間は淡々と流れていった。太陽は既に西の空の彼方へと姿を移しており、暗闇に包まれた部屋に時折差し込む光りが窓の外を篝火を持った兵士が通り過ぎた為なのだ。幾度目かに気付いた。ユハは依然として窓辺に張り付いていた。兵士が数度訪ねてきてはその都度変わりの兵士を立てて部屋を去ったがいくらかもしないうちにまた戻ってくる。恐らく状況を確認しているのだろう。

何ともいえない緊迫感に気はちつとも休まらない。ベッドでゴロゴロしているだけだというのに疲労が蓄積されていく。

そんな中またノックの音がして顔を上げれば、アイラとマリヤツタが湯をはった桶とタオル、着替えの服を持って入ってくる場所だった。それを見て、今夜は屋敷には帰れないのだと分かった。いや、今日だけとは限らないかもしれない。

それはいいんだけど。体を拭いて着替えるというのに、ユハとライオンに部屋を出る素振りがないのは何故かな？いぶかしんでみると、アイラ達が衝立を並べ始める。

…………… ああ、そうですね。その陰で着替えると。いいですけどね。それも別に。いいんですけど！その衝立がユハの身長に足りてないってのは問題ありじゃないですかね？アイラさんよ。それともワザとか？衝立は所詮気休めで、着替え中も監視されると？いい

つちやいいですよ。別にユ八も見たいなんて思ってないだろうしね。けど顔をひきつらせて衝立とユ八を見比べてる私を見て、笑いをかみ殺してるのがたまらなくムカつくんですよ！お願いだから着替え中の監視はライアンにして下さい。

ユ八を睨み付けていると、衝立の問題に気付いたアイラが慌ててユ八にソファを勧める。良かった。故意ではなかったらしい。

服を脱ぎ始めると同時に、衝立の向こうからクスクスと押し殺した笑い声が聞こえた。何なんだこの敗北感は。

怒りを抑えたため息をつきつつ下着姿になると、マリヤツタが短く息を吸い込んだ。その様子にどうしたのかとマリヤツタの視線を辿りギョツとした。腕にくつきり手形がついていたのだ。これって、レーヴィの？そういえば痛い程の力で掴まれていたっけ。冷静に見えたけど、レーヴィも必死だったのかもしれないな。遅ればせながら気付いたアイラが「まあ！？」と驚きの声を上げると、ソファが軽く軋む音が聞こえた。

「どうかしたのかい？」

どうもしないから、こっちに来るな。急いで着替えの服を頭から被る。

「なんでもありません」

と、私が言ったところで信じてもらえないのだろうが。

衝立からこちらが見えないだろうギリギリのラインで止まったユ八にアイラが慌てて説明に向かう。

ああ、疲れる。まさか一晩中ユ八がいるんじゃないだろうな。私は深いため息をついた。ため息をつくときと幸せが逃げていくって本当だろうか。今日何度目かな……………。

そのまさかはどうやら当たりらしい。アイラ達もいなくなり、ライアンはユハに釘をさすような眼差しを送りつつ他の兵士に交代したというのに待てども待てどもユハが去る様子はない。もういいや、好きにしてくれと存在を忘れるように頭から布団を被った。

夜半になって、ようやくとうとうしかけた頃、静かな部屋に扉がノックされる音が響いた。また報告の兵士だろうか。安眠妨害もいいところだ。

「私だ」

エイノか。聞こえた低い声にそっと顔をだして様子を伺う。安眠妨害の最たる素であるユハが、扉の前に立つ兵士に頷いて合図を送ると扉が開かれた。

「サカキの様子はどうだ？」

「落ち着いているよ」

「そうか」

寝たふりを続けようかと思ったが、声に滲む疲労の色に思わず体を起こしていた。

「起こしたか。すまぬな」

「いえ、大丈夫ですか？お疲れみたいですが」

今はエイノには頑張っ て貰わねばならないのだ。馬鹿な疑いを晴らすために。

「問題ない。私はしばらく屋敷には戻れぬが、お前は明日の朝には戻ると良い」

「え。いいんですか」

「但し、襲撃者が捕まるまでは屋敷からは出るな。危険を避けるためだ。よいな」

つまり、軟禁か。

「分かりました」

私に拒否権などあるはずもない。私の答えを聞くとユハに視線をちらりと送りエイノは廊下へと姿を消した。イサークに会う前の状態に戻ったと思えば我慢出来なくもない。しかし一度緩んだ心には少々きついものがある。

ささくれたつ気持ちを押し込むように再度頭から布団を被り目を閉じた。

何もする事がない。というか出来ない。軟禁逆戻り生活1日目。早くも私は暇を持て余していた。カーテンの隙間からただ外を眺めているだけだ。ちらりと視線を流せば屋敷の扉の前に二人の兵士の姿が見える。

重そうな鎧。銀色の鎧に身を包んだ兵士達はご丁寧に1時間に一度どちらか片方が屋敷の周りを巡りまた扉の前に戻っては直立不動の姿勢をとっていた。部屋の前を通る際にカーテンが開いていたりすると軽く睨まれる。まあ、また矢が飛んできても嫌だから閉めているけど。

しかし襲撃者が捕まるまでずっとこの生活が続くのだろうか。もし、捕まらなかつたら……想像してゾツとした。濡れ衣をきせられて、処刑。という可能性も大いにあるだろう。しかも襲撃があつてから既に丸1日が経過している。捕まるものならばとづくに捕まっているのではないか。もう追跡の及ばぬ所まで逃げおおせているのでは？どうなるのかな。私。考えれば考えるほど答えは悪い方へと傾いていく。

それにしても狙われたのはどちらなのだろう？言われてみれば私などよりイサークの方が余程可能性が高いが、私が狙われた可能性も無いわけではない。なのに警備の厳重な城の中から、比較的手薄な2区にあるこの屋敷に移されたというのは……イサークに何かあつたらそれこそ一大事だけど、私なら大した問題ではないのだろうな。ああ、何か気が滅入るぞ。どうしてこんな所にいるのだろう。疑いが薄らいでいた時に無理にでも城を出ておけば良かったのではないだろうか。街で生活していたら今頃何をしていたのだろう。

「どこかに行きたいな……」

「ここではないどこかへ。」

「どこへ行かれるおつもりですか？」

もらった眩きに、答える声に驚き振り返った。

「レーヴィさん!？」

「すみません。扉の外から声をかけたのですが、返事がなくて」

そんなにぼーっとしていたのだろうか。さっぱり気付かなかった。レーヴィは申し訳なさそうに目を伏せる。

「こちらこそすみません。気がつかなくて」

「いえいえ、返事を待つべきだったのです。けど、少し心配だったもので。………体調はいかがですか？」

「大丈夫です。ありがとうございます。レーヴィさんはどうしてここに？」

「お見舞いに………貴方はずっとそうやって一人で窓から外を眺めておられたのですか？」

レーヴィは眉を寄せる。その悲しそうな表情に戸惑った。

「え、ええ。まあ」

「殿下は？殿下はみえられましたか？」

「いえ？」

何でイサーク？

レーヴィは唇をかみ締め俯いた。握り締めた拳には強い力が加わり白くなって小刻みに揺れている。

「この方達は酷い。サカキさんのような少女に何が出来るというんですか！殿下も殿下です。貴方の事を想っている風だったのに、会いにもこないなんて」

あー。そういう事ですか。いや、会いに来られても困るんだけど。その時に何かあったら一巻の終わりだし。しかしレーヴィの優しい心はありがたく受け取っておこう。

「いいんです。私は平気ですから」

「平気なものですか！今だって、どこかに行きたい。とそう仰っていたじゃありませんか！」

うっ、まあそうですね。

悔しげに震える声で吐き出すように言われて私の戸惑いは大きくなっていった。

「逃がして、さしあげましょうか？」

え？

俯いたままようやく聞き取れるような小さな声で告げられる。聞き間違い？問い返したいが声は喉に張り付いて出てこない。呆然としているとレーヴィは勢いよく顔を上げた。

「僕が、逃がしてあげます。このままここに居ても身の安全は保障されません。例え今回の犯人が見つかって疑いが晴れたとしても、また同じような事が起これば、貴方への扱いは繰り返される」

眼鏡越しに真摯な青い瞳が私を見据える。あの穏やかなレーヴィがこんな大胆な事を言うとは。この人はきつと優しすぎるんだな。



「僕の故郷に行きましょう。田舎ですが、そこでなら静かに普通の少女としての幸せを掴めるはずです」

「でも、そんな事をしてはレーヴィさんが」

「今すぐ一緒には行けません」

レーヴィは言葉を切って手に顎を乗せ考え込む。どうするつもりなのだろうか。

「そうですね、街に信用出来る友人がいます。サカキさんにはそこに身を潜めていただいて、僕はこの度の襲撃で怖気づいたとでも言つて殿下の教師役を辞退します。頃合を見て二人で街をでましよう」  
「どうして……………」

レーヴィがそこまで。

「見てられないのです。大の男が寄つてたかつてあなたのような少女を疑つて利用しようとして。それに貴方は僕の大切な生徒です。ここで貴方を見捨てては、僕はっ！」

レーヴィの青い眼には今にも涙が滲みそうで、必死に言い募られて、心の揺れない人間がいるだろうか。

でも、今私だけ逃げたらエイノはどうなるのだろうか。

「もちろん無理には言いません」

イサークは、どう思うだろう。

「けれど、サカキさんが外の世界を望むなら」

ユハは、どうでもいいや。

「僕は全力で貴方を守ります」

よし、逃げよう。

エイノは一人ならなんとかやるだろう。うん、エイノなら出来る頑張れ。イサークもきつといい娘が現れるはずだ。良い王様になれる事を遠くから祈る事にしよう。ユハは、奴はやっぱりどうでもいいや。私がいなくなったところで何も変わらないだろうしな。

「レーヴィさん。私、外に出たい。レーヴィさんと一緒に逃げます」

翌日の昼前、再びレーヴィがやって来た。小さな黄色い花束を手に表向きは見舞いと称して。

「友人に話をつけてきました。サカキさんの身の上については、遠い異国から商売に来たものの両親を無くし、とある貴族に無体を迫られて困っている子を逃がしたいと説明してありますので、サカキさんもそのつもりでお願いします。なるべく自分の話はしないで下さい」

抑えた声で話すレーヴィの目は微かに腫れぼったく赤みを帯びていた。皺の入ったシャツに、長さの違うちぐはぐに結ばれた靴紐。髪を纏める為の細い紐からもれた茶色い束が幾筋も首に垂れている。昨夜は私の為に遅くまで奔走してくれていたのかもしれない。いつにもまして冴えぬレーヴィの出で立ちに申し訳なく思った。

「これから言う事をしっかり覚えて下さい。友人の名はハンネス・アールト。大通りから一本入ったところでリトヴァという食堂を営んでいます。大通り付近で食堂リトヴァの場所を尋ねるといいでしょう。大柄で一見怖く思えるかもしれませんが優しい人間です」

私はレーヴィの言葉を聞き逃さぬよう耳を傾け一語一句を頭に刻んだ。そしてハンネスの人柄やリトヴァの情景を想像する。レーヴィの友人ならきつといい人だろう。私にも食堂の手伝い出来るだろうか。目立つこの容姿じゃ接客は無理かもしれないが、お世話になるのだ、せめて裏方ぐらいは手伝いたい。そんな事を思っていると、徐々に、ああ本当に逃げるのだ、と実感が高まり同時に生まれたい微かな緊張に腕を擦った。その緊張を解きほぐすようにレーヴィ

は目を細めて優しく微笑んだ。

「大丈夫ですよ。きっと上手くいきます。ハンネスの料理の腕は素晴らしいですから、美味しい食事を期待してくださいね」

「はい」

何て柔らかく笑む人なんだろう。つられて笑みを返し、その笑顔に魅入ってしまう。しかしレーヴィはすぐに笑みを消し真剣な面持ちで告げる。

「明日の明け方、まだ日の昇らぬ暗いうちに騒ぎを起こして監視の兵の目をそらします。サカキさんは兵士が持ち場を離れたら窓からでも出てきて下さい。その時にカーテンと窓を閉めるのを忘れないで下さいね。少しでも時間を稼がねばなりませんので」

「分かりました………けど、一つ心配な事があるんですけど」  
「なんですか？」

「以前、エイノさんが留守にしている夜間は術がかけられていたのですが、今も夜は掛けられているかもしれません」

「それはありません。襲撃者の侵入経路の確認と結界の見直しで、いかにエイノ様でも今はそのような余力はないはずです。ですから兵が立っているのですよ」

そうか。エイノ大変そうだな。

「日が昇るとすぐに物資を運ぶ馬車がやってきますので、その荷に紛れて街に出ます。門さえ抜けてしまえばこちらのものです。いいですか荷物は最小限にお願いします。貴方の不在が知れた時、貴方が自分の意思で出たと思われぬように。荷物が無くなれば自らの意思での失踪と露見してしまいます。そうなると街中まで捜索の手が及ぶやもしれませんから」

自分の意思じゃない失踪って………拉致られたと思わせるって事？ そうなれば襲撃の標的は私だったという事になってエイノの疑いも少しは晴れるのだろうか？ 考え込んでいるとレーヴィが気遣わしげな顔で問う。

「殿下の事が気にかかりますか？」

うーん、イサークは命を狙われているかもしれないわけで心配といえど心配だが、私がここに居ようが居まいが危険の度合いは変わらないだろうし。あの時イサークが居れば私を庇おうとして、自分の身を危険に晒していたかもしれないと思うと私の存在はむしろマインスだろう。

「それともエイノ様が心配ですか？」

まあね。心配………というか、責任被せられてエイノの身に何かあったらさすがに寝覚めが悪すぎる。とは思う。しかしエイノもまた私がいても共倒れになりこそすれ負担が減るわけでもないだろうしな。

「あの方は実力も神官達からの人望もおありになる。一時的には神官長としての立場が危うくなるかもしれませんが、あの方以上の適任はいないと、すぐに周囲も分かるはずですよ。何よりお父上がフロンゼン公なのは周知の事実ですから、滅多な事にはならないでしょう。」

ゆっくりと安心させるように諭すように言うレーヴィの、微妙な言い回しにユハの言葉を思い出した。複雑な生い立ち、とか言っていたな。何だろね。まあ、何となく想像はつくが。

それにしてもユハとレーヴィでエイノの処遇に対するニュアンスが違うのはどうしてだろう。レーヴィが楽観的すぎるのだろうか。それともユハが私を脅そうとして大げさに言ってみたとか？エイノやイサークの庇護はあてにならないとびびらせて尻尾を出すのを待っているのかも。大いに有り得るな。エイノが囚われるとなると胃に重いものが押し掛かるが、失脚する程度ならまあいいか。怨むなら賢者を怨んでくれ。フランゼン公とやらがどれ程の力を持つ人物か知らないが、エイノのフォローをきっちりしてくれよ。

それより神官から人望があるというのに驚きだ。あの目から冷凍ビームが出そうなエイノにあるんだ。人望。仕事で失敗しようものなら氷付けにされそうなのにな。上司にしたくない人物ナンバー1だけ。いや、やっぱりナンバー2かな。1は手の付けられないセクハラ上司になりそうなユハだわ。

「サカキさん」

取り留めの無い思考に流されていく私の手をレーヴィの手が優しく包みこんだ。

「僕の故郷は田舎で何もありませんが、水の豊かな美しい所です。着いたら取っておきの場所にお連れしますね。きつと気に入りますよ。貴方はなにも心配なさらないで。大丈夫」

私の手を包むレーヴィの乾いた体温の低い手にぎゅっと強く力が込められる。

「ですから、普段通りに振舞ってください」

そう言つとレーヴィはふわりと微笑んで手を離し、部屋を後にした。

レヴィヴィは私の事をどう思っているのだろう。哀れな生徒?……  
…同情でもいいか。今はまだ。

あくる日、朝は晴れていた空に昼過ぎから雲が流れ込み、日が沈もうとする今は見事な曇天となっていた。心をうつしたように厚く空を覆う雲に不安を掻き立てられる。決意を固めたのに、今になってすっきりしない嫌な気持ちが続わりつく。上手く、いくかな。それに、レーヴィを信用して本当に大丈夫だろうか。ふと心を過ぎった疑念に頭を振った。惚れた男ぐらい信じよう。そう己に言い聞かせると、手元の資料に目を落とした。

手にしているのは古文書の一節を写し取った紙だ。エイノへのせめてもの手向けに少しだけ解読を進めていこうと思っただのだ。白髪、フォルセル、従者、末姫、魔。頻繁に使われている単語を5つ抜粋すると、その上に訳を記しておく。結局これも殆ど進まぬままになってしまったな。ごめんね、エイノ。色んな意味で。怨むのはくれぐれも賢者にしてください。

テーブルの上に資料を置くと、一眠りするためにベッドに横になった。目覚まし時計なんて便利なものはないが、今から眠れば深夜には目が覚めるだろう。不安と期待を抱いたまま私は眠りについた。

目を覚ますと、部屋の中は一寸先も見えない闇に包まれていた。手をかざしながら窓辺に近寄るとそつとカーテンを摘み、隙間から外を眺めた。普段よりも暗い夜の色に月が出ていない事を知る。好都合だ。このまま月明かりが差さなければいいが。私は足音を立てぬようこつそりと移動しながらフードのついたローブを引っ張り出した。荷物は最小限と言われたが、このローブくらいはいいだろう。雨が降ってきたら困るしな。

何時でも行動を起こせるようにローブを身にまとうとベッドに座り時が過ぎるのを待った。どのような状況でもただ待つ時間というは時の流れが遅く感じるものだが、今は格別だ。一秒さえ長く感じ



る。あるはずも無い秒針の音が部屋に響いているようで、時が刻まれる度に迷いが積み重なり増えていく。その時間に耐え切れなくて枕を腕に抱えるときつく抱きしめ顔を埋めた。

その姿勢のままどれくらいの間時間がすぎたのだろうか。ふいに窓を叩くごく小さな音が聞こえた。慌てて窓辺に寄り慎重にカーテンを開け、がっかりする。雨がパラパラと降り出していた。どうやら今の音は雨粒が窓に当たった音らしい。ガラスに貼りつき流れ落ちる水滴を辿っていると

「火事だ」

と叫ぶ声が聞こえた。

屋敷の扉の前に視線を向ければ、兵士達が戸惑っている姿が目に入る。

「誰か！来てくれ。早く！誰かいないのか！」

焦りの滲むその声に兵士達は顔を見合わせると駆け出した。一人だけ。ええー。二人共行ってくれよ。ほれ、行った行った。念じてみても兵士は動かない。

……仕方ない。私は外を伺っていた窓を離れると、部屋のもう一片にある小さな窓へと向かった。この位置ならば兵士からは死角になるはずだ。角部屋でよかった。今兵士は一人しかいないし、きつとあそこから動かないだろう。

音が立たぬように慎重にゆっくりと窓を開けると、足から順に通り抜け……う、きつい。ずりずりとお腹を引き摺りながらなんとか外に降り立った。何かもうこれだけで疲れたわ。

さてと、まずはレーヴィを探さねば。暗闇に目を凝らし辺りを見回すが彼の姿は見えない。どうしよう。とりあえずここを離れるべきだろうか？考えあぐねていると

「サカキさん。こちらです」

木々の間から小さく呼ぶ声が聞こえた。

「レーヴィさん？」

足音を立てぬよう静かに近づき呼びかけると、レーヴィがひよこりと顔を出した。

「静かに、慌てずついてきてください」

レーヴィは厳しい顔で言うが、木の枝にフードを取られ、頭に葉をつけた彼の愛嬌ある姿に知らず緊張がほぐれる。思わず笑みがこぼれそうになるのをぐっと我慢して神妙な面持ちで頷いた。

レーヴィの後に続き木の枝を潜り抜け藪の中を進む。雨がフードを叩き耳のすぐ側で軽やかにはねる音が絶え間なく聞こえた。本降りになってきたようだ。身を隠すには丁度いいのだろうが足元は悪いし体力の低下も心配だな。フードを目深に被りなおし、しっかりとローブの前を合わせた。

さほど距離を歩いてはいないだろうが、暗闇の中を進んでいる為距離感がさっぱりつかめない。しばしの後レーヴィと私は背の高い藪に囲まれた大きな木の下へとやってきた。

「ここで、馬車が来るのを待ちましょう」

そう言うとレーヴィは木の根元に屈みこむ。隣にしゃがむと、青々としげる葉のおかげで土が濡れていない事に気づいてその場に座り込んだ。ローブを通してはいないものの表面についた雨が嫌でも体温を奪っていく。身を縮こまらせていると気遣わしげなレーヴィ

の音が聞こえた。

「寒いですか？」

ローブの下から伸びた手が私のフードを落とし、濡れて顔に張り付いていた髪を優しくすくい取る。そのままそつと頬に手が触れた。

「冷たい」

ぼつりと呟いたレーヴィの顔に浮かぶ物悲しい笑顔に、胸が苦しくなり心配をかけぬように精一杯の笑顔で答えた。

「大丈夫です」

触れるレーヴィの指先のほうが余程冷たいよ。

「サカキさん……………」

顔を歪めて目を伏せたレーヴィは、僅かの時の後、再び顔を上げると同時に肩を掴んで私を胸の中へと引き寄せた。

え？

頬に当たる固い感触と、体温と、快い鼓動に思考が止まる。えーと、どうしよう？戸惑いに目を閉じて身を任せれば頭上からレーヴィの声が吐息に含まれる熱と共に降りてきた。

「サカキさん……………僕は……………」

え？僕は？僕は何！？レーヴィの言葉に年甲斐もなく胸が高鳴る。これって、これってひょっとしていい感じ！？しかし、なかなか次の言葉を継がないレーヴィにはがゆい思いをしていると、体が急激

に回転した。

「うああっつ」

腕に走った熱に悲鳴とも呻きともつかない声がつく。

乱暴に腕を引かれて立ち上がられ、急な動作にふらつく頭に耐えて目を開ければ、私の腕を掴み前方を睨み付けているレーヴィの姿が目に入る。その視線の先に目をやれば、雨の中、ナイフを手に銀色の仮面を被った男が立っていた。

お面男の持つナイフには赤いものが微かに付着していて、それが私の腕から出たものだとすぐに気がついた。弓を射られたと思っただら今度はナイフで斬りつけられるとは、どうなっているんだ。あの弓もこの男の仕業だったのだろうか？ 呆然として動けぬ私の腕をレーヴィが強く引いた。腕を回して胸の中に納められる。

「逃げます。合図をしたら走ってください」

耳元で小さく囁かれ、返事の代わりにレーヴィの服を掴んだ。

「行つて」

いつの間にも手にしていたのか。小石のような小さな物体をレーヴィはお面男めがけて投げつける。キンツと弾かれる音がした時には私は後ろを向いて走り出していた。藪を掻き分けがむしやらに進む。肌蹴たローブから藪に着いた水滴が入り込み服を濡らしていった。水を含んだ服が体に纏わり動きを阻む。重い。けど、膝丈で良かった。私はこの時心底子供服に感謝した。これが足首まであるスカートならもうとつくに動けなくなっているだろう。

むき出しの足を、薄く鋭い葉が引掻き、低木の枝が容赦なく肌を裂いていく。斬られた腕は熱く痺れ、もう痛いのかも分からなかった。進む内に背後から藪が擦れ合う音がして、徐々に近づくその気配に恐怖に駆られて振り返れば、レーヴィの顔を見つけて安堵のあまり涙が滲んだ。しかし直ぐにレーヴィの顔に浮かぶ焦りを感じ、振り返ってしまった自分の失敗を悔やんだ。

「振り返らずに走って」

そう、レーヴィが叫んだ時にはレーヴィの背後の藪から銀色のお面が、そのある意味不気味な姿をあらわしていた。

「レーヴィさん。後ろ」

レーヴィが素早い動きで体を反転させると、お面の男がナイフを振りかざすのは、ほぼ同時の事で、

「レーヴィさん！」

私の悲鳴に重なり、金属と金属が交錯する耳障りな音が響いた。レーヴィの死を予感させたお面男の一刀は、間一髪レーヴィが掲げた掌に弾かれていた。何が起こったのか瞬時には理解出来なかった。掌が鋼鉄な訳はないし、私からは見えないが中に何かを持っているのだろうか。

良かった。呼吸も忘れて凝視していた私はそつと息を吐き出したのも束の間で、またすぐに息を呑む事となる。お面男がちらりとこちらを見たような気がしたのだ。タロウの面と暗さで確証はなかったが微かに傾けられた面の動きに体が強張る。お面男と対峙したまま、その視線を遮るように、レーヴィはじわりと私の側へと後退を始めた。

勢いを増した雨の中、睨み合いが続いた。危うい均衡を破り先に動いたのはお面男だった。ぬかるんだ土を蹴りナイフを突き出そうと腕を引く。レーヴィが更に数歩後ろへ下がる。

今度こそ万事休すだ。お面男が勢い良くナイフを突き出すのを絶望的な気持ちで眺めた。しかし、そのナイフはレーヴィを襲うことなく突如引っ込められる。ナイフを繰り出そうとしたその動きでお面がずれ落ち、かろうじて男の眉下で止まっていたのだ。慌てて後方へ飛び退り面を抑える男。

何だそれ。馬鹿でしょ。間違いなく。この雨のなか、面を支える細く頼りないゴム紐が持ちこたえるはずないのが何故分らないんだろつな。そんなに顔を見られたくないのなら他の手段をとろつよ。如実に焦りを滲ませて、お面男はあとずさる。今度はお面男が後退する番だった。今ならば逃げられるのでは？どうやらお面男はどつあつても顔を見られたくないようだし。後ろ手に私を庇つレーヴイの袖を僅かに引いて逃走を促そうとした時、鎧が擦れる音と、掛けてくる重たい足音が聞こえた。耳を凝らせば「こつちだ。急げ」と話し声もする。先ほどの騒ぎに兵士が気付いたのだろう。2回も叫んでいたしな。

雨の音に混じつて微かに舌打の音がした。と同時にお面男が大きく後ろに飛び藪の中へと姿を消していた。相変わらず逃げ足の速い奴。

とりあえず、助かった。極度の緊張が解けた私はその場にへたり込んだ。本当の恐怖というのはどうして後からやってくるんだろうな。もはや使い物にならないであろう力の抜けた膝に手を置き、目を閉じて息を吐いた。

足音が間近に迫つたかと思うとすぐ側の藪が動きびくりとする。

「大丈夫か？」

お面の男と入れ替わりにやってきたのは二人の兵士だった。

「賊が逃げました。早く追って下さい！向こうです」

レーヴイはお面男が逃げた方向を指し示して兵士に訴える。

兵士達は顔を見合わせ頷き合つと、一人が示された方角へと進んだ。

「もう大丈夫です。ご安心を。お怪我は？」

残った兵に尋ねられてレーヴィが慌てて答える。

「この方が切り傷を。至急サウル殿を呼んできて下さい」

「しかし、あなた方を残しては……………」

「何を言っているのですか！一刻を争うのですよ。賊は先日の襲撃犯かもしれないのです。もし、剣に毒が塗られていては……………はやく、呼びにいきなさい」

レーヴィの剣幕に兵士は息を呑んで私を見た。そして「分かりました。くれぐれもお気をつけて」と言い残すと身を翻して駆けてゆく。

毒って、まじですか。

「傷を見せて」

傍らに膝をついたレーヴィは、斬られた袖を裂き傷口を確かめるようにそつとなぞる。

「うっ」

痛みに小さく呻くと、レーヴィは悔しげに息を吐いた。

「申し訳ありません。僕は、貴方をお護り出来なかった」

「そんな事、ないです」

ちゃんと護ってくれたじゃないか。しかしレーヴィは首を静かに振った。

「貴方を逃がしてあげられませんでした」



あ、そうだった。逃げないと不味いよね。いや、でも毒が……  
……ああ、もう！

「逃げましょう！今のうちに」

毒も気になるけど捕まったら終わりだ。街にも医者はいらるだろうし、そもそも毒が塗られていると決まったわけでもないし。

「いいえ、無理です。直ぐにこの2区も厳戒態勢が敷かれるでしょう。もう、逃げられません。それに傷の手当ても受けなければ」

そんな……逃げようとしたのがばれたらどうなるのだろうか。想像したくもない。

レーヴィは私の肩を掴むと、眼鏡の奥から決意を込めた眼差しを送る。

「僕に強引に連れ出されたと、そうおっしゃってください」

レーヴィの声は、僅かに震えていた。雨に打ちつけられて暗く濃さを増した茶色い髪から水滴が滴り落ちる。その雫が既に濡れそぼっている服に新たに染み込むのを目の端で捕らえてから、おののいた。自分の身に降りかかるだろう辛酸を覚悟しての言葉なのだと理解させられて。

そんな事はさせない。私はレーヴィの目を力を込めて見つめ返した。

「私は、今の仮面の男に攫われた。それを偶然見かけたレーヴィさんが救ってくれたんです。そういう事にしましょう。大丈夫、私がレーヴィさんを守ります」

守られてばかりじゃ女がすたるわ。舌先三寸と涙で乗り切つてみせようじゃないか。

「サカキさん……………」

苦しげに、けれどどこか愉悦の混じった眩きがこぼれて、肩を握る手に力が込められたかと思うと、固く抱きしめられていた。

「サカキさん」

雨に濡れて冷たくなった髪にレーヴィの熱い吐息がかかる。唇が、髪から耳に、そして頬に熱をうつして、最後に息が絡まりあった。

はい？

優しく重ねられたそれは、すぐに強く押し付けられて、呆然としている間に温かいものが唇を割って入る。

んん？ん？

混乱する私をよそに、口の中を遠慮なくはいまわりはじめたそれに、息を奪われ、さらに思考が遠のいた。息苦しさに、手近にあったレーヴィの服を握れば、了解ととられたのか、強引に舌を絡めとられ、唇を噛まれ、なぞられて、僅かな隙に酸素を吸い込みあがった息を整える。

えーと、今更ですが、キスされてますよね。レーヴィに。しかし初めてのキスで舌いれちゃうか？まあお互いいい歳だしいいか。こういう時ってどうするんだっけ。久しぶりすぎて分からない。酸欠でくらくらと揺れる頭を働かせ、キスの感触を思い出しながらおずおずと応えた。

……………ちよつと待て。何か引つかかったぞ。いい歳？確かに実際はその通りなんだけど、私は13歳って事になっていて当然レーヴィもそう思っているはずで、13歳の少女にこういう事をしちゃうってのは、つまり。いやいや、でも思いが通じ合ったわけだし、命

懸けで逃がそうとするほど想ってくれていたんだし　　う  
ん、やっぱり無理。バイでもゲイでもマゾでもいいけど、スカと口  
りは無理！

レーヴィの胸に腕をつっぱって押し返そうとするが、背中に回さ  
れた腕は思いのほか力強くビクともしない。一層激しさをます口付  
けに、息を継ぐのが精一杯で、どちらのものともつかない唾液が喉  
を通っていく。

はーなーせー。

両腕とも胸の中に囚われているのが悔やまれる。押ししても押して  
も動かなかったレーヴィが、ようやく腕を緩めると遠くから兵士の  
声が聞こえてきた。

「こちらです！お早く！」

どうやらサウルを連れてきたようだ。

肩で息をしながらレーヴィから視線をそらしてサウルの到着を待  
っている、頭に妙なしびれが走った。痺れは瞬く間に体を駆け抜  
け手足の感覚がおぼろげになる。背筋を立てていられなくて、後ろ  
に体が傾いた。

「サカキさん!?!」

手を伸ばし、後ろから抱え込むように私を支えたレーヴィが驚い  
た声をあげる。

「どうしたのです？しっかりしてください！まさか……………本当に毒  
が」

嘘でしょ。もう少しでサウルも来るのに。死ぬのかな。私。

「サカキさん、しつかり！喋れますか？」

答えようと力を振り絞った。微かに唇は動いたが舌に力が入らない。視界が徐々に光を失い、レーヴィの顔も分からない。

「……………」

意識を失う寸前にレーヴィの声が聞こえたけれど、聞き取る事が出来なかった。とても大事な事を言われた気がしたのに。

夢を見ていた。繰り返し浮き沈みする意識の中で何度も何度も見た夢に出てきた人物は、日本にいる家族でも、レーヴィでも、イサークやエイノやユハでもなくて、あの馬鹿だった。馬鹿は金色の癖のない髪に明るい青い瞳で、よく言えば人懐こい、悪く言えば軽薄な笑みを浮かべて私を見ていた。掴み掛かって殴ってやりたいのには動かなくて、歯がゆい思いで睨み付けてやると困ったように眉を寄せて首を傾げる。そしてまた笑む。その笑みに無性に腹がたつ。澄ました態度を崩してやりたい一心で、根性を振り絞り上手く動かない舌と唇で罵った。

「この大馬鹿鹿野郎、阿呆、薄情者、何が賢者だ、すつとこどつこい。探し物って何なの？というか時間切れって何？説明もなしにいきなり放置ってどういう事よ。このサド。あんた大賢者なんでしょ？怪しいけど。そもそも本当に賢者なの？ルードヴィーグって本名？どっちにしろ自分で賢者を名乗るんだつたらもうちよつと考えて行動しなさいよ。だいたいね、自分で探せばいいんじゃないの。その方がよっぽど早いでしょうが。間抜け、とんま、おたんこなす」

その他諸々、思いつく限りの罵詈雑言を浴びせても賢者は笑みを浮かべたままだ。まだまだ罵り足りないのに言葉に尽きてしまふ。自分の語彙の乏しさをこの時程恨めしく思った事はなかった。

夢を見ては賢者を罵り、ほんの時折覚醒すれば、痺れて動かぬ手足と息苦しさ、絶え間ない眩暈に不安で恐ろしくて涙が滲んだ。ずっとこのままだったらどうしよう。絶望を感じ始めた何度目かの覚醒の時、暗くぼやけた視界の隅で、傍らに佇む人の姿を認める事が出来た。誰なのかも分からないその人物に優しく髪を撫でられ、額に置かれたやわらかな手の感触に、遠い昔の記憶が呼び覚まされた。

熱を出して寝込んでいた子供の時の苦しいけれども幸せな記憶。

「お母さん」

震える声で呼びかければ、その手が戸惑ったように動きを止める。それが悲しくて、もっと触れて欲しくて強請るように声を出した。

「お母さん？」

躊躇いがちに、再度頭を撫で始めた手は次第に乱雑なものに変わる。それでも側に居てくれているのだという実感に安心してまた夢の中へと落ちていった。

軽やかな小鳥の囀りと共に訪れた目覚めは驚くほどにすっきりとしていた。あれ？ちょっと前まで苦しくて仕方がなかったのに、この爽快感は何だ？サウルが頑張ってくれたのだろうか。斬られた腕を見れば傷は跡形もなく消えていた。便利だな、魔法って。

ベッドの上に身を起こし掛け布を剥いで床に降りようとして、落ちた。痺れは消えていたがまだ手足に力が上手く伝わらないようだ。どのくらい寝ていたのだろうか、ゆっくりと力を込めて起き上がるうともがいていると、扉が乱暴に開け放たれた。

「あ……………おはようございます」

焦りを滲ませた顔で入って来たエイノは、ベッドサイドの床で、立ち上がるうと生まれたての小鹿のように足をプルプルと震わせて挨拶をする私と目が合うと、呆然と部屋の入り口に立ちつくした。他に言う言葉が思いつかなかったんだから仕方がないだろう。それともこの間抜けな格好に啞然としているのか？そんなところで突っ立ってないでちょっと手伝え。

「何をしている」

「ベッドから降りようとしたら落ちて、戻ろうとしている所です」

見たら分かるでしょ。

エイノは俯き額に手を添えると、嫌味たらしく盛大にため息をついた。何かをふっきるように小さく頭を振り、そうしてようやく私の側へと歩み寄る。

脇の下に手を添えると私を引っ張りあげてベッドに腰掛けさせてくれる。

「ありがとうございます」

お礼の言葉は何故か冷たい視線で迎えられた。

「あのー、私はどれくらい寝込んでいたんでしょうか？」

「お前は丸2日間生死の境を彷徨っていたのだ。つい先ほどまでなそれが不審な物音に急ぎ来て見れば、ベッドから降りようとしただと?」

「はあ、まあ。気分は良かったので動けるかなーと」

「……………まずはサウルの診察を受けよ」

何故か苛立っているエイノに、「はい」と素直に頷いた。

サウルはどうやら屋敷にいたらしい。すぐにやって来て、一通りの診察を済ませるとエイノを部屋に招きいれてこう言った。

「このような言葉を使いたくはありませんが、奇跡としか言いようがありません」

神官相手にその言葉ってどうなのか。神の奇跡を信じるのが仕事なのではと思うんだけど。

「お前がそのような事を言うとはな。詳しく検査し原因を究明せよ」  
はなから信じてないんですね。奇跡って言葉を。冷めたエイノの声音に、この人が神官長でいいのかと、シルヴァンティエの人事を憂慮した。

「はい。今からさせていただきますか？」

「いや、今日はやめておこう。サカキの体調が整い次第明日にでも始めろ」

「分かりました。では私はこれで失礼致します」

恭しく腰を折り、サウルが出て行くと入れ替わりにアイラがトイレに湯気のたつ皿を載せてやってきた。

「まずは胃を慣らすようにとの事で、スープをお持ちしました」

もう普通に固形物も食べられそうなんだけど、喉もとまで出掛かった言葉を飲み込みアイラにお礼を述べる。ベッドの上にスープを運ぶとアイラもまた部屋を後にした。

優しい味わいのスープを一口飲めば、程よい熱が五臓六腑に染み渡る。美味しい。私は感嘆のため息をもらした。      ベッド

サイドに置かれた椅子に座りこちらを凝視しているエイノが居なければもつと美味しいんだろうけどな。無視してスープに没頭しようかと思ったがどうにも居心地が悪い。

「何か。ご用ですか？」



居心地が悪いのは、エイノを放って逃げようとした罪悪感からで、いわば自業自得なのだけど、死に掛けていたのを奇跡的に一命を取り留めた直後なのだし、またにしてくれない、よね……。私としても聞きたい事は山ほどあるんだけど、いきなりエイノに確認するのは少々難易度が高い。侍女さん達に探りを入れて状況を 確認してからにしたかったが、このまま何も聞かないつても怪しまれそうだしな。悩んだ末に問いかけるとエイノが口を開いた。

「何故屋敷の外にいた」

硬質な声音に心臓が鼓動を速める。

「無理やり連れて行かれました」

「誰に」

それは聞いてほしく無かった。レーヴィがどの様に話したかわからなかったから敢えて誰にとは言わなかったのだが。やっぱりそうきますよね。

「知らない人だと思います。顔を見ていないのでわかりせんが」

恐る恐るエイノの表情を伺うが感情の読めない冷たい美貌に阻まれる。

「順を追って話せ」

低く冷淡な声に促されて口を開いた。

「はい。部屋で寝ていると、その窓から男の人が入ってきて無理やり連れ出されました。暗かったし寝ぼけていたので顔は見えていま

せん。担がれ運ばれて、しばらくしてから、驚いたような声がしました。多分レーヴィさんだと思っんですが、よく覚えていません。私を助けようとしてか2人が揉み合いだして、逃げようとしたら男に斬りつけられて…後は何も」

「嘘はよさぬか」

エイノの言葉に顔が強張る。レーヴィは本当の事を言ってしまったのだらうか？

「自ら屋敷を出たのだらう。ぼや騒ぎで兵が1人になった時間があるようだが、無人になった時は無かった。嫌がるお前を無理やり連れだそうとすれば物音もしよう。兵が気づかぬはずがない」

しくじった。意識がなくて何も分からないというべきだったか。しかし、それでもあの小さな窓から私を抱えて出るのは不可能だろうし。どうする。俯き思考を巡らせていると、軽く息を吐く気配がした。

「何が不満だったのだ？サリの術をかけた事を恨んでおったのか？」  
「え？」

エイノの声に微かに滲んでいたのは怒りや失望ではなくて、私を気遣う優しさと戸惑いだった。

「いえ、別に」

全く恨んでない事はないが。

「では何故だ。先日の妃の話に憤っておるのか？お前は気が進まぬようであつたな。……………13という歳を考えれば当然の事。ユハは

あのように言っておつたが私はもとより反対だ。お前が嫌ならば応じる必要はない。殿下とてお前が拒めば無理強いはなさるまい」

どうしよう。物凄くいたたまれないんですけど。恩知らずで軽率な馬鹿者と冷たく罵ってくれたらいいのに。何でそんなに優しくしちゃうかな。罪悪感で言葉が紡げないでいると、エイノがそつと俯いたままの頭を撫でた。

あれ？この感触って……うわああああ。柔らかかな手に一気に思いだした。あれはエイノだったのか。夢ではなかったんだな。そういえば、こつぱずかしい事を口にしたような。ああ、今すぐ地中に埋まってしまいたい。火照った頬を隠そうとさらに俯くと、ノックの音が耳に届いた。

立ち上がったエイノが扉を開ければアイラの声が聞こえる。

「エイノ様、レーヴィ様が見えられましたが、いかがなさいますか？」

レーヴィが？どういう事だろう？レーヴィはやはり私の提案通りに説明したのだろうか？うーん分からない。これは迂闊な事は言えないな。頬に手を当て熱を冷まし、私はエイノが戻るのを待った。

46 無口 (15)

エイノの後に続いてレーヴィが部屋へと入ってきた。何時もと変わらぬ冴えない出で立ちに沈痛な面もちをして。眼鏡の奥の澄んだ青い瞳がベッドの上に身を起こした私を捉えて驚きに見開かれる。

「……………サカキさん」

呆然と眩くと走り寄って私の手を取った。続いて感極まったというように肩に額を擦り付けられたかと思うと

「僕に話を合わせて」

聞き落としそうな程に小さく素早く眩かれた。思わず頷きそうになつてすんでのところごとどまる。

「サカキ、レーヴィがお前を救ったのだ。礼を」

「やっぱりレーヴィさんだったんですね。ありがとございます」

「いえ、力が及ばずに……………つらい目に」

レーヴィの青い瞳に涙がにじむ。

「これで一件落着ですね」

目尻の涙を眼鏡を押し上げた手で拭いレーヴィは朗らかに告げた。どういう事かな？話を合わせようにもさっぱりついていけない。

「サカキさんを連れ去ろうとした犯人が見つかったのですよ。先ほど僕が確認してきました」

自信たっぷりに言うレーヴィに違和感を抱いた。確認も何も顔を見ていないじゃないか。

「ツイメンよりの使者に下男として潜り込んでいた男のようです。彼の荷物から先日 of 襲撃に使われたと思しき弓が見つかりました。サカキさんもすっかり回復されたようだし、本当に良かった」

それは、良かった。と言っているのだろうか？いや、良くない。良くないぞ。場合によってはかなり良くない。お面からして日本と何らかの関わりのある人物なのは間違いないだろう。とすれば私の嘘など一目瞭然なのではないだろうか？加えて私に害意があるときた。どんな事を言われるか分かったものではない。せつかく生き長らえたというのに、また地獄への片道切符とこんにちはだ。目覚めたときの清しい気分はどこへやら、息を吸えば空気の変わりにドロリと溶けた鉛が流れ込み腹の中に溜まっていくような錯覚に囚われる。聞きたくない。けど、聞かねば、時が経てば弁解もより難しくなるだろう。

「それで、その人は何か言っていましたか？何故、私を襲ったのかとか」

私の問いに、レーヴィとエイノは一瞬顔を合わせ、レーヴィは俯き、エイノは微かに眉を寄せ、口を開いた。

「死んだ」

簡潔なエイノの言葉に慥然とする。死んだ？お面男が？

「本当に？」

何か信じられない。あの得たいの知れない、神出鬼没なお面男がこうもあっさり。得心のいかぬ私の表情に答えるようにエイノは言葉を続ける。

「今日未明に植え込みの陰で死体が見つかった。自ら毒をあおつたと見られている」

毒。思わず斬られた腕を掌で覆った。もう、傷跡もないというのに冷たい刃が滑っていくさまが、その後に訪れた痺れるような熱い痛みが、ぬるりとした血の感触が、まざまざと思い起こされた。あの時は突然の事に驚いて、必死で、斬られた事に対する恐怖や痛みは分厚い布で遮断されたかのように然程感じなかったというのに、エイノの一言に身体が過敏に反応する。

過ぎ去った痛みを鋭く訴える腕に添えた掌は、いつの間にかきつく、服と共に肉を掴んでいた。エイノの痛ましげな視線に自身の手に籠った力の強さに気づく。そういう目で見ないでもらいたい。本当に居た堪れなくなるから。顔を合わせづらくて俯き、こっそりのため息をついた。

部屋を重い沈黙が満たしていく。エイノもレーヴィもこれ以上説明する気はないようだ。私の様子を慮ったのかもしれない。お面男の死には釈然としないものを感じるが、レーヴィ共々お咎めは免れたいと思つていいのだろうか。自ら逃げ出そうとした事も随分と好意的に解釈されているようだし。エイノは本当に、黒髪の呪術師等という一部の人間の迷妄に惑わされる事無く、私が一善良な少女であると信じてくれているのかね。

「私は城へ戻らねばならぬが……。サカキ、今日はもうベッドから降りようと思わぬようにな」

「私がついていきますからご心配なさらずに」

沈黙を破ったエイノは心配しているのか憤っているのか分からない能面顔で釘をさす。レーヴィがにこやかに答えると、軽く会釈をしてエイノは部屋を出て行った。

レーヴィと二人きりだよ。以前なら嬉しかったけれど、今となつては複雑だ。私が気を失つてからの経緯を詳しく聞いて話を合わせないといけないが……。どうしてロリなんだ。我慢して、受け入れて城を連れ出してもらつてから別れるという手もあるが。ああ、やっぱり駄目だ。生理的に無理。13歳にベロチューはない。中学一年生ですよ？ないない。

ん？あれ？そっぴいイサークって15歳でやっぱりまだ中学生な年齢だよ。うん、最初に年齢を聞いた時に日本なら中学生に相当するんだって驚いた覚えがあるもんな。そのイサークに迫られて多少なりともたじろいでしまう私って大丈夫か？イサークは私の知る15歳より随分と大人びていると思う。だからだと思いたい。半ズボンを見てもときめかないし、美少年にぐらつと来たこともないし、セーフだよ。私。……いや、あつたな。ヴェニスでオヤジにストーカーされる美少年にぐつときた事があつたわ。いやいや、でもあの映画を見たのは随分昔だし、当時の感情がそうであつただけで今はきつと綺麗な子だなと思う程度だろう。イサークともタイプは180度違うしな。そうそう大丈夫。私はシヨタじゃない。はずだ。うーん、そう考えると肉体的にも精神的にも本来は成熟している私だからこそレーヴィもそういう気になつたのであつて、本来は少女趣味ではない可能性もあつたり……。しても、手を出しちゃうのはなあ。良識ある成人男性のすることじゃないな。はい、やっぱり無理。助けてくれようとした事に感謝はする。下心があると思うとそれも半減だが。それでも一応、感謝はするけど引きもする。

さて、どうやって距離をとろうか。不興を買わず興も買わず、目指せ自然消滅。

「レーヴィさん、ご心配をおかけしました。目が覚めたばかりで、あれからどうなったのか何もわからないんです。まだ具合が悪いもので、すみませんが手短かに説明してもらえますか？」

手を口元に沿わせ目線をはずして小さな声でつぶやく様に喋り、若干わざとらしく具合の悪さを演出する。お前と親しくする気はない！と少しずつ態度に滲ませていこう。

「説明ですか。それは」

不自然に切られた言葉に、ほんの一瞬様子を伺うつもりで素早く視線だけをレーヴィに向けた。しかし、視界の端に映ったその姿に目を外せなくなつて、気づけば顔を上げて凝視していた。

中肉中背で、美しくも醜くも無いありふれた顔立ちに、ありふれた声音。今までと何も変わらない、普通を体現したようなレーヴィ。

なのに、何かが違う。

街なかですれ違つても気づかないばかりか、すれ違つたその瞬間に駆け出して離れたくなる不気味な存在感が忽然と顕在していた。強烈な違和感に眩暈がする。

絶句して身をすくませる私の姿に、レーヴィは唇を吊り上げて満足げに微笑んだ。

「あんたが先にしてくれない。どうして死んでないの？」

眼鏡の奥の優しい瞳はもうない。確かな狂気と底冷えのする非情さを宿した青い瞳が愉しげに私を見つめていた。



46 無口 (15) (後書き)

お久しぶりです。やっと更新できました。レーヴィは真っ黒です。

私の耳が毒に侵されて幻聴が聞こえるようになってしまった、という事にしたい。

もう、ロリでいいです。ロリは無理などと狭量な事を思った私が悪かったです。平凡で小心で下心ありありのロリでいいから、お願いだからそれ以上何も言わないでくれ。未だ視線を外せず、レーヴィを見つめたまま心の中で懇願する私をあざ笑うようにレーヴィは滑らかに言葉を紡ぐ。

「僕、確かに致死量の毒を飲ませたはずなんだけど。傷口にも染み込ませたしね」

もう、駄目。両耳を掌で叩いて塞いで「あわわわわわ」って叫びたい。聞きたくないのに。すっかり聞いてしまった。飲ませたって何時の間に！？なんて考えるまでもないか。あの時のキスだ。喉を通っていったのは毒だったという事か。

野暮つたい眼鏡も、お洒落とは無縁な服装も、無造作にひつつめられただけの茶色い髪も、最早私に安らぎを与えてはくれない。

「取っておきのやつを使っただよ。おかげで僕まであの後具合が悪くなっちゃってさ。解毒剤を飲んでいたのにね。なのに何であんたピンピンしてんのさ。本当に人間？」

人間です。間違いなく。ただし世界は違いますが。少なくとも私の知る人間の定義の範疇に属していると思っております。

しかし、わざわざご丁寧に口移しなんて方法をとらなくてもいいじゃないか。自分の体を危険に晒してまで手の込んだ真似をするなよ。何て悪趣味。乙女の純情を返せ。

「凄いよね。意識を保ったまま末端から麻痺していくお気に入りだったのに、僕がお別れを言う前に気絶しちゃうから、どれだけ根性ないんだと思っただけで生き残るんだから」

すみませんね、根性なしで。内心で悪態をつきつつも未だ立ち直れず呆然とするばかりの私にレーヴィが一步近寄る。元々近くにいたレーヴィはそれだけでも目の前に立っていた。何をするつもりなのかと恐怖に身を引きかけると、レーヴィは私の座るベッドに腰をかけた。レーヴィの一挙一動にビクつく私の様子など全くお構い無しに、両手を後ろにつき、足を組んで実にお寛ぎだ。首を傾けて私を見ながら喋りだした。

「ちよつと僕いらついでたんだよね。途中で標的を変えられて、あんたみたいになつたらそんな小娘が対象になって。しかも、僕と契約しておきながら、他の奴も雇っちゃってさ。弓で射るとか馬鹿じゃないの。中途半端に狙って、しかも外しちゃうとかどうしようもないと思わない？大嫌いなんだよね。遠距離狙撃って。だって確実に致命傷負わせらんないでしょ？それに相手の顔も見れないしさ。死に行く間際の表情がたまらないのね。そんな事もわからないあんな三流と同列に扱われたかと思うと腸が煮えくり返るよ」

そんな事が分かってしまったら人として終わっていると思う。しかし、よく喋るな。標的やら、契約やら、ペラペラと喋っちゃっていいの？ああ、この後私の口を塞ぐつもりだから冥土の土産につて、企みを全て喋り倒して説明してしまうという、あれですか？

「でも、ちよつと面白くなってきたな。失敗したのは癪に障るけど。あ、失敗したのはこれが初めてだからね。しくじった事がないのが売りだったんだから。あんたが初めてなんだよ。僕の毒に耐えたの。

うん、あんたやっぱり凄いわ。いいね、面白いよ。ところでさ、どんな手を使ったの？今後の参考に教えてよ」

さつきから褒められているのか貶されているのか全く分からないんですけど。

「ねえ、馬鹿みたいに大口開けたまま固まってないで何か言ったら？目もちよつと閉じたほうがいいんじゃない？瞬きぐらいしなよ」

これが固まらずにいられるか。生還早々にショックのあまり心臓発作を起こして死んでしまったらどうしてくれるんだ。何も言葉を発しようとしないうちに僅かに苛立つ気配を感じて、私は慌てて重い口を開いた。

「手も何も……サウルさんが頑張ってくれたんだと思います」

ですから、質問は是非サウルに！サウルも奇跡だとか言っていたから理由は分からないだろうけど、どうぞ気にせずサウルに聞きに行ってくれ。今すぐに行ってくれ。

「ふうん」

不満そうなレーヴィの声に寿命が削り取られていく。もう確実に3年は縮まったね。

「まあ、いいけど」

思いの他あっさりと軽く流されて、私はほっと息をついた。

「それで、あんた何なの？」

ぐっ、4年目が磨り減っていく。

「何と言われても………何の変哲もないただの一般人ですが」

お前と違つてな！

「あなたこそ、何なんですか？」

やけっぱちに問えば、レーヴィは嬉しそうに目を細めた。

「僕は『無口』」

どこか誇らしげなレーヴィに首を捻ってしまう。

「無口？」

って何時から口数の多い人を指す言葉になったのだろうか。

「何その反応。ひょっとして知らないの？」

「え、えーと、すみません」

何故か謝ってしまうのは日本人の悲しい性だ。

「ほんとに知らないの？」

はい。たとえば、レーヴィは大げさにため息をついた。なんだ？  
無口っていうのがレーヴィの本名なのだろうか？それとも通り名みたいなものかな。

「傷ついちゃったなー。あんた本当に何なの？僕の事も知らないなんてね。」同業なのかと思えばそうでもなさそうだし」

「家に帰れなくなった迷子の子供ですが……………」

「どう言えというんだ。同業の暗殺者です。とでも言えば満足なのか？」

「嘘だね」

間を置かずには断定されて、言葉を失った。私の話を信じる気がないというよりは何かを知っているといった断定の仕方だと感じたから。どの部分に対して嘘だと言っているのだろう。家に帰れない？迷子？子供？

「あんた、13歳なんて大嘘でしょ。20代……………もしかすると僕より年上なんじゃないの？」

ついにばれました。よりによって、この危険極まりなさそうな変態に。顔から血の気が引いていく。気絶したいのに出来ない中途半端に太い神経を恨んだ。

「僕さ。ちよつと前までバジエドールにいたんだよね。あんたの顔、どこかで見たとような顔だなんて、ずつと思ってたんだけどやつと思いで出した。黒鬼の近くでさ、あんたみたいな顔つきの人間をみかけたんだ。あの女も子供っぽく見えただけ26歳らしいし、あんたもそのぐらいなんですよ？」

ノルティアに、この大陸に住んでいるのは、単一人種だけではないかったのか。余りに誰も気づかないからモンゴロイドは存在しないものと高をくくっていたのに。でも待てよ。バジエドールといえ

確かツイメン、ジャスラの2国と1つの山脈を隔てた南にあるんだよね。大陸の端と端に位置するならともかく、割と近い距離なのに、レーヴィ以外気づく人がいないって事は、バジエドールや周辺国にわんさかモンゴロイドがいるわけでもなくて、その女の人がどこかからやって来たのではないだろうか。そう、もしかして私のように日本から来た。とか。

「その人！名前は？名前はなんていうんですか？」

勢いよく顔をあげた私にレーヴィは怪訝そうに眉を寄せた。

「名前なんて聞いてどうすんのさ」

「いえ、そのひょっとして同郷の人かと思ひまして。それでなんていうんですか？」

「さあね、忘れちゃったな。けど、サカキ・ケイコなんて感じじゃなかったと思うけどね。バジエ風だったよ。あそこはちょっと変わってるから。皆、本名じゃなくて俗称で呼び合うからさ」

「そう、ですか」

レーヴィの言葉に私は肩を落とした。馬鹿賢者に連れられてきた人がほかにもいるのかも思ったのだが……そう都合よくいるわけないか。

「そんな事よりさ。あんた、年齢誤魔化して城に忍び込んだうえに王子をたらし込んで何をしようとしてるわけ？目的はなに？」

組んだ足をブラブラとふら付かせながらレーヴィは興味津々といったいで私の顔を覗き込む。

人聞きの悪いことをいうな。誰もイサークをたらし込んでなんかいないぞ。意識的には。

「何もありますよ。私はただ自分の元いた場所に帰りたいたいです」

それが無理ならせめて平穩に暮らしたいだけなんだ。レーヴィみ  
たいな変態に関わらずに。

「何それ。実は噂通りフォルセルの呪術師って事はないの？」

まるでそうであって欲しいと言わんばかりにレーヴィは目を輝か  
せる。

またその名前か。フォルセルの名にうんざりして「違います」と  
返せばはなからフォルセルなどとは思っていなかったのか、それと  
も私の言葉を信じていないのか、レーヴィはがっかりした素振りも  
みせなかった。

「あなたが何者にしろ面白くなりそうだし。わざわざレーヴィ・カ  
ヤンに成り代わって潜り込んだかいがあったよ」

成り代わっていたのか。本名ではないのだろうとは思ったが、架  
空の人物でもなかったのだな。ということは……………。

「本物のレーヴィさんはどこにいるんですか？」

ふと沸いた疑問を口にのせてから、後悔した。「土の中だよ」な  
んて答えが返ってきてそうで恐ろしい。しかし、レーヴィ 『無  
口』の言葉は意外なものだった。

「さあね。今頃どっかの寒村で子供達相手に教鞭をとってんじやな  
いの。貧しい子供達に学ぶことの楽しさを伝えるのが夢だとかほざ



いていたから」

レーヴィ・カヤンは自分の意思で無口と成り代わったのか？それにしても意外だ。この良識の欠落していそうな男なら、ばれぬようにさくつとやっちやいそうなものなのに。

「何その意外そうな顔。僕は殺人鬼じゃないんだからね。依頼されてもない奴を無意味に殺したりしないよ」

うそくさい。物凄くうそくさい。死に行く間際の表情がたまらな  
いなんて台詞を吐ける人間は殺人鬼と称して差し支えないと思うの  
だが。

「信じてないって顔だね。本当だよ。僕さ、レーヴィみたいな奴大  
嫌いなんだよね。表も裏も何もない自己犠牲が趣味の聖人君子みた  
いな奴でさ。気持ち悪いっいたらなかったよ。そんな面白味のない奴  
殺してもなんの愉しみもないじゃない？」

ああ、本物のレーヴィはいい人だったんだ。どうして本物が来な  
かったかなあ。そうしたら同情をかって連れ出してもらえたのでは  
ないだろうか。

「その点あんたは結構好きだよ。王子を騙して、後見人の神官長も  
見捨てようとして。ほんといい性格してるよね。人間やっぱり自分  
に正直に貪欲じゃないと」

唐突に異常な事態に身を置くことになったとはいえ、我ながら酷  
い事をしてきたとは思うが、他人に改めて言われると堪えるものだ。  
それにしても褒められれば褒められるほど自分が卑劣な人間に思え  
てくるのはどういいうわけかな。どっぶり自己嫌悪中の私に無口は追

い討ちをかける。

「そうそう、キスもよかったしね」

ぎゃあああ。キスの話はしないでくれ、もう思い出したくもないんだよ！僅かな時間でも応えてしまったのが悔しいっただらないわ。必死に記憶から消去しようとしているのにわざわざ思い出させるな。「ごちそうさま」と己の唇に舌を這わせる無口を恨めしげに睨み付けた。何だよ、何なんだよ！殺すならひと思いにやってくれ！

「私をどうするつもりなんですか？」

「どうって？」

羞恥と後悔に溜まりかねて聞けば無口はきよとんとして首を傾げた。

「どうってって……殺しに来たんじゃないんですか？」

「今？まさか。そんな事したら僕がやったってばれちゃうじゃない」  
殺してさっさと逃げたらいいだけだと思うのだが、どうやらそんなつもりはないらしい。変態の考える事は分からない。分かりたくもないが。

「さっきも言ったけど、僕今回の依頼人には本当に頭にきてるんだ。場合によってはあんたについてもいいと思ってるよ。まあ、考えといてよ」

言つと無口は弾みをつけてベッドから飛び降りた。くるりと軽やかに私に向き直ると、無邪気に微笑んだ。

「ああ、そつだ。逃げようとししないでね。殺しちゃうよ」

軽口を叩くような口調で恐ろしい言葉を吐いた次の瞬間、狂気を帯びた瞳の無口が一瞬で穏やかな笑みをたたえたレーヴィに変わる。

「筋書きはサカキさんの案通りになっています。貴方に傷を負わせた男が、貴方を攫おうと部屋から連れ出し、偶然見かけた僕が助けた。そして誘拐犯は先日の襲撃者と同一人物で逃げ切れないと悟り毒をあおつて自害した。よろしいですか？それではサカキさん。お大事に」

軽く一礼すると、優しい雰囲気を纏った冴えない家庭教師は部屋を出て行った。余りの変貌ぶりについていけない。狐につままれたようだ。或いは夢を見ていたような。

一人部屋に残された私を慰めるように鳥の歌声が聞こえる。穏やかな光のふりそそぐうらかなひと時。誰かの見舞いの品だろうか。ベッドサイドに飾られた白い小ぶりの花が、強すぎないほのかな香りで心を慰めて、はくれなかつた。気分は最低最悪だ。

夢   じゃないよね。実はまだ毒で寝込んでるとか。それも嫌だけど、まだましだろう。まったく頬を抓りたい気分だよ。抓らないけど。抓って覚められるならいくらでも抓ってやるのに。

はあ、私って男運ないのかな……………。

## 人物等紹介

『サカキ・ケイコ 榊恵子』 主人公 25歳 黒髪・黒目 平穩第一。利己的。心の内で毒を吐く。

『ルードヴィーグ』 自称大賢者 年齢不詳 金髪・青い眼 無責任。

『エイノ・ギルデン』 女嫌いの神官長 20代後半 金に近い薄い茶の長髪ストレート・茶色の目 中性的な美貌とその容姿に似合わない低い声の持ち主。能面。

『ユハ・サリオラ』 爽やかな女たらし 20代後半 赤茶の短髪・緑の目 右頬と右耳に傷がある。腹黒。エイノの近衛。

『イサーク・グランフェルト』 反抗期の王子 15歳 ウェーブのかかった肩までの金髪・青い目 真っ直ぐな性格だが隠れS。

『レーヴィ・カヤン』 教師 23歳 肩までの茶髪・青い目

『サウル・クラウゼ』 医術士 中年

『仮面もしくはお面の男』 榊を狙う謎の男。特撮ヒーローのお面をつけている。

『アイラ』 侍女？金髪の髪をいつもすっきりと纏めている理知的な印象。

『マリヤッタ』 侍女？同じく金髪のフワフワの髪が魅力的なナイ

スバディ。

『トウーリ』 侍女？栗色の内巻きロールで天然系。

『ライアン』 サカキがつけたあだ名。口ひげのおじさん兵士。時々サカキを慰めてくれる。

『クリフト』 サカキがつけたあだ名。20代の兵士。真面目そう。

『セバスチャン』 サカキがつけたあだ名。エイノの屋敷の使用人。今思うと出番ない。

『モスキート』 サカキがつけたあだ名。選民思想のある嫌な奴。イサークと親しい？

『ロニ・サリオラ』 ユハの甥 18歳 残念 乙女の憂鬱にて登場

『シルヴァンティエ』 国名

『ノルティア』 大陸名

『キノス』 シルヴァンティエの王都

『ゴルドベルグ』 1000年以上前に滅亡した国

『リザラス』 国名 シルヴァンティエの西

『ザナルデッリ』 国名 シルバンティエの東

『キユイ』 国名 シルヴァンティエの北

『ツイメン』 国名 シルヴァンティエの南

『ジャスラ』 国名 ツイメンの南

『ドレシヤー山脈』 ジャスラの南

『バジエドール』 国名 ドレシヤー山脈の南、騎士の国

『黒鬼・鬼神』 バジエドールの騎士団を率いる無敗の騎士

## 48 ツイメンの思惑

逃げようとしたら殺される。では逃げなければ殺されないのだからか。場合によっては私についてもいいと言っていたけれど、具体的にどんな場合を指すのだろう。私がフォルセルの呪術師ならいいのか？無口を楽しませる事が出来ればいいのか？

どっちも無理です。

呪術って何。頭に蝋燭をさしてわら人形に五寸釘でも打てばいいの？そんな事で相手を苦しめる事が出来るなら、とつくにあの馬鹿賢者で実践してるわ。では無口を楽しませる？あり得ない。あの変態が楽しめちゃう事態イコール常人には耐え難い事態に決まってる。いつその事、違う世界から来ました。存在自体レアです。天然記念物レベルです。殺しちゃうなんて勿体無い！とでも言ってみるか？………ないな。頭がおかしいと思われるだけだろう。

どうして荷物の一つも持ってこなかったのだろう。携帯でもボールペンでも手帳でもこちらにはない技術で作られたものがあれば良かったのに。賢者とお茶を飲んだときに足元に置いた鞆に全て入ったままだ。そういえばあの鞆はどうなったのかな。日本のどこかに放置されていないだろうな。誰かに拾われて悪用されていたりしてなんか帰るのが怖くなってきたぞ。まあ帰れないんだけど。帰れてもろくな事にはならなさそうだ。

それもこれも全てあの馬鹿のせいだ。何を探しているんだか知らないが、誰が探してなどやるものか。もしも見つけたら絶対に見つからぬように海の底に沈めてやる。ああ、シルヴァンティエには海はなかったっけ。燃やして炭にするかそれとも粉々にして埋める方がいいかな。

賢者の顔を思い浮かべ、掛け布を握り締めて力いっぱい絞り上げた。お、結構指先にも力が入るようになってきたな。この分だと今日中にはベッドから降りられそうだ。自由に体が動かせるようにな

つたら、まずは風呂だ。意識の無い時に体を拭ってくれていたように、だが髪はばしだし、体もほんのり汗臭い気がする。こういう事って、一度気付くともう気になって気になって仕方がなくなっていく。なあ、ああ、頭が痒い。顔を洗いたい。お腹もすいた。あんなスーブじゃ全くお腹は満たされないよ。鰻丼が食べたい。ほんの少しの山椒をかけて、奈良漬と肝吸いも忘れずに………いかんいかん、思考が逸れてきたな。

今はそんな事より無口だ。どうやって身を守ろう。エイノ達にはらしてしまえたら楽なのに。偽者なんです！私の命を狙う暗殺者なんです！と。でも、こちらの嘘も無口にばれているわけだし、報復に私のことを話されてはたまらない。

そういえば、標的が途中で変わったと言っていたな。当初は誰を狙うつもりだったのだろうか。イサーク？うん、わざわざ暗殺対象になるのだからイサークやもしくは王等の国の重鎮である可能性が高そうだ。それがどういうわけで私に変わったのか謎過ぎるけど。何にせよ、暗殺問題は私にとって死活問題だが、シルヴァンティエにとっても、無視出来ぬ重要な案件であるだろう。依頼主の気が変わってまた私意外の人間を狙わないとも限らないわけだからな。

無口から巧みに情報を引き出して依頼主共々突き出せたら、私の信用は鰻上り。黒髪の呪術師との疑いも払拭されて、さらには私の身の上を打ち明け、帰る手段を探す協力を乞うたりして。あら、いい感じ。

なんて、出来るか！

私は警察でも探偵でもスパイでもないんだ。事務員、いや、元事務員にそんな工作活動が出来たら007は用無しだ。………ああ、何故か唐突に思い出したくも無い部長の顔が浮かんだわ。倒産したその日に「俺たちはラ・フランスだ！つまり用無しだ。なんちゃって」と、ただでさえ冷え切っていた皆の心に真冬の寒気を吹き込ませた部長を。あんなのが部長だったから潰れたんだな。

そもそも身元不明の私と、偽者とはいえ男爵の子息を名乗ってい

る無口。どちらに分があるのか。私がこの国の人間の立場なら迷うことなくレーヴィを信じる。

イサークは？イサークなら私を信じてくれるだろうか？イサークが味方についてくれたらもしかしたら………駄目だな。独裁者の王様なんて立場ならまだしも、歳若い王子様ではな。イサーク一人が信じてくれたところで、周りを納得させられるだけの証拠がなければどうにもならないだろう。どうするよ。全く解決策が思い浮かばない。

それにしてもお腹がすいた。腹が減っては何とやら、空腹じゃ頭も働かないわ。アイラ戻ってきてくれないかな。手を打ち鳴らしたら気付いて来てくれたりしないだろうか。

パンパン「お呼びですか？サカキ様」なんて、なんだか屋敷の女主人のようだ。やってみたいが居候の身でそんな偉そうな事は出来ん。よし自分で炊事場まで行ってみるか。早く体も慣らさないとな。ごちゃごちゃと考えるのは後だ。まずは腹ごしらえ。それから風呂！

私は慎重にベッドから床へと足を下ろした。足の裏に冷たい石の感触が伝わる。片足ずつ体重をかけて、なんとか立つ事に成功するとほっと息を吐いた。多少震えがあるが、壁伝いに行けば、何とかもちそうだ。

ゆっくりとすり足で移動しかけた時、ベッド際の窓の外に小さく人影が見えた。エイノがもう帰って来たのだろうか？もしエイノならベッドから降りた事にまた文句を言われるかもしれない。窓に顔を寄せて外を確認すると、金の髪を揺らした人物が後ろに共を二人引き連れて此方へやって来る姿が見えた。

イサーク？目を凝らしている間にも近づいて来るその人が、確かにイサークだと確認出来た瞬間、ばちりと目が合う。目が合ってしまった以上無視も出来ず、片手を挙げてふっで見せると、イサークは駆け出した。一直線に此方にむかって。

え、ちよつと、玄関は向こうだぞ。



慌てて窓を開けようとするが力が入らず重い窓はなかなか開かない。その間に窓のすぐ外までやってきたイサークは、片手で軽々と窓を開け放つと窓枠に手をつき軽快な動作で飛び越えた。いいな、運動神経がいい人は。私がやれば間違いなく足を引つ掛けて顔から落ちるだろう。

窓からの侵入という無作法よりも軽やかな身のこなしに気をとられている私の前に立ったイサークは、食い入るように私の顔を見つめた。

久しぶりにイサークの顔を見たような気がする。ウェーブを描く豊かな金の髪と明るく澄んだ、秋晴れの空を思わせる清々しい青い目を懐かしい気分で眺めて、その若さに似合った艶やかな頬がほんの少しこけて見える事に気がついた。

心配をかけたのだろうか……。そんなに思ってくれなくていいのに。年齢を誤魔化してイサークを利用しようとして、逃げ出そうとした人間なんだぞ。またもや押し寄せる罪悪感にそつと伏せた視界の隅に、ダツシュで駆けて来たイサークの後ろから急ぎついて来た近衛達が戸惑った拳句、同じように窓を乗り越える姿が映る。大変だな、元気のいい主をもつと。

えーと、なんと言おう。「おはようございます」「じゃ、また呆れられるかな。少し迷った後、

「ご心配をおかけしてすみませんでした」

そう言おうとして口を開くが、言葉を紡ぐ事は出来なかった。気付けば、おもむろに伸ばされた腕の中に囚われていた。

「サカキ……………良かった……………本当に良かった」

安堵のため息と共に掠れた声で吐き出された嘘のない言葉に胸に温かいものが広がる。

イサークの柔らかな髪が頬をくすぐり、熱い吐息が耳にかかった。その熱を受け、後ろに控える近衛ズが浮かべているであろう表情を想像してしまう。顔を上げれば殺人光線が飛んでくるに違いない。

恐ろしくて身動きできぬ間にイサークの腕の力は強まり、痛い程に抱きしめられていた。いや、程じゃない。まじで痛いです。鼻がつぶれる。頭の後ろにまわされた掌が力強く私の顔をイサークの肩に押し付け、腰に回された腕が体と体を密着させるだけに止まらず、容赦なく胸を締め上げた。鼻と口と更には肺を同時に圧迫されて、息苦しさで喘ぐがイサークの腕の力は強くなるばかりだ。

待て。回復を喜んでくれるのは嬉しいが、ちよつと待て！このままでは今度こそ本当に死ぬから。本復したわけではないんだぞ。酸素不足からか足から力が抜け、膝が折れると、ようやく気付いたイサークが慌てふためいて両腕を私の腰にまわし支えた。

「わるい」

一言、呟いたイサークはしかしそのままの体勢で動かない。

その謝罪は、命を狙われた事に対してなのか、それともこの姿勢に対してなのか。ベッドにでも置いてくれると助かるのだが。お風呂に入っていないし今の私は清潔とは言いがたいぞ？

「イサーク、あの……………」

それに近衛が怖いのでこの辺で。

「ん？」

短く訪ねるイサークの声は、僅かに鼻にかかっている、甘く切なく耳に響いた。

本当に近衛の顔を見るのが恐ろしい。

## 49 ツイメンの思惑 (2)

「イサーク、すみません。ベッドに座らせてもらえますか？」

近衛達と顔を合わせまいと、俯いたまま恐る恐るお願いすると、イサークは小さくため息を漏らす。何故ため息？いぶかしんで顔を上げた私が見たものは、眉を寄せ微かに口角を上げた寂しそうな笑顔だった。

「え、あの。イサーク？」

ベッドに置いて欲しいとお願いしただけだというのに、何でそんな表情を浮かべるかな。私が苛めたみたいで、気が咎めるじゃないか。

「上手く足に力が入らなくて自分で立ってられないので、重いでしょう？それに、まだお風呂にも入れていないので、その、あんまりきれいじゃないですよ。自分でいうのもなんですが汗臭い気がします。いや、間違いなく汗臭いですよ、私」

逃げようとした事への後ろめたさも手伝って、余計な事を言ってしまった気がする。目を見開いて驚いた表情を見せた後、クツと喉を鳴らしたイサークを軽くねめつけると、青い瞳を愛しげに細めて微笑まれた。

「いや、汗臭くなんかないぞ？」

顔を寄せたイサークの鼻先が髪に埋もれる。

こら、やめないか。髪も洗ってないからどろどろなんだよ。雨と汗

で汚れて指も通らない髪に触れられて嬉しい女がいるだろうか。

私の胸中など知る由も無しに、イサークは腰にまわした腕に力を込めてますます顔を近付ける。恋は盲目というが、恋は盲嗅でもあったのだな。諦めにも似た気持ちでされるがままになっていた私は、イサークの後方から伝わる最早殺気といえるのではないかと思える程に凶悪な近衛の気配に蒼白になった。

しかしだね、私にはかり悪意をぶつけていないでちつとは主を諫めたらどうなんだ。玄関を使えとか、行き過ぎた抱擁は控えろとか、女心を酌めとか、側近として、同じ男であるイサークの人生の先輩として色々あるだろう。色々。イサークもイサークだ。レーヴイの一件からスキンシップが過度になっていないか？とりあえず、人前はやめてくれ。人目を憚らず二人の世界に没頭出来るのは10代の若人の特権だ。私の歳では無理なんだよ。いや、人がいなかったらいいってもんでもないんだけど。

困惑顔でしきりに近衛を気にする素振りを見せれば、声を飲み込み「あっ」と口を開いたイサークが頬を僅かに染めてようやく腕を緩める。やっと思い出したか。近衛の存在を。

二人きりの甘い世界から無粋な現実へと意識を戻したらしいイサークは、深いため息をつく、私をそつとベッドに降ろした。王子様業も大変だな。プライバシーなんて無いに等しいだろう。そりゃ、お忍びで街に出たくもなるつてもんだ。

近衛の一人が素早く差し出した椅子に渋い顔で腰掛けたイサークは、ベッドに座る私を見て表情をゆるめた。

「悪いな。思っていたよりずっと元氣そうで驚いた」

「皆さんのおかげです。イサークにもご心配をおかけしてすみませんでした」

「いや、謝らなければならぬのは俺のほうだ。今回の事はこちら側の落ち度だ。本当にすまない」

深々と頭を下げるイサークに慌てた。

「やめてください!」

近衛が見てるから!私を。射殺しそうな目で。

「私にも、抜かりが………えーと、つまり警戒心が欠けていたというか。自覚が足りなかったんです」

何かと。

「ですから、気にしないでください」

私の言葉にイサークは苦しげに眉を寄せながらもどこかホツとしたように微笑んだ。

自分を責めるばかりのイサークの態度に、心の中で首を捻る。うーん。私が自ら抜け出そうとしたのは知らなさそうだな。知っていたらきつと何か言うだろうし、もし言葉にしなくても少しは態度に出るだろう。さっきはエイノとの話が中途半端に終わってしまったが、私が自ら抜け出そうとしたのは黙ってくれていると思っただろうか。エイノにとっても私は完璧なる被害者でいた方が都合がいいだろうしな。

「ところで私を狙った人なのですが………」

まずは情報収集と口を開いた私の言葉に、イサークは顔を強張らせた。

その表情を見て、お面男の死を確信する。どうしても信じられなかったのだが、やはり本当だったようだ。………何かひっかかるが今はちよっと置いて、

「どうして私を襲ったのか。調べはつきそうですか？」

お面の男が、無口が、私を襲った理由。それが知りたい。依頼主に目星はついているのだろうか？

「おおよその見当はついてきている。だが、まだ推測の域を出ないんだ。……襲撃者が自害したからな」

私に犯人が死んだ事を言いたくなかったのだろうか。イサークの声は低い。シヨックを受けるかもと心配してくれているのかね。確かにいささかシヨックではあったが、もうエイノから聞かされたかな。不要な心配というものだ。

「レーヴィさんが遺体を確認したと聞きました」

レーヴィの名を出した瞬間、イサークの瞳が剣呑な色を帯びる。私の口からレーヴィの名は禁句のようだ。気がある相手に助けられて益々入れあげるとでも思っているのだろうか。それはもうないから。絶対ないから。是非とも安心してほしい。

それより理由だ。その推測の域を出ないおおよその見当とやらでいいから教えてほしいんだけど、話してくれそうな雰囲気じゃないな。王太子殿下が近衛の前で迂闊な発言は出来ないだろうし。推測が間違っていたら大変だもんな。

話してくれそうなのは……あの男か。何の見返りもなく話してくれるかは疑問だけど。私は赤茶の髪をもつその人物の一見爽やかな笑顔を思い浮かべた。まだ私を疑っているだろうか。死にかけたのだから、多少は晴れていると思いたいが。とにかくその件は後日ユ八に訪ねるか、侍女さんの情報に期待するとして、1つ確認しておきたい事があった。私はイサークの目を注意深く覗き込み尋ねる。

「単独犯………って事はないですよね？」

ずっと懸念していた。レーヴィを装っていた無口が口にした「一見落着」という言葉を。よもや犯人の背景を軽く洗っただけで、被疑者死亡で捜査終了。なんて事にならないよね？まさかまさか一国の首脳陣が、今回の襲撃を軽挙妄動な輩の迂闊で無謀な一人相撲と推察している。とは思わないが、もしもそんな事があつたら非常に困る。

実行犯を雇った黒幕がいるんだ。現在進行形で狙われているんだ。と率直に伝えたいが出来ずに遠まわしな質問になってしまふ。

「残念だがそれはないだろう」

イサークの答えははっきりとしたものだった。

良かった。ならば黒幕を明らかにすべく捜査されているのだろう。是が非でも無口が私に飽きる前に黒幕を突き止めていただきたい。

「では、また狙われる可能性があるという事ですね？」

私の問いにイサークはしばし押黙る。イエス！と答えて私が怯えるのを憂慮しているのだろうか。

イサークの澄んだ青い瞳が暗く翳りをおびる。小さく息を吐くと、イサークは重い口を開いた。

「可能性がないわけではない。だが、かなり低いと思っている」

その根拠は？突っ込んで聞きたかったが、出来なかった。眉根を寄せ何かを耐える苦しげなイサークの表情に胸がつまる。どうしてなのだろう。狙われる可能性が低いならば喜ばしい事ではないか。

何故、そんな思いつめたやるせない顔をするのか。寝込んでいる間に何があったのだろう。聞きたい！が聞けない。うおー。気になる。これは本腰を入れてユ八から聞き出さねば。

「殿下、そろそろお時間です」

沈黙の落ちた部屋に、近衛の一人が控えめな声で告げた言葉が響く。「わかった」と短く応えたイサークは、悩ましげに揺れる瞳で私を見た。何というか、色っぽくなつたな。恐るべし思春期。独特の色気に翻弄されそうな自分に必死に言い聞かせた。「駄目だ。駄目だ。私はシヨタじゃない！」と。

「また来る」

少し寂しげにそう言うと、イサークは私の頭に手をやり、2、3度、優しく撫で近衛と共に部屋を後にした。

だから、洗ってない髪に触るなって。がつくりと頂垂れ脱力していると、扉がノックされアイラの声が聞こえた。

「サカキ様。ユ八様がみえられました」

まるでイサーク達が姿を消すのを見計らったかのような訪問に、なんてタイムリー。丁度聞きたい事があるんだ。ラッキー。………とは思えなかった。しつこいようだが、私は意識を取り戻したばかりで身繕いも出来ていないんだ。気にかけてくれているのは嬉しいが、ひとこと言いたい。

病み上がりの女の部屋に次から次へと！お前らにはデリカシーってもんがないのか！



49 ツイメンの思惑 (2) (後書き)

50 ツイメンの思惑 (3)

「やあ、サカキちゃん」

鮮やかな赤茶の髪を揺らし魅惑的な緑の瞳を細めて爽やかに微笑みながら、ユハは扉をくぐり部屋に入ってきた。ベッドに腰掛けた私のすぐ傍までやってくると手にした袋を差し出す。

「お見舞いだよ。口当たりのいいものなら食べられるんじゃないか  
と思っただけ」

「ありがとうございます」

ユハが入室してから愛想笑いを浮かべて対応していた私だが、この時ばかりは心からの笑顔になった。見舞いの定石である花束をすつとばして、食べ物を持つてくるとは。ナイスだユハ。エイノから私の状態を聞いてきたのだろうか。抜け目のない彼の心遣いに素直に感謝した。

ここに来て間もない頃は、捨てても翌日には帰ってきそうな人形だの、過剰にレースのついたショールだのを土産にもってきていたユハだが、気付けばそれは、使いまわしのきくデザインの帽子や、上質でシンプルなハンカチ、飾り立てすぎている手鏡など実用的な物に変わっていた。人形を貰った時も変わりなく笑顔を浮かべて対応していたつもりだったが、好みを見抜かれていたらしい。女性の扱いに慣れているからなのか、私を警戒して注視しているからなのかは分からないが、その観察眼に薄ら寒いものを覚える。が、今はただただ感謝だ。人間空腹には勝てない。

「あの、いただいてもいいですか？」

「ああ、口に合うといいんだが」

言いながらユハは先ほどまでイサークが腰掛けていた椅子に座る。袋の中には小ぶりの箱が入っていた。趣味のいいリボンで飾り立てられたそれを包む薄い紙を破り捨ててしまいたいのを堪えて、丁寧に包装を解いていく。相変わらず凄い色。箱の中に鎮座する器に盛られた真っ赤な物体を見て私はこっそり息を吐く。わかっちゃいたけど、どうにかならんかね、この世界の菓子の色は。それにしても今回はまた強烈だな。半透明の赤いその内部には黒い球状のものが浮いていて、蛙の卵を連想させた。暑い季節になると池や田にぶかぶかと浮いているのを棒でつついて遊んだりしたな。懐かしい。…………菓子を見て懐かしむものじゃないな。これ以上思いだすのはやめておこう。

「いただきます」

なるべく直視しないようにして、添えられていたこれまた可愛らしい木で出来た小さな匙で口へと菓子を運んだ。

「美味しい」

この色で、このセンスで味は一級品なのだから本当に不思議だ。夢中でゼリーを食べる私を見るユハの目は優しげに感じる。が、本心からの眼差しとは限らないのがユハだ。少し酸味のあるラズベリに似たゼリー状のその菓子を食べ終わるのを待つて、ユハが口を開く。

「さて、サカキちゃん。俺に聞きたい事はない？」

よく分かっているじゃないか。横目でちらりと顔を窺えばユハは不敵な笑みを浮かべていた。

「聞いて、教えてくれるんですか？」

「そうだね、俺もサカキちゃんに聞きたい事がある。交互に質問して答えていくっていうのはどうだい？」

嫌だ。とは言えないのを分かかっていて疑問形にするな。

「分かりました」

不承不承頷けばユハは笑みを深めた。

「では、俺からきかせてもらうよ」

おい、そこはレディーファーストだろう！

「今回、君を襲った犯人に見覚えは？」

だから、レディーファーストは？

「見覚えはないのかな？」

……………。

「顔を見ていないのでわかりません」

不満気な視線を送るも、人好きのする笑みから与えられる理解不能なプレッシャーに負け口を開いた。ぶっきらぼうな口調になったのは無論わざとだ

「そう。次はサカキちゃんの番だね。なんでも聞いてくれ」

言われなくても聞きますよ。

「私を襲った犯人について、今現在判明している事と推測されている事柄、それと裏で糸を引く人物或いは組織についても、同様に教えてください」

一氣にまくしたてればユハは一瞬呆氣にとられた表情をみせてから、苦笑する。

「一度の質問で一つの事しか聞いてはいけないとは言っていないでしたね。年齢差と立場を考慮すれば、このぐらいで公平じゃないですか」

無茶苦茶理不尽を言っているのは分かっているが、子供というのは無理を通す我がままな生き物なのだから許して欲しい。畳み掛けるべく、早口に言葉を足せばユハは仕方が無いというように肩をすくめて、軽く息をついた。

「年齢差ね。サカキちゃんと俺の年齢差は幾つだったかな。時々分からなくなるよ」

墓穴。自分で穴を掘ってどうするよ。動揺を押し隠し「さあ？」と惚けた。

「ユハさんの歳は知りませんが……20歳差ぐらいですか？」

実際は2、3歳差くらいだろうか。老獺で黒い側面をみればもつと差を感じるけど。しかし20歳は言い過ぎたか。33歳だと思っ  
ているって事だもんな。「やっぱり15歳くらいかな」と言いなお

そうとして思いとどまる。若く見える精力的な33歳なら20代に見られる事もあるだろうし、人種の違う13歳の少女から見れば、20代も30代も然程の違いはないかもしれない。この間もおじさんだと言い切っておいたし問題ないか。この際だからユハは13歳の私から見て、30代に見えるいい歳のオヤジで守備範囲外と印象付けておこう。

「包容力があると捉えられていると喜ぶべきなのかな。残念ながら俺はまだ27だよ」

まあ、そのぐらいだろうな。しかし、

「ええ!？」

私は両手を口に当てて目を見開く。

「お若かったんですね。すみません、てっきり30代だとばかり。本当に失礼な勘違いをしておいてごめんなさい。じゃあ14歳差ですね。思ったより変わらないかな……あ、でも、私の倍以上のお歳なんですな」

大きさに驚き、倍の言葉に力を置いて満面の笑みを浮かべた。ああ、すつきり。今回は勝てそうじゃないか。微苦笑を浮かべるユハに胸がすく。

しかし、敵はそう甘くなかった。口の端をさらに上げて、少し意地が悪く見える笑みを作ったユハは緑の瞳に蠱惑的な色をのせると形のいい薄い唇を開いた。

「そうだね。俺は随分と年上だ。14歳差か。それだけ歳の差がある恋人が出来れば、きつと可愛くてたまらないだろうな。思う存分、

甘やかしていとおしんで腕の中に閉じ込めて、俺無しではいられなくなる程に溺れさせてみたいね」

溺れさせて、後は放置なんだろう！ 耐え切れなくなった相手が別れを切り出すまで。何なのその無駄に溢れるフェロモンは。無責任に色香を振りまくな。私が本当に13歳で万が一にも惚れたらどうするんだよ。

この危険極まりない男から一刻も早く目を逸らさなければと思うのに緑の瞳に見据えられて私の身体は石になってしまったかのように動かない。固まる私をみて、クスツと軽く声に出して笑うその様子が嫌味に見えないのが嫌味だ。赤茶のそれは本当に髪なのか？ 実は蛇なんじゃないのか？ 鏡を向けて応戦すれば勝てたりしないだろうか。

51 ツイメンの思惑 (4)

昔読んだ本に描かれていた恐ろしい蛇の頭髪を持った醜いメドウ  
ーサ。鮮やかな赤茶の髪に精悍な顔立ちのユハとは全く違う容姿な  
のに、両者がダブって仕方が無い。辛くも呪縛から逃れる事に成功  
すると、私はユハを睨み付けた。

「可愛い彼女が出来るといいですね。けれど、余り年下はやめてお  
いたほうがいいんじゃないですか？この国ではどうか知りませんが、  
私の国では18歳未満を相手にすると例え同意があっても犯罪にな  
るんですよ」

私の脅しに、ユハは眉を上げ驚いた表情を作る。

「へえ。それは面白い制度だね。想いを告げただけで罪になるのか  
い？」

「……………いえ」

興味を引かれたらしいユハは顎に手を当てるとほんの一瞬考える  
素振りを見せて、ニヤリと人の悪い笑みを浮かべた。

「ベッドに誘うと駄目。という事かな？」

「……………まあ、そうですね」

ああ、なんだか嫌な笑顔だな。余り突っ込んで聞いて欲しくない  
んだけど。確か一概に駄目だというわけではなかったような気がする  
るし。けど、ユハの場合はアウトだな。どう考えても。というかね、  
13歳の相手とする会話じゃないでしょう。



「なるほど。この国でも若い者への行為は当然忌むべきものとされているが。恋人というのは何もベッドの中だけで過ごすものではないだろうか？」

仰るとおりだが、ユ八が言うつとすこぶる説得力に欠けるんですけど。プラトニックな関係が築けるのか？ まかり間違っても手を繋いで遊園地に行くようなタイプじゃないだろうに。

「それまでの手順を教えていくのも楽しそうだね」

ユ八は唇を笑みの形に吊り上げたまま、掛布の上に置かれた私の右手を取り、軽く指を絡ませる。……………どういふ手順だよ！絡められた指を、角が立たない程度のしぐさで引き抜こうとすると、逃げられないように力を込められ、腕を持ち上げられた。何をする気なのかと指の先を見て顔が引きつる。指先にユ八の唇が落とされようとしていた。絡めた手を器用に動かして親指の腹で優しく手の甲をなでられ、心地よい痺れが腕を這い登り思考を麻痺させる。夢見心地で顔を上げれば指先に導かれるように緑の瞳に視線がたどり着いた。

綺麗。

艶やかな翡翠の瞳に意識を奪われる。その妖しい魅力に抗えずに魅入りかけたとき、目の奥に存在する、稚気を伴うからかいと、微かに灯る硬い光に気がついて、はっと我に返った。

このやろっ。

これ以上調子に乗らせてたまるかと、唇が触れる寸前に拒絶の意思を込めて振り払おうとした。しかし、その間際にさっと手が離される。

「残念だが、続きはもう少し大人になってから、かな」

そう言ったユハは、今しがたまで漂わせていた震えの走るような色気をきれいさっぱりと霧散させ、人のいいお兄さん面で爽やかな笑みを顔に貼り付けていた。

………解放されて嬉しい。はずなのに何だか割り切れない。自由になった手で握りこぶしをつくると、ため息を一つ落とした。遊ばれているのか、試されているのか、恐らく両方なんだろうけど。もう疲れたよ。一応病み上がりなんですよ。

「さて」

ひとしきり私の反応を楽しんだらしいユハは腕を組むと表情を改める。

「君を襲った犯人についてだが」

やっと本題に戻ったか。

「現在判明している事といえば、ツイメンの使者の二団に下男として同行していた事。毒によって命を落とした事。の二点のみだ。国から同行してきた人物で、身元も確か。これまでに怪しい素振りもなかった。と言うのはツイメンの言い分だね」

ツイメンの使者に同行している人物である事はさつき無口から聞いたが、身元が確かか、か。特撮ヒーローのお面と小柄な体格から、髪を染めた日本人である可能性も考えていたのだが、そうではなさそうだ。

「その人が犯人と断定された根拠は？」

死んでしまったのだから自白もとれないしな。

「荷物から弓が出た事。弓が射られた時間、さらに君が再度襲撃された時間、その双方どちらの時間も所在が不明であった事から犯人とみなされた」

それだけの証拠で犯人に決定されてしまうのか。弓から指紋を採取して、なんて出来ないのだろうか。冤罪とか多そうだな。

「その人が犯人で間違いないんですか？ 例えば真犯人は別にいて、罪を着せる為に荷物に弓を紛れ込ませて、毒を飲ませた。とは考えられないんですか？」

「その可能性もあるね。だが、一番の問題は城への侵入手段なんだよ。他に真犯人がいたとすると、その人物は3度も侵入した事になる。結界のはられた城へ弓を持って侵入し、狙撃。その数日後に結界が無く比較的警備が薄いとはいえ、兵士や神官がうるつく2区へと侵入し君を誘拐、さらに日をおいて再度結界を潜り抜け、下男 of 荷物に弓を混入し、2区へおびき出して殺害。少し無理があると思わないかい？」

あー、そうだな。もしその説が通るとなると、結界は穴だらけ。共犯者はエイノ。って事になるのかな。まあ、実際にはずっと内部にいた無口がいるわけで。あまり考えたくなかった事だが、その下男の死因が毒つてのがね。無口が関与してたり……するんだろうなあ。弓を使った事も気に入らないようだったし、私を連れ出すのも邪魔されたし、きつと相当頭にきていただろう。やはりその下男は免罪などではなく襲撃者だったのかな。誰だか知らないが雇った者同士が潰し合っていたと気づいているのだろうか。何とも間抜けな話だ。

「そして、首謀者についてだが、ツイメンではないかと上の方々は

「ご推察のようだね」

そのまんまだな。ツイメンの使者団の人物が実行犯で、黒幕がツイメン。ならわざわざ城内で自殺なんてしないんじゃないのか？疑ってくださいといっているようなもんじゃないか。

「男が死んだのはツイメンの使者団の所持品検めを実施する直前だったんだよ。実行犯である男を切り捨てて、ツイメンは無関係であると逃げ切るためではないか、というんだ。何よりツイメンには動機があるからね」

「動機？ なんですかそれは？」

「おっと、次は俺が質問する番だよ」

やんわりとした口調だがその声は有無を言わせない。もう少し大目にみてくれてもいいじゃないか。子供相手に大人気ないな。内心ぶたれていた私は次のユハの質問に息を呑む事になった。

「どうして城を出ようとしたのかな？」

静かな声は低く、少し顎をひいた姿勢から鋭い眼光が投げかけられる。「嘘を吐いたらどうなるか分かっているだろうな？」と言外にほのめかされている気がして顔から血の気が引いていく。

エイノから聞いたのか？ それともユハの憶測か？ ああ、もう分からないな。白を切りたいが、ここは慎重を期してエイノから聞かされて知っていると思っただろうがよさそうだ。

「怖かったんです」

私は小さく訴えた。ユハがは僅かに方眉をあげただけで表情を変えすることも無く静かに私を見据えている。

「故郷にいた頃は、平凡な庶民として静かに平穩に暮らしていました。それがいきなり知らない国へ来て、身に覚えのない疑いをかけられて、サリの術なんてわけのわからないものをかけられたり、街中で誘拐されそうになったりして」

そつと伏せた目の奥で私は頭を必死に働かせ慎重に言葉を選ぶ。とはいえ余り言葉に詰まると怪しまれるので考えていられる時間が短いのが難点だが。

「イサークの気持ちは嬉しいけど、私には荷が重いです。イサークの背負うものを私では支える事ができません。ずつと心苦しくて申し訳なくて……。矢を射られて命を狙われて、私がいては駄目だと思っただんです。イサークにもエイノさんにも迷惑をかけてしまっ

疑われていないだろうか。ユハの顔を見たいが怖くて見られない。私は目を伏せたまま、言葉をつむいでいく。

「それに……。怖くて、凄く怖くて。あの矢がほんの少しそれいたらと思うと体が震えて。帰りたいです。家に帰りたいたい」

嘘は言っていないよ？言っていない事があるだけで。大丈夫、我ながら演技が上手くなってきた。とは思って、相手がユハなのが心配だ。お涙頂戴には流されてくれないだろうけれど他の選択肢がないんだ。いかにも涙を堪えていますというように、顔を逸らして唇を噛み締める。

「それだけかな？」

優しく問うその声に舌打をしたくなる。それだけだよ！ それだけって事にしといてよ。うう、胃がしくしくと痛み出してきたわ。

「以前に話したよね。13歳の少女が一人で生きていけるほど外の世界は甘くないと。サカキちゃんは頭がいい子だ。それにとても慎重だね。君が一人で城を出て行こうとしたとは俺には思えないんだよ」

それはどういうことですか。手引きした人間がいると御思いですか。ああ、いますよ。います。レーヴィこと無口という名の変態が。でも言えないんだから仕方ないでしょうが。

「悩みました、とても。でもこのままでいるよりはと思って。……私の国に、渡る世間に鬼はなして言葉があるんです。世の中悪い人ばかりじゃないですよ」

決して良い人ばかりじゃないけどね。

顔を上げると健気に微笑み、ユ八を真っ向から見つめた。緑の瞳が探るように私の目を注意深く覗き込む。怖気づきそうになる気持ちを奮い立たせてユ八の視線を受け止めた。どう、思っているのだろうか。

私を注視するユ八の瞳から逆に思考を読み取れないかと、窺う。見詰め合っていたのはほんの僅かの時間だっただろう。けれど私には長い時間だ。

「そう。考えなしに出て行こうとしたと言うんだね？」

さらっと辛らつな事を言うな。子供なんだから、いいでしょうが。突発的に行動したってさ。

「考えたつもりですが」

不満げに訴えれば、フツと笑みを零したユハに「ごめんね」と頭をなでられた。優しげに微笑んでいるけど、鼻で笑ったよね、今。子供ゆえの短慮に笑ったのか、私がまだ隠そうとしていることに笑ったのか、どっちなんだ……………。

## 52 ツイメンの思惑 (5)

頭を撫でる手が鬱陶しい。なんで皆、頭を撫でる？ いくら相手がユハとはいえ、髪の毛の汚れが気になってしまうのが女心というものだ。女たらしなら、それぐらい察しろ。やんわりと困った表情を浮かべて頭上に伸びた腕を見る。その視線の意味に気づいたのか、ユハはほんの少し笑みを深めるとポンポンと頭を軽く叩いて手をおろした。思春期真っ只中の13歳にはもっと気を使うべきだと思う。アドルトな会話は論外だが、子供過ぎる扱いもNGだぞ。

「攻守交替だね。どうぞ」

涼しげな態度を崩さないユハに、焦りが産まれる。次の質問はどうくるのだろうか。最低限知りたいことだけを聞いてさっさと切り上げるのが無難だな。私はしばし考え、口を開いた。

「私が再度狙われる可能性は低い。とさつきイサークに聞いたのですが、それはどうしてですか？」

「おや、ツイメンが君を狙う動機は聞かないのかい？」

それは後だ。狙われる可能性が下がった理由が分かれば自ずと動機にも繋がるかもしれない。いや、でも動機を聞いて、暗殺対象から完全に外れる方法を考えたほうがよかったのかな。頭はぐるぐると渦巻いてぶれる思考に苛立つ。イサークの言葉が正しければ危険性は減ったようだ。やっぱり、その訳を知るのを優先しよう。眉を上げわざとらしく驚くユハに私は無言でうなずいた。

「殿下が大礼の乙女達をお決めになられたからさ」



大礼、は何時ぞや聞いた単語だな。乙女？　ってなに？

「聖獣の世話役となる女性達の事だよ」

疑問が顔に出ていたのだろう。ユハが説明を付け加える。

大礼に聖獣……どこかで聞いたけどどこで聞いたんだっけ？

ああ、そうだ。エイノだ。えーと、確かオリンピックみたいな四年に一度あるやつで国の繁栄がどうか。世話役の女性から正室やら側室が決まるとかなんとか。自分には関係ない！　と切ってしまったわ。

記憶の奥に追いやられた情報を引っ張り出すが、頭の中の疑問符は増えるばかりだ。その事と襲撃されない理由とが繋がらないんだけど。

どついつ訳かと問おうとユハを見て口を開くが、一瞬早くユハから次の質問が投げかけられる。

「サカキちゃん、君はレーヴィイ殿をどう思っているのかな？」

ちよつと待て！　私の番はもう終わり？　答えになつてないでしようが。分かるように説明をしる。説明を。しかも今レーヴィイの事を聞くか？　どう思うかって？　ほんの数時間前に認識が140度程傾いた所なんですけど。

そつえば、この質問以前にもされたな。花の咲く城の庭で。あの時はレーヴィイじゃなくてイサークをどう思っているかだったか。正直にイサークに対する所見を述べたら大笑いされたっけ。今覚えれば、異性としての意見を聞かれていたんだと分かるが。さて、今度は一体どんな返答を期待しているんだ。ユハの表情を伺うが笑みを浮かべるその顔からは何も読み取ることが出来ない。とりあえず差し障りのない答えで流そう。

「いい人ですよ。謙虚で、人当たりがよくて」

と黙っていました。

「レーヴィさんみたいなお兄さんがいたらいいなって思います。けどレーヴィさんが何か？」

私は不思議そうに首を傾げてユハを見た。底の見えない緑の瞳が静かに視線を返す。嫌な汗が背中を伝った。レーヴィ、疑われているんじゃないか？ 屋敷を抜け出した私を偶然見つけた襲撃者が襲い、これまた偶然通りがかったレーヴィに救われる。なんて偶然はそう何度も重ならないものな。

「サカキちゃんがレーヴィ殿を随分と慕っているようだという話を小耳に挟んでね。少し妬いていたんだよ。俺にはちっともなびいてくれないのにつてね」

嘘つけ。誰が妬くだ？

純情可憐な13歳としては頬を染めて喜ぶべきなのだろうか。でも無理だ。瞳に宿った剣呑な光は消えてくれそうにない。「そう、兄のような存在なんだね。安心したよ」と爽やかな笑顔でうそぶくユハをいつそ羨ましく思う。本当にいい性格してるな。

「はい、次私ですね！ 世話役の女性が選ばれると……」

どうして私が狙われなくなるんですか？ と聞こうとして口を閉ざした。そうか。そういう事か。世話役から正室や側室が選ばれる事が多いという。イサークは権力に阿る者達から世話役の乙女を選ぶよう迫られていた。しかしなかなか選ばうとしないイサークに痺れを切らし、私がいるから乙女を選ばないのではないかと考えた者

がいた。しかもユハが言っていたように力のある貴族の養女となつて側室になる可能性もある。骨を折って、正室になれたとして、寵を受ける側室の存在はさぞかし煙たかろう。そう考えた者がツイメン。

これがツイメンの動機。隣接する大国シルヴァンティエ。その王太子の後の座は喉から手が出るほどに欲しいのではないか？

「世話役の一人にツイメンの人間が選ばれたのですか？」

私の言葉を聞き、ユハは片眉を吊り上げ薄い唇をゆっくりと歪める。愉しげな、それは愉しげな笑顔を浮かべていた。おーい、爽やか仮面がはがれて腹の黒さが顔に出ていますよ。

「そつだ……………ツイメンの動機はわかつたようだね」

あたりか あれ？ 何か忘れていている気がするな。とても大事な事を。なんだろう。喉元まできているその答えがあと一歩のところまで引つかかつて出てこない。ああ、もう、気持ち悪いな。なんだっけ？

「さて、俺からの最後の質問だ」

思考を遮る声にはつとして、いつの間にかユハの腰にさがる剣に落とされていた視線をあげた。

「例えば、だが。レーヴィ殿に誘われたら、君は城を出ようと思えるかな？」

何だつて？

どこまでバレているんだろう。絡みつく視線の温度が何時もより

冷たく感じる。緑の瞳が私の目の奥から思考を暴いていくようでぞつとした。視線を合わせているのが怖い。だが、外す事も出来ない目をそらしては認めるようなものだ。憶測で揺さぶりをかけられているだけかもしれない。冷静にならなくては。私は感情を出さぬように努めて答えた。

「レーヴィさんに、ですか？それはレーヴィさんはいい人ですが……。考えたこともないので分かりません」

イエスでもノーでもない曖昧な返事は日本人の必須スキルだと思う。特に社会に出てからは、白黒つけないグレーの大切さを嫌でも学ばされたものだ。

やましいことなど何にもございません。私は無垢な13歳。おじさんたら何を言っているの？と、想いを込めて小首を傾げて困ったように、無邪気に微笑んだ。自分でやっていて鳥肌が立つけど。上目遣いに小首をかしげる25歳。不気味すぎる。

突っ込まれるかと思ったが、ユハは笑顔のまま注意深く冷静に私を眺めるだけで何も言わない。その沈黙がかえって怖いんですけど。誤魔化せたということにしておこう。そうでなくては神経がもたない。よし、誤魔化せた。大丈夫！では私からも最後の質問だ。

「乙女の一人に選ばれて、ツイメンはそれだけで本当に満足してくれるのですか？どちらにしても私は邪魔ですよね？」

私の身の安全を保証するには少し心もとない気がするんだが。

「殿下が乙女に選んだのはツイメンの王の妹君だ。以前から再三に渡って殿下とのご婚約の申し入れがあったんだよ。決して悪い話ではないんだけどね。しかし、シルヴァンティエでは王家に他国の血が混じるのは歓迎されないんだ。この国は強国だ。これまでの歴史

の中で他の国と婚姻関係を結んで同盟を強化する必要がなかった上に、王家の血が薄まるのを良しとしないお堅い方々がいてね」

何だよ、それなら私も歓迎されないじゃないか。それでよく私を養女にいれて、なんて話をしたものだ。

「もし、サカキちゃんが殿下のお傍に上がって、お子を身ごもっても、悪いがその御子が王太子となる事はない。臣下に下りいずれかの地を拝領する事にだろう。しかし、ツイメンの王妹ともなると、たとえ側室として入られたとしても王子をお産みになれば一騒動起きるのは避けられないだろうね」

まるで私の心中を読み取ったかのようにユハは説く。

母親の身分で産まれる子供の未来が決まってしまうのか。分からないでもないが嫌な感じだな。それにしてもお堅い保守派層の反対を押し切ってツイメンの姫君を妃に迎えて大丈夫なのかな、イサークは。それにその原因をつくった私は、今度は保守派から狙われたりしないだろうか。

「だから、殿下は乙女の一人として姫君を御迎えになられるんだよ」

どういうことだ？どうも考えが追いつかない。今までこんな王室のいざこざなんてものとは無縁の人間だったのだから、理解しがたい事ばかりで頭が痛い。

「ご婚約もなさらず、妃とする確約もせず、ただ乙女として受け入れるだけで、ツイメンには期待を持たせ、実質的には姫を人質としてとる。同時に反対派の中核である人物達の娘や親近者も乙女の一人としてお選びになってそちらもおさえ込まれているのさ」

ツイメンには使者団の一員から暗殺者が出たという弱みがある。例え思惑から外れた条件でも飲まないわけにはいかないというわけか。その上で妃として迎える気がある素振りをし、飴をあたえ、国内の者には人質とするだけと見せる。なかなかどうして狡いじゃないか王子様。

ツイメンとしても疑いが自分に向いている最中に、しかも王妹がシルヴァンティエにてよく人質に取られている状態で、私に手を出して、わざわざ不興を買おうとはしないとふんだか。

けど、いつかは選ばなければいけないのだろうな。自分の隣に立つ人を。好きな人と自由に添う事が出来ない。10代の少年には歯がゆく辛い事実だろう。力になりたいが、イサークに伝える事も出来ない。イサークの切ない眼差しに込められた熱を思い出し、ぶるりとふるえる体を抱えた。

「体調の整わないか悪かったね」

沈黙し考え込んだ私の頭にユハが手をおく。

おい、だから髪に手をやるんじゃない。愛想良く対応する気力もなくなつた私は、きつとあからさまな視線を送っていたのだろう。

「どうかしたのかな？」

優しげに問われて、正直に答えた。

「お風呂に入っていないので頭が痒くて気持が悪いんです」

だから、触るな。

私の言葉にユハはニヤリと笑み、頭を撫で回したあげにくこう言つた。

「そう、風呂場まで歩くのはまだ大変だろう。俺が連れて行ってあげようか」

いいえ、いいです。本当に。全くお構いなく。ええ、ええ、遠慮なんてしていませんから。有難くも迷惑な申し出を全力で拒否するが、3分後にはユハの腕に抱えられ廊下を移動していた。何度目だ。ユハに抱っこされるのは。たまには人の希望を聞き入れてほしい。とはいえ、助かったかな。風呂場まで一人で移動するのは確かに少々骨が折れただろうし、だがユハの事だ。風呂場についたら「背中を流してあげるよ」等とからかって、また人で遊びだしそうだ。

アイラを捕まえてこの事態をなんとかしようと、首をひねってあたりを見回すが、アイラの姿は見えない。どこに行ったんだ。

アイラを見つけられぬまま、ユハに抱えられエントランスホールに差し掛かったとき、扉が開いた。アイラか？と期待を込めて視線をむければ、こちらをみて驚きの表情を浮かべるタワーリがいた。アイラと交代の時間なのだろうか。

「タワーリ、サカキちゃんが湯浴みをご所望でね。介助してもらえるかい」

助かった。

「……………え？あ、はい。すぐに参ります」

何故か戸惑った様子タワーリは慌てて風呂場にユハを案内すると入浴の準備を整えていく。準備が終わったところで、ユハは職務があるからとあっさり帰って行った。

「あ、あの。サカキ様。シーツを取り換えてまいりますので失礼してもよろしいですか？タオルと着替えはこちらにご用意してあります」

すので」

服を脱ぎ始めた私に背後から恐る恐るといった様子でトゥーリが声をかける。妙によそよそしいトゥーリを怪訝に思いながら、裸になった私は体にタオルを巻きつけた。トゥーリに向き直ると何とモバつの悪い表情をした彼女と目があう。

「はい。もう一人でも大丈夫ですから。すみませんが、部屋に戻るときに肩を貸してもらえますか？」

「ええ、もちろんですわ。では失礼いたします」

慌しく風呂場を出て行くトゥーリを見送り、私は浴室へと足を踏み入れた。

エイノ邸の風呂は広い。日本のように深い湯船はなく。座つても臍あたりまでしか湯のこない浅いものだが、それでもお湯につかれるのは嬉しかった。はられたばかりの湯から立ち上る湯気はまだ室内を暖めるにはいたっておらず、少し肌寒い中、寝転ぶように湯船に体を沈めた。

生き返る。お湯の熱が体に移るその瞬間が好きだ。掌でお湯をすくって顔をゆすぐと何時ものようにドリフを熱唱しかけて、ふと口をつぐんだ。

私を狙う相手も、動機も分かった。けど、すっかりしない。あのお面は一体なんだったんだろう。日本の特撮ヒーローのお面を何故ツイメンの人間が被っていたのか。一度目は初代。二度目はタウのお面などと手の込んだ真似を何故？

「あっ！」

私は思わず声をあげていた。あまりに重大な事を見落としていた。あのお面男が町で私をさらおうとした時、私はまだイサークと会っ



てもいなかっただけではないか。けど、ユハは、というよりこの国の上層部の人間はツイメンの動機を先ほど私が考え付いた答え通りだと思っっているのだろう。だが違う。ツイメンの動機はそうじゃない。何だろう？ ツイメン、二人の暗殺者、ヒーローのお面。どこかおかしい。何か間違えてはいまいか？

最初は攫おうとし、次は弓を射、最後は剣で斬りつける。お面男は何故てんでバラバラな手段をとったのだろう。

矢は私のすぐ近くに刺さったが、私にはかすりもしていない。死にかけて原因となった毒は剣に塗られたものではなく、無口が盛ったものだった。

お面男は私を殺す気がなかったのだろうか？しかし私が一步でも動いていれば矢は体を貫いていただろうし、斬りつけられて怪我も負わされている。全く害意がなかったとも言えない。

結局何も分からないままか。

何ともいえない脱力感に襲われて、私は仰向けに寝転んだまま頭まですっぽりとお湯の中に潜った。静かに揺れる湯に体をまかせ目を開ける。湯を通して見える世界は透明で揺らめいていて日本で見える光景とかわらない。口からこぼれ出た泡が不思議と心地よい音を立てて昇っていき、水面で弾けて消えた。

お湯から出たら日本の病院で、心配した家族にベッドを囲まれていて、なんて、ならないかな……。あ、やっぱり駄目。失業してから生命保険解約したんだ。入院費って一日いくらだ？大部屋で5000円ぐらい？治療費を含めたらもつとするか。こつちにきてから結構な日数がたっているから、えーと、ああ、やっぱり無理。病院のベッドの上で目が覚めるのだけは勘弁だな。

さてと、髪でも洗うか。湯船から顔を出せば、そこはやはりシルヴァンティエのエイノ宅の風呂場だった。感傷的になりきれないのは、やはり歳が歳だからだろうか。

### 53 ツイメンの思惑 (6)

さっぱりした。

ゆつくりと湯につかったおかげで体は芯から温まり、風呂から出た今もほこほこと湯気を立てている。

タオル一枚を体に巻きつけた状態で、しばしの間ぼんやりと休んだあと、ぎこちない動きでトゥーリが用意してくれていた着替えを身につけ始めた。

シンプルなアイボリー色の膝丈のワンピースはしつとりと汗ばむ肌の上に着ても、さらりとすべり着心地がいい。存在感溢れる真夏の太陽の下で上品なデザインの麦藁帽子を被れば、避暑地にやってきたお嬢様。に見えなくないかもしれない。そんなワンピースだ。

しかし、これは所謂部屋着というやつらしく、以前にこの服で外に出たいと言ったところ、とんでもない！とアイラ達に呆れられた。徒歩5分の近所のコンビニならばスッピン、スウェットでも外出できてしまう、恥じらいを忘れかけた歳になったとはいえ、正装した神官やら小奇麗な格好の貴族がうるつく城内を部屋着で移動する勇氣はもてない。私は泣く泣くワンピースでの外出を諦めたのだった。

服を着終わっても、部屋に戻るさいには肩を貸してくれると約束していたトゥーリは姿を現さなかった。まあ、トゥーリだし。半ば肩を借りる事を諦めて、髪についた水滴を肩にかけたタオルで絞り取りながら、浴室の扉を開けた。そして扉をくぐらぬまま、閉めた。いや、正確には閉めようとした。

扉が閉まる寸前。ほっそりとした長い指が素早く扉の縁を掴み、阻まれる。

おいこら、危ないでしょうが。一歩間違えれば指を詰めて、そのお綺麗な爪に血豆が滲むところだぞ。私が勢いよく扉を閉めようとしたからだという事は棚にあげ、相手の危険な行動を諫めた。心の内で。

どうしようか。思わず、扉を閉めようとしてしまったけれど、冷静になるまでもなく自分の首を絞める行為に他ならない行動にこの後の出方に悩む。

結論が出る前に思いのほか強い力で外側に扉を引かれて、ドアノブを握ったままだった私は、引つ張られ前方に倒れこんだ。

白く滑らかな布に包まれたそれに顔から突っ込む。痛い。

勢いよくぶつけた鼻を押さえながら、抗議の為に顔を上げて……

…。無言で伏せた。

「何をしている」

元からして低い声がより低音になって目の前にたつ人物から発せられる。

「……………お風呂に入っつていま」

「今日はベッドから降りるなど言わなかったか？」

俯いたままぼそぼそと答えれば、怒気のコもった低い声が言葉を遮る。

「言わなかったか」

「……………はい。言われました」

何だろう。このプレッシャーは。あれは確か小学3年生の時だったか。担任になった学校一怖いと恐れられていた定年間際の女性教師を思い出す。

深く落とされたため息に、恐る恐る顔を上げれば、扉を開けた時と変わらぬ、怒りを刻み込んだ冷たい美貌から底冷えのする視線が投げかけられる。上向いた事を再度後悔した。

「すみません」

そろりと視線を外し、男のヒステリックはみっともないぞ。と胸中で負け惜しみを吐く。

「部屋へ戻れ」

「はい」

怒りの収まらぬ様子のエイノに冷たく言われ覚束ない足取りで部屋への道をたどり始めると、また深くため息が落とされる。エイノは無言で私の横に並ぶと脇に腕を入れ浮きあげるように体を支え歩き出した。お姫様抱っこじゃないんだな。まあ。どう見ても体育会系じゃないしな。

体格の違いから引きずられるようにして部屋へ戻ると、やや乱暴な仕草でベッドに腰掛けさせられた。温まっていた体がやけに冷たく感じるのは、単に入浴を終えてから時間が経ったからだけではないうように思う。

そのままぼへつと真新しいシートの上に座り込んでいると、氷点下の青い瞳が不満げな視線を送る。慌ててベッドに横たわるが、視線が緩まることはなかった。どうしろというんだ……痛みを訴えだした頭を抱えて足元に畳まれていた掛布を胸元まで引き上げると、ようやく少しだけ眼光が穏やかになる。本当に少しだけ。

過保護な性質のようにもみえるが、冷たい美貌から発せられる凍えそうな雰囲気は言いつけを守らなかつた事に腹を立てているだけのようにも思える。何にせよ、エイノ神官長は入浴した事にいたくご立腹のようだ。

「頭が痒かったんだから仕方がないでしょうが。体もべたついて気持ち悪かったし。病は気から！ さっぱりして何が悪い。私の体調は私が一番分かっているんだ。ほっといてくれ」

という思いは

「本当にすみませんでした。でも、もう大丈夫ですから」

という言葉となって口から出る。

これだけ殊勝な態度をとっているというのに、3度目のため息が耳に届いた。

「支えられねば、碌に歩けぬさまを大丈夫だというのか？」

しつこいな。エイノ。しつこい男はもてないぞ？

「廊下で倒れて頭を打つかもしれぬとは考えなかったのか。何度サウルの世話になる気だ」

口元を歪め薄い笑みを浮かべたエイノは皮肉をたっぷり添加してご丁寧に追い討ちをかけてくれる。

「……………ごめんなさい」

エイノ大魔神にしおらしく頭を下げて謝った。

「今日はこのまま屋敷におるからな、もうベッドから抜け出そうとは思わぬ事だ」

……………え。

エイノが出かけたら炊事場を漁りに行くことと思っていたのに。

ベッドの上で力なく横たわる私を冷たく一瞥するとエイノは扉へと向かう。

ドアノブに手をかけると、首をひねり振り返った。

「お前が自ら屋敷を抜け出したことは私の心の内に秘めておく。お前も余計な事をしゃべらぬようにな」

もうユ八にはれちゃっているけど、お心遣い感謝致します。

ドアノブを手にしたまま、エイノは何かを考えるように僅かに顎を傾ける。クセのない絹糸の金茶の髪がサラリと背で揺れた。

「ユ八は何やら感づいておるやもしれぬが、あれの事は気にするな。思慮の足りぬ行動をする男ではない」

自分の利益の為に、勘違いしたイサークに攫われていく私を見て見ぬふりをした男だぞ。思慮の足りぬ行動はしなくても、どう出る事やら。心配なことこの上ないわ。

胸中でケツとやさぐれつつ、無言で頷く私の顔をエイノは冷めた目で眺める。

4度目のため息を短く落とすと美貌の神官長は部屋を出ていった。腹ごしらえを優先して置けばよかった。いや、風呂を短めに切り上げておけばよかったのか。度重なる来客との精神的攻防と長風呂で体力を削られた私はベッドの上で静かに目を閉じた。

腹が鳴る音が室内に切なくこだまする。おなか、すいた。

## 54 ツイメンの思惑 (7)

意識を取り戻してから10日がたった。

体はほぼ元通り、外を出歩いても全く問題はない。とは思うのだが、見目麗しい蜥蜴神官長の許可がおりず、未だ籠の鳥だ。嫌味な程お美しい後見人様の涙が出るほど有難いお言葉には逆らえない。私はエイノの悪口を呟きながら、退屈な屋敷の中をちょこまかと歩き回って筋力の回復に努めていた。きつとエイノは始終クシャミに悩まされている事だろう。

この10日間、イサークは毎日花束を抱えてやって来てはほんの10分程たわいもない話をして去っていく。何やら忙しそうだが、その顔にはあの時のように思いつめた切ない影はなく、ほっとしていた。空元気というやつかもしれないが、若いし、案外気持ちの切り替えが早いのもかもしれない。

そして、イサーク以外にも毎日顔を見せにくる人がいる。レーヴイだ。来なくていいのに。むしろ来られたら治りが悪くなりそうだというのに。毎日毎日毎日毎日、こちらも建て前が見舞いなものだから、花束をもってやってくる。

私は花に埋もれた部屋をみて小さくため息をついた。

レーヴイがもってきた花瓶に活けられた花束をみて、イサークは翌日にはそれより少しだけ大きな花束をもってきた。初めて花束をもらったときのような特大サイズを持ってこなかったのは、大きすぎるのは困るとうったえた私の言葉を覚えていたからだろうか。

しかし、それに気づいたレーヴイが面白がって、一回り大きな花束をもってくれば、次の日はそれよりさらに少しだけ……と、分りやすく火花を散してくれたおかげで部屋の中は色とりどりの花だらけ。今やちょっとした街角の花屋の様相を呈していた。

いいけどね、花の世話をするのは私じゃないし。全ての花瓶の水かえを自分でやらなければいけなかったら、とつくに投げ出してい

ただろう。まめめめしい侍女さん達には頭が下がるわ。

そして、今日もレーヴィはやってきた。昨日イサークが持ってきた花束より心持ち大きな花束を携えて。

レーヴィを案内してくれたマリヤッタの手前、引きつる口元を隠してお礼をのべるが、彼女が姿を消すと、私は呆れて口を開いた。

「いい加減飽きませんか？」

「なんで？ 楽しいよ？」

あ、そう。

心底不思議そうに首を傾げられては何も言い返せない。

「それよりさ、今日こそ教えてよ。あんたの目的」

ソファーに向かい合わせに腰を掛け、マリヤッタが用意してくれた冷たいスカイブルーのジュースに口をつけながらレーヴィは私を見る。

またか。私はこめかみに指をあて目を閉じた。見舞いと称してやってくるレーヴィは毎日同じ質問を繰り返していた。午前中はイサークとの授業が続いているようだが、午後は暇なのだろうか。たっぷり1〜2時間は居座っていく。そしてその分私の寿命はおろし金で削られるかのごとく磨り減っていく。

「だから、何も無いって言っているじゃないですか」

「ふーん。教えてくれないんだ」

顎を上げて目を細め、レーヴィは手に持ったコップを軽く左に揺らした。中の液体が零れ落ちる寸前で右に傾け、また左に戻す。そのまま左右に揺らし続けるといふ、子供のよような遊びを楽しんでいたが、何度も繰り返すうちに力加減を誤ったらしい。僅かに角度がき



つくなくなったコップから波立ったジュースが一滴、跳ねてテーブルを濡らす。途端に顔をしかめ、面白くなさそうにコップを置いた。

「教えてくれないんじゃないね」

口から出た声は低く、明らかに機嫌を損ねていた。

ジュースが零れたのは私のせいじゃないだろう。八つ当たりともとれるレーヴィの言葉に呆れと恐れが同時に広がる。

「さーと、やる事が出来たから今日はもう帰ろうかな」

コップを人差し指で軽く弾くとレーヴィは腰をあげた。

来た早々に帰ってくれるのは非常にありがたいけれど、やる事って何？ 出来たってどういうこと？ レーヴィが何を思いついたのか、ものすごく考えたくない。

「また来るから。じゃあね。サカキさん、お大事に。屋敷の中でリハビリは結構ですが、無理は禁物ですよ。では失礼します」

皺のよった上着の裾を伸ばして、軽く頭を下げるとレーヴィは帰っていった。

レーヴィの仮面を被る様も、脱ぎ捨てる様も、何度も目にしてきたけれどその瞬間は一向に慣れない。よく本人は混乱せずに使われるな。器用なことだ。その器用さを暗殺なんて非建設的な事に使わずに他の事で発揮すればいいのにとしみじみ思う。

その日の夕刻、夕食前のひと時を部屋で怠惰に過ごしていた私をマリヤツタが呼びにきた。

応接室でエイノが待っていると。

応接室、あるのは知っていたけれど使わないから埃が溜まってい

たよな、掃除したのだろうか。急な呼び出しに意外な場所を指定され戸惑いながら指示された通りに応接室のやってきた私は、部屋に居そろう面々とその衣装に少々度肝を抜かれた。

なんですか、その目が疲れる衣装は。良く言えば煌びやか。悪く言えばげげばしい。部屋にいた人物たち　　イサークと二人の近衛、エイノにユハ　　は揃いも揃って、派手に着飾っていた。

イサークはいつぞや見た、カレーうどんは絶対に食べられない白尽くめの格好で、やはり髪を後ろに撫で付け、いかにも精悍な王子様といった風貌だ。それはもう白馬に跨っていない事が不自然に感じる程に絵になっている。

近衛達とユハは揃いの紺をベースにした服に身を包んでいた。首の詰った上着は膝ほどまでの長さがあり、腰の位置から両サイドがパツクリと割れている。色自体は地味な色だが、縁という縁が銀系で彩られて鮮やかなその対比が本来紺色の持っている地味さをきれいさっぱり消し去っていた。それに加えて細身のズボンも真っ白で、上着の上から巻かれた腰帯は手の込んだ美しい刺繍入り。何より目立つのは肩から足元まである紺色のマントだ。縦に長く横にガツシリとした骨格の男3人が紺色のマントをぶら下げて立つ様は圧迫感がある。格好いいと思うが暑苦しい。長すぎだ。私が羽織ればカーテンを巻きつけて遊んでいる子供に見えるぞ。

そしてエイノだが、どちらの女神様ですか？と聞きたくなるほどの美人っぷりだった。色はいつもと同じ白だが、使われている布の量は大幅にアップしており、丈も袖も足首までの長さがある。金糸と銀糸で彩られた丈の長い袖なしの上着を真珠のような宝石が縫いこまれた帯で留めていた。金茶の髪の一部は複雑に結われ、僅かのうねりもないその毛先は結われない髪に沿うように肩におろされている。なんとというか、貝殻の中から出てきても驚かないと思う。

王子様、騎士様、女神様、を地でいく衣装でびしっときめた5人に対し、私はせいぜい避暑地のお嬢様どまりの部屋着なわけで。

こねって新車の嫌がらせですか？　ねえ？

## 55 ツイメンの思惑 (8)

「お喜び申し上げます」

私に向かつてエイノは恭しく頭を下げた。その動きに合わせて絹糸の如き髪が流れるように肩からすべり落ち、足首まである長い長い袖が床に広がった。床に堆く積もっていた埃はなくなっており、美しく磨き抜かれた乳白色の石の床に純白の布がするすると伸びていく。

深く頭を下げた後、ゆつたりとした動作で顔を上げたエイノに、私は思わず問いかけていた。

「は？ 何が？ ……ですか？」

部屋が静寂に包まれた。

近衛達は呆れと侮蔑の混じった顔で私を見て、イサークは訝しげにエイノを見る。ユハは穏やかな笑みを浮かべてはいるがその肩は細かく震えていた。

なんとも言えない空気の中、エイノはいつもと変わらぬ能面のような無表情で私を見据えて口を開く。

「これより三月と三日の後に執り行なわれます大札に於いて、またそれまでの期間、御身を聖獣ユーンの乙女のお一人にとの、御託宣が御座いました」

何を、言っているのですか？ 私はエイノに目で問うが、無論親切に教えてくれるエイノ神官長ではない。すつと背筋を伸ばし、懐から書簡を取り出すと、朗々と読み上げ始めた。

「サカキ・ケーコ。女神ヴェラーモに選ばれし穢れなき乙女。女神

の御使いユーンのお傍にあつて、その荒ぶる心を宥め、その清浄なる身を清め、また、その

書簡の内容を説くエイノの低く魅惑的な声を、私は他人事のように右から左へと聞き流していた。

大礼、大礼、  
大礼！

私は頭を抱えなくなった。フォルセルに次いで鬼門の言葉だ。

それはもう、ツイメンのお姫様の参加が決まって落ち着いた話なのではなかったのか。少なくとも私にとっては過去の話だというのに。なんでまた出てくるんだ。

それに何その御託宣つて。どこから女神が出てきたんだよ！ 政治色にとっぷり塗れた駆け引きで決まるんでしょ。というか既に決定済みじゃなかったんですか？ ああ？

乙女としての心構え…… というより仕事内容が書かれた書簡を淡々と読んでいくエイノを睨みするが何の効果もなく、助けを求めるように視線を彷徨わせると、イサークと目が合う。

恐らくずっと私を見ていたのだろう、先ほど見た精悍な王子様らしい毅然とした顔はなく、眉を寄せ気遣わしげな表情を浮かべ、私と目が合うと気まずげに微笑む。

頂垂れた耳と尻尾が見える気がする。心細さを訴えるような憂いを帯びたその様子に、母性本能という名のおばちゃん根性を刺激されて、つい安心させるように微笑み返してしまった。

途端に、花が綻ぶように満面の笑みを浮かべたイサークを目にして、自分の犯した失敗に気づいた。

乙女？OKOK。突然でちょっと驚いたけど、もちろんひきつけますとも！ と、とられた気がする。

弁解しようと口を開きかけるが、吸い込んだ空気と共に飲み込んで。少年らしい素直な笑顔を向けられて今更、「今のは無しでお願いします。やっぱり乙女なんて無理ですから！」とは言えない……。というか女神の御託宣なんて言っている時点で私に拒否権は無

いのだろう。

書簡を読むエイノの声が途切れるとユハが進み出て小さなナイフを差し出した。

何それ。血判でも押させる気か？

柄の部分に蔦と桜のような花卉を持つ花の彫刻が施された、切れ味の悪そうなナイフを向けられ、思わず後退してしまう。

「御髪をいただきます」

エイノは短く告げると耳の横に垂らされた髪を一筋すくい取り、刃をあてた。

血じゃないのか。ほっと息をつきかけるが刃を当てられた箇所を目をやって唾然とした。待てい。そんな目立つところを切るな！

制止の言葉をかける前に思いのほかい切れ味を發揮してさつくり髪がそぎ落とされ、短くなった髪が頬にはらりとかかった。髪は女の命、とまでは言わないが。ほうつといたら伸びるし。けど、伸びるにもそれなりの日数が必要なわけで……。非難を込めた眼差しをエイノに送るが、それに気づいているのかいないのか、エイノは相変わらず能面のように無表情だ。

エイノの辞書には、思いやりや気遣いといった言葉はないらしい。切られた髪を横目で確認し私はため息をついた。

切り取った髪を和紙のようなしなやかで厚みのある紙に包み深々と一礼したエイノが下がると、待っていたようにイサークが私の前に進み出た。

「ユーンは女神ヴェラーモが御遣わしになられた聖なる獣。その気性は難しく孤高の存在ではあるが、サカキならばきつと気に入られる事だろう。気負わずに励んでほしい」

「……………はい」

「不揃いになってしまったな」

イサークは切られた私の髪に痛ましげな視線を送り、手を伸ばして軽く梳くと、何かを思い出したように口元を緩めた。

「この国では結婚するとその証に互いに髪を切って贈りあうんだ。サカキの国では何かしないのか？」

「指輪を贈りあって左手の薬指にはめますが………」

「そうか。いい風習だな」

ここの女性は何かと髪を切られて大変そうだな。それを思うと指輪の交換は些細ではあるだろうが経済効果もあっていい習慣なのかもしれない。

一旦口をつぐんだイサークは、足元に視線を落としたあと、しっかりと私を見据えた。口元には楽しそうな笑みが浮かんでいるが、その目には真摯な熱が宿り、ぎくりとさせられる。

「俺は今日で16になった」

「え？それはおめでとございます」

何を言われるのかと身構えた私は、脈絡のない急な話題の転換に驚いた。誕生日はめでたいが、なぜ急にそんな話をしだすのか。いぶかしむが続く言葉と行動に意味を悟った。

「サカキの国では16から婚姻を結べるんだったよな」

そういうとイサークは私の左手をとって薬指の付け根に親指を当ててそつと撫でる。

そういう、ことですか。

イサークの熱い眼差しと、ギャラリーの視線に私は頬に熱が上がるのを自覚した。返す言葉に窮して、イサークを見ると、その目の

ふちがうつすらと色づいている事に気づく。どうやら本人も照れているらしい。可愛いな。けどどうするんだよこの雰囲気。部屋を満たす甘酸っぱく、こっぴどくさしい空気に益々頬が熱くなる。こんなに赤面するのは何年ぶりだろうか。誰かこの間をどうにかしてくれ。目の前のイサークから視線を外したいが、他の人間と目が合えば、もっと恥ずかしい。どうにも身動きがとれないでいると、イサークが明後日の方向を向いて咳払いをする。

「あー、俺はもう行くから………体をいたわれよ。じゃあな」

さつと手を離すとその手で整えられた髪をかき回し、マントをなびかせ扉へと向かう。

ようやくこそばゆい思いから開放された私はほっと息をつくど、去っていくその背中に声を出さずに語りかけた。

すまん。男性はこの国と同じ18歳からなんだよ………。



56 ツイメンの思惑 (9)

「御可愛らしいことだね」

くつくつと震える声で言葉をかけられ、私は声の主を振り返った。この男は 人事だと思って楽しみやがって。緑の瞳を楽しげに細めて肩を振るわせるユハを冷たく眺めてからエイノに視線を移す。イサークの手前、平静さを保ってはいたが、後から後から湧き上がる苛立ちに任せて、声を荒げてエイノを問いただした。

「どういう事ですか！ どうして私が乙女に選ばれているんですか。御託宣って何ですか。そんなものないんでしょう！？」 嘘っぱちもいいところじゃないですか」

何時もどうして何も言わないんだよ。私が側室になる事に反対だと言っていたじゃないか。余計な軋轢を生むだけだと。私の事を案じてくれているようだったあの言葉は嘘だったのか？

「暗黙の了解というやつだ」

低くもらされたその声に不満が募る。まったく説明になってないわ。

「わかりません」

面倒そうに息をつくときエイノは口を開いた。

「本来、乙女は神の声を聞くことが出来るという神官が選んでいたそうだが 詐称だろうがな。しかし、ある代の王が役目を終えた

乙女を妃にお迎えになつてから、乙女の中から正室か側室を選ぶのが慣例となつた。以来、候補を選ぶのは家臣。決定は王が下す事になつた。現王は王太子である殿下にお任せになられているから、この度の場合は殿下となるが。しかし表向きには女神の御託宣により決まるという事になつておるのだ。実際に民の多くはそれを信じている」

有難い御託宣もあつたものだ。民衆が信じる神も大礼も一皮向けば欲と俗にまみれているつて事ですか。ああ、やだやだ………つて、いや、私が聞きたいのはそういう事じゃなくて、

「それで、どうして私が選ばれたんですか？」

「欠員がでた」

私は補欠か！ なんだろう納得がいかない上にそう高くないと思うプライドに傷がついたぞ。

「乙女は多くて30名前後。最低でも12名が必要とされる。殿下はその最小人数たる12名しかお選びにならなかつたのだ。名誉な上に実益の大きい役目であるから、今まで辞退する者などいなかったのだが……。さる伯爵のご息女が自分には資格がないとご辞退されてな。一人足りなくなつたのだ。期日まで日がなく貴族達は互いに足をひっぱりあつて碌に根回し出来ぬ間にサカキ、殿下がお前をお選びになつて、乙女にと押し通されたのだ」

なんて事だ。私は自分の早計さを呪つた。………辞退、出来たのか。

一人足りなくなつて、選びなおす時間もなく、私を押ししたイサークの案が通つたと。通したと。つまりエイノさんよ、あなた私の庇護より自分の仕事の潤滑さを優先させましたね？

自分とエイノと、多分無関係だけどユハへの鬱々とした苦い思いに額を手で覆う。イサークには申し訳ないが、面倒事は避けたいというのに。

いや、待てよ。資格がなくて辞退したって事は今からでも辞退出来ないだろうか。資格をなくせばいいんじゃないか？

「資格って何ですか？ その伯爵令嬢より私の方が余程ないんじゃないでしょうか？ シルヴァンティエの人間じゃないし、何より身分もないですし」

「そのような問題ではない。広く民衆からも乙女の候補者が出ていた時もあったのだ。資格についてお前が案ずることはない」

なら、どんな問題なんだ……伯爵令嬢になくて私にある資格。何？ ああもうっ、分からない。

「殿下は伯爵令嬢が辞退される事を知っていたのかも知れないね」

今まで黙って話を聞いていたユハが口を挟む。

なんだって？ 聞き捨てならないその言葉に驚いてユハを見た。同じくエイノも訝しげな視線をユハに向けている。どうやらエイノにとっても初耳の事らしい。

「ご令嬢の事は少し噂を聞いた事があってね。ごく一部の者にしか回らなかったようだから……殿下をご存知だったとは思っていません。思ったように、いや、殿下がこんな奸計をめぐらされるとは思わなかったよ」

思わなかったよ……っていけしゃあしゃあとよくも言えたものだ。その噂を知っていたって事は遅かれ早かれ欠員が出るのも知っ

ていたんだろうに。

唇を吊り上げ声を上げて笑うユ八に、目の前に置かれた椅子を投げつけたい衝動に駆られ、それを耐える為、手近にあった空の花瓶を手に取り投げた。

「おっと」

片眉を上げて花瓶を危なげなく手で受け止めると、なおも笑い続けるユ八を見て重量感のある熊の置物に手を伸ばす。

「……………サカキ」

諫めるように言い、エイノは首を静かに左右に振る。

「乙女に選ばれた事は何もお前にとって悪い事ばかりではない」

熊に手をかけた状態で私はエイノに据わった目を向けた。

「乙女の選出が政治的な意味合いが強くなった頃に、乙女の一人が暗殺されるという事があった」

そのどこが良い事なんだよ。熊に置いた手に力を込める。

「同じく身内から乙女を輩出していた政敵の手によるものだった。以降、乙女の内の一にでもその身に危害が加わる事があれば、凶兆として全ての乙女を入れ替える事になったのだ」

「乙女の総入れ替えを狙って犯行に及ぶ人が出るかもしれないじゃないですか」

「乙女に選ばれるのは何れも名だたる時の権力者の親族。幾人もの有力者を敵にまわそうと思うものなどおらぬ。乙女でいるのが一番

安全なのだ」

……………安全第一。それは賛成だ。けど、これでイサークの側室へ一歩近づいてしまったじゃないか。いや、信じていますよ。無理強いをする人間じゃないと。けれど足がかりを作られてしまったのは確かで……………ああもう、どいつもこいつも禄でもない！

### 閑話

「ところで、せめて事前に乙女に選ばれた旨を伝えてくれても良かったんじゃないですか？私にも心構えというものがいるんですけど」

服装とかね。

「表向きとはいえ女神の御託宣で決まるとなっているのだ。事前に知らされているのはおかしいではないか」

「という建前で、皆、御託宣を伝える使者を出迎えるのに派手に着飾ったりはしないんだけどね。けれど、それとなく知らされてそれなりの対応をするんだよ。部屋着で受けたのはサカキちゃんが初めてじゃないのかな」

エイノめ。私は熊を手にとると迷わず投げつけた。ひらりと振られた白い手が見えない壁をつくり、熊をはじく。

「サカキ」

疲れを滲ませため息をつくとき、エイノは私の頭を軽く撫でた。

「そう怒るな。大礼の神事はつまらぬものだが、聖獣は乙女以外は

触れる事のできぬ素晴らしい珍獣だ。何事も経験と想つてみよ」

エイノの言葉にユハはまた声を上げて笑い、私は怒りも忘れて呆れかえった。

神事がつまらぬって、神官がそんなこと言っているのか？ しかも仮にも女神の御使いたる聖獣を珍獣って言い切っちゃいましたよ。この人。誰だよ、エイノを神官長なんて座につけたのは！

## 57 ツイメンの思惑 (10)

心ならずも栄えある乙女に選ばれてしまった翌日から、私は外出を許されるようになった。

窓のない警備の厳重な部屋に移されたイサークとの勉強会にも参加し、レーヴィの補習を受け、昼食を挟んで午後からは屋敷で乙女として恥をかかないようにと簡単な作法を教わり、夜にはエイノの部屋で解読に励むふりをする。

シルヴァンティエにやってきた当初の暇さが恋しくなる程の忙しさだ。何もする事がなかったあの時は退屈でたまらないと感じていたが、実際に忙しい日々を過ごし始めると、やはり暇なぐらいがいい。と思ってしまう。ないものねだりだな。

ちなみに作法の先生はセバスチャンさんが引き受けてくれる事になったのだが、これが地味に厳しい。声を荒げる事は決してなく、静かに礼儀正しく忍耐強く教えてくれるが、妥協というものが一切ない。完璧主義者は教師には向かないと思う。

優雅な礼の仕方や美麗に見える手先の動きをマスターすべく普段使わない筋肉を酷使しているおかげで私は毎日筋肉痛に悩まされていた。

そんな生活が始まって9日目の晩、私は不可解な体験をした。

その日、夕食後に襲ってきた猛烈な睡魔に勝てず、私はエイノを待つことなくベッドへと入った。明日の朝、エイノに会えば解読の手伝いをサボった事を咎められるかもしれないが、そんな事はどうでもいい。そう思う程に眠たかったのだ。

連日の過密スケジュールとセバスチャンの穏やかなしごきに私の体は疲れ切っており、ベッドに横になって5分とたたない内に眠りは訪れた。

夜半、ふと意識が浮上する。体の欲求のままに安眠を貪る私のその深い眠りを揺り動かすように、誰かが髪を梳き、手の甲を滑らせ

て頬をなでた。羽のように軽く優しく触れる感触にうっとりとして  
いると、手がゆるゆると首元に下りていく。新たにもう一本の手が  
加わり、共に首に添えられた。

私はぎくりと体を強張らせた。

殺される。

二本の手が私の首に巻きつき、力を込める。絡みつく指を取り除  
こうと腕を上げようとするが、私の体は、腕はおろか指の一本も、  
瞼さえも動かすことが出来ない。かわりに全身から嫌な汗があふれ  
出す。喉もとを覆う手がそっと、私の首を持ち上げた。氣道を歪め  
られ、私は息苦しさにあえいだ。  
このまま死ぬのだろうか。

嫌だ。死にたくない！ 生を渴望する気持ちと、体が動かないの  
だから仕方がない、とまるで他人事のように諦める気持ちが奇妙に  
入り混じる。

が、そこまです。首を絡め取っていた指が離され、私の頭は  
再び枕へと沈む。頬に砂が零れ落ちるようなさらさらとした感触が  
したかと思うと、唇の上を掠めるように何かに触れ、離れていった。  
緊張を解いた私の意識は次第に薄らぎ、再び眠りに落ちる。

カーテン越しに薄っすらと差し込む日の光に、私は飛び起きた。  
背中がぐっしょりと汗に濡れている。手の感触を思い出し、喉を撫  
でさすり、鏡の前へと向かう。

「何もない」

首には何の痕跡もなかった。慌てて部屋を見回すが、夜、ベッド  
に入る前と何も変わらない。念のため全ての窓を見て回るが、鍵は  
閉められたまま。

夢。だったのだろうか？

釈然としない気持ちを残し、私は普段どおりの朝を迎えた。

碌でなしの筆頭、レーヴィが碌でもない話を引っ提げて屋敷にや



つてきたのは、不可思議な夢を

夢なのかすら分からないが

見たその日の朝食時の事だった。

私とエイノが無言で食卓を囲んでいると、トゥーリに案内されて、寝癖のついた髪を無理やり一纏めにしたレーヴィが食堂に姿を現す。

「おはようございます」

人好きのする笑顔で挨拶をするとレーヴィはエイノの許可をとり私の前の席へと腰かける。トゥーリが運んできた暖かい飲み物に口をつけながら、エイノに向かって近頃の私の授業内容を話し始めた。

気分は三者懇談だ。

余り朝に強くない神官長様は、気だるげに話を聞き流していたがレーヴィは気にする事無く朗らかに笑みを交えて語りかけていた。これが演技だというのだから実に惜しい。

胃が痛くなること請け合いなこの朝食の席からさっさと退散するべく急いでデザートを食べ終え席を立とうとすると、ほんの一瞬レーヴィからぞっとするような無口としての視線が投げかけられ、私は強張った体を椅子の上へと戻した。

「さて、サカキさん。食後のお茶を飲み終えたらいきましょうか」

「え？」

何処へ？と口に出しかけた私にレーヴィが再度鋭い視線を飛ばす。

「え、ええ。そうですね。はい」

私は言葉を濁して呟くように言い、俯いてテーブルの上に置いた手を見た。

ああ、嫌な予感がする。今度は一体何をするつもりなんだ。

「兵は屋敷の前に待たせてある。気をつけていけ」  
「勿論です。良かったですね、サカキさん。許可がおりて」

心から嬉しそうに私に言葉をかけると、レーヴィは人の良い笑みを浮かべた。

何の話だよ。

どうやら、どこかへ出かけるつもりらしいが、何が何だかさっぱり見当がつかない。しかし一つだけはっきりしている事がある。ついて行けばとんでもない事に巻き込まれる。これだけは確かだ。

「あ、あの、とっても楽しみにしていたのですが、なんだか急にお腹が……………」

咄嗟に腹痛を訴えて外出を回避しようと口を開くと、レーヴィは胸の前で組んだ手の中にすっぽりと収められた小さな黒く鋭い刃物を、エイノに見えぬようにちらつかせる。私は息を吞んで続く言葉を変えた。

「……………いつぱいになりました。もう満腹です。食べられません。ごちそうさまです」

おかしな物言いにエイノが微かに眉を上げて私を見るが、曖昧に微笑んで誤魔化すぐらいしか成すすべがない。

「見頃に間に合って良かったです。エイノ様のお許しがなかなかいただけないものですから、散り始めるところでしたよ。エイノ様は本当にサカキさんを大切に思われていらっしゃるんですね」

にこにここと嫌味な程の笑顔を浮かべるレーヴィを、エイノは眉根を寄せて見てから、おもむろに席をたち、「失礼する」と言い残し

て食堂を出て行った。

エイノの足音が遠ざかり侍女さんが戻ってくる気配がない事を確認して私は口を開く。

「何の話ですか？」

「この辺りでしか咲かない大変珍しいタピオの花が見頃です、城からそう遠くない場所で群生している場所を見つけたのですよ」

その花がどうしたっていうんだ。無言で先を促せばレーヴィは機嫌よく説明を続ける。

「植物学に造詣が深い僕の話聞いて、すっかり興味をもったサカキさんがしきりにタピオの花を見たがっていると予てよりエイノ様に外出の許可を御伺いしていたのです。サカキさん達での願いで、ね」

誰が、何時、どこで、そんな願いを口にしたと？ タピオの花も植物学の話も何もかも今初めて耳にしたんですけど。

「何が狙いですか」

「単なる息抜きだよ。近頃忙しそうだったから。僕の好意」

いつの間にかレーヴィの仮面を脱いだ無口が、手にしたお茶の入ったカップの向こうで目を細めて笑う。その笑顔に潜むものに背筋がひやりとする。

「好意なら不意打ちにする必要なんてないでしょう……」

「僕が普通に誘ってもこないでしょ」

当然だ。どこまでも悪びれない態度の男に私の常識が追いつかな

い。

「やだなあ。誰もあんたに危害を加えようなんて思っていないよ。乙女のおんたを殺して、相手構わず喧嘩を売る度胸なんて僕にはないからね。今乙女に手を出せば、王子にシルヴァンティエの権力者達、加えてツイメンまで敵にまわす事になるんだよ？ 今のおんたは何重にも守られている状態なんだから、そんなに警戒しないでよ」

「で？」

何が、狙いなんですか？」

深いため息と共に問えばレーヴィはけらけらと笑った。

「信用ないなあ、僕」

あると思うのか？

芝居がかった仕草で頬をかくレーヴィの愉しげな瞳に、これから起こるであろう惨事を想像して身震いした。

馬車の中にはレーヴィとライアンと私。御者台には御者とクリフト。馬車は快調に森の中を細く長く続く道を走っていた。以前に街に出たときに乗った黒塗りの馬車によく似た馬車だが、外装も内装もこちらの方が少し豪華になっており窓も大きい。

乗り込む時に扉の脇に、ローマ字のHに似た紋様がついているのを見つければ、これは何かと聞いたところ、乙女が乗車している証であると教えてくれた。つまり、「おい、てめーら、この馬車には大切な乙女が乗ってんだから手えだすなよ。もし襲ったら地の果てまで追い詰めて、殺してくれと泣きをいれるほど後悔させてやるからな」という脅しになるらしい。便利なことだ。

馬車の外は鬱蒼とした木々が生い茂り、森の奥から時折小鳥の囀りが響いてくる。レーヴィとの補習で習ったとおり、城のまわりは森で囲まれているようだ。しめ縄をまいて拝み倒したくなる程の大本が林立していた。城を出て10分程までの森は人の手が入っていないのか、適度に枝がはらってあり、陽の光が地表まで届いていたが、さらに倍の距離を進んだ現在は道の中央に疎らに木漏れ日が届く程度で、辺りは薄暗い。

地面を慣らしただけの道は馬車を揺らし、私の胃をかき混ぜる。吐くときは左隣に座るレーヴィを向こうと私は密かに心に決めていた。

しかし、残念な事に私の胃が限界を迎える前に目的地に到着したらしい。馬車はゆっくりとスピードを落としていき、やがてその歩みを止める。

「ついたようですな」

レーヴィに手をとられ馬車を降りると、揺れない足元にふらつき、

その胸の中にしっかりと抱えこまれた。顔をあげると上背のないレーヴィの顔がすぐ近くにあって、反射的に仰け反ってしまう。

「大丈夫ですか？サカキさん」

心配そうな声音とは裏腹に、私にしか見えないその顔には小ばかにしたような意地の悪い笑顔が浮かんでいた。本当に器用な奴だ。

「ここからは徒歩になります。足元に気をつけて下さいね」

私の手をとりレーヴィは森の中へと入って行く。

手をつなぐ相手を他の人に変えてもらえないだろうか。………もらえませんか。

後ろに続くライオン達に悟られぬように、レーヴィの腕から手を抜き取るうとするが、そうは見えないのに、がっちり強い力で挟まれて果たせなかった。

巨木の根に足を取られてすこぶる歩きづらいが、空気は澄みきっていて気持ちがいい。どこからともなく聞こえてくる小川のせせらぎ。頭上を覆う木々の深い緑。苔むした木の皮。枝を縫う様に絡みつく蔦。日本にいた頃に憧れていた森林浴を満喫中だというのに、全く嬉しくない。

レーヴィに手を引かれたまま歩き続け、緩やかな流れの小川が視界に入った時、どさっどさっ、と重たいものが二つ、地に落ちるような音がした。後方から聞こえたその音に、嫌な予感が………いや既に予感ではなく確信をもって首を回して見れば、力なく崩れ落ちたライオンとクリフトの姿があった。

「やっぱり~~~~~~~~!!」

私は思わず絶叫していた。

もちろん、何かあると思っていましたよ。楽しくお花見をして終わるだなんてこれっぽっちも思ってもみませんでしたよ。けれど、護衛がこうもあっさりと真っ先に倒れてしまうのは正直予想外でした。

ここは視界の遮られた深い森の中。護衛は倒れ、馬車からは離れた隣にいたのは暗殺者。さて、どうしましょう？

どうもこうもあるか！ 取りあえず逃げる！

未だ絡めたままのレーヴィの腕を振り払おうと力を込めたとき、信じられないものを、私は見た。

驚愕に目を見張る私の前に、鈍く銀色に輝くお面が木の陰からゆったりとその異質な姿を現す。

……………何で。

生きているんだ？ 植え込みの陰で毒を飲み息絶えた状態で見つかったのではなかったか。

ここは視界の遮られた深い森の中。護衛は倒れ、馬車からは離れた隣にいたのは暗殺者。前にいるのも暗殺者。もう、どうしろっていうんだ。

「何がやっぱりですか。走って！」

「ぎゃっ」

呆然としていると唐突に腕を引かれ、木の根に足を取られて転びそうになるが、それすらも許さぬ力でひっぱり上げられ、走らされた。水しぶきを上げて小川を横切り1本2本と太い木の枝を潜り抜けると、小さな黄色い花が畳4畳程の広さで地を覆う空間へと出る。この場だけ森が切り取られたようだ。頭上を覆う背の高い木も、光をさえぎる葉もなく、燦々と太陽の光が花々へと降り注ぐ。これが、タピオの花なのだろうか。可憐なその姿にうっとり……………している暇はない。

「ちょっと！ どういうつもりですか！」

花畑の中央まで来て歩みを止めたレーヴィの手を振り払い、私は抗議の声をあげた。

あいつは同じツイメンに雇われた暗殺者仲間じゃないか。何故レーヴィまで逃げる必要があるというのか。へっへっへっ逃げられるところまで逃げてみな子猫ちゃん的な悪趣味な余興でもやらせるつもりなのか。

レーヴィは私の抗議など耳に入れるつもりもないらしい。いつの間に取り出したのか。朝食の席で見かけた黒い刃物を左手に持ち、右手を伸ばすと私の襟首をつかんでくると体を反転させる。レーヴィに背を向けた状態になった私の首に右腕を巻きつけ、左手の刃物を首に突きつけた。

首に当たる冷たい感触にごくりと喉を鳴らす。黒光りする小型の刃物はいかにも切れ味が良さそうで、その些細な動作でさえ皮膚を切り裂きそうで恐ろしい。

「止まってくれる？」

レーヴィの言葉に後を追ってきたお面男が花畑の入り口で動きを止めた。

何。これ？ いまいち状況がつかめないんですけど。死んだと思っただお面男が現れたかと思ったら、仲間割れですか？

「やっぱり、現れたね」

「……………その女を放せ」

「放せと言われて放す馬鹿がいると思う？」

そうだね。いるわけがないね。



59 ツイメンの思惑 (12) (前書き)

暴力描写あり。ご注意ください。

59 ツイメンの思惑 (12)

「何が目的だ？」

お面越しにくぐもった声がレーヴィに問いかける。

「目的は、もう達成できたよ。あんたをおびき出したかったんだ」

え？ そうなの？ さっぱり話が見えないけど達成できたんなら、放してもらえないだろうか。

「あんた達、何者なの？ 狙いはなに？」

あんた達？ たちって、お面男と私がひとくりですか？

少しでも刃物から首を遠ざけようと、自然と顎をあげていた私は、言葉の真意を探るためにレーヴィの顔を見ようとして後ろに首を傾けた。

ぷつり、と肌を裂く音がして生暖かいぬるりとした液体が首を伝う。

「馬鹿。動くな！」

軽率な行動だったのは認めるが、恥ずかしげもなく幼児向けヒーローのお面を被るような人物に馬鹿と言われたくない。というか、お前は何なんだ。この間は私をナイフで襲ったくせに。今は私の身の心配か。

「そいつを、放せ」

じりじりと距離を詰めようとするお面男を威嚇する為か、レーヴィは喉元の刃物を食い込ませる。下を向けないせいで見えないが、流れ出る血の量が僅かに増えたのが肌を伝う感触でわかった。

「ねえ、あんた。フォルセルの呪術師なの？」

「狙いは王子様？ それともユーンかな？」

レーヴィの問いにお面男は否定も肯定もせず沈黙するばかり。

「答えてほしいなあ」

本当に、答えてほしいなあ。私の首がかかっているんですけど。レーヴィなら「答えてくれないならいいや」とすぱっとやりかねない。

首からしたたる血が服の胸元を濡らしていく。膠着状態に陥った二人の睨み合いは、突然終わりを告げた。

いちはやく何かに気づいたのはお面男だった。ぴくりと体を動かし後方に意識を向けたのが私の目にも分かった。次いでレーヴィが舌打ちをして、私を突き飛ばし、後ろに下がる。

ああ、そうか。

舌打ちの音を聞き、私はお面男に襲われた、あの雨の夜の事を思い出していた。兵士が近づく音を聞いて舌打ちをしたのは、お面男だとばかり思っていたが、レーヴィだったのだな。

突き飛ばされた勢いでお面男の前に倒れこむ私に、男の手が伸ばされる。しかしその手は、私に届く前に突如出現した光の壁によって阻まれた。

これって。

「サカキ！」

この場にいるはずのない人物の声に名を呼ばれ、その方角をたどった私の目に、枝葉を掻き分け、あるいは剣で切り払い駆け寄るイサークとユハの姿がうつる。そして、その後方に腕を掲げて歩くエイノの姿が見えた。あの小川を越えてきたのだろう。白い神官服の踝まである長い裾が水分を含んで足に纏わり付き、なんとも動きづらそうだ。森の中をその服で進むのは無理があるだろう。TPOに応じた服装を心がけてはどうだろうか。

イサークはエイノの張った結界の前に立って私を背に庇うとお面男に向かって剣を構え、さらにそのイサークの前にユハが身を置く。日の光を反射して光る鋭い切っ先をお面男に向けて。

「……………おい、こら君達。相手を間違っただけか？ いや、でもお面男が味方ときまっただけでもないし。どうしよう？」

私が対処に悩んでいる間にも、ユハは厚みのある長剣を、その重さを全く感じさせない動作で振り上げ、目にも留まらぬ速さでお面男に向かって振り下ろしていた。

対するお面男は腰の後ろから小ぶりの剣を引き抜くと振り下ろされた剣を滑らすように受け、後ろに飛ぶ。その動きを見越していたかのように大きく右足を踏み出し間合いを詰めたユハが、流されて下方にあった剣で一気に切り上げた。

上体をそらして間髪避けたお面男の髪が数本、宙に舞う。体勢を崩したお面男にユハが畳み掛けるように剣を振り下ろした。ギンツ。重く、鈍い音が響く。左手を刃にあて、ユハの剣を受けた男は体制を立て直す事が出来ず背を地につけていた。

金属がこすれあう耳障りな音。お面男は剣を押し戻そうとするが、ユハの力が勝っていた。見る間にお面男に交差した剣が迫る。

「くっ」

お面男の口から苦しげな声が漏れた。

お面男は柄を持った右手に力を込め、ユハの剣を刃の上を滑らして左へと流す。自身の肩に剣の切っ先が触れる寸前に体を捻って逃れた。しかし、両手に持っていた剣を左手一本に移したユハが、その柄を強かにお面男の腹に打ち据えた。溜まらず腹を抱えて蹲るお面男の手から剣が零れ落ちる。その背をユハが容赦なく膝で押さえつけ、さらに右の手の甲に剣を突き立て地に縫いとめた。

「うわあ」

間の抜けた声を出したのはお面男ではなく私だった。あまりに痛そうなお面男の情景に眉をしかめる。

押し殺したうめき声をもらすお面男はそれでも抵抗しようと、左手を落とした剣に向かって伸ばすが、遭えなくユハに腕を取られ背に向かって捻り上げられた。

すっかり体の動きを封じられたお面男に、エイノが歩み寄る。男の前に片膝をついて屈むと、銀色のお面に手をかけた。

栗色の髪を細く頼りないゴムがすべり、面が剥がされた。

お面の下から現れたその顔に、私は目を疑った。余りにも見知った顔だったから。

シルヴァンティエにやってきた当初から、仕事とはいえ明るい笑顔を決することなく世話を焼いてくれていた。そそっかしさに呆れる事もあったが、それでも私はこの世界での数少ない知り合いである彼女を憎からず思っていたものだ。

信じられなくて、食入るように見つめるが、苦痛に歪むその顔は間違いなく、

トウリーだった。

男ものの衣服に身を包み、いつもは内巻きロールの髪を無造作に

後ろで纏め、化粧を施していないその姿は、中性的で一見では性別の判断がつかない。

男装の麗人か女装した少年か。考えて思い至る。トウーリがこれまでに犯していた天然とも思える失敗を。そして、先日の風呂場での様子を。思い返せば着替え等で肌を見せる時にいつもトウーリはいなかった。

男か……………え？ トウーリが男という事は。

「サウルさん！」

「サウル……………」

「サウル殿」

「サウル!？」

エイノを除く4人の声が同時に響いた。

## 60 ツイメンの思惑 (13)

トウーリが男。

恋人関係にあった、医術師サウルがそれに気づかなかったとは考えにくい。特殊な趣味の人間で理想の相手だった、という可能性もないではないが、城という安全面において気を配らねばならない場所で働く人間が素性を偽っていたとなると、ちょっと無視できない問題だろう。それを庇ってまで己の趣味を優先させるような人間とは思えない。私の知るサウルは恋情に流されるようなタイプではなかった。ということは、サウルはトウーリと同じ何らかの目的を持つ仲間である、という事になるのではないか。

イサークやユハ、レーヴィも皆一様に複雑な表情を浮かべていた。おそらく私と同じ結論に至ったのだろう。

唯一声を上げなかったエイノを見て、私は軽く息をついた。その冷静さから声を上げなかったのではなく、どうやらサウルとトウーリの偽りの仲を知らなかったようだ。訝しげに眉根を寄せて私達を見回していた。15歳……16になったんだっただか、歳若いイサークでさえ知っていたというのに。他人にも色事にも興味がないのかね。

「反応するな」

エイノの浮世離れっぷりに呆れる私の耳に、突如、懐かしい響きが飛び込んだ。

言葉の意味を理解する前にエイノに向けていた視線を声の主

トウーリに向けていた。愕然として注視してしまっただから、ようやく吐かれた言葉の意味するところを解して臍を噛む。

『反応するな』そう、日本語で言われたというのに思いつきり反応してしまった。

「馬鹿野郎。反応するなと言っただろうが。いいか、俺の言葉を理解していると悟らせるな」

早口に日本語でまくし立てるトゥーリ。今更視線を外すのも不自然な気がして私はトゥーリの顔を見つめた。

「俺は敵じゃない。あの夜、お前に傷をつけちまったのは故意じゃねえ。その変態を切るつもりが、お前を盾にしてかわしやがったんだ。もう分かっただろうが、そいつは教師でも男爵子息でもない。暗殺者だ。ちったあ男を見る目を養え。この阿呆」

私に対するメッセージと悟らせない為か、目の前のエイノを睨み付けトゥーリは苦しげな息を吐きつつも、一気に言葉を紡いでいく。しかし、人が言い返せないのをいい事に、馬鹿だの阿呆だの言いたい放題だな。

「死にたくなければ自分の身は自分で守れ。俺はもう手を貸してやれない。ついた嘘はつき通せよ。王子の信をなくすな」

「……………呪か!？」

どこかぼんやりとトゥーリを眺めていたエイノがはっとしたように口を開いた。押さえ込まれたトゥーリの額にその白く細い指先を伸ばす。

「それから！俺はこんななりでも少年じゃねえからな。こつ見えても上にいる馬鹿力の女たらしと同じ歳だ。そこんとは絶対に間違えるなよ!」

すごく、どうでもいいです。頬が引き攣りそうなるのを私は必死



で耐えねばならなかった。

トゥーリは言いたい事を言うつと強く唇を噛んだ。歯の間から鮮血が滴り落ちタピオの花を赤く染める。

「我が名はトゥーロ。私の血は流された。契約に従い我が身を狭間へと導け」

エイノの手が触れる寸前、トゥーリの体が霞にかかったかのように白み、

消えた。

背に膝をついていたユハがバランスを崩して前のめりになる。手を貫いていた剣に残されたのはべつとりと張り付く赤い血のみ。

誰もが、動くことも出来ず呆然とトゥーリがいた場所を見つめていた。

空間の転移。1000年前にルードヴィーグが自在に操ったという術。トゥーリ、いや、トゥーロはあの馬鹿賢者と繋がっているのだろうか。

「消えた……か。信じられぬな。転移の術をものにする人間が現存するとは。しかし、なぜ唇を噛んだのか」

掠れた声で誰に聞かせるでもなく呟くエイノ。

……言われてみればそうだな。最後の台詞から術の発動に血を流す必要があったのはわかる。けれど唇を噛む意味が分からない。そんな事をしなくても手からだくと血が流されていたのにな。

しかも、しょうもない情報をはいて行きやがって。確かに、線の細さからイサークよりも若く見えると思っただけけれども、誰も歳なんかに聞いてないわ。15歳だろうが、27歳だろうが、そんな事はどつでもいいんだよ。他にもつと言つべき事があるだろうに。

天然なのは素か！

「殿下。サウルの身柄を拘束する許可を」

真つ先に硬直から立ち直ったユハが、剣についた血を振り払う。鞘に戻すとイサークに向かって膝をつき頭を垂れた。

「許可する。直ちに身柄の確保にあたれ」

「はっ」

ちらりとエイノに視線を送ると、ユハは一人、来た道を駆けていった。

行ってしまった。レーヴィを無視して。ということは、私の首に刃物を当てていたのは見ていなかったのか。うん、まあ結果的にはそのほうが良かったのかもしれないけれど、どうにもやり切れない。

「サカキさん。僕の力が及ばずに傷を………なんとお詫びしていいのか」

心痛に目に涙を浮かべて力ない足取りで私に向かうレーヴィ。ああ、そう。そういう設定ですか。そんなっ。レーヴィさんは何も悪くないです！よよよよ。と、のるべきなのだろうか？

しかしレーヴィが私にたどり着く前にさっといサークが身を割り込ませた。

「レーヴィ。サカキの身に万一の事があればどう責任をとるつもりだ。今後、このような行動は謹んでもらおう」

顎を引き、目を眇めたイサークは、低い声音で告げる。

鍛えられたしなやかな長身を包むは豪華な刺繍の施された純白の衣服。後ろに撫で付けられた金の髪は緩やかなウェーブを描いて肩

に散り、澄んだ湖面の如き瞳は静かに怒りを伝える。不遜な態度が幼さを消し、侮りがたい空気を作り上げている。猛々しい狼の側面を見せるイサークがいた。

「はっ、申し訳ありません」

膝をつき、臣下の礼をとるレーヴィをイサークは悠然と見下ろす。10歳も年下とは思えぬその凛々しい姿に見惚れて、嫌な事に気がついた。その格好、王子様の正装じゃないか？近衛の姿も見えないし。

また、抜け出してきたな。この王子様は……………。

61 ツイメンの思惑 (14)

身を翻し私へと向き直ったイサークは、薄く笑みを浮かべた。腰帯の下から小さく畳まれた白い布を取り出すと、そっと私の首の傷へと押し当てる。柔らかく滑らかな肌触りがくすぐったくて私は微かに身を振った。ああ、このハンカチ。きつとすごく高いんだろ。血の汚れは綺麗に落ちるだろうか。首の痛みよりも純白のハンカチを汚す事になってしまったのが気がかりだった。

「ありがとうございます」

「いや」

お礼の言葉にイサークは首をふって答える。痛ましげな視線に混じる複雑な色に私は首を傾げた。何か、いつもと違う気がする。

「殿下、お早くお戻りになりませんか……」

控えめにかけられたエイノの声に、私のおぼろげな思考は霧散し、布を押さえるイサークは頷いた。

「あの、何か大事な用事があったのですか？」

その正装。事後ならばいいが、どうやらそうではなさそうな雰囲気ではないか。私の問いにイサークは眉を寄せ目をそらしてぼつりと答えた。

「ツイメンの……出迎えだ」

え……。それってまさか乙女になるツイメンのお姫様の出

迎えて事か!? それをすっぱかして来たのか? すっぱかした原因が私だとばれたら、ただでさえ悪い私の印象がさらに悪化するじゃないか。

「も、戻りましょう! 急いで戻りましょう! 外交を疎かにしてはいけません」

イサークの手から布をひったくると、自分で傷口を押さえ、イサークの手を引く勢いで帰路を促した。

エイノを先頭にイサーク、私と続いて馬車への道を辿る。

イサークとユハによって無残に切り開かれた木々の間に足を踏み入れ、ふと後ろを振り返れば、タピオの花が風に吹かれ小さな花弁を舞い上がらせていた。

幻想的なその光景の中に少し遅れて歩を進めるレーヴィの姿があった。珍しく真剣な顔をして何かを考え込んでいたレーヴィは私と目があうと、唇を吊り上げ目を細める。ひつつめただけの温かな色みの髪に無骨な眼鏡。その純朴そうな容姿には到底似合わぬ不敵で皮肉めいた魅惑的な悪魔の笑みに震えが走る。

「サカキ」

私の足が止まった事に気づいたイサークが近寄り、後ろから腰に手を回した。

瞬時にレーヴィの仮面を着けた無口が狼狽したように視線を逸らす。

何だ? レーヴィを見ていた事に立腹なのだろうか。別に、恋しくて見ていたわけじゃないぞ。あの笑顔には少々ぞくりとさせられたが、一度ならず二度までも自分を危険にさらした相手に好意を持てるほどお人よしでも、マゾでもないつもりだ。

腰に回された手をさりげなくほどこうと自らの手を添えるが、逆

に力を強められ息が詰まる。

イサークは右手でしっかりと私の腰をおさえると、左手を首の後ろに這わせ、肩にかかった髪を掻き分けるように撫でた。露になった首筋に吐息がかかり、柔らかいものが押し付けられたかと思うと背骨をなぞるように滑りおりる。

「……………」

寸でのところで漏れそうになった声を抑え、私は唇をかみ締めた。鼻先だろつかすべらかな何かが首をつつく。その何かよりも格段に柔らかな感触をもつ器官が熱い息を吐きながら一度なぞった線の上をはむように上がっていった。

掌にじわりと汗が滲む。まるで回る独楽の上に立たされているように急速に足元がぐらついていく。腰を支えるイサークの腕にしがみつき、膝に力をいれて耐える私のうなじに湿り気を帯びたそれが強く押し付けられてようやく離れていった。同時に腰に回された手が緩み、私は両手で首を押さえて、距離をとりつつ体を捻ってイサークを振り返った。

いきなり何をするんですか。と、そう言おうと思っていたのに、私を見つめるイサークの冷やりとした青い瞳に気圧され声が出ない。

「傷があつた。消毒だ」

シルヴァンティエ人は揃いも揃って嘘つきだ。

返す言葉もなく、ただ平静を保とうと、身に宿った痺れから目を逸らしていると、イサークの肩越しに冷静な顔でこちらを見ているエイノに気づき、羞恥に襲われる。当然、レーヴィからも丸見えだつただらう。やつの事だから見ていないふりをして、胸中でにやつきながらしっかりと視界に納めていたに違いない。

首に手をあてまごつく私に背を向け、歩き出そうとしたイサーク

が一瞬動きを止めた。エイノの視線がイサークに注がれているから、目が合つて気まずい思いでもしているのだろう。

エイノよ。後見人として一言言つてやってくれ。との願いはかなうはずもなく、エイノは何事もなかったかのように前を向く。もう、近衛がいなくてまだ良かったと自分を慰めるしかない。

気恥ずかしさと奮闘しながら、馬車への行程を中ほどまで来たところで、背を木の幹に預けぐったりと目を閉じているライアンとクリフトの姿が目に入った。二人のことをすっかり忘れていた自分の薄情さを深く自省する。

「あの！ この方達は……………」

何かアクションがあるだろうと思つていたのに二人の前を当然のように通り過ぎるエイノに思わず声をかけていた。

「眠らされているだけのようだ。後で救護がくる」

私はほつと胸を撫で下ろして二人の様子を観察した。血色はよく、呼吸も安定している。無意味な殺人はしないと云つていたレーヴィの言葉は信じられないが、エイノの言に間違いはないだろう。

「お二人は無事なのですね。良かった……………」

背後から聞こえる涙交じりの言葉にあいた口がふさがらない。

お前の仕業だろうが！

## 62 ツイメンの思惑 (15)

馬車の傍には葦毛と栗毛の2頭の馬が繋がれていた。イサーク達  
が乗ってきたらしい。エイノが馬に乗れるという事実にならな  
驚きを覚えた。乗馬や運動等とは無縁そうなのにな。こちらでは馬  
に乗れないと死活問題なのかもしれないが、どうにも華麗に馬にま  
たがるエイノの姿が思い描けない。

イサークの愛馬が白馬でなかった事に少々落胆しつつ、何故か私  
は4人で馬車に揺られていた。

私の前には足を組んで顎ひじをつき、ずっと窓の外を眺めている  
イサークが座っており、その横に目を閉じて寝ているんだか瞑想し  
ているんだか、微動だにしないエイノが腰を据えている。エイノの  
前、つまり私の隣ではレーヴィが引つ切り無しに首の傷を心配する  
ふりをして声をかけてきていた。非常に鬱陶しい。

何やらずっと不機嫌なイサークと、いつも通り無愛想なエイノと  
の同乗は気詰まりだった。馬で来たのなら乗って帰れよと言いたい  
が、かといってレーヴィと二人きりなのも御免こうむりたい。困っ  
たものだ。酔いには耐えるからもっとスピードを上げてくれないだ  
ろうか。頑張れ馬。

御者と馬に胸中で声援を送りつつ、ドナドナと揺られること数十  
分。窓の外に城が見えた時は心底嬉しかった。仮に私が子牛で、た  
どり着いた先が市場でも喜んで馬車から降りたことだろう。

2区への入り口となる二つ目の城門に差し掛かると、警備に立つ  
兵士が馬車の中にいるイサークの顔を見て驚きに固まる。馬で出た  
王子様が馬車で帰ったことに驚いているのか、そもそも外に出てい  
た事を知らなかったのか。当然のように顔パスで馬車は門を通過す  
る。

2区の中を走り抜け、二つ目の城門の前に横付けにされ漸く馬車  
が停められた。外から扉が開かれ、紺色の制服に身を包んだ近衛が



出迎える。

踏み台に一步足をかけたイサークがふと振り返った。

「エイノ、お前たちは厩舎で降りろ」

どうしたのだろうか？エイノのびしょぬれの足元を気遣ったのだろうか。それにしても急に表情を引き締めたように見えるイサークの態度に疑問がわいた。

何気なく開かれた扉の向こうに視線を向けると、イサークの肩越しに風をはらんでふわりと裾を舞わせる桜色のドレスが目に入った。視線を上上げると、細くひきしまったウエストに適度にボリュームのある膨らみが続く。胸のすぐ下に切り替えが入ったドレスは、スカート部にややはりのある素材が使われており、それより数段柔らかく繊細な表情をみせる布がふつくと胸を覆っていた。

下品にならない程度に開いた胸元。華奢な肩を強調するような幅の狭い肩布。白い首には真珠のような光沢をもつクリーム色の玉を幾重にも重ねた首飾りが輝き、トップを頭の後ろで纏め肩や背にたらされた豪華な蜂蜜色の巻き髪が彩りを添える。

お蝶夫人。

私は桜色のドレスを纏うその女性の呼び名を瞬時にそう決めた。

お蝶夫人は長い睫の下でけぶる青灰色の瞳を細め、口元に優雅な微笑を浮かべて、イサークを見、そして私を見た。

お蝶夫人のコロネを髷髯とさせる素晴らしい巻き髪を觀賞していた私と目が合った瞬間、挑むような眼差しを向けられる。敵愾心もあらわなその視線に、彼女の正体を悟った。

あれがツイメンのお姫様か？　なかなかの美少女じゃないか。イサークより2〜3歳上だろうか。すったもんだある異国の地にやってきて心細かるうに、その堂々とした佇まいは正にお蝶夫人と呼ぶに相応しい。

日本人の性で軽く頭を下げて会釈をする私に、一瞬目を見張った後、艶然と微笑む。なかなか良い根性の持ち主のようだ。

こうして私と彼女の、イサークの寵をめぐる醜く苛烈な争いの火蓋が切つて落とされた。と傍目には思われているのだろうか。近衛が顔を固定したまませわしく視線だけを動かして、私と彼女の間に往復させていた。

イサークはお蝶夫人の視線を遮るように体をずらして私を背後に隠し馬車を降りる。庇うというより臭いものに蓋ゆえの行動だろうか。イサークの足が地についたと同時に、脇に控えていた近衛が素晴らしい速さで馬車の扉を閉めた。

「あの方がツイメンの姫君ですか、お美しい方ですね」

再び動き出した馬車の中で、レーヴィがほうと感嘆のため息を漏らす。「そうですね」と相槌を打つ私をちらりと見たその視線の中に「あなたと違ってね」という音にされない一文を感じ取る。

「それに気丈でいらっしやる。まだお若いのに……………」

私と違ってな！ 悪かったな、年増で。すぐに気絶してしまう根性なしで。おまけにくびれのない寸胴だし色々と重力に負けてきているし、虫刺されの痕は中々消えないし！ 十代のぴちぴちぶりん相手に勝てるなんて思っっちゃいないわ。そのうえ片や姫君、片や身元不明の迷子だ。……………いや、まあ、元より張り合っつもりもないんだけど。何か無性に悲しくなってきたな。

「殿下と並んで立たれるとさぞかしお似合いですよね。支障も多いでしょうが、良い方向かうといいのですが」

確かに似合いそうだ。若さあふれる精悍な王子に、気丈で美しい

お姫様。容姿が良ければ万事OKとは思わないが、良いに越したことはない。民からもきつと支持される事だろう。ツイメンも納得。私は安全。何だ、考えてみればいい事尽くめじゃないか？

心が彼女に移ればイサークの庇護は薄くなるだろうが、かといって完全に見捨てるほど薄情者でもないだろう。私から拒めば角が立つが、イサークからなら問題は薄いとみた。一時は想いを寄せたけれども心移りしてしまった相手として、多少の罪悪感を伴って無碍には出来ないだろう。

よし！ 私は応援するぞ。お蝶夫人！

63 ツイメンの思惑 (16)

厩舎の中は日の光が遮られているためかひんやりとしていた。馬車から降りると、いつもは暖かく感じる風が濡れた足を冷やす。私は小さくクシャミをもらした。

「まずは着替えですね。着替え終わったら医務室に行きましょう。エイノ様はお忙しいでしょうから、僕が後で迎えにいきます」

結構です。

「頼もう」

頼むな。

子供じゃないんだから一人でいけます、と言いたいのに言えないのが辛いところだ。まあ自分で撒いた種だが。

厩舎の外に出るとすでに代わりの護衛が待ち構えており、屋敷への道を先導する。

私は前を歩く厳しい顔つきの護衛兵の様子をそつと窺った。全身が岩石で出来たようなごつごつとした筋肉で覆われている。マッチョばかりの兵士の中でもかなりごつい部類に入るのではなからうか。きつと主食はプロテインで暇さえあればアニキ！ と叫んでいるに違いない。

ライアンとクリフトは今頃救助されているだろうか。早く復帰してくれるといいのだが。やはり見知った人間の方が気安くていい。

小川の水に濡れた靴は一步進むごとに砂埃が纏わりついて今や惨憺たる有様だ。二歩前に行くエイノの真っ白だった神官服の裾は、先になる程色濃くなるベージュ色のグラデーシオンに様変わりしていた。

「それでは僕も一旦部屋に戻って着替えてきます。サカキさん、屋敷で待っていて下さいね。急いでいきますので」

エイノの屋敷がある一角まで来るとレーヴィは慈愛の籠った眼差しで私を見た。

待ちたくない。何か急用が出来ないものだろうか。

「レーヴィ、預けたものはどうした」

黙って歩いていたエイノが立ち止まってレーヴィを振り返る。

「あ！こちらにあります。申し訳ありません、気が動転していてせつかくお預かりしていたのに使うことも出来ずに……。このような有様ですから兄達にお前は勉強しか能のない役立たずだと言われてしまうんですね。男爵家の子弟として一応の剣の鍛錬も収めたというのにお恥ずかしい限りです」

己を恥じる言葉を口にしながらも、胸を占める悲しみや悔しさを悟らせまいとして微笑むレーヴィ。しかしその笑みにいつももの朗らかさが欠けている事に注意深い者ならば気づく事が出来ただろう。力なく落とされた肩や僅かに伏せられた眼差しが一層哀れみを誘う。剣の腕がないぐらいなんだというのだ。そんなものがなくとも損なわれることのない、真摯さや誠実さといった稀有な美徳がレーヴィにはあるじゃないか。

と、正反対の真実の姿を知っていても思ってしまうそうになる。まったくオスカー男優も真つ青の演技力だ。レーヴィの足元にてるんとした光沢をもつレッドカーペットが見えた気がした。

「そうか」

しかし、そんなものに心動かされる優しいエイノではない。そんな話には全く興味がないとでもいうように無表情に相槌をうつと、手を差し出してレーヴィから白い筒状のものを受け取った。

「それは何ですか？」

一見すると極太の蠟燭のように見えるがどちらの端にも芯がない。

「お前が気にすることではない」

一言でばっさり切り捨てられ、私は黙るしかなかった。後でレーヴィに聞こう。

「いくぞ。風邪をひくきか」

へいへい。私はレーヴィに向かって軽く頭を下げ挨拶をすると、エイノの後を追って屋敷へと戻った。

出迎えたセバスチャンがエイノと私の濡れた足元をみて、驚いた表情ひとつ見せることなく、アイラに指示を出す。

自室に戻った私のもとにアイラが湯をはった桶を抱えて持って来てくれた。桶に手ぬぐいを浸して足を拭いながらそつとアイラを伺う。私の首の傷を見て目を見張って驚いていたが、それ以外は何も変わった様子は見受けられない。どうやらトゥーリの話はまだ伝わっていないようだ。知ったらショックを受けるだろうか？ 受けるだろうな。私などより余程近い所にいたわけだし。トゥーリの正体を知らされた時のアイラやマリヤッタの気持ちを考えると、心が沈んだ。

すっかり足も綺麗になり、着替えもすませ、アイラが淹れてくれた温かいサルミを啜って、一息ついていると、早くもレーヴィがや

ってきた。一息ぐらいゆっくりつかせる。

「僕のことはお構いなく。サカキさんがサルミを飲み終わったら医務室に行きますので」

お茶を勧めるアイラに笑顔で断わりをいれると、レーヴィはソファに座る私の向かいの席に腰をおろした。

「さっきの筒は何ですか？」

アイラが退室すると同時にずっと気になっていた疑問をぶつける。

「ああ、あれね。発煙筒だよ。硬いものに先を擦り付けると煙が出るの。居場所や危険を知らせるのに使うんだけど………あんだ、発煙筒も知らないの？」

「あー、えーと、知っていますが、私が知っているものと少々形が違ったもので。しかしなんでまたそんな物をエイノさんから預かっていたんですか？」

「そりゃ、仮面の男が出現した時の為だよ」

へえ、用意がいいですね。と返しかけてはたと固まる。ちょっと待て。仮面の男が トウロ口が現れるかもしれないと、レーヴィだけでなくエイノも思っていたというのか。

「何で………」

「いやさ、あんたの外出の許可がなかなかおりなくてね。困っている時に、神官長と近衛の会話を偶然耳にしたんだ。銀色の仮面がどうとかって話をしているのをね」

つまり

「神官長達もあんたを餌に仮面の男をおびき出そうとしてたつてこ  
と」

そういうことが。予想通りのレーヴィの言葉に、私は唇を噛んだ。  
ユハはともかく、エイノめ。散々過保護に扱っておきながら、あつ  
さり囮にするか!?

「あんたが襲われた夜に、銀色の仮面をつけた不気味な男を見た。  
ずっと目の錯覚だと思っていただけ、最近になってこの屋敷の周囲  
をうろついているのを目にしたと言ったら、面白いように食いつい  
てくれたよ。心優しい僕があんたを気遣って花見に連れて行くのを、  
神官長達は利用しようとしたってわけ………だったんだけど」

「だけど？」

ソファの背もたれに両手を上げてどっかりと寄りかかり、背を反  
らして伸びをしながら、レーヴィはかつたるげに言葉を続ける。

「僕が発煙筒を使わなくても位置を把握して来たって事は、僕も案  
外信用されてないのかもしれない。自信なくしちゃうなあ」



63 ツイメンの思惑 (16) (後書き)

ぶつ切り御免!

## 64 ツイメンの思惑 (17)

信用は確かにもしれないな。特にユ八には。また私を逃がそうとするかもしれないと、警戒されていたのではないだろうか。

「まあ、そんなわけだから僕のこと恨まないでよ」

上に上げた腕を下ろした反動を利用してレーヴィは身を起こした。

「恨む？」

今更何を言っているんだ。恨みならとっくの昔に山と抱いているというのに。馬鹿を言ってもらっちゃ困る。

「あなたのお仲間の正体がばれちゃったこと。神官長達に介入させる気はなかったんだから」

ああ、レーヴィはトゥーロと私が仲間だと思っているのか。それで一括りだったんだな。私が目的やらを何も喋らないと見るや、エイノ達がレーヴィと私を利用して仮面の男を誘き出そうとしたのを逆に利用し、私を人質にトゥーロから情報を引き出そうとしたって事か。

お生憎様、喋らないんじゃないよ、喋る事がないんだよ！

「あなたがさっさと正体と目的を話してくれていたら良かったんだよ」

さらりと人のせいにするな。どっちにしる碌な事を思いつかないんだろうに。

「それにしても、まさか転移の術を使っちゃうなんてね。あんたも使えたりするの?」

そんな力があつたらこんな所からはとうにオサラバしているわ。こいつは一体私の事をなんだと思っているんだ。まだフォルセルの術師だとも思っているのか? 「使えませんよ。そんなもの」と否定の言葉を吐きかけてふと、思いとどまる。未知の力があるとはったりをかましておけば下手な小細工を仕掛けてこられないのではないだろうか?

私は唇を微かに開き指先を顎に這わして意味ありげに流し目を送り、挑発的な笑みを浮かべた。

「さあ、どうかしらね」

「使えなさそうだね。あんた術の才能なさそうだし」

………艶かしく見えるように精一杯そらして顎にあてた指をそつと膝の上に戻す。余計な演技をしてしまった。そう思うんだつたら最初から聞くなよ!

気まずさを誤魔化す為に、音をたててサルミを啜る。さつきまでほんわりと温かく心を落ち着かせてくれていたそれは、既に冷えきっており、身も心も寒くなった。

「差し詰めあなたは潜入調査担当で、あのタワー口とか言う奴が実行者ってどこ?それとも王子をたらしこむ役と、補佐かな」

どこの秘密諜報員ですか。自動的に消滅するテープで指令が来た事なんて一度もないんですけど。それにハニートラップはもっと妖艶な美女がするもんだろ。

「まあ、問題ないよね。転移の術が使えるんだし。何時でも力が借りられるんですよ」

レーヴィの言葉に私は曖昧な笑みで答えた。

そうだったらどれ程良かったか。もう、力を貸せないというあの言葉が本当ならトウーロはもう戻ってこないだろう。そもそもトウーロは私にとってどういう存在なのか。私を殺そうとしていたレーヴィからは守ろうとしてくれていたようだし、敵ではないと言っていたけれど、味方であるとは限らないのではないだろうか。

ちやらんぼらん賢者の一味なのか。敵の敵はなんとやら、レーヴィを雇うツイメンの反勢力なのか。はたまた同郷のよしみで手を貸してくれていただけの、通りすがりの女装趣味の変態さんなのか。

……………どれも嫌だな。

「さ、そろそろ医務室へ行こうか」

「いいですよ。後で、自分で手当てします。この屋敷にも救急キットぐらいあるでしょうし。レーヴィさんも何かとお忙しいでしょうから、どうぞお気遣いなく」

ソファから立ち上がると扉に歩きだそうとするレーヴィに堪らず声をかけた。

「そもいかないよ。自責の念に駆られる小心な僕としては引きずってでも医務室に連れて行かないとね。ま、そのぐらいの傷、舐めときゃ治るけどね」

付けた本人の言う台詞じゃないでしょう。今は止まっているけど結構流血していたんですけど。刃物傷に慣れていない現代日本人には大層な傷なんですよ。後でこっそり医務室へ行こうと考えていたのに。

「何なら僕が舐めてあげようか？」

レーヴィは薄い唇からちろりと赤い舌を覗かせて目を細める。爬虫類を思わせるその仕草に全力で首を振った。爬虫類はもう間に合ってるんだ。どっかの神官長で。

「是非医務室へ連れて行ってください」

「遠慮しなくていいのに」

してねーよ！

怒りをかみ殺して唇を震わせる私にレーヴィは軽やかな仕草で手を差し出す。

「お手をどうぞ。未来のお妃様」

反論する気力もなく、私は促されるままに手を取り、医務室へと向かった。

重い足を引きずり、首の傷を気にして俯き加減に城の廊下を進む。ふと前方から聞こえてきた床を叩く長靴の賑やかな音に顔をあげる。と、こちらに向かつて足早に移動する兵士の一団が目に入った。

先頭に行く近衛の制服を纏った長身の男が何やら指示を飛ばしながら歩き、後ろに従っていた兵士が一人、また一人と散っていく。その男は私達に目を止めると赤茶の髪を掻き揚げ緑の瞳を細めて薄っすらと笑みを浮べた。お互いがお互いの方向に向かっていた為瞬く間に距離が縮まる。

脇に避けて道を譲る私達の横を通りすぎるかと思いきや男はピタリと足を止めた。見れば脛から下のズボンは肌に張り付き、長靴は水分と砂塵で色が変わっている。服を着替える間もなく、サウルの拘束にあたっているらしい。

「傷の具合はどうか？今から医務室かい？」

兵士に飛ばす鋭く威圧感のある声とは違う柔らかな声が頭上にふる。

「今から医務室に向かうところですが、もう血もとまりましたし、大丈夫です」

「そう、良かった。サウル以外にも腕のいい医師はいるからね、傷が残らないように治してくれるよ」

「はい。………サウルさんはどうなったんですか？」

拘束したにしては姿が見えないし、もしや。

「逃げられたよ。医務室に駆け込んだ時にはもぬけの殻さ。これから城下の親類の家やらを当たるんだが、まあ無駄だろうね」

苦い笑いを浮かべるユハ。その手に一冊の古ぼけた本が収まっているのを見つけて首をかしげた。

「その本は？」

徒労に終わるであろうサウルの捕縛に本が必要だとは到底思えない。

「ああ、これかい？サウルの自室で見つけたんだが」

ユハは表紙を上に向けて本を差し出した。

「サカキちゃんはこの文字が読めるんだったかな？」

表に書かれたその文字に私は息をのんだ。毎夜エイノの部屋で眺めている字だ。私にとっては日本語、シルヴァンティエ公用語に次いで馴染み深いものとなっているゴールドベルグの文字でこう書かれていた。

『医術大全。伝承医術から研究中の最新医術までを網羅。この一冊があればもう大丈夫！急患だつて怖くない。一步先に行く医師を目指す貴方へ』

一目見て読む気が失せそうな程、重厚で堅苦しい装丁とは裏腹な、軽快なキャッチコピーにくらりと眩暈がした。

「見せていただいてもいいですか？」

表紙を見ただけでは分からない、と言いたげに見えるように困惑の表情をつくりながら、ユハを見上げる。

「ああ、いいよ。何が書かれてあるかわかるかい？」

パラパラと本を捲って大雑把に目を通し、戸惑いをのせた小さな声で答える。

「時間をかけて調べてみない事には断言は出来ませんが、医術書のような気がします」

訳の分からない専門用語だらけで、賢者の自動翻訳は文面の半分も機能していない。しかし、サウルの持ち物だというこの本が、表紙に偽りなく医術に関する本だということは分かった。

何故、サウルがゴールドベルグの言葉で書かれた本を所持していたのか。サウルはこの本を読むことが出来たのだろうか？賢者に類する者であれば読めたとしても不思議はないが……。

それにしても……私は掌にのつた本をちらりと見た。夕暮れ時の薄闇に潜む正体の無い影に足を捕られるような気味の悪さを覚える。状態が良すぎるのだ。所々墨が薄くなっているものの、破れや虫食い等の欠損は見当たらない。エイノの古文書とは比べ物にならなかった。

「やはり、ゴルドベルグの本なんだね？」

緑の瞳が深みを増す。鋭い視線で問いかけるユ八に頭を縦に振ってみせた。

「そうか、足を止めさせて悪かったね。それじゃあ」

ユ八は去り際に私からレーヴィに視線を移すと、軽く会釈をし、機敏な動きで大きく足を運んで、私達が来た方角、城門へと向かっていく。後に続く兵士達の耳障りな鎧の音が胸に広がる灰色の靄を掻き乱した。

「サカキさん。医務室へ参りましょうか」

ユ八達の後姿が遠く離れ小さくなるまでぼんやりと眺めていた私に、レーヴィが声をかけた。



## 65 ツイメンの思惑 (18)

サウルに代わる医術師に首の傷を治してもらい、翌日は術の反動の気だるさを理由に一日を部屋の中で怠惰に過ごした。滋養強壮効果のあるという薬湯を飲みながら私はこの数日に起こった出来事の考察に没頭していた。

サウルはやはり見つけ出す事は出来なかったらしい。2区にある自室と医務室には私物が残されたままで、急ぎ姿を消した様子が窺えたという。

そして懸念していたトウーロの件は公には伏せられる事になった。かく言う私も口止めをされ、口を噤んでいる。アイラやマリヤッタは実家に不幸がおこった為に帰郷しているものと説明を受けたようだ。ただ、トウーリについて2、3質問を受けたらしく、何故なのかと首を捻っていた。反対に私は何も聞かれない事に首を捻っていた。

しかし、トウーロがレーヴィの一味でないという事が判明し、一つずつきりした事がある。風呂場で悩んでいたあの疑問。イサークに会う間にトウーロが私を誘拐しようとした為に生じた、ツイメンの思惑の謎だ。レーヴィの雇い主たるツイメンの狙いはやはりイサークの妃絡みと置いていいだろう。

そうなると今一番気になるのはやはりトウーロの目的か。何の為に私を誘拐しようとし、レーヴィから守ったのか。ツイメンの反対勢力とするとウルト○マンの仮面の説明がつかない。

やはり賢者の一派だと考えるのが妥当なのだろうかと考えかけてふと賢者の言葉を思い出した。どこぞで取れたお勧めのお茶が入ったカップから立ち上る湯気越しに「大賢者を名乗れるのは自分だけ。異界渡りはそうそう出来る事ではない」と確かそう聞いたはずだ。

つまり、異界渡りが出来るのは自分だけではないと。そう解釈出来るわけで、トウーロが賢者と無関係であるという可能性も出てく

る。

実際そう考えた方がしっくりくる事も多い。もし賢者の一派だったのならば、トゥーロが賢者の手となり足となり探し物をすればいいのだし。何らかの理由があつて私に探し物を手伝わせたかつたとしても、協力も申し出ず、わざわざ侍女に化けてまで知らん振りを通すのは解せない。まあ、探し物をしろといった本人が全くもつて姿も現さず、詳細も伝えてくれないのが一番理解に苦しむところだけだな。

ああ、もう考えれば考えるほど分からない事だらけで、腹が立つ。私は薬湯を飲み干すため息をついた。それにしても、この薬湯色からして青緑でねつとりと粘り気がありかなり不味い。不味い！もう一杯！とは到底言えぬ飲みにくさだった。

サウルの出してくれた薬湯は飲みやすかつたのにな。あの薬湯もゴルドベルグ発行の虎の巻に書かれていた処方が出されたものだったのだろうか。

カムバツクサウル！

その日、レーヴィとの補習を終え、昼食もそこそこにセバスチヤンの指導へと移ろうとしていると困惑顔のアイラが部屋へやってきた。

「あの、サカキ様。お客様がお見えになつていますが……………」

私を訪ねてくる客人といえば、イサークかユハかレーヴィの3人しかいないのだが、どうも様子が違う。

「どなたですか？」

「ミーツェ・ラツヴァイト様です」

誰それ？聞き覚えの無い舌を噛みそんな名前に眉根を寄せる。

「ツイメンの、姫君でいらっしやいます」

ほうほう、ツイメンの……………留守という事にしてもらうわけにはいかないだろうか。

イサークとの仲を応援しようと思ったが、あくまでこっそりひっそり心の中でエールを送ろうと思っていたのであって、ああもう！これ以上厄介ごとには巻き込まれたくないんだよ。一体お姫様が私に何の用なんだ。宣戦布告でもしにきたのか？

私は目を閉じ、ため息を喉の奥で殺してからアイラを見て口を開いた。

「分かりました」

気遣わしげな視線を私に向けるアイラの顔に微かに安堵の色が混じる。

アイラに先導され応接室で待っているというお姫様のもとへと向かった。エイノの屋敷がもつと広がって応接室までの廊下が長ければいいのに。たつぷり1ヶ月かかるぐらいに。しかし現実とはなんと無情なものなのか。ほんの数秒で応接室の扉へとたどり着いてしまった。

おとないを告げるアイラに、高い女性の声に応え、ゆっくりと扉が開かれた。

部屋に入ると見かけない衣装の女性がまず目に入った。白いシャツに裸まである黒いタイトスカートを身につけ、頭の高い位置できつくまとめた髪を団子状に丸めてすっきりと顔を出している。今にも第九を歌いだしそうな出で立ちのその女性から部屋の中央に置かれたソファへと目を移せば、湯気を立てるカップに口を付けるお蝶夫人がいた。

今日も素晴らしくコロネな蜂蜜色の巻き髪が線の細い背を覆う。お蝶夫人はゆつたりとした動作で顔を傾げ私を見た。その動きにつられてするすると一房の巻き髪が全く形を崩すことなく胸に垂れた。ツイメンの整髪料は随分と優秀だ。

口の端に微笑を浮かべ、青灰色の瞳で私を射抜く、絶世の……とはいかないが美しい少女。私が男でDMならいちころだっただろう。

席を立つ事もなく悠々とした態度で私を出迎えるお蝶夫人に先日セバスチャンに教わった通り、掌を重ねて胸につけ腰を折り、挨拶をする。私には奇異に思えるその所作は乙女独特のものらしい。乙女の中には、役をこなしてから数十年経っても、この礼をとる女性もいるとセバスチャンに聞かされた。乙女に選ばれる事がシルヴァンテイエの女性にとっていかに誉れ高い事であるか実感させられる逸話だ。

「どうぞ、お掛けになって」

鈴を転がすような澄んだ高い声が、桜貝を思わせるお蝶夫人の唇からこぼれる。まるで屋敷の女主人のように堂に入った態度。一国の姫ともなるとやはり、昂然としているものなのだ。

「二人きりで話したいの。席をはずして頂戴」

私が向かいのソファへと腰をおろすのを待つて、お蝶夫人が背後に立つお団子頭の女性に声をかけた。女性は不満げな顔を見せるも何も言わずに部屋を後にする。続いてアイラも扉を潜り、部屋には私とお蝶夫人の二人だけとなった。

65 ツイメンの思惑 (18) (後書き)

ツイメンの思惑は次で最後となります。長かった・・・。

66 ツイメンの思惑 (19)

気まずい。重苦しい部屋の空気に長い沈黙が拍車をかける。

アイラ達が退室してから随分と経つというのに、お姫様は何も言わず優雅にお茶を口に運んでいた。これは、話しかけるべきなのだろうか？しかし、なんと言おうか。

「いい天気ですね」

じゃ、当たり障りが無さ過ぎる。敵意が無いことを示し、親しくなる為にジョークを交えてみよう。

「素晴らしい御髪ですね。ヤドカリが喜びそう」

……なんて言った日には不敬罪で投獄されたりしそうだな。今は乙女だから大丈夫かもしれないが、試す気には到底なれない。

「先ずは、お詫びを申し上げますわ」

悶々と第一声に頭を悩ませていると、第一印象を裏切らない高飛車な態度で詫びをいれられた。

「わが国の使者の一員に、暗殺者の身代わりにされ、汚名を着せられるような間抜けがいた事は、本当に恥すべき事です」

そういう意味のお詫びですか。当然、国の関与は否定するのだからとは思っていたが、暗殺者の存在自体を否定してきたか。

お詫びと言いつつさらりと潔白を主張するお蝶夫人。彼女の言葉から敵愾心以外の感情を読み取る事は難しい。しかし、真っ直ぐに

私を見つめるその瞳には微塵も後ろめたさが浮かんでおらず、私を困惑させた。彼女の言葉を嘘だと決め付ける事の出来る根拠を私は持っていない。お蝶夫人の真摯ともいえる眼差しは彼女の言葉に真実味を加える。

しかし、彼女が全てを知らされているとは限らない。可愛い妹に汚い側面を知られたくないと願う兄王の姿が思い浮かんだ。いや、可愛く思っていたら人質同然に差し出さないか。彼女を信用しておらず、口を滑らせる事のないように不必要な情報として伏せる非情な兄王の方がしつくりくるな。

なんて不憫な……お蝶夫人、強く生きてくれ！

私は同情を込めた眼差しで彼女を見た。たちまち眉を顰めたお蝶夫人に訝しげな視線を返され、咳払いをして俯いた。いかんいかん、穩便に話を済ませて早々にお引取り願わなくては。

「わざわざお足をお運び頂いて誠に恐縮です。えー、ラツヴァイト様」

確か、そんな名前だったよな。ほんに恐縮至極でございます。だから帰ってください。

「ミーツェと、お呼びになって」

言葉だけを聞けば、まあ友好的！と思えるだろう。しかしお蝶夫人改めミーツェの目は蔑みを存分に含んでいた。このような場ではラツヴァイトではなくファーストネームであるミーツェと呼ぶのが常識でしょう。そんな常識も知らない山猿と席を同じくして会話を交わしているなんて耐えられないわ！といった所か。

「申し訳ありません。ミーツェ」

噛んだ。

「ミーツエ様」

舌の痛みをこらえつつ、笑顔を浮べて誤魔化す。冷たさを増したミーツエの視線が突き刺さった。仕方なかるう。慣れないツイメンの名前は発音しにくいんだよ。

「ところで、サカキ様は随分とイサーク殿下と親しいとお聞きしました」

気を取り直したのか、お蝶夫人はがらりと話題を変える。こちらが本題なのだろう。

「いえいえ、決して親しいわけではありません。ただ、親も住むところもなく困っていた私を不憫に思って保護して下さいだけです」

「まあ、ご苦労なさっているのね」

ミーツエは付け睫毛なのではないかと疑ってしまうほど長い睫毛を瞬かせた。磨かれた珊瑚のように薄赤く色づいた艶やかな爪を頂く、細く染み一つない白い指を口元にあて、美しく整えられた眉を顰めて哀れみを示して見せる。白々しい。私の身の上などつくに調査済みなのだろうに。

「はい。それなりに。優しいお言葉をかけていただき、ありがとうございます  
「ございます」

ミーツエの芝居に付き合って、私は潤みもしていない目元をそつと拭う。狸比べだな。



「殿下はどのような方なのかしら。私、先日少しお話をしただけで存じ上げないの。教えてくださる？」

ほうほう。イサークの情報収集ですか。そりや将来の夫の事だもの、知りたいに決まっているよな。ここは一つプッシュしておこうか。キューピッドなんて柄ではないが、自分の為だ。

「殿下はそれはそれは心優しい方なんです。でも、優しいだけではなくて、勇ましい面もありになって、王としても、伴侶としても、理想的だと思います」

「素敵な方ですね」

微笑を浮べるミーツェ。よし、もう一押し！

「ええ、それはもう！ 男らしくて勇敢で、情に厚くて心配りも出て、純粹さや誠実さも備えていて、ああ、でも政治的な駆け引きなんかもそつなくこなしてですね氣品があつて凜としていて」

言葉を紡ぐことにミーツェの笑みが深まる。見た目は問題ないだろうし、中身の良さも知ってもらい、是非、表面だけではなく心から慕い合う仲になってもらいたい。

「あとは、そうそう、笑顔が可愛いんですよ」

ほんと手を打ち、付け加えた。

「もう、結構よ。惚気はおよしになってくださるかしら」

笑みを形作るミーツェの唇から冷ややかな声が発せられる。

………違つんですけど。私はがっくりと肩を落とした。また墓穴を掘ってしまったのか？

「サカキ様には素晴らしいお相手に映るのでしょうか。だって恐ろしい程の玉の輿ですもの。けれど、貴方を娶られても殿下には何一つ益はないのではなくて？」

「全く同感です」

居丈高に嫌味を吐くミーツエに率直に答えた。

「……………え？ええ。そ、そうよね。よくお分かりでいらっしやるのね」

一瞬啞然として言葉に詰まるミーツエ。取り澄ました態度が崩れ、僅かに幼さを残す素顔が垣間見えた気がした。

「そ、それに、シルヴァンティエにはツイメンが必要なのよ。今のままではバジエに飲み込まれてしまうわ。シルヴァンティエに、殿下に必要なのは貴方ではなく私ですわ」

バジエ？何故バジエドールが出てくるんだ？

「バジエがどうかしたのですか？」

「バジエの鬼神はご存知よね？」

あー、確かべらぼうに強いんだっただか。レーヴィ曰く、不敗の騎士団を率いる一騎当千の猛者とか。本当かね。百戦百勝でも一戦一勝でも不敗だしな。後者なら笑えるのだが。

「鬼神がバジエの北の砦に逗留しているのです」

「はあ」

私は間の抜けた声を出した。自国の砦に騎士がいるのがいけないのか？

「何もご存知でないのね」

話を飲み込めていない私にミーツェが苛立った目を向ける。

「申し訳ありません。その鬼神が北の砦にいと何か拙いのですか？」

「バジエの北の砦は広大な荒野の中心にあるのです。バジエの鬼神といえ、ノルティアの隅々にまで名を轟かす当代きつての剣の使い手ですよ。軍力の要である鬼神がペンペン草が生えているだけの荒野に数ヶ月も滞留するなど不自然だとは思いませんか？」

「はあ、まあ。そうなんですかね」

普通に左遷じゃないのか？いくら強くても一人で戦をするわけじゃなし。個人の力などしれているだろう。騎士団のトップなら、むしろ人間関係や指揮力がものをいうのではないだろうか。と思う。こちらの戦争を知らないからなんともいえないが。ひよっとしたら「やあやあ、我こそはバジエの鬼神」等と一人ずつ名乗りを上げて一騎打ちをしていく、自然とその他大勢の兵士に優しい手法がもしれないしな。

「不自然ですよ！」

反応の鈍い私にミーツェが苛立ちを露にする。

「……………失礼。貴方、ノルティアの出ではないのでしたわね。シル

ヴァンティエからバジエにかけての地理は分かっているしやるの？」

「ええ、一応は。シルヴァンティエの南がツイメン、その南にジャスラ、ドレジャー山脈があつて、バジエドールでしたっけ？」

「そうよ。ドレジャー山脈は魔物の跋扈する死の山。東西に長く伸び、永くノルティアの中央部を南北に隔ててきたの。バジエから北への移動は大きく迂回する必要があつたわ。人も馬もね。山脈があつたから今までバジエは北へは攻めてこなかつた。けれど鬼神という傑物を輩出し、ツイメンがジャスラでとれる鉱物の加工技術で目覚しい成果を挙げている今、バジエは山脈を越えて北へ攻め入ろうとしていると、兄は、ツイメン王はお考えでいらっしやいます」

魔物！？　すごい。さすがは理解不能な魔法や聖獣が存在する世界。魔物もいるんだ。ファンタジックだな。

「ジャスラは鉱物が採れるだけの小国。バジエが攻め入っては三日ともたないわ。ツイメンも……悔しいけれど、バジエの騎士団に太刀打ち出来る国力はありません。ジャスラ、ツイメンの二国が落ちれば、シルヴァンティエとてどうなることか。ツイメンの技術を得ただけでは満足せずに、この国にも牙を向くかもしれませぬのよ」

そうかー。魔物か。見てみたいような、みたくないような。やっぱりおどろおどろしい見た目をしているのだろうか。

「お分かり？玉の輿に乗れたところで、ツイメンを蔑ろにしては妃としての煌びやか暮らしも、儂いものになるのですのよ」

一見可愛くて実は凶暴というパターンもあるな。水をかけると増殖するとか。

「ちょっと、貴方！話を聞いていらっしやるの？」  
「え？はい、勿論。聞いています」

一応は。と心中で付け足した。正直、日本に生まれ育った私としてはあまりに縁のない話だったのでぴんと来ないが。どうにも他人事といった感が拭えない。それより魔物のほうが気になるわ。やはり夜中に食べ物を与えてはいけないのだろうか。

「そういう事ですから、ご自分の為にも、身をわきまえられた方がよろしいわ」

「そうですね。善処します」

「……………そ、そうですね。話が早くて大変結構ですわ」

ミーツエは湯気の立たなくなったカップを手に取り、お茶を口に含む。眉根を寄せてお茶を飲む様は、不可解さを流し込もうとしているようにも見えた。しまった。従順過ぎて逆に疑惑を抱かれたかもしれない。

「あの、一つ確認したいのですが、鬼神が北の砦にいるのは確かなんですか？山脈があるから、迂回しないと連絡もとれないんですよね？」

「詳しくは言えませんが確かです」

「鬼神が砦にいるのは本当に進撃の準備なのでしょうか？」

「他にどんな理由があると言われるの？」

ミーツエが不愉快そうに眉を上げ、手にしていたカップを受け皿に戻す。陶器がぶつかる高い音が鳴った。

「兵や物資が集まっていたり、山脈に進軍の道筋をつけていたりするのですか？ 他の理由は考えられませんか？」

左遷とか降格とか失脚とか。

「ツイメンの王様は確証がおりなのですか？」

「バルトロメーウス兄様のお考えに間違いなんてありませんわ！」

矢継ぎ早な私の質問にミーツェが声を荒げる。膝の上に載せられた手がきつくドレスを握り締め震えていた。どうやら逆鱗に触れたらしい。それはともかく、バルト………なんだって？ どうにもツイメン人の名前はややこしくていけない。

「バルトロメーウス兄様は幼い頃から広く諸国をご見聞なさって、王位に就かれる前より国政に携わってこられたの。ジャスラから出る鉱物を一手に引き受けてその技術を確立する後押しをなさったのもバルトロメーウス兄様よ。兄様はツイメン、シルヴァンティエ、ジャスラの三国が今こそ結束を固めて立ち向かわなければならぬと仰っていたわ。私は兄様の言葉を信じております」

なんとということでしょう。お蝶夫人はブラコンでした。そして私の中でツイメン王のイメージは、己を慕う妹を思い通りに操る冷酷非道な兄王に上書き修正される事となった。

自分が後押しして出来上がった技術のせいで強国から狙われる嵌めに陥った拳句、無関係で非力で罪のない私を暗殺しようとし、さらに自分を盲信している妹まで送り込むとは。なんて奴だ。

バルトなだけに三国仲良くか？ 結構だが、やりたきゃ、私を巻き込まずにやってくれ！

兄の話題に激昂したミーツェだが、すぐに冷静さを取り戻すと、澄ました態度で帰っていった。部屋の外に控えていたアイラが青い

顔をしておろおると私を宥めてくれる。ミーツエの声は外まで響いていたらしい。仲良くなるのは難しそうだから、やはり距離を保って接していこう。ブラコン、ミーツエへの対処をそう決めた。

その日の夜、私は何時もどおりエイノの部屋でエイノと二人、解読を進めていた。もちろん進めるふりだが。欠落だらけの古文書は何度読んでも要領を得ない。

一頁目の内容からフォルセルの所為で国が滅んだ。すごい力をもっていた。どうやら白髪らしい。という事が分かるが、次頁からはやれ何時何時どこでこんな災害があった。神殿を荒らされた。疫病が流行り村がいくつか壊滅した。城内で数十人規模の不審死があった。神事を司る神官が再起不能になったのと、滅亡間近に起こった凶事が細かく書かれているようで、そのどれもにフォルセルが関与していると臭わせる記述がみられた。

フォルセルとは一体何なのだろうか。何故、ゴルドベルグを滅ぼし、今また妙な噂が流されているのか。

眠気で霞がかかる頭には何一つ答えは浮かんでこなかった。

「作法の稽古ははかどっているか？」

眠気覚ましに、凝り固まった目じりに指を当てマッサージをしていると、書類から顔を上げたエイノが唐突に口を開くいた。

「……………努力はしています」

ええ、本当に。努力だけはしているつもりですよ。身についているかはわかりませんが。

「明後日に乙女が揃い、神に誓いを立てる儀を行う。心しておけ」  
「え、明後日ですか？ 大礼はまだ2ヶ月以上先ですよ」

エイノの言葉に一気に眠気が吹き飛んだ。まだまだ、時間があるからと安心していたのに二日後だと？

「大礼とそれまでの期間と言っただろう。聞いておらんかったのか？ 大礼までに、聖獣と信頼関係を築くのも乙女の重要な役目だ」

そういえば言っていましたね。そりゃあ、ぶつつけ本番って訳にはいかないよな。

「その時に聖獣に会えるのですか？」

面倒だが、聖獣がどんな生き物なのかは気になっていたので、少し楽しみな気もする。

「いや、聖獣に接するのはそれかさらに二日の後だ。明後日の儀は要は講義だ」

神への宣誓もエイノにとっては式典の講義に映るのか。エイノは本当に神官としての仕事を果たしているのだろうか。礼拝中だろうが黙祷中だろうが祈りなんて捧げていないのだろうか。表面上は静かに取り組んで、中身では全く関係のない他の事に考えを馳せていそうだ。呆れてエイノの端正すぎる顔を眺めて、ふとあることに気付いた。

「エイノさん、顔色がよくないですね。お疲れですか？」

「大礼の準備に追われておっつな。然程ではない」

この人、そのうち倒れるんじゃないか。何時にも増して白いエイノの顔に、ふと過労死という言葉が思い浮かんだ。



「今日はもう終わりましょう!」

ぶっ倒れるのは勝手だが、それに一役買つのは御免だ。

「然程ではないと言っただろう。続けるぞ」

「いえ、駄目です。健康第一! 身に勝る宝なしですよ」

とつくに終わっている解読のせいで過労死なんて、いくらなんでも笑えない。

「自分の体調ぐらい心得ておる」

「いえいえ、そういう人が一番危ないんです。それに……父も母もいないこの地で後見人になって下さったエイノさんにまで何かあったら、私……」

俯いて力なく言葉を紡ぐ。駄目押しに鼻もすすっておいた。

「すまなかつた」

低く柔らかな声に驚いて顔をあげれば、私を見つめる冷たい茶色の瞳に暖かな光が灯るのが見えた。頭に大きく柔らかいものが置かれる。それは二度三度と髪を滑ると頬に降り、そつと撫ぜ、唇を掠めて離れていった。

「おやすみなさい!」

上ずつた声でそう叫ぶと、私は脱兎のごとく部屋から逃げ出した。あの声で、あの顔で、至近距離は心臓に悪い。誰かさんや誰かさんや誰かさんと違って、毛なんて一本も生えていないつるつるの私の心臓には無理だ。

ああ、今日も疲れたな。

66 ツイメンの思惑 (19) (後書き)

ツイメンの思惑終了！ 一話あたりの長さがバラバラですね。

## 67 乙女の憂鬱

私は感激していた。

肩から踝までをすっぽりと覆い隠す布は絹のような肌触りで、動きに合わせて滑らかに体に沿って揺れる。色が汚れの目立つ白というのが不満ではあるが、とにかく私は感激していた。なにせシルヴァンティエにやってきて初のロングスカートだ。祝！ 脱子供服！ 和服のように袂がある真っ白なシャツの上から、袖無し白いロングワンピースを着て幅の広い黒い布帯を締め、最後にオニキスのような光沢を持つまろい石のついた飾り帯で留める。それが乙女としての正装だった。腰帯の黒がなければ神官と大差ない衣装だ。

しかし、前々から思っていたのだが、胸の直ぐしたから腰までをぐるぐる巻きにする布帯は何気にエロスをかもし出していると思う。嫌でも胸が強調されるもんな。強調するだけのポリウレームが無い己の胸を見下ろし、次いで周りの乙女達の胸元を見て、ため息をついた。日本にいた頃は、決してまな板ではない！ と胸を張って言えると思っていたが、ここでは、どうぞ洗濯の際はお声をかけて下さいと卑屈になるしかない。これはもう、人種の違いだ。仕方ない……はず。

いま私は城内の一角にある大神殿に来ていた。城内とはいえ、離れのように完全に独立した建物は、城と同じ乳白色のつるつるとした石で出来ており、今まで入った建築物の中では断トツで天井が高い。緻密なレリーフの施された太い柱が、十本以上そびえ、単一色で描かれた歴史を感じさせる天井画を支えている。

儀式まではまだ半時ほどの猶予を残しているが、先ほど私と同じ乙女の衣装に身を包んでいる女性の数を数えてみたところ、もう12名全員が揃っているようだった。

集められた乙女達は思い思いに、付き添いの人々と言葉を交わし

ている。誇らしげに胸をはる者、期待に頬を染める者、父親らしき男性からのアドバイスに真摯な顔で頷いている者。

皆が皆、美少女とはいかないが、王子の嫁にと親族が推す少女達だ。皆、精一杯容姿にも磨きをかけている。白くすべらかな頬に、豊かで艶のある髪、フォークより重たいものを持った事がないであろう細く真つ直ぐと伸びた指。かすずかれ育った気位の高さと、苦労を知らぬが故のあどけなさが混在した、いずれ劣らぬ深窓の姫君達。

乙女達は私を除くと15歳〜19歳のうら若き少女達だった。公には私が一番若いという事になっているが、正直辛い。

浮き足立つ乙女達の輪を抜け出し、神殿の隅の柱にもたれてこっそりとため息をついた。後見人であるエイノは私が起きた時にはすでに屋敷に姿はなく、ユハは当然エイノの護衛。付き添いもおらず一人でこの場にいるのは私だけだ。

「お待たせしました。サカキさん」

一秒たりとも待っていません。

いつもよりは幾分かマシな服に身を包み、寝癖のついた髪を強引に纏めたレーヴィがバタバタと忙しない足音を立てて駆け寄る。

そりゃ、私だけ一人で少し寂しいとは思いましたけどね。レーヴィが来るなら一人の方がどれほど心強いかな。

「なんて顔してんのさ。ちょっとは喜んだら？あんただけ一人じゃかわいそうだと思ってわざわざ来てあげたのにさ」

柱に寄りかかる私の耳元に顔を寄せると、レーヴィは囁いた。

「お気持ちだけで十分ですよ」

小さな親切大きなお世話なんだよ。今すぐ帰れ。

内心で毒づく私の顔をレーヴィは不躰に眺める。なんだ？ 何か顔についているのか？

「あなた化粧してる？ 化粧してそういう服着てると、13には見えぬね。拙いんじゃないの？」

「……………え」

今朝、乙女の衣装に袖を通した私に、他の乙女達に負けぬようにと、アイラとマリヤツタが二人がかりで髪を整え化粧を施してくれたのだ。イサークとの食事会以来のはりきりようだったな。

「何歳に見えますか？」

「んー。まあ、見ためだけだと15、6？」

あまり変わらないじゃないか。とはいえスカートの丈一つで年齢が上がって見えるのか。そういえば、エイノ達と初めて会った時はスーツの上下だったから膝丈のタイトスカートだったけ。膝丈イコール子供服な先入観が私をよりいっそう幼く見せていたのかもしれないな。

「ああ、その表情よしたほうがいいよ。もっと上に見える」

「どういふ表情だよ。」

「あなたさ、よく何か考え込んでるでしょ。そういう時、ちょっと眉根を寄せて厳しい目つきするんだよね」

へえ、そうだったのか。癖というのは自分では気付かないものなのだ。私は両手の指を眉に添えて外側へと伸ばすようにマツサー

ジをした。皺になったら嫌だなと丹念に眉間を揉む私に無口が追い討ちをかける。

「それも駄目、すぐくおばさんっぽいから」

うるさい。一言多いんだよ。口は禍の門だぞ。

「10代の若い子の中に混じるんだから、気をつけないと浮いちゃうよ。比較対象がいると違和感が浮き彫りにされやすいからね」

それは一理あるな。私は乙女達を真似て少女らしい華やいだ笑みを口元に浮かべた。

「なに、その能天気そうな笑い方。品がない。それも駄目」

「またも駄目だし！ こちらとお前みたいに器用じゃないんだよ。レーヴィは、私に敵しく皮肉を飛ばしながら、穏やかな笑みを絶やしていない。まったく、癪に障る。」

「もう、ちょっと黙ってて下さいよ」

小姑のように煩く口を出すレーヴィに、げんなりとしていると、こちらを見つめる射るような視線を感じて目を向けた。視線の主は一人の青年だった。金の髪に青い瞳、やや華美な服装はいかにも貴族といった様子だ。年の頃は十代後半か。年齢からみて、姉か妹が乙女にでも選ばれたのだろう。同じく姉妹だろう乙女に付き添う同じ年頃の青年は数人いた。この場においても何の不思議もない。そんな青年だ。だが、なぜ私を見ているのか。それも睨むと目つきでいい目つきで。貴族様に知り合いないのだが、でもどこかで見ただよな気もする。

「なに？ ラウニオ伯爵と知り合い？」

レーヴィは私の視線の先を見もせずと言う。本当に器用だな。側頭部に目でもついているんじゃないのか？

「いえ、知り合いじゃないです………と思うのですが」

「セルミレ公の長子だよ。先王の妹の孫だね。喧嘩は売らないほうがいいと思うけど」

売ってるつもりはありません。

レーヴィと会話を交わしている間も青年は忌々しげに私を睨みつけていた。初対面で向こうが喧嘩を売ってきたんだけど。おかしいな。私自身は恨みを買わないようにひっそりと生きているつもりなのに。とりあえず流しておこうと、軽く会釈をして視線を外しかけて、思い出す。前にもこんな事があった。あれは、たしか………2区の散歩中で、ああ、あの口やかましく煩わしいモスキートか。ラウニオ伯爵なる青年と、モスキートの姿が重なりぴたりと合わさった。

長子って事は、隣の乙女は妹か？ 青年によく似た金の髪と青い瞳を持った少女に目を移す。緩やかな動作にはかむ笑顔が愛らしい少女だ。少女はラウニオ伯爵に話しかけようとして、伯爵の視線が自分に向いていないことに気付く。伯の視線をたどり私と目があうと、小首をかしげてぺこりと頭を下げた。高慢なラウニオ伯爵とは違い、随分とおっとりとしているようだ。兄に似なくてよかったな。まあ、面倒そうだから、なるべく避けていこう。

「ほら、眉根。また寄ってるよ。あんた僕の忠告聞いているの？ 右から左に流してない？ ちょっと注意力足りないんじゃないの。馬鹿なドジ踏んで捕まらないですよ。つまらないから」



モスキートより煩いレーヴィに、明後日の方向を見たまま、「はいはい」と適当に返事をかえした。

「サカキさん。乙女の衣装がお似合いですね。少し大人っぽくみえます。とても美しい……………」

はい？

小言が帰ってくるかと思いきや、急に口調を変えたレーヴィに啞然として顔を向ける。

「照れておられるのですか。すみません。余りにかわいらしかったもので」

頬を染めて、そつと髪をなでるレーヴィ。このしかめっ面が照れているように見えるというのか。

注意されたばかりだとういうのに眉間に皺を寄せてから、何やら居並ぶ面々の視線が扉近くの一方向に向いている事に気付いた。

私からはレーヴィの影に隠れて死角になっていたそこを、頭を傾けて視界に収める。先ず目に入っただのは何時ぞや身に付けていた豪華な女神様の衣装を纏ったエイノ。そして、そのエイノと近衛に挟まれて、ゆっくりと歩を進める、真つ白な装束に身を包んだ青年と目が合った。顎をひき、すつと背筋を伸ばした青年が歩きたびに背に垂らされた白いマントが波打つ。平素は頬や肩で散らばり遊ぶウエーブのかかった髪は、後ろに撫で付け整えられており、その鋭い眼光を遮るものは何もなかった。

イサーク……………目が据わってますよ。

「ほらね。注意力が足りない」

私の耳に口を寄せて小さく息を吹き込むレーヴィ。険しさを増す  
イサークの視線をうけながら私はその言葉を聞いていた。

いつか思いつきり殴ってやる。私は僅かに膝を曲げて、爪先をス  
カートで覆い隠し、レーヴィの足の甲にのせると、体重をかけて捻  
った。

にい、と口の端を上げて笑むレーヴィ。

この変態め。

67 乙女の憂鬱（後書き）

固有名詞を考えるのがすこぶる面倒です。もう増やさないぞ。

イサークを先頭に、一步遅れてエイノ。その両脇をユハを含む6名程の見慣れた近衛達が固め、続いて神官の衣装に身を包んだ老齢の女性が2名と、同じく神官姿の大きな壺を抱えた、がたいの良い若い男性が2名。十数名からなる王子御一行様は奥に設けられた祭壇を目指し、神殿の中央を真っ直ぐに進んだ。談笑に暇がなかった貴族達が、まるで波が引くように道を開ける。素早い動きで左右に分かれて次々と頭を垂れる様はなかなか壮観だった。

モーゼみたいだな。

レーヴィに促すように脇をつつかれ、慌てて乙女の礼をとったまま、私は映画のワンシーンを思い出していた。

颯爽と歩くイサーク達が私の眼前を通り過ぎると、神殿内の籠った空気に混じって爽やかな外気が風となって首筋に届く。その風がやけに冷たく感じるのは乙女達の熱気で室温が上昇していたからだろう。そういう事にしておこう。

靴音を響かせて、祭壇に到着するとイサークはマントを翻して人々へと向き直った。高い位置に設けられた窓から差し込む光が、一筋の煌めきとなってイサークを照らす。計算付くであるかのような幻想的な神々しさが場を支配していた。

「これより、神誓の儀を執り行う」

イサークの宣言に、集う人々が深く礼をとった。

「清めの水をこれへ」

イサークに変わり祭壇の中心に進み出たエイノの低い声が神殿に響く。祭壇の袖に控えていた壺を抱えた青年神官が一名、エイノの

傍らへと移動した。

サッカーボールがすっぽりと入る程の口の広い壺は、陶器のように厚手で、全面にびっしりと蔦模様の彫りが入っていた。水が入っているとしたら、かなりの重量になるだろう。しかし神官にしては体格のいい青年は涼しい顔をして何でもないように壺を手にしていった。

「誓言の水をこれへ」

もう一人の青年神官が壺を腕に、先に呼ばれた壺持ち神官の隣に並び立つ。清めの水が入っているらしい壺と大きさも形も良く似ていたが、浮かび上がる模様が違っていた。金持ちの気障なボンボンが乗り回す赤い車についたエンブレムによく似たそれには、あつてはならないものが一つついていた。額から生えた掬れた角。それを目にした瞬間、ぞわりと嫌な予感が背筋を覆う。

角のはえた馬の絵を日本でも目にした事がある。その馬の特性を知ったとき、なんて贅沢な助平だ。とそう思ったものだ。

「ユーンに愛でられし乙女よ。ハーラの花を」

エイノの言葉に、控えて立っていた二人の老女が祭壇の隅に飾られた純白の花を手にとり、誓言の水とやらが入った壺へと浸した。

厳かに進められる一連の様子を頬を染めてうつとりとした表情で眺める乙女達。私は一人、顔を青ざめさせて某然と老女を見ていた。

あの二人が乙女だと!?

恐らくそろそろ70に手が届くであろう二人の顔には深い皺が刻まれていた。しかし、歳を経た今なお色あせない涼やかな目元と凜とした口元が、彼女達に控えめながらも輝きを与えている。娘時分はさぞや美しかった事だろう。いや、今問題なのは半世紀前の美醜ではなくて、彼女たちが乙女と呼ばれているという事実だ。私の認

識では乙女というには大幅にとが立ちすぎている。イサークの花嫁にはどう転んでも無理だ。

目を皿にして余すことなく二人を観察していると、腰についた一輪の花を模した見覚えのある黒い石に気がついた。自分の腰に巻かれた帯をちらりと確認する。やはり同じものだ。この宝石と呼ぶのもおこがましい黒光りするだけの石は、見た目に反して相当に貴重なものらしく、これを身に着ける事が出来るのも乙女の特権らしい。ひよっとしたら彼女達は十数代前の乙女なのかもしれない。それが今も乙女と呼ばれている。加えて馬の ユニコーンの姿を写した壺。伯爵令嬢にはなく13歳の私に問題なくある資格。

つまり、

「乙女って………処女？」

ポツリと漏らした呟きにレーヴィが私の顔を見る。

「当たり前でしょ。ああ、そういやあんた、乙女の資格ないね」

そう、ないです。女25歳。それなりに経験も……… って、どうして「ない」って断言しやがるんだ、この男！

儀式の最中だということも忘れて、勢いよく首を回す。神妙な面持ちながらも期待に胸を膨らました冴えない家庭教師の横顔を、張り倒してやりたい気持ちで眺めた。睨みつけるように凝視しているとレーヴィはきよろりと青い瞳を動かして、私を捉える。僅かに、ごく僅かに、挑発を含んだ蠱惑的な笑みを唇に乗せた。魚一匹住めない程に美しく透き通りすぎた湖のような薄い青の瞳が、私を絡めとり翳るように細められる。

私に資格がないと知りつつ、今の今まで一言も忠告を発しなかった非情な男の、思いやりのかけらもないその笑みに、何故か、優しく臍腑を撫で上げられるような不気味な愉楽が体にはしった気がし

て私は眉を顰めた。何だか変態に毒されてきた気がする。

すつと視線を前方に戻したレーヴィに倣い、重い気持ちで前を向いた。

私とレーヴィが静かに攻防を繰り返す間にも儀式は滞りなく進んでいた。名前を読み上げられた乙女が、順に祭壇に登り、エイノの前で跪く。エイノは清めの水が入った壺に黄緑色の柔らかそうな葉がついた枝を浸し、その枝で乙女の頭と肩を払う。誓言の水に浸されたハーラの花から花びらを一枚千切りとると、額を撫で、鼻梁を滑らせて唇に押し当てた。

「偽りを口にする可不ならず、その身を穢す事ならん。女神ヴェラ―モに誓いを」

「麗しの女神ヴェラ―モよ。ユーンに身を捧げたもう事を誓います」

……あれ、魔法じゃないよな。サリの術や光の結界等の魔法が存在するんだ。嘘を封じる術や、見破る術があっても、おかしくない気がする。嫌な汗が額をつたう。逃げ出したい。

落とせ！ つるつと落つことせ！ 貴方はだんだん腕が重くなる……いいからさつさと後生大事に抱えたその不吉な壺を落としかれ！

神官の兄ちゃんが手を滑らして壺を落とすようにと念じてみるも、当然の事ながら全く効果がない。

「サカキ・ケイコ。こちらへ」

とうとう私の番が来てしまった。無情にも私の名を呼ぶエイノの声に促され、祭壇へ近づくと事を拒否する足を懸命に動かし、一段、また一段と階段を上る。エイノの前へと辿り着くときこちない動きで跪いた。跪く瞬間、イサークの顔が陰しく歪められるのを目の端でとらえていた。

顔をあげると、エイノの白い手が伸び、細くしなやかな指先に挟まれた花びらが額から唇に押し当てられる。

「偽りを口にする可不ならず、その身を穢す事ならん。女神ヴェラ―モに誓いを」

表情を消したエイノの、形のよい唇から艶やかな声が落ちる。

「麗しの女神ヴェラ―モよ。ユーンに、身を……………捧げたもう事を誓います」

震えそうになる声を律して宣誓の言葉を口にのせた。

何も、変わらない。

「何か」に耐えようと固く口を引き結んで待つが、何も変化はなかった。

良かった。単なる口先だけの誓いだったようだ。私は小さく息をはくと立ち上がった。膝が笑っていた。

力の入らぬ足を引きずるようにして祭壇を後にしようとし、ふとイサークと視線が合う。安心させるように、こくりと頷いて私を見つめるイサークに先ほど目にした険しさはもうなかった。緊張が解けた私は、にへらと締りのない笑顔で返すと、祭壇を背にする。気付けば背中はずしょりと汗でぬれていた。染みになってなければいいのだが……………。

「これであんたも正式な乙女の一員だね。まあ、頑張つてよ似非生娘さん」

レーヴィの傍へ戻るがいなや吹き込まれる嫌味と、軽薄な応援に、ヒールのついた踵でレーヴィのつま先を踏みにじって応えた。くすくすと押し殺した軽快な笑い声が耳に届く。



誰か、この変態をどうにかしてくれ！

「処女じゃないといけないってのは、形式的なものなんですよね？」

そうですね？ そうなんですよね？ どうかそつだと言ってくれ。

神誓の儀式は滞りなく終わり、イサーク達は一足先に神殿を後にしていた。この後は場所を移して、旧乙女の婆ちゃんズによる説明会となるらしい。城の廊下を進む一団のしんがりに陣取った私は、歩調を緩めて他の乙女達と間隔を空けつつ、こっそりとレーヴィに尋ねた。

「さあね」

「さあねって……………」

「実物を見たことがないし、何とも言えないな……………ただ」

ただ？ もつたいぶって言葉をきり、廊下の窓に視線をやるレーヴィの胸倉を掴んで、前後に揺すって問い質したいのをぐっと堪える。

「生娘以外が触れると神罰が下るとかで」

で？ 一々言葉を区切るレーヴィに苛立ちが募った。さっさと話せ。移動先についてしまうじゃないか。私の胸中などお構いなしなレーヴィはちらりと私を見ると、にいと楽しそうな笑みを浮かべる。

「その昔は罪人の処刑に使われていたそつだよ」

……………処刑。ユーンの群れに突き落とすとか。ユーンに抱き

つかせるとかするんだらうか。罪人が処女だった場合はどうするんだらうね。

「罪人をユーンの角で突かせたり、生き血を飲ませたりしたらしいね」

わあ、痛そう。しかし角で突かれれば生命活動の維持にとてもシンプルな問題が生じるのは分かるが、血を飲むのが何か拙いのだらうか。ありがたい聖獣様の血なのだし、むしろ精がつきそうないメージだな。スツポンみたいに。

「ユーンの恠気に触れると身体を貫かれて死に至り、その血を飲めば血に宿る力に人の器が耐えられず死に至る。しかもそれが直ぐには死ねないらしくてね。7日7晩苦しみ抜いた拳句に二目と見れないう有様の死体が出来上がるとか」

ひいい。えぐいな。生き生きとした笑顔で語るレーヴィの思考が理解出来ない。何でそんな楽しそうなんだ。

「ごく一部の大罪人に限られたみたいだけど。例えば王族殺しとかのね」

そりやそうだよな。罪人が出るたびに血を絞り取られていたらユーンもたまったものではないだらう。ユーンの血、欲しいなあ。等と物騒な事を呟くレーヴィから少しばかり距離をとって歩く。

しかし、考えれば考えるほど贅沢な聖獣様だ。処女だらうか経産婦だらうかユーンには何の利害もないように思えるんだけどな。もつと言えは、何故女性限定。童貞の男はだめなのか？ ユーンは助平の雄か、男嫌いの雌のみで構成されているとでもいうのだらうか。動物の扱いに長けていて、信心深く清らかな心を持つ、毛むく

じやらのむさいチエリーなおやじだっているだろうに。おやじの何がいけない。

そもそもユーンは、処女をどうやって見分けるのだろうか。内診でもするってののか？ 蹄で？ 出来るもんならしてみやがれ。よしんば超高性能魔法的センサーがあつて出来たとしても、性交以外で裂傷している可能性もあるわけだし。

そつだ、たかだか角が生えているだけの馬に何が分かる。大方、王子の花嫁選びの篩いとして、後からどっかの馬鹿が考え付いたんだろう。よし、そういう事にしておこつ。聖獣だろうがなんだろうが、所詮は獣。畜生に膜の有無が分かつてたまるか！

握りこぶしをつくつて気合を入れる私に、「ねえ、血。とつてきてくれない？」と囁く変態は無視した。

自己暗示をかけて気を取り直した頃、折よく貴賓室と言う名の説明会会場へと到着した。付き添いの入室は認められておらず、屋敷に帰る者もいたが、その殆どが、城に用意された別室に移つたようだ。皆、身内の乙女が心配でたまらないらしい。金を産むかもしれない卵だもんな。過保護になるのも領けるというものだ。

「皆様、ごきげんよう」

腕を胸に腰をおる旧乙女の老女。結い上げた髪には白いものが混じり、胸の前で組まれた枯れ枝のように細く節だった指は、彼女の上に流れた時の長さを感じさせる。しかし背筋は美しく伸び、声にははりが残されていた。たおやかな立ち居振る舞いといい、均整のとれた顔立ちといい、彼女達が今時分まで乙女であった事を嘆き惜しんだ男性はさぞかし大勢いたことだろう。

「どうぞ、お掛けになって。肩の力を抜いて下さいな」

聖母のように慈愛の籠った笑顔に、緊張で顔を固くしていた乙女達はぎこちないながらも笑みを浮かべた。

部屋の広さはざっと20畳はあるだろうか。ゆったりと間隔を空けて設けられた椅子に乙女達が腰掛けていく。私は最後に設置されている椅子へと向かった。飴色の椅子は、撫でるとなめした皮のような手触りがする。

「この度は乙女と選ばれました事、またつつがなく神誓の儀を終えられました事、誠におめでとう存じます。ユーンは気性が難しく、乙女の役目は骨が折れると言われていますけれど、案ずる事はないのですよ。ただ、心をこめてユーンのお世話をするだけでよいのです。さすればユーンは自ずと皆様に心を開いてくれるでしょう。皆様、どうぞ世俗の事はお忘れになって。女神ヴェラーモの御使いに仕える、その幸せだけを感じ、感謝の心で臨んで下さい。女神に謝意を。ユーンに謝意を。父母に謝意を。朋輩に謝意を。ね、易しいでしょう?」

さして大きな声を出しているわけでもないのに、老女の声はよく通り、耳に馴染んだ。静かな眼差しで乙女達を見渡す老女に舌をまく。不安と緊張、大きすぎる期待に凝り固まっていた乙女達が、すっかり聞き入っており、その表情は穏やかなものへと変化していた。なんとというカリスマ性。

「ユーンはね、実はとても寂しがりやなのです。ですから自分を愛し慈しんでくれる乙女を好むのですよ。けれど、同時に少し嫉妬深い性質をしています。男性の匂いを嫌いますので、皆様その点だけはお気をつけになってくださいね」

匂い……………か。それは、言葉どおりの意味なのだろうか。それとも……………。カリスマ婆ちゃんの穏やかな目が微かに鋭い光を放った

気がして私は思わず視線を逸らしていた。早くもかけたばかりの自己暗示がぐらつき始める。

当てもなく彷徨わせた視線の隅で、固く握り締められて小さく震える白い手が目に入る。斜め前方の席についた、腰まで届くウェーブのかかった豊かな金の髪が印象的な乙女だ。後方に座している私から、その表情を窺い知る事はできないが、これはひょっとしてお仲間発見か？

70 乙女の憂鬱 (4)

心得を説き終わると、白髪のカリスマ婆ちゃんズは数枚つづりの冊子を乙女達に配って回る。皆の手に冊子が行き渡ると、ほっこりとした笑顔を見せた。

「では、具体的な説明にうつらせていただきます」

冊子を片手にカリスマ婆ちゃんはよどみのない口調で説明を始める。そのかくしゃくとした様に呆けとはまだまだ無縁そうだ、と関心して耳を傾けた。

「まずは日程の説明です。明後日から2日間、皆様にはユーンの間まう聖域に移っていただきます。聖域の環境を知り、ユーンを間近に見て理解していただく事が目的です。それから一度城に戻り7日後に今度は5日間の聖域勤めとなります。ここには書いてありませんが、2度目の聖域訪問は1日、ないし2日程、日程にずれが生じるかもしれませんが。ああそうだわ、これも明記されていない事ですが~~~~」

全部書いておけ！ 抜け落ちている情報の多さに辟易して、私は頬を引きつらせた。やっぱり少し呆け始めているのかもしれない。分かりにくく続く日程の説明に苦慮しているのは、私だけではないようだ。後方から乙女達の様子を観察すれば、首を傾げている者や、額に手をついているだろうと見受けられる者もいた。

「それから、最後に10日間を聖域で過ごして、ユーンとの絆を確固たるものにして頂きます。ああ、聖域の環境に馴染めずに体調を崩す方も時々いらっしやるので、その場合は、早めにコンネちゃん

に申し出て下さいね。一時帰宅も認められますが、可哀想だけれど、無理をして頂かなければならない場合もありますので、二日前には申し入れて頂きたいわ。特に3度目の訪問時の4日目と、4度目の2日目と〜〜」

ああ、ペンが欲しい。婆ちゃんズの説明を必死に頭に叩き込みながら筆記具が手元にならない事を呪った。ヨネちゃんって誰だよ。一時帰宅が認められない日はいつだった？ 4度目の3日目だったか？ もう一度言ってくれ。言ってもらっても覚えられないだろうけど。とりあず、ヨネちゃんは覚えたぞ！

「あら。ヨネちゃんじゃなくて、ハンナちゃんだったかしら」

……………もう、全て聞き流していいだろうか？

「これ、書いてないけど試験に出すからなー」と宣言しておいて出さない教師のように、新乙女達を翻弄するカリスマちよい呆け婆ちゃんは、冊子を持った腕を突っ張って離したり、縮めて間近にもってきたりと忙しい。日本に帰ることが出来れば、是非とも老眼鏡をプレゼントしたい。

その後は「背後から近寄ってはいけない」「大きな音をたててはいけない」など等、馬とさして変わりないと思われる注意事項についてことこまかく説明を受けた。もちろん、口頭で伝えられたことの半分も冊子には書かれてはいなかった。

講義が終わり、別室で待ちかねていた付き添いの面々から、離れていた間の様子を尋ねられても、覚えた事を忘れまいとしてか乙女達の口数は少ない。それをどう解釈したのか、皆乙女を気遣い早々に引き上げていく。

私はいえ、レーヴィを放つて急いで屋敷に戻り、冊子のメモ書きに勤しんだ。一時帰宅申請はハナちゃんだったか？



あらかた覚えていた事を書き終えた私は、マリヤツタが入れてくれたお茶を飲みながらお仲間疑惑の乙女のことを思い出していた。部屋を出るときにさり気なく確認した彼女の顔をしっかりと脳裏に焼き付ける。明るい茶の瞳に確かに宿った怯えの色に、訳ありであると確信していた。十代後半といえば、人生のうちで最も恋多き年頃だろう。そりゃあ、想い合う人がいる乙女だっているよな。家の為にと泣く泣く身を離れたか、既に過去の話なのかは分からないがどちらにせよ嫌な話だ。せめて後者であることを祈りながら、カップの底に溜まったお茶を飲み干した。溶けきらずに残っていた砂糖の甘みと、茶葉の渋みが混ざり合って口に広がる。

お代わりを貰おうと、カップを手に立ち上がるうとした時、茶を飲み終わるのを見計らったようにドアをノックする音が響いた。

「私だ」

扉の向こうから艶やかな低い声がかげられる。

「どござ」

部屋へ入ってきたエイノは、いつもの神官服を見につけていた。結われていたはずの髪は微塵の結い跡も残さず、真っ直ぐと背に垂れている。白い顔には疲労の影が浮き出ていたが、美貌に水を差すどころか艶かしさが増すばかりであるのが腹立たしい。

「今日はご苦労だったな。先達の話は参考になったか？」

「ええ、まあ」

なったような。ならなかったような。言葉を濁す私にエイノはくつと喉を鳴らす。婆ちゃん達の特性を知っているらしい。

「聖域に行く前に、何か私に聞いておきたいことはないのか？」  
「そうですね……………」

私は返答に迷った。

聞きたい事はいっぱいある。けどなあ「ズバリ、処女じゃないと  
とっても物理的な神罰が下るといふのは本当ですか？」なんて、お  
いそれと聞ける相手じゃないし。けど、聞きたい。何とか遠まわし  
にでも聞けないものかと、とっかかりになりそうな質問を思いつい  
て口にした。

「ユーンは男性の匂いを嫌うと言われたのですが、こうやってエイ  
ノさんと話したりするのは問題ないのでしょうか？ や、あの。え  
ーと、明後日には聖域に行かないといけないらしいので、その、男  
性とは接しないほうがいいのかな、と思ひまして」

「匂い……………か」

と、眉を顰めて低く呟くエイノにしどろもどろに言葉を紡いだ。  
何もエイノが臭いって言っているわけじゃないぞ。考えてみれば  
匂いが嫌いとか、失礼な話だよな。

「ユーンは確かに男を嫌い傍に寄る事も許さぬが」

言うなりエイノは私の頭にそつと手を置き、片方の口角を上げて  
笑い言う。

「彼女らの言う匂いとは別のものを指すのであろう」

やっぱりですか。それで、神罰は！？ 本当に下るわけですか？

「別の……………もの？」

こうなれば、とことんかまとぶって突っ込んでやる。サカキ、子供だからわかんない。と言わんばかりに頬に人差し指をつけて首を傾げる。

「そつだ。そつ深く考えずともよい」

頭から髪を滑らすようにして手を離れたエイノは、自身の指が揺らした毛先に置いていた視線を、ふと私のそれと絡ませた。

「お前は、故郷に好いた相手はいなかったのか？」

私を見据える感情の見えない切れ長の瞳。間近で尋ねる声は深く、耳朶を痺れさせて、するりと耳に滑り込む。

「え？ ああ、えーとまあ。いたような気がします」

私は目を逸らし頬についた指でぽりぽりと肌をかいた。この、色気過剰神官め。

平常心を欠いた私の答えに、エイノはふっと息をもらす。エイノから視線を外していた私には、零された吐息の持つ意味合いが分からなかった。

「詮無いことを聞いた。ユーンのを心配しておるのか知らぬが、幼いお前には縁のないこと。気にするな」

無理ですよ。そんな事言われたって。縁ありますから！ 当惑する私の頭を、エイノはぽんぽんと掌で包み込むように優しく叩く。

「しばらく解読はよい。体調の管理に気をつけよ。早く寝るのだな」

そっぴい残して部屋を出て行った。釈然としない私を残して。  
何だか、うまくはぐらかされたよつな気がする……。

71 乙女の憂鬱 (5)

見渡す限りの緑。繰り返し吹き抜ける風に、海原を渡る波のように葉がさざめいていた。

膝程までの高さに伸びたそれはイルというパンや麺類の原料となる穀物らしい。

城を出てからしばらくは細い道の左右を大木が挟む樹海が続いていたが、一旦抜けてしまえば、その後は延々と穀倉地帯が広がっていた。

この世界にきて幾度目かの馬車の中、私は吐き気と闘いながら代わり映えのしない外の風景を眺めていた。道中を一泊二日の日程で早朝に城を発った馬車は、2〜3時間ごとの休憩を挟みながら淀みなく聖域へと続く道を進んでいる。

馬車が揺れる度に胸の下から腰のくびれにかけてまかれていた黒い帯が腹の肉に食い込んだ。苦しい。前回の休憩時に振る舞われた昼食のサンドイッチを欲張りすぎたのかもしれない。馬車の揺れに酔っては大変だと、朝食を控えたのがいけなかった。思っていたよりもゆつくりとした速度で行進する馬車は、揺れも軽微で、ついつい気を緩めて朝の足りず分も食べてしまったのだ。

「大丈夫ですか？ 馬車を止めてもらえるように頼みましょうか？」

私の隣へ腰掛けた神官姿の若い女性が袂から淡い色合いの布を差し出して尋ねてくるのに、私は首を振って応えた。

「大丈夫です。外を眺めていればそのうち治まりますから」

「今以上に具合が悪くなるようでしたらすぐにおっしゃって下さい」

私の手に布を持たせると、女性は手にしていた手提げ袋の中から、

折りたたまれた皮製の小さな袋を取り出し、膝の上にのせた。エチケツト袋だろうか。

ぼんやりと女性の行動を眺めていた私は、せり上がるサンドイッチの残骸の気配を感じて慌てて窓の外へと視線を戻す。ゆるいカーブに差し掛かっていた馬車の窓からは、後続の姿が見えた。馬車2台がすれ違うのがやっとな幅の道に連なる列の長いこと。乙女の数は12名しかいないというのに、荷馬車も含めるとその数は倍に上っていた。

というのも、ユーンの世話をする乙女をさらに世話する神官の女性が数十名同行しているからだ。その神官達がユーンの世話をしたら早いんじゃないかと思うがそうもいかないらしい。しきたりって面倒だな。

馬車の両側には馬に跨る護衛の兵士が、馬車一台につき4名ずつぴたりと張り付いていて、時おり視界を鎧に乗る鎧をまとった足が遮った。聖域には女性しか入れないらしいから、彼らはとんぼ返りで城へ引き返すのかと思いきや、乙女の滞在中は聖域の外に野営地を設けて見張りにあたるのだとか。

その話を隣に座る神官の女性から聞いたときには「何ともご苦労なことですね。兵士さん達も大変な役にあたってしまったものですね」と相槌をうつたのだが、「とんでもない。とても人気のある務めなんですよ」と苦笑交じりに返された。

なんでも乙女を狙う貴族身分の兵士がこぞって志願する倍率の高い任務らしい。兵士をしている貴族は下級出身である場合が多く、乙女に見初められれば婿養子に入り楽々出世も夢ではないそうだ。

だが、今回は乙女の中からイサークの妃が選ばれる確率が非常に高いため、兵士達は嚴重に釘をさされているとか。それでも言わばお零れに預かるうと、挙手する者が後を絶たなかったというのだから、乙女人気恐るべしと言わざるを得ない。

現に今も私の乗る馬車を守る兵士が、手綱を引いて少し距離をとってから馬上の身を屈めてこちらを覗きみていた。私と目が合うと、

にこりと微笑み、器用に片目をつぶってみせてから隊列に戻る。

残念！ 身分のない私に粉をかけても徒勞に終わるぞ。

シルヴァンティエには珍しい暗い茶色の髪はその兵士に私は心の中で突っ込んだ。

影が長く伸びて地に落ちる頃になると、道脇に馬車を止め、兵士と神官達が慌しく夜営の準備を整え始めた。手際よく張られる天幕の群れを眺めていると、食事の支度が整ったと声をかけられ、食卓についておどろいた。

クロスの敷かれたテーブルには旅の途中とは思えぬ程の豪華な食事が並んでいた。湯気を立てるスープに瑞々しいサラダ、芳しい香りを放つとろみのあるソースのかかった肉料理。一行には料理人も加わっているのか。なんと贅沢な旅なのかと呆れながら、暖かい料理に舌鼓を打つ。食後のお茶を啜る頃には天幕へと一人また一人と案内されて、早々にお開きとなった。

いくらゆっくりと進む快適な旅と言っても、一日中馬車に揺られていけば疲れもたまる。悲鳴を上げる腰を摩りながら、私は案内されるままに天幕の入り口に張られた布を潜った。小ぢんまりとした天幕の内部には、板の上に厚みのある布を重ねた簡単な寝台と、小さな衣装箱、液体の入った小瓶が並べられた鏡台が置かれている。衣装箱を開けると寝巻きと明日の着替えが綺麗に畳まれて置かれていた。早速着替えようと寝巻きを手に取ると、天幕の外から声をかけられる。中に入ってきた神官の女性が抱えた桶には熱い湯が注がれていた。近くに水源があるのだろうか。身を拭う湯まで用意されているとは恐れ入る。最早呆れを通り越して感心しながら、有難く身を清めるとさっさと寝台に身を横たえる。お世辞にも寝心地がいとはいえない簡易ベッドでも疲れた体に睡魔はすぐに訪れた。

ぐっすりと熟睡しているところを揺り起こされ着替えを済ませて外に出ると、まだ夜が白み始めたばかりで辺りは薄闇に包まれてい

た。にもかかわらず、きつちり暖かな朝食がセットされている。いたい世話係の神官たちは何時から起きていたのだろうか。神官業も大変だな。

朝食を終えると昨日と変わりない旅が続く。時折馬車を覗く暗い髪色の兵士に曖昧な笑みを返し、小石を踏んでは揺れる馬車にお尻を摩る。

変わった事といえば目に映る景色ぐらいだろうか。穀倉地帯から草原へ、草原からなだらかな傾斜の山道へと移り変わり、そろそろ日がくれようかという時になって、遠く川のせせらぎが耳に届いた。昨日はとつくに夜営の準備を始めていた時間だが、今日は黙々と馬車を走らせている。程なくして大きな岩がまるで門柱のように道の両脇に鎮座している場所を、先頭に行く馬車が通り過ぎると、守備に就いていた兵士が馬首をめぐらして後退していくのが見えた。

「着いたようです。あの岩から向こうが聖域です」

同乗する神官の声に、思わず腰を浮かせて窓に手をつき身を乗り出す。ぷつと吹き出す声が聞こえて顔を上げれば、闇色に染まった髪を揺らして、馬上の兵士が拳を口に笑いを堪えて苦しげに眉を寄せていた。目が合うと、愛嬌のある笑みを浮かべて手を振り、離れていく。微妙に恥ずかしい。帰りは違う人が護衛についてくれる事を祈ろう。

聖域への境目にあつた岩を通り過ぎてから十数分もすると、木々の合間に月明かりに照らされて白く浮かび上がる石造りの建物がちらつき始める。近づくにつれ、その大きさが分かり私は息を呑んだ。この山中によく建てたものだ。城にあつた神殿と同じくらいの高さがあるその建物の、観音開きの重厚な扉が開け放たれ、見知った老女が煌々と光を放つ丸い珠の収められた取っつきの籠を掲げている。

次々と運び込まれる荷物を傍目に、まずは湯を使って疲れた体を



癒してくださいとのお言葉をいただき、湯殿へと案内される。正直クタクタで、お湯じゃなくてベッドで癒したいところなんだけどなしかし、一人断りを入れて別行動をとるわけにもいかず、着替えを手渡されて風呂場の戸をくぐり……私は目を見張った。

それはそれは見事な岩風呂だった。

組まれた岩は大きなものばかりで、中には人の身長程の高があるものもある。岩肌はごつごつとしており野性味に溢れていた。天然の岩を運びこんで造られたというよりは、もともと温泉が湧き出していた場所に建物を建てたのかもしれない。

なんと勿体ないことを！ どうせなら内風呂じゃなくて露天風呂が良かったのに。ああ、あの壁をぶち抜きたい！

熱い湯に浸かりながら壁を睨み付けていると、白い裸体が次々に通り過ぎていった。こんなにもいいお湯なのにもう出てしまうのか？

と首を巡らし気がついた。風呂に残っているのは既に私一人だという事に。どうやらシルヴァンティエの人間には熱すぎるようだ。そういえばエイノ宅の風呂はもう少しぬるかったか。

ひゃっほー。貸切。私は盛大に水しぶきをたて大の字になって湯船に浮かんだ。目を閉じてぶかぶかと揺られる私の耳に入るのはたゆたう湯の音だけ。

そんな極楽の時間は耳をつんざく悲鳴で破られた。甲高い女性の絶叫に慌てて身を起こせば、さらに悲鳴が重なる。何事かと悲鳴のした方向に顔を向けると、馬車に同乗していた神官が零れ落ちそうな程に目を見開いて立っていた。と思ったら、腰が抜けたのかズルズルとその場にへたり込んだ。

「あ、服が濡れますよ」との私の声にも神官の女性は小さく首を振るだけ。白い神官服が見る間にこぼれ出た湯を吸い込んでいく。

まったく、人が気持ちよく温泉を堪能していたというのになんだ。私は風呂から上がると岩場に置いていたタオルを素早く身にまとい、女性の元へと駆け寄る。

「サ、サ、サカキ様！ ご自重なさってください！ 仮にも乙女ともあろう方がなんとはしたくない！」

大丈夫ですか？ と声をかけようとした私に彼女は震える声を張り上げた。

「お帰りが遅いので様子をうかがいに来てみれば、わ、私は、てっきり。サカキ様が……もう手遅れかと………」

目に涙を滲ませる彼女にひたすら謝り、さらに悲鳴を聞きつけて飛び込んできた神官さん達にも謝り倒して聖域一日目の夜は更けていった。

すみませんでした。でも、風呂ぐらいのんびり浸らせてくれ……。

72 乙女の憂鬱 (6)

どんな時でもシルヴァンティエの朝は早い。朝日と共に起きだし、小鳥のさえずりを聞きながら支度を済ませると、私は重たく押し掛かる瞼をこすりながら、朝食の席についた。

乙女が全員着席してもまだ余裕のある長いテーブルの上には所狭しと料理が並んでいる。狐色に焼けたパン。バターや色とりどりのジャムが入ったビンに、大きなお皿に盛られた果物。スープ、サラダ、ふんわりと膨らんだオムレツ、マカロニのように穴の開いた麵に肉を詰め込み煮込んだもの、など等、メニューは豊富で朝から胸焼けがしそうだ。

昨晩は風呂場での顛末についてあちこちに説明と侘びを入れに行き、遅くまで駆けずり回っていたおかげで寝不足だった。超がつくほどの空腹だが、どうにも食欲がわかない。私は腫れぼったい目で、ぼんやりとテーブルを見つめていた。

「昨晩は、大変だったのですってね。お体の具合はよろしくて？」

今にも船を漕ぎ出しそうな私に、無遠慮にかけられた冷たい声音の主へと、ぐるりと音がしそうな勢いで首をもたげて向き直る。

「おはようございます。お蝶婦人」

「ごめんなさい。聞き間違いかしら？ お蝶……………なんですって？」

「すみません。ちょっとしたジョークです。おはようございます。」

「ミーツエ様」

何か言いたげに美しい眉を顰めたミーツエは、しかし私の顔を眺めると、つとすましました顔をつくり、無言で隣の席へ腰をおろす。恐らく私のすわった目を見て、いま嫌味を言うのは得策ではないと

ふんだのだろう。

賢明は判断だ 私にとってだけど。揉めたら泣きを見るのは自分の方だと分かっているても、喧嘩をふっかけられたら穩便に対処する自信がなかった。もう、とにかく眠いわ、馬車に揺られ続けた体は痛いわ、ろくに夕食をとれなかったせいで腹はすいたわ、で体調は最悪だった。いい年して体の不調で苛々するのはみつともないと思うが、この後に控えるユーンとの邂逅のせいもあってか、どうにも心が波立った。処女性など関係ない！ と思いこもつとしてみても、やはり不安は付き纏う。

暗澹たる気分を、テーブルに並べられた焼き立てのパンから立ち昇るこつばしい香りが包み込む。食べ物匂いに癒されるってどうなんだと思いつつ、私はパンに手を伸ばした。ついさっきまで食欲がないと思っていたのに、不思議なもので食べ始めるとそれなりに胃におさまるもので……いやあ、食べた。食べた。周囲の目も気にせず。だって最後の晚餐になるかもしれないわけだしな。と自分に言い訳をして。

食後のお茶が振舞われると同時に、給仕の神官さん達が姿を消す。次の予定までまだ間があるので乙女同士の親睦を深めるようにとの配慮らしい。幾人かの乙女たちが輪になって談笑を始めるのを尻目に、食欲が満たされたせいで再び瞼が下りてきた私は、ティーカップごと部屋の隅に置かれたテーブルへと移動した。

壁に寄りかかるようにして目を閉じていると、間近で椅子が引かれる音がしてうっすらと片目を開ける。蜂蜜色の巻き髪が柔らかそうな胸元へ落ちて見えた。またお前か。

「具合がお悪いのかしら？ ヨンネ様に申し出て帰していただいてはどうかしら？」

第2라운드의鐘を鳴らすミーツェ。お姫様はアグレッシブだ。

「いつそのことご辞退なさってはいかが？　今からでも遅くなくつてよ」

そうか。そうだな。聖域の環境にどうしても馴染めなくて、乙女の大役を果たせる自身がありません！　と泣きついてみようか。しかし、それをすんなり信じてもらえるだろうか。ユハあたりに疑いを持たれそうだしなあ。ユーンの特徴がデマであるほうにかけるか。たとえ疑いの元になったとしても安全策をとるべきか。

ミーツエの言葉を真剣に検討していると、何やら周囲が騒がしくなり、顎に手を当て考え込んでいた私は、そのままの姿勢で顔をあげた。

ざわめきは輪になっていた集団から発せられていた。乙女の一人が両手を顔に当てるように俯いている。周囲の乙女たちが困惑顔で声をかけ、宥めるように肩に手を置き、背中をさするが、とうとう指の間から嗚咽が漏れ出す。

なんだ。なんだ。穏やかじゃないな。

掌で顔を覆ったまま力なく首を振り、押し殺した泣き声を漏らす乙女。首を振るたびに腰まである豊かな金の髪が、風に吹かれた麦の穂のように波打つ。掌に隠されて顔は見えないが、その印象的な長い髪に彼女が誰だか分かった。あの訳ありの乙女だ。

「どっしたのかしら？」

訝しげなミーツエの声。その声が聞こえた分けではないだろうが、乙女がしゃくり上げながら話し始める。

「わ、わたくし、私には神罰が下りますわ。女神を冒瀆し、ユーンを欺こうとした罰が……………」

なんとというか、明日は我が身の私に、彼女の言葉が鋭い刃物となつて胸に刺さつた。

「へりヤ様。どうなさつたのです。お気をしつかり」

「私は許されぬ事を。どうしたら、どうしたらいいの、わからない」

慰めの声も耳に届かぬ様子で泣き続ける乙女へりヤは悲鳴をあげるように言葉を紡いだ。

「私、殿方と口付けを交わしてしまいましたの！」

ずるつ。

顎に当てた手から滑り落ちるといふ、ベタな動作を実際にする日が来るとは思わなかつた。

口付け……………だあ？

「なつ、なんて事をなさつたのです！」

はい？

一笑に付されて終わるはずのその言葉に、取り囲む乙女が叫んだ。

「恐ろしいことを！」

「いったいどなたと……………いえ、そんな事より、今すぐにご辞退申し上げねばなりませんわ。ああ、神誓の儀もすませられたというのに」

「女神に慈悲を請いましょう。一刻も早く聖域の方々に打ち明けられるべきですわ」

えーと。皆さん、頭は大丈夫ですか？ キスで駄目だと？ こっちは正真正銘アウトで悩んでいるのに、いきなりハードルをあ

げまくるな！

私は長く長く息を吐いた。

いくらなんでも異性とのキスが駄目はないでしょう。赤ちゃん時代に親族の誰かで経験済みだと思っぞ。そういうのはカウントされないのか？ それに他人との距離が近い幼少時にもいくらでもありそうだしなあ。

「辞退などとしては、家名に傷が……………」

「な、何をおっしゃっているの。そんな事をおっしゃっている場合ではなくてよ」

「そ、そうですね。お子がお出来になっているかもしれないですよー！」

「じゅっ。」

テーブルに激突しました。ひりひりと痛む額に手を当て私は力なくミーツェに目を向ける。この事態どうする？ との思いを込めてだったのに……………だったのに。

血の気のうせた頬を手で挟み目を見開くミーツェの姿を見てポカんと大口を開けて固まってしまった。ミーツェはわなわなと震える指先を唇に当て苦しげに眉根を寄せる。その反応をみて私は悟った。

お前もか！！

72 乙女の憂鬱 (6) (後書き)

中途半端に長かったのでぶった切り。次話は同じシーンの続きです。



73 乙女の憂鬱 (7)

「いったい誰と？　なんて聞かないぞ。聞きたいけど。絶対に聞くものか。高らかに「イサーク殿下と」と宣言されるならともかく、「バルトロなんかお兄様と」なんて恥じらいの籠った瞳で言われた日には、返す言葉にすっごく困るからな。

今にも倒れそうな青い顔をしながら、気丈にもぐつと唇をかみ締め耐えるミーツェを見ながらお茶をすする。さて、お姫様はどうする気なんだろう。

「そんなっ、子供が？　いいえ、そんなっ……………」

「ああ、女神よ。お許してください」

「いったいどうなさるおつもりなの」

「早くご辞退を！」

煩い。寝不足の頭に響く甲高い声で喚きたてる乙女達。乙女達の混乱は一向に収まる気配を見せず、集団ヒステリー一歩手前の大騒ぎと化していた。さつさと申し出て、大丈夫だと太鼓判を貰ってこい。

「辞退などしては、父に殺されてしまいます」

「では、どうなさるおつもりなの！　ご辞退申し上げて、神殿で祈りをささげられるべきですわ！」

「いいえ。いいえ。辞退など出来ません！　辞退するぐらいなら自害して果てます！」

ぶーっ！

ああ！　お茶が！　ミーツェの顔面にかかってしまったじゃないか。嫌味や文句が流星群の如く飛んでくるかと身構えるが、ミーツ

エは無言で袂から布を取り出すと顔を濡らすお茶を拭いはじめた。

「あの、すみません……………あのー。ミーツエ様？」

恐々としてミーツエの様子を見守る私は、どうやら既に視界に入っていないらしい。空ろな目でただ顔をこするミーツエに頭をかかえたくなつた。

「とめないで！」

「お、おやめになつてー!!」

「へりや様！ お気を静めてくださいませ！」

くそ煩い。延々と続く乙女達の悲鳴に、とつくに拭き終わっている顔を拭い続けるミーツエ。私は目を閉じると眉間に寄つた皺を指で挟んでもみしだいた。放つておいても、神官や聖域の旧乙女達の耳に入ればすぐに事態は収束するだろう。しかし、ミーツエがこれでは……………。收拾までにぼろを出して、反ツイメン派の耳に入りイサークとの関係がこじれては困る。人の口に戸はたてられない。ライバル関係にある他の乙女達が気づく前になんとかしなくては。

ミーツエに向けていた視線を、ちらりと乙女達に走らせれば、テーブルの隅に置かれた籠に入れられた未使用のナイフをへりやが掴んだところだつた。

……………おい。本気ですか。もはや狂気とも思える純粹さにふつと遠くなる意識を戻すと、私はひろげた手を顔の両側に持ち上げ、テーブルめがけて振り下ろした。

バンツ、と暗い灰みの茶色のテーブルが大きな乾いた音をたてる。ひりひりと痛む掌を握り締め、私は椅子から立ち上がった。恐慌状態にあつた乙女達が動きを止め目を丸くして私を見ていた。

「落ち着いてください。神官達が戻ってきます」

ミーツェがヒュツと短く息を吸い込む音が聞こえる。

「乙女の資格は口付けで喪失されてしまうのですか？」

壁際の席から乙女達の集団に歩み寄ると、ヘリヤと呼ばれた乙女が口を開くよりも早く、子供が出来ているかもしれないと言いだした乙女へと視線を移して言葉を投げかけた。

「え、ええ。そうですわ」

「誰からお聞きになりました？」

「父から……」

「口付けをすれば失うと。本当にそう仰っていました？」

戸惑いながらも返答を口にする乙女の言葉に、割り込むように質問を続ける。

「正確な言葉を思い出してください」

ぴしゃりと言い放つ私に乙女は面食らったようだ。きよとんとした表情を見せたかと思えば、むっと眉を寄せ、苛立ちを含んだ声が返された。

「子を成す行為で失われると。ですからそのような行為には絶対に及ばないようにと、そう教えられましたわ。ですから口づけは……」

……」

やっぱりか。私は項垂れるとがしがしとこめかみを掻き繕る。万が一キスで本当にアウトだったらどうしようかと思っただが、よかつ

た。それにしても今までどんな箱に入って育ってきたんだ。唾液で受精が可能だなんて、今日日小学生でも思わないだろうに。いったい彼女達はどこから子を産むつもりなのか。口からげろつと卵でも吐き出す気か？ この世界の人間が全身緑色で触覚が生えていたりしたら、それも可能なかもしれないと考慮したが、生理用品があり、男と女がいる以上、生殖方法も同じだろう。とういか、違ったら嫌だ。すごく嫌だ。

「キスで子供が出来てたまるか」

俯いたままポツリとこぼした言葉は、果たして誰かの耳に届いただろうか。

私は顔を上げるとヘリヤの顔を見据えてきつぱりと告げた。

「口付けで子は出来ません」

「そ、それは。確かですか？」

「確かです」

キスでばこぼこ子供が出来たら、日本は少子化問題に頭を悩ませてないっての。

つかつかと足音を立てて、部屋の中央に歩を進めると、手招きをして皆を寄せ集める。ミーツエまでが素直に従うのを見て、私は苦笑した。いくら居丈高に振舞ってみても、彼女達はまだ、子供の殻を脱ぎきれない少女達なのだ。それも飛び切りの箱入りだ。これは想像でしかないが、彼女達は故意に性に疎くなるように育てられたのではないだろうか。イサークが産まれた時、年の近い娘を持った有力貴族達は、将来、娘がイサークの傍に立つことを夢見ただろう。その為にとわざわざ子をもうけた者もいるかもしれない。妃となる一番の近道であろう乙女とする為に、男女の営みに関する知識から徹底的に遠ざけたのではないだろうか。寝た子を起こさぬよう。純

潔を保てるよう。

イサークの妃となる為に育てられた彼女達が不幸なのか幸福なのかは分からない。しかし、紛う方なき不適合者で、明日の朝日を拝めるかも分からない私よりは、今この瞬間絶対にラッキーなはずだ！　なのに何故私が彼女達に手をさし伸べなければいけないのか。くそつたれ！

「皆様、耳の穴をかつぽじってよくお聞きあそばせ」

私は皆の顔を見渡して、抑えた声を出した。

「花に雄しべと雌しべがあるのはご存知ですか？」

こうして私の半ば自棄な性教育は始まった。にわか教師による講義の間、乙女達は顔を赤らめ、また青ざめさせて一言も声を漏らさずに聞き入っていた。その無垢な反応に、罪悪感がわく。純真な乙女に卑猥な知識を植付ける悪女のような。モスキートに小悪魔と罵られても反論出来ない。話が終わる頃には、乙女達の私を見る目はすっかりと変わっていた。今までは年下と思われていたからか、はたまた容姿や身分のせいなのか、侮蔑とまではいかなかったも、どこか侮りを含んだ目で見られていたのに、頬を染めてため息をつく乙女達の、尊敬と驚きの入り混じった何とも形容のしがたい視線といったら、もう、最悪に居心地が悪い。

74 乙女の憂鬱 (8)

落ち着きを取り戻したヘリヤが、手の中に握り締めたままだったナイフをテーブルの上へと置いた。ことりとテーブルが音をたてる、それを合図としたかのように、放心状態だった乙女達が我にかえる。

「私、安心いたしましたわ。サカキ様は博識でいらっしゃるのね。無知な自分が恥ずかしいですわ」

「本当ですわね。こんなにいとけなくていらっしゃるのに、驚きましたわ」

分かつちやいたけど、私にとって非常に良くない方向に乙女達の会話は進んでいく。口止めすべきだろうか？ と考えてかぶりを振る。口止めなどとしては怪しんでくださいと言っているようなものだ。

「本当に、豊富な知識をお持ちでいらっしゃること。国や育ちが違えば思想や料簡も違うもののかしら。それよりもアリッサ様、惜しいことをしたと思っておられるのではなくて」

胸元に垂れていた蜂蜜色の縦ロールをバサリと手で払うと、ミーツエは含みのある笑みを浮かべた。

「なっ、なんのことかしら？」

「私、見てしまいましたのよ。昨晚、兵士の方と随分といい雰囲気でしたわね」

アリッサと呼ばれた少女の頬が見る間に赤くそまつた。図星なのか。

「そつ、そんな。私は決してやましい真似は」  
「まあ、誤解なさないで。私は責めているわけではありませんのよ。護衛についてくださる兵士の方々は見目の良い男性ばかりですもの。お気持ちは分かりますわ。私も殿下にお会いしていなければ、きつと目移りしておりましたわ」

ミーツエは、胸の前で伸ばした左右の指を交差させ、愛嬌たつぷりに首を傾けた。親しみのこもったミーツエの言葉に、きよるきよるど所在無く視線を彷徨わせていたアリツサは、腹を据えるように、一度大きく息を吸い込んだ。

「私、これまで男性の方とお話する機会もなくて、あの方に声をかけられて。兵士の方のもつと荒々しいものだと思っておりますのに、とても紳士的で、颯爽としていらつしやう。深みのある珍しい御髪の色も素敵で。私、こんな気持ちになったのは初めてで。ああ、でも、決して殿下を………女神を、蔑ろにする気はないのです。その、口付けもお断りいたしましたし」

目のふちを赤く染めて話し始めたアリツサは、見る間に顔どころか首までも色を変えていく。熱を冷まそうと頬に手をあてる姿の、なんと初々しく可愛らしいことか。

「ええ、勿論。わかっております。けれど、私達も女ですもの。素敵な男性に心惹かれるのは仕方の無いことと存じますわ。かくいう私も幼い頃には憧れた方がおりましたもの」

「ミーツエ様にも？………私も」  
「素敵なお話ですわ。実は、私も覚えがありますの。昨年のお事なのですが」

あれよあれよと始まる乙女達の暴露話に私はたじろいだ。抑圧されていた少女らしい感情が一気に爆発したらしい。場に浮かないようにこくこくと相槌をうつてはいるが、加熱する乙女達の話の輪には全く加わっていない。甘酸っぱい思いではとっくの昔に酸化して煮ても焼いても食えたものじゃない代物と化しているからな。

時が経つのも忘れ、目を輝かせて淡い恋の物語に花を咲かせる乙女達。今、鏡を覗き見れば、死んだ魚のような目をしている人に会えるだろう。何時まで続くんだ。拷問にも等しいこの時間は。

それにしても、アリッサの話に出ていた珍しい髪色の兵士つてのは、もしかや私が乗った馬車を受け持っていた奴じゃなかるうな。だとしたら、いい度胸だ。自戒するように念を押されているというのに、私に粉をかけたうえに、他の乙女にキスまで迫っていたとは。赤茶の髪の色を彷彿とさせる。そういえば、あの男もこの国では珍しい髪色だ。血縁者だったりしてな。ああ、そう思うと顔つきも何処か似ているような気がしてきた。よし、帰りは無視しよう。愛想笑いなどとしては勿体無い！

乙女達の恋話は、出立の容易が整ったむねを伝えに神官がやってくるまで続いた。

かわいそうに、食堂にやってきた使いの神官が、室内に流れる微妙な空気に途惑っている。

完全に女子高のノリと化していた乙女達が、慌てて表情を引き締めるが、その顔はどこか満足げで、愉しそうだ。羨ましいこつて。

当初感じられた気負いも薄れ、意気揚々と食堂を後にする乙女達とは逆に、気力を削ぎに削がれた私は、背を曲げて足を引きずるように扉へと向かった。

廊下に出たところで、額に柔らかなものがぶつかる。俯いていたせいで、前に行く乙女にぶつかったようだ。

「申し訳ありません」



顔を上げて、反射的に謝罪の言葉を口にのせた。

「……………お気になさらないで」

澄んだ声がサクランボのように薄く艶やかに色づいた唇からこぼれた。一分の乱れも無い巻き髪が肩に垂れている。よりもよってミーツエか。今度こそ嫌味が飛んでくるのではと期待　　いや、身構えた。しかし、ミーツエはその灰青色の瞳を、何かを訴えるように揺らめかせると、すぐに顔をそむけ、流れるような優美な足取りで行ってしまう。

何か感づかれたかな。

ミーツエの背中を小走りで追いかけながら、さき程の彼女の発言を思い出す。皮肉交じりの突き放すような言葉ではあったが、意図的に話を逸らせたように感じた。事実流れは変わったし、おかげで乙女達の意識も逸れた。

一体何故？　さては後々脅迫の材料に使い、乙女を辞退させようという魂胆だな！？　なんて勘ぐりは嫌な女のそれだろうか。借りを作るのを嫌っただけかもしれないしな。それに、性に対する知識が皆よりあったというだけだ。疑惑の域を出る事はないだろう。

それよりも、今はユーンだ。ああ、胃が痛い。誰か、大丈夫だと言ってくれ！

74 乙女の憂鬱 (8) (後書き)

男性陣が出てこない逆ハー……。  
彼の名前はロニー・サリオラ。本編では主人公とは絡みません。

75 乙女の憂鬱 (9)

神官に先導され、建物の外へと足を踏み出した。背の高い木々の遙か頭上から光が差し込み皆を照らす。あと一刻も経たぬうちに正午を迎えるだろう時間帯なのに、空気は冷たくひやりと肌にしみ込んだ。やはり森の中だからだろうか。それとも標高のせいだろうか？ 玄関前で皆を出迎えた婆ちゃんが、乙女達の顔を見回してにこりと微笑む。

「ごめんなさいね。お待たせしてしまって。どういわけか今朝はユーンの気が立っていて。宥めるのに時間がかかってしまったの」

笑顔で脅迫されている気がした。どうして、今朝に限って聖獣様が荒れていらつしやるんでしょうか。気温の低さだけが原因ではない悪寒が背筋を這い、ぶるりと身を震わせる。

「では、皆様。参りましょう」

婆ちゃんは年を感じさせない軽快な仕草で、長いスカートの裾をためかせ、建物脇から伸びる道へと向き直った。

踏み均されてはいるが、獣道に多少毛が生えた程度の道を、先達の婆ちゃんと二十名程の神官に率いられ、延々と歩かされる。

人の手が殆ど入っていない山中は高木、低木が入り乱れていた。長い裾や袂に慣れていない私は、幾度も枝に服の端をとられ、其のつど歩みを止めて手ではらい、駆け足で皆の背を追って進む。勾配は緩やかだか思うように歩けないおかげで、うっすらと額に汗が滲み始めた。気分はハイキングだ。

婆ちゃん達はユーンの世話の為に年がら年中この道を往復してい

るのだろうか？ 若々しさの秘訣が一つ分かった気がした。

裾の捌き方に慣れ、枝を引つ掛ける回数が劇的に減った頃、前方を行く乙女達の歩みがゆつくりになる。ゴールが近いのだろうか？ 歩調が緩まったおかげで余裕が出来る、私は視線を辺りにさ迷わせた。茂るがままにまかせられた森の中に、人工物らしきものが所々に点在している。

木々に埋もれた石で出来た土台と、その上に僅かに残った朽ちた柱。苔と蔦に覆われた何かの像のようなもの。木の根に侵食され、ひび割れた階段状の石。それらが徐々にその数を増やしていく。

前を行く乙女たちの服の合間からキラキラと光がもれ、眩しさに目を眇めた時、唐突に森が開けた。

道を抜けたその正面に広がるのは、対岸に生える木々を鏡のように写しこんだ、澄んだ湖だった。湖の右手には岩肌の顕な切り立った崖があり、その崖を滑り降りた風が、湖面を渡ることに青い水面に美しい模様が形作られる。対岸を木々に囲まれた湖の手前側の岸には、鋭く尖った切れ味の良さそうな背の高い草が生い茂っており、ぽつりぽつりと苔の生えた岩が顔をのぞかせている。

その中に四角く削られた岩が二つ、寄り添うように佇んでいるのを見つけて、私は思わず顔を顰めた。他の岩は自然の形そのままに、いびつな姿をしているというのに、その二つだけは明らかに人の手が加えられていた。

まるで墓石のようだ。

と、思った。縁起でもない。私は意識してその岩を視界から外す。自然と崖の方に向けられた目が、今度は崖の中腹に空いた穴を捉えた。穴は一箇所ではない。何の穴だろうと思いつながら、ひい、ふう、みい、とその数をかぞえる私の視線を真っ白な神官服が遮る。

「サカキ様。こちらへ」

無表情に告げられ、崖の方向を示されて、私はしつこく穴の数をかぞえながら従った。神官の背中越しに数えた、穴の数は全部で13個。うち一つは地面に接しており、他のものよりもかなり大きい。あとの12個はどれも似たり寄ったりで、直径が2メートル弱程だろうか。どれも地表からは高く離れた場所にある。

他とは違う形態の穴を除いた、12というその数字に思い当たるふしがある。乙女の人数だ。「最低でも12名」確かエイノがそう言っていていやしなかったか？ これは偶然の一致だろうか？

青く茂った下草を踏みしめて、崖の真下までやってくると、婆ちゃんが振り返った。

「さあ、皆様つきましたよ。ここが聖域の中心となるユーンの住まいです」

やはりか。私の想像は当たっていたようだ。あの穴の1つ1つがユーンの寢床だとすると、ユーンの数に12頭ということになるのだろう。……いや、まてよ。1つの穴に一頭とは限らないな。そうなると一人で数頭の世話をする事になるが。番いで一穴だと一人2頭か。うーん、しかし24頭で種が維持出来るとは思えない。一見狭そうな穴だけど京町屋のように奥に広がっていてユーンがじゃうじゃひしめき合っているとか。乙女の仕事って意外とハードかも……。

「まずは、この洞、『楔の窟』奥に湧き出ております聖水で、手と口を清めていただきます。滑りますから気をつけてくださいね」

地上に接している大きな洞窟を目で示すと、婆ちゃんは両手でスカートを掴み足首が見える程度にたくし上げた。

数名の神官が懐から白い布と握り拳だいの球を取り出す。左の掌

に布を置き、その上に球を載せ、右手を翳す。唇が小刻みに動き、何事かを呟いたかと思うと掌の上で球が白い光を放った。城の廊下やエイノの自室で見たのと同じ明かりだ。なんて便利な。電気代いらずじゃないか。あの球を売ってもらえないだろうか。

明かりを掲げた神官を従え、婆ちゃんが洞窟内に足を踏み入れる。それを見て、婆ちゃんを見習い、スカートをつまみ上げた乙女たちが恐る恐る後に続く。左手に球を掲げているために、右手一本でスカートを掴んで進む神官の持つ球を物欲しげに見ながら、私は洞窟内へと足を踏み入れた。

球が放つ光が洞窟内を照らす。ごつごつとしたむき出しの岩場を想像していた私は、光の前に姿を現した洞窟の様子に呆気にとられる。足元も側面も天井さえも、全てが平らに慣らされた黒く光る岩で出来ていた。

岩はその多くの部分に緑の色の苔を纏わせている。足元を見れば、中央に30センチ程の幅で苔のない部分が、入り口から洞窟の奥に向かって細長く続き、定期的に人の出入りがある事を伺わせた。

ために、この岩場が露出した道から一步、外に出ると、ぬるりとした苔に足を取られよるめいた。傍を照らしながら歩いてきた神官に、何をしているのかと言いたげに眉を顰められる。

洞窟は思っていたよりずっと深い。入口から差し込んでいた日の光はとつくに欠片も届かなくなり、頼りは神官の灯す明かりのみとなる。壁や天井から染み出た水が所々に水溜りをつくっている。空気が徐々に冷たくなり、先ほどかいた汗が冷えて風邪をひきそうだ。やがて、両側の壁にどこかで見たとような蔦のレリーフが彫られた場所へと出た。そこから先は苔が綺麗に取り除かれ、岩が明かりを反射して黒々と光っている。

蔦に紛れて角の生えた馬の姿も見えた。につつきユーンが蔦に隠れて遊ぶ壁の彫刻を目で追った先に、紋様の彫られていない箇所を見つけて……ばかんと口を開けた。

辺り一面にびっしりと彫られた蔦とユーン、その蔦がぶつとりと

途切れたその壁の一角に文字が掘り込まれていたのだ。

ゴルドベルグの文字が。

1000年以上昔に、この地で栄えていたゴルドベルグ。道中の森の中で見かけた遺跡はゴルドベルグのものだったのだろうか。この洞窟も随分と古そうだし。ユーンが1000年以上前から、今のシルヴァンテイエと同じようにゴルドベルクという国の名の下に崇められていたとしてもおかしくない。

そうだ、聖域にゴルドベルグの遺物が残されていても何も不思議はないのだ。

私は思わず額を手で押さえた。あの野郎。これが目的だったのか？類まれな美貌を持つ冷血な神官長が、イサークとの仲を反対していたあの蜥蜴野郎が、私の乙女入りを反対するどころか、やけに賛同していた事を思い出していた。すんなりと私を乙女と認めたのは、新しい乙女役を決める時間を惜しんでの事ばかりではなかったのだな。

とことん、自分の趣味に比重をかけやがって。無事に戻れたら、出張手当を請求してやる！ 危険手当もな！

76 乙女の憂鬱 (10)

エイノの思い通りに動くのは癪に障るが、ユーン攻略の糸口が掴めるかもしれない。

私は気を取り直して文字を目でおった。

- 32年 アノ・ガソツト
- 54年 クラエス・フリベルイ
- 81年 キルシ・グロス
- 119年 ヤン・ハルテイ
- 132年 ゲーデイ・イルマリ
- 151年 カティヤ・クスニエミ
- 249年 ラウノ・キラヴァーラ

何だ？ これは？ 年号と後に続くのは人の名前だろうか。首を捻りながら読み進め、最後に書かれた行を見て心臓が跳ねた。

- 497年 ラーティノヤ・ノルタ トル フォルセル

即ち、

フォルセルの呪術師<sup>ラーティノルタ</sup>

私は呆然と立ちつくして、何度もその一文を読み返した。497年ラーティノヤ・ノルタ トル フォルセル。何度読み返そうとも変わらない。間違いなく刻まれたフォルセルの文字。

なぜフォルセルの名前がここに？ ゴルドベルグの終焉について書かれていたエイノの持つ古文書に書かれたその名から、フォルセルなる何かゴルドベルグを終焉へと導く一端を担っていたのでは



ないかとおぼろげに考えていたのだが、違つのだろうか？

聖域の、それも聖獣ユーンが住まうという洞近くにあるこの場所に、名を残すのにどういう意味があるのだろうか？ もしかしたら、ここに彫られているのはユーンを祭るお偉いさんの名前なのか？ シルヴァンティエという神官長のような役に就任した人と、その年代とか。

そう思いついてすぐにその考えを打ち消した。上から6行目、151年〜249年の2行。100年近くも年月が離れている箇所があったからだ。産まれてすぐに役についたとしても無理がある。違う。要人の名ではない。

その昔罪人の処刑に使われていたそうだよ

年号と名前の羅列をにらみ付けるように見ていると、ふとレーヴィの声が聞こえた気がして、私ははっと息を呑んだ。

そうだ。処刑だ。大罪を犯し、ユーンの血を飲まれた者達。その年と名前が記されているのだとしたら、途中で100年もの間が空いている事も、フォルセルの名が刻まれている事も説明がつく。

私は唇を固く結んで込みあがる笑いを抑えた。

死んでいるんじゃないか！ 1000年もの昔に処刑されていた亡霊の為に、私はロリータ紛いの格好をしていたのか。子供のふりなどしなければ、のぞき魔の被害に会う事もなかっただろうに。

いったい誰だよ。性質の悪い噂を流したのは。沸々と湧き上がる怒りに自然と顔が歪んだ。

出所となる人物を見つける事が出来たら、朝から晩まで耳元でねちねちと嫌味を呟いてやる！

「サカキ様、楔を……………」

順を告げにきた神官が、私の顔に浮かぶ暗い笑みを見て後ずさっ

た。

「ああ、はいはい。襦でしたね。すみません、ちょっと物思いに耽ってしまいました」

取り繕うように穏やかな笑顔をつくってはみたが、上手く笑えていたかは分からない。神官の頬が 若干引きつっていたように思うが気にしない事にした。

洞窟の最深部である壁からチヨロチヨロと染み出た水が、壁と同じ黒い石で作られた、手水舎を思わせるどっしりとした水盤に流れ落ちている。

水盤の前に立つと、神官が中心部を窪ませた大きな葉を浸し、器用に水を掬い取った。

「お手を」

言われるがままに両手を前に差し出すと、透明な水が垂らされる。雪解け水のように冷たい。

「口を漱いでください」

葉から零れ落ちる水を掌で受け止め、口元へと持っていく。唇の間から入ってきた水はまるやかで驚くほどに美味だった。シルヴァンティエで飲まれている水は硬質で、私には少々親しみづらいのだが、これはいける。飲料用として売り出せばいいお金になりそうだが、全ての乙女が襦を終えると、一行は来た道を引き返す。洞窟の外に出ると、降り注ぐ日の光が冷えた手足を温めてくれた。

「これで全ての仕度が整いました。これより女神ヴェラーモの御使い聖獣ユーンを、お呼びいたします」

さあ、いよいよこの時がやってきた。ユーンとの対決……いや、対面か。4本足の獣に負けてたまるか。来るならこい！

長い袖の中に隠した手を強く握り締め、両足を広げて大地を踏みしめた。

その時だった。

眩い光が木々の奥から走り出て目を焼く。間を置かずして大地を震わす地響きに似た轟音が大気を支配した。

「アールピージー！」 映画のワンシーンが、激しく点滅を繰り返す脳裏にフラッシュ映像となつて再現される。近代兵器溢れる戦場ならともかく、魔法などという摩訶不思議な技が跋扈するレトロ口かつファンタジーなここでは、かなりの確立で関係ないだろう兵器の名が、大打撃を受けた鼓膜の向こうで延々とエコーしていた。

衝撃が過ぎ去ると、乙女や神官達の口から次々と甲高い悲鳴がもれる。凍り付いて立ちすくむ者、耳を塞いでうづくまる者、闇雲に走り出す者。混乱の最中にあつても、冷静さを保っていた幾人かの神官達が、錯乱状態にある乙女の脇を抱えて、この場を離れようと懸命に動いている。

私とは言えば、脳内を右往左往するRPGの声に頭を揺さぶられながら、呆然と目に映る光景を眺めていた。

そう遠くない場所にある木から立ち上る赤い炎が、大きく口を開けて獲物を狙う蛇のように、次々と辺りの木々を飲み込んでゆく。

「何をしているんですの！」

誰かが私の腕を強く引いた。バランスを崩してたたらを踏む私に、腕を引いた人物がつかれてよろけた。

「しっぴかりなさって！ 早く逃げますわよ！」

こんな時でも乱れない完璧な巻き髪が、炎の生み出す熱風に煽られて頬をくすぐった。

「……………お蝶夫人」

「なんですの、それは。しっかりなさい！」

美少女は怒っていても美少女だ。

「サカキ様、ミーツエ様。こちらです」

もうもつと辺りを包み始めた白い煙を裂いて、白煙に溶け込みそうな神官服の袖から伸びた大きな手が、私の手首を掴んだ。

手首に食い込む指に、ようやく意識がはつきりとした私は、慌ててミーツエの手をとる。手首を掴んだ神官の誘導するままに、視界の悪い中を転びまろびつ進む。煙が目にしみて後から後から涙が零れた。どれほど歩いたのか、白煙がきれ、人々の悲鳴が止むが、目に滲む涙のせいで視界は明瞭としない。

「ありがとうございます」

いがつぼい喉を、唾を飲み込み潤すと、大きな岩の傍で立ち止まった神官に礼を述べた。

すつぽりとフードを被った神官は伏せがちにした頭を左右に振る。喉を痛めたのだろうか。声を出そうとしない神官を心配していると、背後からゴホゴホと咳き込む音が聞こえた。どうやらこちらも喉をやられたらしい。

口元に手をあてて、苦しげにむせぶミーツエに神官は懐から取り出した水入れを差し出した。自分も苦しいのだろうか、乙女を優先するとは見上げた神官根性だ。と感心して伏せられた神官の顔を覗きこむようにして窺い、愕然とする。

(……………レーヴィ)

呟きは声にならなかった。

フードの隙間から零れる髪は長い金色で、眼鏡も外しているが、間違いはない。

変態どS暗殺者。レーヴィこと無口がそこにいた。

77 乙女の憂鬱 (11)

ぱくぱくと声もなく口を開閉する私と目が合うと、レーヴィは肩をすくめて茶目つ気たっぷりに唇を吊り上げ凶悪な笑みを浮かべた。

「なん……………なん、なんで」

ようやく声を絞り出した私の、掴んだままの手首を引いて逃げ道を塞ぐと、レーヴィは素早く耳元に唇をよせる。

「助けにきてあげたんだ。騒がないでよ」

だ、れ、が、信じるか。

ある意味澄んだ青い瞳を睨んで返すと、レーヴィは一層愉しげに微笑む。

もう、嫌な予感しかしない。現れたタイミングからして先程の爆発はレーヴィが仕組んだものである可能性がすこぶる高い。一体何を考えているんだ。そうまでしてユーンの血が欲しかったのか？

目の前の変態をいぶかしみ注視していると、私を見て細められていた薄い青色の瞳がほんの一瞬、私の背後に向けられた。

ひつくと喉を引きつらせる声がある。慌てて手首に巻きつくレーヴィの手を振り払い後ろをみると、喉元を押さえたミーツエが、水入れを口にあてて、水を流し込もうとしているところだった。背筋を冷たいものが滑り落ちる。

「あーっと！ ミーツエ様」

私は、反射的に声を上げていた。

「ごぼっ、なっ、なんです、のっ」

掠れた声を出し、眉を顰めて私を見たミーツエの手を、がしっと両手で掴む。

「ありがとうございます！ ミーツエ様は私の命の恩人ですわっ！」

掴んだ手を上下に大きく揺さぶった。ミーツエの手の中にある水入れごと。

ちゃっぷちゃっぷと音を立てて飲み口から水がこぼれ、地面に染み込んでいく。

「なっ、なにをっ、げほっ」

「私などをわざわざ助けて下さるなんて、感謝感激感無量です！」

困惑して制止する声を無視して、さらに激しく手を振った。

「あっ、水が……………」

ついに水入れがミーツエの手から転がり落ちる。

困惑するミーツエの声に混じって、忌々しげな舌打ちの音を、私は確かに聞いた。

「ああっ、申し訳ありません！ あらら、飲み口に土が。これではもう飲めませんね。ささ、ミーツエ様。館に戻りましょう。水はそちらでいただけますわ」

強引にミーツエの手を取り歩き出そうとすると、ふいに日が翳った。いや、日が翳ったのではない。何かの影が落ちたのだ。背後にある大きな岩の上に立つ何者かの影が、私を飲み込み、地に黒い染

みをつくるのを、眼を見開いて見つめた。

「ユーン……………」

聞きたくなかった、その言葉。泣きつ面に蜂とはこの事か。

ミーツエの口からこぼれ出たユーンの三文字に、何もかもを放つて、全速力で駆け出してしまいたくなる。

「血が。怪我を!？」

ミーツエが悲痛な声をあげた。

怪我？ あの爆発に巻き込まれたのだろうか。レーヴィめ、罰が当たっても知らないぞ。むしろ当たれ!

私はゆっくりと向き直った。怪我を負っているのなら、いざとなれば逃げおおせるかもしれない。そう思って。

見上げる程の巨岩の上に、それはいた。

蹄が岩肌を打ちつける度に、カツカツと高い音がする。気が立っているのか絶え間なく吐き出される荒い鼻息。血走った目。どんな些細な音でも捉えるだろう大きな耳は忙しなく動き、眉間から生えた擦れた角は鋭く尖り淡く輝いている。

これが、ユーン。私はごくりと喉をならした。

「なんて気高いお姿なのかしら……………」

感嘆の声をもらすミーツエの横で、私は首を捻った。

気高い……………のか？ 思い描いていた姿とちよつと違うような気がする。

サラブレッドのように見上げるほどに大きな馬体。その体は短い純白の毛に覆われ、躍動感溢れる筋肉の動きを離れていても感じ取ることができる。首筋を覆う鬣は絹糸のように繊細で、森の谷間を



抜ける風に遊び舞う。深い海の底のような静謐さを湛えた瞳が私たちを射抜いていた。

っていうのを想像していたんですけど。

落ち着きなくカリカリと岩を引っ掻く聖獣ユーンはロバ程の小さな馬だった。白黒の。うん、白黒。しかも縞々。縞々のロバ。というかシマウマ。そう、ロバだとか縞々だとか白黒だなんて、まどろっこしく言う必要はない。シマウマだ。

綺羅綺羅しい角の生えたシマウマが、そこにいた。神々しいというよりは可愛らしいといったほうがしっくりくる。伸びた角刈りのようなツンツンと立った鬣も見事に白黒で感心してしまう。確かに珍獣だ。

シマウマだと思うと途端に有り難味が4割減になってしまつのは何故だろう。その見慣れぬ角さえもハリボテのように思えてきた。実は拾ってきたイツカクジラの牙をペイントしてつけただけなんじゃないのか？

何処をどう走ってきたのか、体の至る所に跳ね上げた泥をつけたユーンを、胡乱な目で眺める。ユーンは前足をひと際強く岩に擦り付け、抗議するように嘶きをあげた。その高い声にビクリと体がふるえる。シマウマでも怖いものは怖い。

「手当てをしなくては」

ミーツエは落ちた水入れを拾い上げ、緊張した面持ちでそろりと足を踏み出した。

えええ。いくら小さくても危ないぞ。見るからに興奮しているし、もしも蹄で蹴られては無事ではすまないだろう。それに、血に触れるのにも抵抗がある。飲めば7日7晩苦しむ毒だ。経皮摂取も問題があるのではないのだろうか？

ユーンの泥に塗れた右前足の関節部から流れる赤い血を目にして、私は無意識に後ずさっていた。血は極微量だった。子供が転んでひ

ざ小僧を擦りむいた程度の怪我であることに、落胆する。ユーンがその気になれば逃げられないだろう。

「ユーン。私はこの度乙女となりましたミーツェと申します。傷口を清めますのでどうぞこちらへ」

ミーツェは微かに震える、しかし、しっかりとした口調でユーンに語りかけると、さらに一歩進んだ。

左の掌に水入れから水を注ぎ、掲げる。

その水は！

慌てて駆け寄ろうとした私の二の腕を、誰かが掴んだ。「放して」と口にするよりも早く、その人物の胸元へと引き寄せられる。

「まき込まれたいの？　ここにいなよ」

囁く声はぞくりとする程冷たい。

「っ……………！！」

硬く腕を掴まれて動きを封じられ、せめて声をあげようと開きかけた口も、素早く伸びた掌に塞がれた。

「やあ」

ミーツェが水を湛えた掌を伸ばす。ユーンが岩を蹴ってミーツェの眼前に降り立った。

目を、見開いて見つめる事しか出来ない。

頭上を旋回する一羽の鳥が鋭い鳴き声をあげる。

一陣の風が吹きぬけ、辺りを覆う木々の葉が雪のように舞う。

緑色のそれに混じって爆発現場から運ばれたと思しき炭が、ひら

りひらりと揺れながら私とミーツエの間に落ちた。

死に物狂いで抵抗すれば、ミーツエを止められたかもしれない。しかし私の体は良心よりも本能に忠実だった。レーヴィの肩に頭を押し付けられたまま、ミーツエがユーンの足元に片膝をついてしゃがみ込むのを、ただ見ていた。

ばさりと長い尾を揺らしたユーンが何かを確かめるように、ミーツエの頬に鼻先を摺り寄せた。

「安心して、傷を清めるだけよ」

まるで幼子を宥めるように柔らかく微笑むと、ミーツエは掌の水をそっと、ユーンの傷へと落とした。

ブルルツと唸るような鳴声を上げ、体を引きかけたユーンは、しかしそれ以上拒絶を示す事はなかった。

水入れの水を掌にすくっては、ユーンの傷口を洗い清めるミーツエ。あれほど落ち着きのなかったユーンが、呼吸を穏やかなものへと変えていく。

すごい。ミーツエにならばきつと恐竜サイズの団子虫も心を開いてくれるだろう。風の〇のお蝶夫人は、見た目だけではなく心も美しかった。お姫様で、勝気で、美少女で、ブラコンで、心優しく、機転もきく。もう、最強じゃないか？

78 乙女の憂鬱 (12)

傷口を濯ぐミーツエの手をユーンが黒く濡れた鼻で、2、3度軽くつつく。

「あら、お水を飲みたいの？ 大丈夫よ、水はまだあるから、こちら、急かさないの」

ナチュラルにユーンと会話を開始するミーツエ。

一人と一匹の心温まる戯れに、ぼへつと見入っていた私は、はつと我に返った。

いや、だから、その水は！

強張る体を察知したのか、レーヴィの拘束が強まる。

「しいー」

耳に吹き込まれる愉しげな声。おまけにかりつと耳朶に齒をあてられて、体が硬まる。どさくさに紛れて何をしゃがる、この変態。口を塞ぐレーヴィの手に噛み付こうか、足を踏みしだこうか、迷ったのがいけなかった。

ミーツエの掌に垂らされた水を、ユーンが舌をのばして舐める。

あーあ。

2度3度と美味しそうに喉を鳴らすユーンを私は呆然と見ていた。飲んじやったよ。

鼻面をすりつけて、掌から水をすすすることに没頭しているユーンを見つめるミーツエの眼差しはどこまでも優しい。瞬きするたびに大きな青灰色の瞳が、長いまつげに隠れた。

なんとも心温まる光景だが、あの時、ミーツエを見たレーヴィの目が気にかかる。レーヴィは何のために危険をおかしてまで聖域へ

きたのか。私を助ける為などは1ピコも思わない。仮にユーンの血が欲しくて、潜り込んだのだとしても、この危険極まりない迷惑男が、善意で人に助けの手を差し出すはずがないのだ。

水には何かが混入されている。そう私は確信していた。のだが。

気を失うことも、四肢を痙攣させて泡を吹くことも、血をはくこともなく、ユーンはご機嫌にミーツェに甘えている。

杞憂だったのだろうか？ よくよく考えれば同盟を望むツイメンが大事な駒であるミーツェを殺害しても何の益もないもんな。

けれど、なあ。どうにも解せない。私は手を顎にあてて首を捻った。自由に動く両手に、いつの間にもやら拘束が解かれていることに気づく。

振り向けば、そこにいるはずのレーヴィの姿はなく、代わりに数名の神官と、聖域の婆ちゃんが遠巻きに私たちを、というよりミーツェとユーンを見ていた。その顔にはありありと賞賛の色が浮かんでいる。

ぱんぱんと手を打ち鳴らし、婆ちゃんが私を通り越してミーツェの傍へと歩み寄った。

「素晴らしいわ。ユーンがもう心を開いているなんて。あの騒ぎで極度の緊張状態にあったはずなのに」

肩に頭を摺り寄せるユーンの首筋をなでながら、ミーツェは頬を僅かに赤らめた。

「恐れ入りますわ」

ゆっくりと立ち上がったミーツェを婆ちゃんは真っ直ぐに見つめる。平素の穏やかな笑みはなりを潜め、厳しくも真摯な表情がその顔を覆っていた。

「ミーツエ様。私ども聖域の人間はあなた様を歓迎いたします」

婆ちゃんは、掌を重ねて胸につけ腰を折った。敬意を尽くした乙女の礼だ。

聖域がミーツエを、シルヴァンティエの王太子  
イサー  
クの妃として相応しい人物であると、認めた瞬間だった。

女神の御使いであるユーンを擁する聖域の後押しは、きつとミーツエを優位に導くだろう。彼女は王太子妃の座に一步近づいたのだ。目を見張って息を詰めたミーツエは、そつと目を伏せ、こくりと小さく首を縦に振った。まるで何かを自分に納得させるように。

ミーツエの心を感じ取ったのか、ユーンがその指先を慰めるようにそつと舐める。

ユーンの鼻先を撫でながら顔を上げたミーツエは、誇らしげな笑みを浮かべていた。

大輪の薔薇の花がほころんだようなその笑顔に、婆ちゃんは満足げに頷いて返すと、背後の神官達が嘆声をあげた。

神官達は我先にとミーツエを取り囲み口々に贅辞を述べる。

その輪の中心で笑顔を振りまくミーツエを私は複雑な思いを抱いて見ていた。

彼女は、何を飲み込んだのだろう。

キスの相手は果たして誰だったのだろうか。

祖国を出てシルヴァンティエの土を踏んだ時点で、覚悟は出来ていただろう。しかし数刻前に想い人の事を、唇の感触を、思い出したばかりなのだ。頭では分かっている、感情はそうそう割り切れるものではない。

せつないな。

青灰色の瞳に揺れる、決意と哀愁が入り混じった複雑な光に胸が痛んだ。

同じ女としてミーツエの気持ちを慮ると、イサークに一言いわず

にはおれない。人生の先輩としても、これだけは言っておきたい。

チャンスだぞ、イサーク！ 落とすなら傷心の今だ！

78 乙女の憂鬱 (12) (後書き)

注意：ヒロインは柷です。柷なんです……。



「他のユーンは、安全な場所に避難していただいております。後は私たちに任せて館にお戻りください。さあ、サカキ様も」

婆ちゃんに促されてもユーンはミーツエの傍を離れようとしな。幾度もその首を撫でさすり、理解しているのか怪しいユーンに辛抱強く声をかけ続け、ようやくユーンは婆ちゃんの後について森の奥へと姿を消した。名残惜しそうにミーツエを振り返りながら。

遠ざかるシマウマの後姿にひらひらと手を振ると、私は神官の誘導をうけミーツエと共に館へと戻る道を歩き始めた。

レーヴィに齧られた耳を拭いながら、ユーンの棲家がある岸壁と泉の横を通り過ぎると、鎧の擦れる重く高い音が聞こえる。木々の合間に兵士の姿がちらちらと見えた。

消火の為に禁を侵して兵士たちを聖域にいられたのか。

原因不明の爆発にユーンや乙女達の安全確保、消火作業となると聖域にいる神官だけでは手が回らなかったのだろう。

緑に埋まる森の中に、黒に覆われた異質な空間が出来上がっていた。半ば炭化した太い根元部分のみを残した木を中心に、焼け落ちた枝や葉が入り乱れる。横倒しに重なり合った木々のあちらこちらからは未だ細かい煙があがっていた。地面は消火に使われた水でぬかるんでおり、泥と、水に溶けた灰が、銀色に光る兵士達の鎧に無数にこびり付いている。延焼を防ぐ為に切り倒されたのだろうか。周囲には青い葉を茂らした木々が無残に切り倒され、その痛々しい姿をさらしていた。

野次馬根性で火災現場を眺めながら歩いていた私は、流れ出た水で足元がゆるんでいる事に気が付かなかった。

ずるりと、靴底が泥の上を滑る。咄嗟に前を行くミーツエの袖を

掴もうと手を伸ばしかけて、やめた。ツイメンの姫でもあり、将来の王妃様でもあるミーツェに怪我でもさせたら立場に困る。それだけでなく微妙なのだから。

ああ、泥まみれになるな。この非常時に岩風呂に入りたいと言ったら白い目で見られるだろうか。数時間はどろどろで過ごさなくてはいけないかもしれないと諦めたとき、お尻にくるべき衝撃が何故か背中に走る。

黒と茶色に塗れた硬い鎧に覆われた指が、背中をまわり肩を支えていた。

肩越しに振り仰ぐと、鈍い光を放つ兜が目に入る。

「あの、ありがとうございます」

慌てて体勢を立て直すと、兵士は可動式の兜の顔面部分を持ち上げた。

僅かに緑がかった青い瞳が細められる。暗い色味の髪が一房、兜の隙間から覗いてとれた。

「けっ、おまえか。」

「大丈夫ですか？ 館までお送り致します」

「嫌です」って言えたらいいのにな。

「お忙しいのに、申し訳ありませんわ」

首を傾けて困惑した顔を作り、控えめに断るが、「いえいえ、一度一段落ついたところで、館に報告に戻るところですから」とかわされた。

「さぞや怖い思いをされた事でしょう」

「まあ」

「我々が来たからにはもう大丈夫です」

「そうだといいですね」

「お怪我はありませんでしたか？」

「おかげさまで」

道すがら、誑しその2はひっきりなしに話しかけてきた。その目は妙に生き生きと輝いており、両端を上げたままの形の良い唇は瑞々しい。思っていたより若い気がする。

それにしても……隣を歩く誑しその2の鎧についた汚れに目をやりながら私はこっさりため息をついた。転んでも転ばなくても、大して差はなかったかもしれない。掴まれた肩にはくつきりと黒と茶色の斑模様の手形がついていた。背中はずっとひどい事になっていそうだ。

前に行くミーツエが時折後ろを振り返る。気遣わしげな視線を私に、侮蔑の混じった視線を誑しその2にむけて。彼女も気づいたのだろう、こいつがアリツサを誑かそうとしていた兵士であると。

しかし、当の本人は凍えそうな冷たい青灰色の瞳にも全く怯む様子を見せない。シルヴァンティエにはふっさふさに毛の生えた心臓の持ち主のなんと多いことか。知れば知るほどあの男に似ている気がする。

兵士達が水を運んで行き来したのか、道には点々と水がこぼれていた。おかげで常に足元に気をはらわねばならなかった。

誑しその2に、常人ならば「俺って嫌われてる？」と気づいて話しかけるのを遠慮するであろう程に適当な相槌をかえしながら歩き続けることしばし、ようやく遠くに館の白い壁が見えた。館の前には十数名の兵士がたむろしている。そのなかに紺色の近衛兵の制服に身を包んだ人影が数名みてとれた。

おかしいな。同行していた兵達に近衛は混じっていないかったのに、眉を顰めたとき、そのうちの一人が見知った人間に酷似してい

ることに気づいた。一連の騒動による疲れがどつと押し掛かるような錯覚にとらわれる。

見間違いだ。こんなところにいるはずかない。ちょっと思い出していたから似た人物がそう見えただけだと自分に言い聞かせるも……大勢の兵士の中にも目を引く長身に赤茶の髪。蠱惑的な緑の瞳。極めつけは頬の傷跡に、内面の黒さを感じさせない爽やかな笑み。……どうみても本人だった。

ユハはこちらに気づくと、紺色の制服の裾から足をのばし、颯爽と近づいてくる。目の前までくると、立ったまま頭をさげる略式の礼をとった。

「ミーツエ様、サカキ様。ご無事で何よりです」

ユハは、唇の端をあげて微笑んだ。

「ミーツエ様、奥の広間に皆様あつまっております。お疲れでしょうがそちらでお待ちください。ロニ、ご案内しろ」  
「はっ」

ロニという名なのか。誑しその2が短く声を上げて敬礼をする。ロニの後ろについて玄関をくぐり奥の広間へと足を進めるミーツエ。そのあとに続こうとすると、すつとユハの手が胸の前に降りてきた。

「サカキ様は、こちらへ」

へ？

驚いてユハの顔を振り仰ぐ。柔らかく細められた緑の瞳が静かに私を見ていた。

どうして私だけ別行動なんだ……。

理由を説明する事もなく前に行くユ八を小走りで追いかける。何時もなら歩幅を合わせてくれるのだが、急いでいるのだろうか。

石で出来た階段を上り右に曲がってすぐの扉の前になると、ユ八は足をとめて扉を軽く握った拳で叩いた。

拳をおろしたユ八は扉を見つめて返事をまつ。が、部屋の中からは物音一つしない。5秒………10秒………たっぷり30秒が経過した。

ユ八の腕が再び持ち上がる、再度ノックをするのかと思いきや、扉に手をかけ力をこめる。

扉はかすかに床を擦る音をたてながらあっさりと開いた。

何の躊躇もみせず部屋の中へと足を踏み入れるユ八。私は廊下に立つたまま首をのばして恐る恐る中を伺った。

部屋の中央にアイボリー色の毛足の短い敷物が敷かれ、その上に素朴な色合いのテーブルと椅子が置かれている。左の壁には書棚が置かれ、右の壁にはタペストリーが飾られていた。椅子の横をすり抜けて、壁際に進んだユ八は、窓の下に置かれたソファの前で立ち止まる。

硬そうなソファにうつ伏せに寝そべる人物を認めて、私は小さく息をのんだ。

裾の長い神官服で身を包んだエイノが目を閉じてクッションに頭を沈めていた。

ユ八の姿を見たときから、エイノも来ているのかもしれないと予想はついていた。だから、エイノがいる事に驚きはない。

私が驚いたのはその顔色だ。むかつ腹が立つ美麗な顔には全くと言っていいほど血の気がなかったのだ。固く閉じられた瞳に、紫色の唇。白魚のような指が力なくソファから垂れていた。

だから仕事はほどほどにして、体を労われと言ったのに。エイノよ、安らかに。私の夢枕には立つなよ。

「ユハか」

あ、生きてた。

低い声で力なく呟くと、エイノは重たそうに瞼をあげた。茶色い瞳が私をとらえる。

「来い」

短く言われ、私はまごついた。エイノ・オブ・ザ・デッドには妙な気迫と色気があって、出来ることなら遠巻きに会話をしたい。

助けを求めて、ちらりとユハに視線を走らせると、顎をひいて頷かれる。逃げ道なしか。そもそも助けを求めた相手が間違っていた気がする。

おすおすと室内を横切り、ソファの前に立つと、エイノは腕をつけてソファから身を起こした。立ち上がるのも億劫そうなその様子に、私は床に膝をついて視線をあわせた。

鎖にでも繋がれているのではないかと思うほどに、ゆっくりとエイノが手を持ち上げる。どうする気なのかと目で追った指先がそつと私の背後に回されたかと思うと、ぐつと背中を押される。はずみで私の顔はエイノの胸に埋まった。驚いて身を離そうとするも、もう片方の手が髪の中に滑り込み首を撫ぜるように押さえ込んだ。冷たい手の感触にびくりと体が揺れる。

みるまに息が詰まるほどにきつく抱きしめられ、顔の横でため息が落とされる。熱い風が耳の中に入り込んだ。

人間、驚きすぎると無表情になるのだと、私は知った。顔の筋肉ひとつ動かせずに固まる私の背を、首に当てられていた手が滑り落ちる。布をとおしても伝わる、背骨の隆起を一つ一つ確かめるように撫でていく滑らかな指の感触。

エイノは働きすぎて頭がおかしくなってしまったのだろうか？

それか、ユハだ。ユハ菌だ。ユハ菌に感染して分別がつかなくな

ってしまったんだ。

瞬きも出来ないまま、私は今おこっている不可思議なこの現実に向き直ろうと試みた。

ユハ化したエイノ。なんて迷惑な存在だ。女にとっても男にとっても毒にしかならないだろう。鼻をふさぐエイノの胸元からはいっそやと同じ甘いかがりがした。

はんっ。色神官が。服に香なぞ焚き染めおって！

すっかりしろ私！ いくらいい声でも、いい匂いでも、いい男でも、こいつの本性は冷血蜥蜴神官だぞ！ 今まで幾度も思い知らされてきたじゃないか。そうだ、絶対に裏があるんだ！

だらりと垂らされていた2本の腕を渾身の力を振り絞って動かさ、エイノの長つたらしい袖を掴む。

もう一度、耳の傍で大きくため息をついたエイノが体を離して私を見る。強張った私の顔を眺めると、唇を僅かにつりあげ、面白がるようにくつと笑みをこぼした。かと思うと、ふわりと目元を緩める。

「無事であったか」

エイノがこんなにも柔らかく笑む所をはじめてみた。本気で心配してくれていたのだろうか。茶色の冷たい瞳が温かな熱を灯す。唇には赤みがさし、心なしか零された言葉にも力が戻っているような気がした。

「エイノさん、どうしてここに？」

いやいや、そんな笑顔に騙されてたまるかと、私はあえて固い声をだした。

「仕事だ」

「仕事？」

聖域の中で？ 男子禁制じゃなかったのか？  
エイノは緩慢な動きでソファに背を預ける。

「この近くに神事に使う為の枝を切り出す神木があつてな。立場上私が同席せねばならなかったのだ」

「帰ろうとしたときに、聖域から火の手があがったのを見てね」

死人のようだった先程までよりは随分とましになったものの、未だありありと不調を滲ませたエイノの様子をみかねてか、ユ八が言葉を継いだ。

「聖域の入口でうるたえていた兵士達にエイノが急遽許可を与えて共に中に入ったんだよ」

ユ八を見上げる私の前に、筋張った大きな手が伸びる。上を向いて差し出された掌に、ソファの前に跪いたままだった私に氣遣ったのだと、思い至って手を重ねた。なるべく体重をかけないようにして立ち上がると、導かれるままに傍の椅子へと腰をおろした。

「男性が入っても大丈夫だったんですね……。ユーンや女神の怒りに触れたりしないんですか？」

「昔は男の侵入を阻む結界があつてな。おかげで男は髪の一筋さえも侵入する事はできなかったそうだが、その技は失われて久しい。ようはユーンにさえ接触せねばよいのだ」

ああああ。聖域への男性の出入りが問題ないのなら、ユーンの助平気質も迷信かと思っただが、ユーンは別なのか。



「おまえも、女神の存在を信じておるわけではあるまい」

も、って。仮にも神官長がそう堂々と不信心を公言しないでほしい。

「まあ、私は異国の人間ですし………ところで、犯人はつかまつたんですか？」

「犯人？」

私の言葉にユハがぴくりと眉を動かす。

「爆発のです」

他に何の犯人がいるっていうんだ。私は立つたままのユハを仰ぎ見た。首がつかれる。ただでさえ身長差があるというのに着席した状態で顔を見るのは至難の技だ。座ったらどうなんだ。

「いや、まだ何も分かっていないんだが。サカキちゃんは何か心当たりでも？」

「残念ながら………」

あれだけ大勢の兵士が聖域内をうろついでいて、まだレーヴィは発見されていないらしい。逃げ切られて、また気まぐれに厄介事に巻き込まれるのもたまらないが、捕まって私の事をばらされても困る。

「サカキ」

ソファにもたれたままのエイノが静かに名を呼んだ。

「明日中には増援が来る。増援の兵士達が到着し次第、乙女は城へ戻ることになる。そのつもりでいろ」

そりゃ、そうだよな。こんな状態じゃユーンの世話どころではないものな。どうやら命拾いしたようだ。結果的に、「助けにきた」というレーヴィの言葉は嘘にはならなかった……か。まさか本当に私を助けるに？

なんて、あるわけないない。

エイノの言葉どおり、翌日の日暮れ前に増援が到着すると、入れ替わるように私達は聖域を後にした。エイノとはあれきり会話を交わしていない。聖域内部の事やゴルドベルグの遺跡について等を細々と聞かれると思っていたのに。忙しいのだろうか。それとも体調が悪くてそれどころではないのかもしれない。もしか、これ幸いと自ら見物に行ったりしていないだろうか……。

帰城の途は、往路に護衛についていた兵士達に増援部隊の一部も加わり、なんとも物々しいものとなっていた。

夜半まで走らせた馬車を、見晴らしのいい草原にとめてまずは一泊。先を急ぐ馬車に揺られて痛むお尻に、打ち身に効くというアロエのような肉厚の植物の葉を貼り付け、寝台に臥せって過ごした。せめて夜明けまで待てばいいのに。

翌朝、幾分ましになった尻をさすりながら天幕を出て、こんな状況にあってもしっかりと用意されている朝食を目にして驚いた。ただ、人数の増えた兵士達がまともに食事をしてるところを見たことはなかったが。かつちかちに乾燥したパンのような携帯食をかじる姿をちらりと見かけたただけだ。そんな兵士達に囲まれて味わう食事は……それでも美味しかったです。すみません。

景色を楽しむ余裕もない馬車の旅を、寝台に敷き詰めてあった布を馬車に持ち込み、尻の下に敷いて凌ぐ。

砂利道の上をがらがらと車輪が回る音を聞きながら、私はぼうつと聖域で過ごした短い日々を思いをさせていた。

エイノの態度、イサークとミーツェの関係、レーヴィの目的、角の生えたシマウマ、墓石のような岩、処刑されていたフォルセルの呪術師、ユハとロニの類似点。まあ、最後はどうでもいいとして、何かもが紗幕を通したようにぼやけていた。一つ一つに焦点を絞っ

て考えていこうとしても、思考は車輪にはじかれる小石のようにバラバラに弾けて何もつかめない。分からないことばかりが増えていく。

さがし物 か。

隣に座る神官の金色の髪を見ながら、私はいつしか賢者のことを考えていた。シルヴァンティエに来た当初、分からない事といえば、あの軽薄馬鹿のさがし物が何か。ぐらいだっただのに、随分と疑問が増えたものだ。

賢者は、私がこうして乙女となることを見通していたのではないだろうか、ふとそんな考えが頭を過ぎったのは何時だっただろうか。なぜ、賢者は私にゴールドベルグの文字を与えたのだろうか。100年以上も前に滅びた国の言葉など必要なかったはずだ。私を聖域へと導いたのはイサークとエイノの二人だが、何か別の意思が働いているような気がしてならなかった。

尻を打ち付けながら、混沌とした思考の渦にもまれ、夕日に赤く照らされた城が、その壮麗な姿をあらわす頃には、私は疲労困憊していた。とうぶん馬車は見たくない。

2区を通り抜け、城門近くに馬車が止められると、乙女達が次々とタラップを踏む。皆気持ちは同じらしい。土を踏みしめ、足を伸ばして立つのがこんなにも気持ちいいとは。両手をぐっと天に突き上げ伸びをしたところで、どよめきが耳に飛び込んだ。

乙女が人前で伸びなどしてはいけなかったのか？ 慌てて手を下ろして澄まし顔で取り繕うが、すぐにどよめきの原因が自分にならない事に気づいた。

イサークが近衛を従えてこちらに向かっていたのだ。厳しい顔つきで一点を見つめて歩くイサークの先には、一台の馬車があった。その前には十数名の兵士が集まっている。兵士達に囲まれる人物を見て、私は得心していた。

鎧の隙間から見える蜂蜜色の髪。ミーツェだ。さすが隣国の姫にして聖域の後押しを得た乙女。VIP待遇も当然だろう。頑張れい

サーク。愛のある政略結婚を結べるかどうかは君にかかっているぞ。いちやつくカップルを見ると繋いだ手の間を素通りしてやりたくなる私でも、この二人ばかりは応援せずにはいられない。

兵の間をイサークが進む。ミーツエの前にくると、熱い抱擁を……とはならなかった。

ミーツエの眼前に歩を進めたイサークは、固い表情で何事かをミーツエに語りかける。その途端、ミーツエが驚きに目を見張り、力なく首を振った。青い顔色は旅の疲れから来るものではない。ミーツエは左右の手を胸の前で握り締め、必死にイサークに言葉を投げかけた。しかし、そんなミーツエにイサークは目を閉じて首を振ると背をむける。歩き出したイサークの後を追おうとしたミーツエを兵が遮った。

「残念だが君とは結婚できない」

「そんなっ、待ってください。お腹の子はどうなるの？」

「さらばだっ」

遠目に見た二人の様子から、脳内で勝手に再生された恐らく実態にかすりもしていないだろう会話を、頭を振って追い払う。いったい、二人の間でどんな話が交わされたのだろう。

一度も、振り返ることなく城門の中へと消えるイサーク。残されたミーツエは兵士に周囲を固められていた。

状況が理解できず、不安げな様子で戸惑うばかりの乙女達の間を縫うようにして、私はミーツエの近くへと歩み寄った。「ミーツエ様！」と、兵士越しに声をかけようとするが、諫めるように背後から肩に置かれた手に、口をつぐんで振り返る。眉根を寄せた世話役の神官が、私を見据えて静かに首を左右に振った。無駄です、とその目が物語るのを見て、私は無然として視線をミーツエに戻す。

まるで罪人扱いじゃないか……。

手荒く扱われているわけではない。けれど、周囲を囲んだ物々し

い鎧に身を包む兵士は、険しい雰囲気をかもし出しており、傍から見ているだけでも恐ろしい。中にいるミーツエの心情はいかばかりだろう。

どうして、ミーツエがこのような扱いを受けなければならないのか。

私の前を、兵士に取り囲まれたミーツエが通り過ぎる。銀色に光る塀の間から、青灰色の頼りない瞳を私に向けて

その日の夜遅くまで私は部屋の中を、檻の中をうろつく熊のように、落ち着きなく歩きまわりながら過ごした。ミーツエがどうなったのかを確認するために、エイノが帰るのを待っていたのだ。しかし、待てども待てども、その日エイノが屋敷に戻ることはなかった。

桶の中に手を入れようとして、指先に触れた水の冷たさに、思わず動きが止まる。しかし、すぐに掌を全て浸すと、両手を合わせて水を掬い取った。

「はあ」

掌にたまった水で軽くすすいで顔を上げると、鏡に映ったそれを見て、ため息をついた。25年間使ってきた鏡よりも質の落ちる、僅かな歪みとくもりのあるシルヴァンティエの鏡でも分かる程に目の下にはくつきりとくまが出来ている。

一晩中帰らないエイノを待ち続け、結局一睡も出来なかった。25歳の肌に徹夜はきつい。タオルで水滴を拭いながら、鏡を覗き込んで、昨晚から何度ついたか分からないため息を落とす。

兵士に連れ去られる間際に向けられたミーツエの顔が頭から離れない。聖域での騒ぎの時に助けてもらったミーツエを見殺しにしたようで、後ろめたさが針となって胸に刺さっていた。国どうしの諍いなど、私にどうにかできるはずもない。そう、思ってみても鋭い針がもたらす痛みは一向におさまらなかつた。

眠れなかつたが、罪悪感に苛まれようが、朝の営みは何ら変わることはない。

重たい気持ちを引きずりながら着替えを済ますと、心配と顔一杯に書かれたマリヤッタの給仕をうけて朝食を済ませた。

部屋に戻ると、私はソファに腰をかけた。何もすることがない。本来ならばまだ聖域にいるはずだったのだ。

忙しく予定が入っていれば、まだ気を紛らわせることが出来ただろう。しかし、一人部屋でぼんやりと過ごしていると、絶えず青灰色の瞳がつきまとった。何でもいい、情報が欲しい。誰でもいいか

らこないかな、いつその事レーヴィでもいいから……そうだ、大変な騒ぎに巻き込まれた生徒を見舞いに、と称してひよっこりと姿をあらわす頃合じゃないだろうか。

早く来い。レーヴィの訪問が待ち遠しいなどと思う日がまた来るとは思わなかった。

「サカキ様」

唐突に扉の向こうからかけられた遠慮がちなマリヤッタの声に、私は慌ててソファから立ち上がった。願いが通じたと思ったのだ。思わず扉に駆け寄り、一気に開け放つ。

「レー……………」

ヴィと発音してしまう前に舌が止まってよかった。

と、思ったが遅かったようだ。私が誰の名を呼ぼうとしたのか、分かったのだろう。部屋の前に立つ人物は、眉を寄せてあからさまに不快感を示す。

首のつまつた鮮やかな青い服。つややかな光沢を持つ柔らかい金の髪が肩で散る。引き締まった口元、きりりと上がった眉。真っ直ぐな強い光を宿す瞳。久しぶりに近くで見るイサークは、後悔と後ろめたさで一杯の今の私には、やけに眩しく映った。

違うんだ、別にレーヴィが良かったわけじゃないんだ。むしろ情報を得る相手としては一番信頼のおけない相手だし。けれどこのつぴきならない状況の中、のこのこと私の部屋を訪ねる時間を作れるのは奴しかいないと思ったただけなんだ。信じてくれ、イサーク！扉に手をかけて引きつった顔で突っ立つ私をみて、どんとどんといサークの表情が険しくなる。レーヴィよりも貴重な情報源の機嫌を損ねてはまずいと、私はくまの浮かぶ顔で精一杯愛想良く微笑んだ。



「おはようございます。イサーク」  
「待ち人でなくて悪いな」

ははっ。ぱっさりと切り返されて、歪な形に曲がった唇から乾いた笑いが漏れる。

冷たい表情を浮かべた顔をつつと背けると、イサークはずかずかと扉をくぐり、まるでこの部屋の主のように悠然とソファに腰かけた。時折見せる何とも自然なジャイアニズムは王子様育ちの賜物だろうか。

「あいつじゃなくて申し訳ないが、少し話がしたい」

何だろう、出会った頃はもう少し素直で可愛げがあった気がするんだけど。擦れてきたような気がするのは  
私のせいじゃないよな？

嫉妬にしては冷徹な空気を放つイサークに、私は「はい」と声をあげて頷いた。

3対の冷たい視線が私に向けられる。シルヴァンティエの王太子殿下と、紺色の服をきた金魚の糞その1、その2は仲良くそろって斜め上から睥睨するように私を見下ろしていた。

「まずは謝っておく。乙女となったが為に恐ろしい目に合わせた」

人に謝るときの態度ってのは、足を組み頬杖をつけて明後日の方  
向に視線を向けたままでいいの？ いいや、良くない。良くないぞ！  
お姉さんはこんな礼儀知らずにイサークを育てた覚えはない！  
実際に育ててないけど。しかし、この態度はなかるっ。

「2〜3確認したいことがある」

遠くを見るように窓の外に向けられていた視線を部屋の中に戻すと、イサークはおもむろに口を開いた。

その青い瞳に見つめられた途端、ぞくりと背筋に冷たいものが走る。違う。これまで私に向けられていた目とは。感情の見えない氷のような顔付き。ああ、そうか。イサークではない。今日はイサークとして私に会いにきたのではないのか。王太子として、シルヴァンティエを統べる次代の王として来たのだ。と、そう理解して、私は背筋を伸ばし居住いを正した。部屋の空気がみるまに重く張り詰めていく。10歳近く年下のイサークから与えられる圧力にぴりりとした痛みにも似た何かが、肌の上を撫ぜた。

「聖域で騒ぎがあった後、ミーツエと行動を共にしていたというのは真か？」

「はい。あの爆発があったとき、恐ろしさに動けずいたところを、ミーツエ様に救っていただきました」

「ミーツエと、サカキ、お前の他に共にいたものは？」

「神官が一人」

「名は？」

「分かりません。フードを被っていたし、煙で目を痛めていたので……」

ミーツエの拘束の理由が見えてきた気がした。やはり、ということはない。レーヴィは聖域で何をやらかしたんだ。

「神官から何かを受け取ったか？」

「喉を痛めておられたミーツエ様に、神官が水入れを差し出しました」

そう、思い当たることといえば、あの水くらいだ。しかし確かに

水を飲んだはずのユーンに変調は見られなかったのに、今になって何故？

「お前には？」

「私は、何も」

イサークの瞳が一瞬、険しさを増したような気がして、私は言葉を詰まらせた。

「ミーツエは、水入れをどうした？ 水を飲んだのか？」

「いえ、その、水入れを落とされて……………」

これは、もう確定か。やっぱりやっぱりやっぱりあの水かよ！！何が入っていた？ ユーンはどうなった？ ミーツエの容疑は何なんだ！

「ほう、ではミーツエは水を飲まなかったのだな」

「はい」

「で、その水はどうした」

「水入れを落とした後、ユーンが現われました。怪我をして気がたっているようでした。ミーツエ様はユーンを宥めて傷口についた泥を落とそうと……………」

「水入れの水を、使ったのか」

「はい」

どうすりゃいいんだ。水入れなど知らない。ミーツエは何もしてないと証言したかった。けれどミーツエも調べを受けているはずだ。話が食い違っては益々まずいことになる。嘘はつけない。かといつて、レーヴィのことをどう話す。どうすればいい。

「傷を洗っただけか？ ユーンはその水を飲みはしなかったか？」

「……………飲みました。あの水が何か？」

「……………今、質問しているのは私だ」

「申し訳ありません」

低い声でにべもなく言い捨てられて、私は即座に謝った。怖い。

怖いよ。ワンコが怖いよ。エイノやレーヴィを恫喝している所を目にしたことはあったが、自分に向けられるとこんなにも恐ろしいものなのか。自称腑抜けの王子じゃなかったのか。だいたい！2／3確認したいって言ったじゃないか！ もう3問以上質問してるぞ！

81 乙女の憂鬱 (15) (後書き)

恋愛で逆ハーなんですよ。これでも、そのつもりなのです。

「水を飲んだコーンに異変は見られなかったか？」

「はい、美味しそうに飲んで、ミーツエ様に甘えていました」

張り詰めた空気の中、イサークの詰問は続く。疲れる。こんなことなら昨晩はちゃんと寝ておくんだった。

「水入れは、その後どうした？」

「え？」

緊張と眠気に襲われるなか、受けた思わぬ問いに頭が真っ白になる。

水入れは、あの後どうなった？ レーヴィが姿を消した時には、まだミーツエが持っていた。神官達を取り囲んで、それから………駄目だ。思い出せない。ずっとミーツエが持っていたのか？ いや、待てよ。爆発現場の横を通りかかったとき、滑りそうになってミーツエをつかもうとした。そうだ、その時にはもうミーツエの手の中にはなかった！

どくん、と心臓が大きく跳ねた。

レーヴィだけじゃない。あの時、あの場にいたツイメンの作業員はレーヴィだけじゃない。ミーツエを取り囲んだ神官の中に、紛れ込んでいた者がいたのか。

「分かりません」

どう、伝えればいいのか。

「そうか」

詰問が始まったその時から、片時も外されることなく私を見据えていた青い瞳がふつと伏せられた。イサークが胸を押し上げて大きく息を吸い込む。長く長く吐き出される息。と、同時にイサークと私の間にあつた、今にも破裂してしまいそうな風船のように膨らんでいた緊張が音をたててしぼんでゆく。

終わった、のかな。ミーツェが疑いを逸らそうと虚言を弄していなければ二人の証言は合つたはず。

「イサーク、水に問題があつたのですか？ ユーンはどうなつたんです？」

伏せたまま、私に向けようとしないイサークの目をじつと見つめる。答えてくれるだろうか？ 私とミーツェが共謀して、などとはイサークも考えないだろう。供述が一致すればあるいは……………。

「分からん」

イサークは額に当てた手を後ろに滑らして鬱陶しそうに髪を掻き揚げ、深くため息をついた。硬いながらも返された言葉に、私はほつと胸をなでおろす。

「恐らく毒だと思うが、足をやられたらしい。あの夜から立てぬようになったそうだ」

#### 遅効性の毒

私は思わず喉を抑えていた。レーヴィの死のキスを思い出して。ツイメンの使者の死因も毒だった。毒の扱いに長けているらしいあの変態なら、さぞかしいろんな種類の毒を取り揃えていることだろ

う。

「毒ならまだいいのだが。水を媒介とした呪なら、まずいことになる。だが、水入れが見つからぬ為に対策を立てられんのだ」

呪ってなに。そういや、トウーロが日本語で話したときに、エイノが使っていたな、その言葉。わーお、呪いまで実在するんだ、フアンタステイック！ くそっ！ この世界の理がさっぱり理解出来ん！ もうちよつとこう、杖からビームが出るとか、雷が落ちるとか、氷漬けにしてみまうとかの派手で分かりやすい魔法はないのか？ サリの術とか、ネズミ捕りとか、呪いとか、地味でいやらしい性質のものばかりじゃないか。ちゅどーん、ばこーん、ぐあーで勸善懲悪！ とはいかないもんかね。いかないよな。この世は灰色。ユーンのように白黒はつきり分かれていれば少しは生きやすいのだからうけど。

それにしても、お仲間の役目は水入れの始末だけだったのだろうか？ ミーツエがユーンに水を飲まず、その瞬間の目撃者をつくるために、聖域の婆ちゃんや神官達を誘導する役でもあったのかもしれないな。違う。違う違う違う。そうじゃない。そうじゃないだろ！ レーヴィはミーツエに水を飲まそうとしたんだ。私が入入れを落とさなければ、ミーツエは間違いなく水を飲んでいたはずだ。シマウマだからこそ、足だけですんだ毒。人間が飲めば、どうなっていた。違う。何が違う。何か、根本的な間違いをおかしてはいないか？

ツイメンの目的はシルヴァンティエとの同盟の強化のはず。その為にはイサークの寵を受ける存在になる恐れのある私を消そうとした。なのに、今度はミーツエを？

ツイメンの国力がシルヴァンティエより上ならば、戦争を仕掛ける大義名分を作る為とも考えられるが、ミーツエの話からも、ツイメンの軍事力がシルヴァンティエのそれを上回っているとは到底思



えない。ツイメンの王は何がしたいんだ！ 妹を害して何の得がある。

何もない。ツイメンにはミーツエを殺す動機が何もない。

目の前にイサークと二人の近衛がいなければ、私は自分の頬を自分で打っていたかもしれない。

黒幕は

ツイメンじゃない。

殺された使者は、疑いが向くことを恐れたツイメンに切り捨てられたんじゃない。ツイメンに疑いが向くように仕向けられたんだ。

黒幕の狙いは、シルヴァンティエとツイメンの同盟強化の阻止。或いは戦争。

レーヴィの元々の標的は誰だった？ 恐らくこの国になくてはならない人物だったはずだ。殺されれば、殺した相手に報復をなさねばならぬほどの。当初のレーヴィの暗殺対象は、たぶん、イサークだ。だから無口はイサークの教師に選ばれたレーヴィに成り代わった。

たった一人の王子を殺された王は怒り狂うだろう。国の威信にかけてもツイメンをつぶそうとしたに違いない。

ツイメンとシルヴァンティエの間に戦争が起こって得をするのは誰だ？

順当に考えればバジエドルかな。北を狙っているというツイメン王の推測が正しかったとしてだけ。でも、それだと標的が私に変わった理由が分からない。私なら、ぽつと出てきた正体不明の女よりも、王子を狙う。次期国王のイサークを殺してしまったほうが、臣や民の間にも不安を広げられて一石二鳥だ。

なぜ、標的が私に変わった？

待てよ。待て待て。イサークが殺されれば国力の上回るシルヴァンティエがツイメンを潰そうとするのは想像に難くない。だが、逆の場合はどうだろう？ ミーツエが殺されたとして、大事な妹を殺されたツイメンは果たして負けると分かっている戦をシルヴァンティエに仕掛けるだろうか？ ノーだ。兄としての心情はともかく、ミーツエが心酔するほどの器たるツイメン王が負け戦を挑むとは思

えない。

そういえば、彼女をイサークの妃にとツイメンが打診してきたのは何時からだっただのだろうか？

王家の血は特別だと、確かそう、イサークが言っていたな。他国の血を入れるのを嫌うものがあるという話は誰から聞かされたのだっただか。いや、だからといってただ一人の王子であるイサークを殺そうとするか？

……………するかもしれないな。

街で会ったときのイサークの様子を思い出せ。貴族を嫌っていた。王子は賢王の息子でありながら才を持たぬ腑抜けだと、暗い顔ではき捨てていた。あれは誰からみたイサークの評判だったのか

貴族からの評価は、決して高くなかったんだ……………。

エイノに見せられた地図はシルヴァンテイエを誇張して描かれていた。街での貴族階級の兵士の態度にモスキートの思想。どうやらこの国には驕り高ぶっている者が多いらしい。

血統を重んじる愛国者がいた。その人物は、イサークを能無しと決め付け、祖国を誇りに思い、ツイメンを見下している。

格下と侮っていたツイメンがシルヴァンテイエの王子に婚姻を申し入れてきた。伝統的に国内の人間から妃を娶ることになっているにもかかわらずだ。さぞかし矜持を傷つけられたと憤っただろう。ジャスラから出る鉱物の加工でツイメンが勢力を増しているのも快く思っていなかったかもしれないし、その加工技術が軍事転用できるものなら将来的な脅威にも映っただろう。

加えてイサークがミーツエとの結婚に肯定的だったとしたら？  
今に至るまで婚姻話が残っていたのだ。少なくともはつきりとはねつけたりはしていなかったはずだ。

王子は一人でも、王位継承者が一人とは限らない。イサークのほかに王家の濃い血を継ぐものがあるのではないだろうか。

「イサーク、聞いて欲しい話があるのですが」

私は言葉を切ると、ちらりと背後で仁王立ちする二人の近衛をみた。

「二人きりで話せませんか？」

近衛の一人と目が合った途端に、射殺されそうな眼差しを浴びせられて、あわてて顔を背ける。

「すまないが、それは出来ない。だが、サカキの話は聞きたい。この者達は身元の確かな信用できる人間だ。話してくれないか？」

ため息と共に伏せられたままこちらを見ることのなかった青い瞳が、再び私に向けられた。

身元が確かなのがネックなのだが、そうもいってられないか。でも……………」

「以前に、王家の血は特別だとお伺いしたことがありますよね。それで、その、もしもの話なのですが、イサークの身に何かがあった場合、イサークの代わりになる、その特別な血を継ぐ次代の王になり得る人間がいますか？」

血統至上主義者が満足するほどの。

「あ、仮に！ 仮に！ の話ですよ」

近衛の手が腰にさがる剣の柄にそっと添えられたのを見て、顔が盛大に引きつる。今ならムンクの叫びと睨めっこをして勝てる自身

がある。こいつらの前で話するのはこれだから嫌なんだ。

「王位継承者なら、十人以上。俺と同等の血を持つ人間も片手はい  
る」

やはり。私は頭がぼくと熱くなるのを感じた。

イサークを捨て駒にしようとしたのか。

「あの時の矢が、私に当たっていたとして、それがツイメンの意思  
であると証拠があがったら、イサークはどうしていましたか？」

ユハは言っていた。私に会ってイサークは面白みのある人間にな  
ったと。街でイサークの肩をはずした時、ユハの表情にはささやか  
ではあるが侮蔑が混じっていた。ユハもイサークを軽視していた一  
人だったのだ。そのユハの評価も変わった。レーヴィの雇い主も考  
えを変えたのではないだろうか。或いは私を出汁にイサークを変え  
ようとしたか。

「使者団は一人を残して捕虜とし、実行犯は……」

青い瞳に暗い影が落ちる。ふいと顔を背けるとイサークは苦いも  
のを吐き捨てるようにつぶやいた。「俺が殺していただろう」と。  
そんな言葉をそんな目をして言わせるつもりじゃなかったと言っ  
たら偽善だろうか。イサークの心に消えない黒い染みを作ってしまった  
ようので、顔を見ていられなかった。

「2度に渡る私の暗殺が成功していたら、ミーツェがこの国に来る  
ことはなかったんですね」

そらした視線をどことはなしにさ迷わせる。

「どの馬の骨とも分からない私も始末できて、ツイメンと手を結ぼうという考えを捨てさせる。黒幕にとって、私の暗殺は一石二鳥だったのだ。」

「イサーク、ミーツエ様は何も知りませんよ。彼女はあの水入れの水を何の疑いも抱かずに口にしようとしていました。水入れを落としたのは私です。取り乱した私が、水入れを落としたのです。それさえなければ彼女は確かに水を飲んだはずですよ。」

「お前は、わかっているのだな。ミーツエが今どういう立場に立たされているか。」

わかるよ。わかるでしょう。「サカキ13歳だし、難しい話はわかりません」って言いたいよ。けど25歳なんだから。仕方ないでしょう。ミーツエに助けられたんだから仕方ないでしょう。あんな目で見られたら、もうどうしようもないでしょう。」

「レーヴィさんとの授業で、この国とツイメンの関係はなんとなく……」。私にはツイメンがユーンを傷つける理由が思い当たりません」

「水入れに毒を仕込んだのも、2度、お前を狙ったのもツイメンじゃないと、そう考えているのか。」

暗い色を宿したまま、イサークは私をみる。

「シルヴァンティエの人間だと思っています。ミーツエを迎える事を嫌い、ツイメンとの争いを望んでいる者を調べてください。お願いします！」

私の訴えにイサークはため息を漏らした。

「……………国内の人間が糸を引いていると考えなかったわけではない。だが、無理だ。以前からツイメンを快く思わないものはいた。だが、今や殆どの者が反ツイメンに回っている。その一人一人を調べる時間もなければ人もいない」

くっそう。ここまで狡猾に事を運んできた奴だ。以前から声も高らかに反ツイメンを叫んでいた人間の中にはいないだろう。今回の騒ぎで、ひっそりと反ツイメン派に組みし、ほくそえんでいる人間が確かにいるというのに！

何かないか。手がかりが。考えろ、思い出せ。レーヴィは依頼人について何か漏らしてはいなかったか。何でもいい、手がかりを……。

「  
リトヴァ  
」

見つけた。

「え？」

私の口からポツリとこぼれ出た言葉に、イサークは怪訝そうに眉を寄せた。

「リトヴァです！ 食堂リトヴァ！ 大通り近辺にリトヴァという店がないか調べてください。きっとあるはずですよ」

大通りから一本それた道沿いにあるという食堂リトヴァ。レーヴィの友人ハンネスが営むというリトヴァ。私を匿ってくれる場所と、レーヴィが大嘘をつきやがったリトヴァだ。思い出したぞ！ 私は喝采を上げたい気分です。テーブルに手をつけて身を乗り出した。

と、同時にカチンと軽快な音が聞こえた。音のしたほうを見れば、

イサークの背後に佇む近衛の親指が鏢にかかり、銀色の刀身が数ミリ顔を出している。ひいい。こいつら本気か。イサークが私に顔を向けたまま片手をあげてみせると、鏢から指が離れ刃が音もなく鞘に納まる。どうも、今日の近衛は何時にも増して虫の居所が悪いらしい。生理か？

まあいいや。そんなことより、見つけたぞ。手がかりを。私はテーブルから手を上げ、ソファに深く腰を沈めた。

嘘をつくときは少しの真実を混ぜると、ぐんと信憑性があがると聞いたことがある。私が大通り付近にリトヴァなんて名前の食堂がないと知っていたら、レーヴィの嘘はすぐにはれてしまう。あの時はすっかり失念していたが、レーヴィの話はいぶかしんでリトヴァなる食堂があるかどうか、誰かに尋ねないとも限らなかったのだ。リトヴァもハンネスも作り話だとばかり思っていたが、リトヴァは本当にあるのではないだろうか。いや、ある。あるはずだ。多方向に渡り危ういレーヴィの性格。どうせ殺してしまう相手だと、嘲り半分、重要なキーワードを喋っていても不思議はない。お喋りな無口。依頼主と連絡をとるために使う店の名を出したのではないだろうか。標的が変わったなんて話ももらしてしまうほどだしな。

「ここ数ヶ月の間に秘密裏にリトヴァに出入りしているものを洗ってください。そいつが黒幕です！」  
「リトヴァか……………」

顎に手の甲をあてて、しばし考え込んだのち、イサークはやけに冷静な声でつぶやいた。

「わかった、調べてみよう」

ふははははは。レーヴィめ。首を洗ってまっけている。黒幕さえわかればこちらのものだ。犯人の一味だと知れてしまえばレーヴィの



信用は無いに等しい。私が年増だとか、甘言にのってエイノを見捨てようとしただのと、のたまおうと、分は私にある。以前から言い寄られていて困っていた。兄のように思って慕っていたのに困惑していた。怖くて言い出せなかった。きつと私に振られた腹いせに出鱈目を言っているんです！ と泣き喚いてやる。

84 乙女の憂鬱 (18)

「それで、サカキ」

「なんですか？」

レーヴィの泣きつ面を想像して、自然と笑みを形作ろうとする唇を押しとどめながらイサークを見た。

「それはどこから得た情報だ？ 出来ればその情報をもたらした人物に直接あつて話をききたいのだが」

「それは……………」

馬鹿。馬鹿だ。大馬鹿者だ。馬と鹿がオペラ座で大合唱するほどの大馬鹿だよ。私は。

「わかりません」

手かがりを掴めた喜びのあまり、つい後先考えずに突っ走ってしまった。冷たい汗が背中を伝う。

「わからない？」

イサークが眉を上げた。

「あの、2区を散策するのを日課としていたのですが、そのときに侍女さん達が噂をしているのを小耳に挟んだんですよ。リトヴァって食堂にこそこそと出入りしている怪しい人物がいるらしいって。ほら、ベルイマン卿の例もありますし、侍女さん達の噂は侮れないかな、と思ひまして」

この城の侍女さんたちは優秀なのでしょう？ 情報主集能力と拡散能力が。侍女としてはどうなのかと思うけど、庭園で私を探していた兵士も恐れていたほどだし、彼女達の力は周知の事実だと信じたい。

「ベルイマン卿の噂をサカキは知っているのか？」

「いえ、内容は知りませんが、噂話から失脚したと聞きまして」  
「……………確かにそうだが」

そう言ったきり、イサークは何かを思案するようにテーブルの上へと視線を落とした。

これはまずい。このままでは調べてもらえないばかりか、余計な詮議にかけられてしまう。「ミーツェ、ごめん」と心の中で断りをいれ、私は腰を浮かせるとテーブルの上に上体をせりだして、イサークの手をとった。

「だめ、ですか？ 噂話がもとでは調べてはもらえませんか？」

反射的に引かれかけた硬い質感をもつ大きな手を、逃がすまいと力をこめて握り締める。もう数年使っていない錆かけた上目遣いでイサークの目を覗き込んだ。

「駄目……………ですか？」

すらりと抜かれた銀色の刃がイサークの頭越しでちらついているが、かまうもんか。今、私を切ればお前らの大切な王子様がスプラッタになるからな。切れるもんなら切ってみやがれ。

青い瞳が大きく見開かれ、手の中の指がぴくりと動いては止まる。ほんのりと赤みを帯びた耳に息をふきかけつつ、駄目押しとばかり

に、顔を近づけて肩にこつんと額を寄せた。

「お願いします………イサーク」

ミーツエを助けてくれ。ついでに私も。血統至上主義者がこのまま私を放っておくはずがない。ツイメンが片付いたら、いよいよ私も拙いことになるだろう。もう一つついでにレーヴィに天誅を。

肩から伝わる振動が速くなる。髪にかかる息が熱い。確かな手こたえを感じたその瞬間。掌の中からすり抜けたイサークの手が私の両肩に置かれた。

あ、まずい。やりすぎたか。

私は抱擁に備えて身を硬くした。

肩に置かれた指に力が入り、イサークは  
イサークは腕  
をつつぱり、ぐいと私を押しやった。

あれ？

おかしい。確かに手こたえがあったのに。これまでの言動からして、抱きしめられると、そう思ったのに。背後に般若の如き形相で抜き身の刃物を持った近衛がいるからか？ それとも、私の上目遣いがいけなかったのか。やはりいい年をした女のそれは通用しないのだろうか。おばさんのおねだりでは駄目ですか！？

自分に惚れているはずの相手一人落せないとは………。からからと、どこか寂しげな音を立てながら崩れていくプライドが、イサークの表情を目にして、その崩壊を止める。

うつむき加減に逸らした顔は朱色に染まり、桜色の唇には白い犬歯が食い込んでいた。現在進行形で何やら葛藤しているであろうその姿に、失敗したわけではないと知って胸をなでおろす。

「今はどんな情報でもありがたい。調べさせてもらおう」

イサークは肩から手を離すと、ぎこちない動きで指を丸めて拳を

つくり、顔を隠すように腕で頬をこすって立ち上がった。

「邪魔したな」

私から顔を背けたまま扉に向かって歩きかけたイサークは、ふと歩みをとめると、首を傾げ振り返るそぶりを見せた。しかし、思いとどまったように扉へと視線を戻すと、消えるような小さな声で咳いた。

「サカキ」

イサークの頭が僅かに下に傾けられると、波打つ金の髪がその動きに沿ってさらさらと流れ、赤く色づいた耳がのぞいた。

「いや　また来る」

名を呼んだ時とは打って変わって、強くそう言つとイサークは部屋を去っていった。金魚の糞を連れて。私を見ぬままに。

事態は私の想像を遥かに超えたスピードで進んだ。

進展があるまで早くても10日以上かかるだろうと、私は思っていた。リトヴァに出入りしている人間を突き止め、背後関係を洗い、糾弾にたる証拠を集めねばならないのだ。それも少ない人員で。

聖域から帰ってから、ずっとスケジュールが白紙のままだった私は、その日、落ち着かない気持ちを少しでも紛らわせようと、ライアンとクリフトをお供に2区を散策していた。

時刻は昼を少しまわったころ。休憩を終えた兵達が、談笑を交わしながら持ち場や兵舎へと戻っていく、一日の中でも特に穏やかな

時間帯だ。ところがその日に限ってはそうはならなかった。最初に異変を感じたのは、馬に乗った一人の兵士が駆け足で城へと去っていく姿をみた時だった。人通りの多い2区では馬から下りるか、並足が常であると2区の散策を日課としてから知っていた私は、その兵士の姿に言いようのない不安に駆られた。

早すぎる。

そう思ったから。3日だ。まだ3日しか経っていないのだ。こんな短時間で証拠が押さえられるとは思えない。一連の騒動とは無関係の事柄で急いでいるのかもしれないという考えは、何故か思い浮かばなかった。

何があったのか、確認したかった。けれど、話を聞ける相手がない。イサークにはこちらからは会いにいけないし、ユハが何処にいるのかも知らない。エイノは………エイノとは聖域からこちら、祿に顔を合わせていなかった。ゾンビ状態からは抜け出したものの、相変わらず青白い顔で奔走しているようで、帰宅は深夜。朝食もそこそこに屋敷を出ているらしく、朝に2度程挨拶を交わしただけだ。そんなエイノを当てに出来るはずもなく、仕方なく私は2区の門近くの片隅にこっそり陣取り、成り行きを見守る事にした。

馬に乗った兵士が去っていった数十分後、今度は重そうな鎧を纏った十数名の兵士が城門から城へと一糸乱れぬ隊列を組んで走っていく。その兵士達の姿に周囲の空気が一気に変わった。先ほどの早馬を目にしていなかった兵士達も、何か起こったのだと察知したらしい。交代で遅い休息を取っていた兵が時間を切り上げて慌しく持ち場へと戻る。城から2区の各所へ、2区から門の外へと慌しく行き交う兵士の数が、時が経つごとに、どんどんと増えていった。

話を聞きたいが、殺気立つ兵士を捕まえる勇氣はない。私は、振り返ってライアンを見た。

「あの、ライアンさん」

眉を寄せて沈黙を保つライアン。その様子に首を捻り、「ああ」と思わず声に出していた。違うだろ。ライアンじゃないだろ。すっかり私の中でライアンと定着してしまっていたが、彼の名前も知らなかったのだ。

「あの一」

恐る恐る語りかけると、ライアンは口髭の下で真一文字に結ばれていた口を開いた。

「何でしょうか？」

おお、初会話。

「何かあったんでしょうか？」

私の問いにライアンはクリフトと顔を見合わせた。眉根を寄せたまま、親指と人差し指で口髭を挟むように撫でると私に向き直る。

「聞いてまいりましょう」

そう言つとライアンは再度クリフトへ視線を向ける。頼んだというように顎を引いてみせてから、行き交う兵士の一人へと駆け寄っていた。

兜をかぶったままの兵士と2、3会話を交わし戻ってきたライアンの眉間には皺が刻まれいた。

「フロステル伯爵の屋敷に火が放たれたようです。下手人も上がっ

ていないようですし、騒がしくなります。屋敷に戻られたほうがよ  
ろしいでしょう」

もう、十分騒がしいと思うんだけど。  
ところで、フロステル伯爵って誰だ？



フロステル伯爵か。本当に誰。黒幕か？ だとしても、なぜ火事になっているのだろう。証拠を手にして捕らえにいった軍と、屋敷に立て籠もった伯爵との間でドンパチやったのだろうか。それにしても、何だろうこのもやもやは。残り15分になって犯人が初登場する火サスのような割り切れなさがある。真犯人が割れた第一声が「おまえ誰だよ！」なんてあんまりだ。

緊張の広がる2区の中を、ライアンとクリフトに挟まれるようにして屋敷への道を辿った。屋敷のある一角に近づいたとき、ふと前を行くライアンの歩調が変わる。何かに気づいて躓くようにほんの一瞬歩みを緩めたライアンの背中越しに、首を傾けて屋敷の方角を見て、目にした光景に思わず「げっ」と声が出た。

扉の前に重量感のある長い剣を腰に下げた赤茶色の髪の男が立っていた。辺りを警戒するように鋭い目つきで佇んでいたユハは、ライアンの後ろから顔を出した私と目が会うと爽やかな笑みをうかべた。

ああ、嫌だ。回れ右をして引き返したいが、目があってしまっただから実行に移す度胸はない。あつという間にユハとの距離は縮まった。扉の前まで来るとライアンがさつと身を引いて私をユハの眼前に晒してくれる。柔らかなく笑む口元と、頭上に落ちる鮮烈な緑の視線。狼の皮を被った豹に差し出された赤頭巾の気分だ。

「やあ、サカキちゃん。聖域で会って以来だね。早く訪ねたかったんだが何かと忙しくてね。元気そうな顔が見れて嬉しいよ」

「ユハさんもお元気そうで……。えーと、エイノさんのお使いですか？」

お忙しいはずのユハさんが、何でまた屋敷の前で仁王立ちしてい

るんでしょうか。

「いや、サカキちゃんの顔を見にきたんだよ。聖域であんな事があつたばかりだしね。この騒ぎで不安な思いをしていないか心配になつてね」

「それは、わざわざありがとうございます」

この男は。心にもないことをぺらぺらとよく口に出れるもんだ。つまりは私が可笑しな動きをしていないか確かめにきたんだろうに。

「でも、ご心配なく。私は大丈夫です。護衛の方もついていきますし」  
「そう、なら良かったよ」

形だけは弧を描く緑の瞳と、顔の筋肉を駆使して笑みを浮かべる私の黒い瞳がぶつかった。作り笑いで負けてなるものか。

「フロステル伯爵様のお屋敷が火事になったとか。お会いした事もなければお名前を聞いたのも始めての人ですが、お気の毒ですね」  
「おや、サカキちゃんはフロステル伯爵とは面識がなかったかな。ほら、金の髪に立派な髭をたくわえた恰幅のよい方だよ。覚えはない?」

「いいえ。まったく」

ないものはない!

「そう。例の食堂に出入りしていた人物なんだけどね」

すつと笑みをひいたユハの口から放たれた言葉に、胸がつまり呼吸が重くなる。まるで心臓に重石を乗せられたようだ。どういう意味だ。フロステル伯爵が黒幕で間違いないのか。何故火事になって

いるの。知りたい。もうただ待つのも、憶測で一喜一憂するのもうんざりだ。いつそのこと燃え盛る屋敷の中に突撃して伯爵その人に一から十まで問いただしたい。気ばかり急いで言葉の出ない私に、腰に下がる剣の柄にあてられていた茶色い皮の手袋に包まれた掌が伸びた。

「フロステル伯爵はユーンの一件で反ツイメン派にまわった。血統を重んじる、サカキちゃんという首謀者像に一致する人間だ。だが、伯爵には一連の謀を企てる力も器量もない。そう思わないかい？」

ざらり、と頬を撫でる皮の感触。笑みを消した緑の瞳が真っ直ぐに私を捉える。

「そんなこと……」

知らないわ。伯爵がどんな人物かなんて知るわけがない。名前も知らなかったとさっき言ったでしょう。

「伯爵は確かに一枚かんでいるのかもしれないが、糸を引いている人物は彼ではない。彼は糸に操られた哀れな人形の一人さ。しかし、このまま伯爵が屋敷と共に火に吞まれてしまえば、全ては闇の中だ」

末端が消えたところで本丸を取り逃がしては意味がないじゃないか。魔法で何とかならないのか？ 呪なんてものがあんなら雨乞いぐらいやってのけてほしいものだ。

「サカキちゃん、俺はね、迷っているんだ」

私も迷ってますよ。この手をどうやってはらおうか。

頬に添えられた指がゆっくりと移動して、顔に落ちていた髪をすく

うと優しく耳にかけられる。耳朶に触れるか触れないかのぎりぎりのラインを辿って首筋に流れていくユハの指先の感触に、背筋がぞくりと粟立った。何時もなら、この辺りでライアの助け舟が入るといふのに、今日は無しですか！ 止める者のいない指は髪を掻い潜ってゆっくりと項にまわり、首の後ろをそつと撫で、とんとんとその場所を軽く叩いた。

途端に蘇る嫌悪感に、私は乱暴にユハの手を振り払うと、後ろに跳び退くようにして距離をとり緑の瞳を睨み付けた。エイノにかけられたサリの術を生々しく思い起こさせるユハの行為に怒りがうまれる。見張っているという警告のつもりか。

歯を食いしばって怒気に耐える私を見て、ユハはふっと笑みをもらした。

「すまないね」

まったくだ。あれは本当に精神的にくるんだよ。無力な女子供を苛めて何が楽しいのか。

「御用はそれだけですか？ そろそろ部屋に戻りたいのですが」

これ以上顔をみていたら急所めがけて蹴りをいれたくなりそうだ。

「どつぞ」

そう言って道をあけたユハの顔には、いつもの爽やかな笑みが浮かんでいた。

「どつぞ」

結局、知りたいことは何もわからないままだ。

「ああ、そうだ。レーヴィ殿を見かけたらすぐに護衛に知らせてくれるかい」

「え？」

すれ違う瞬間、今思い出したとでもいうように、さらりと投げかけられた言葉に私は足を止めてユハを見上げた。

「彼を殿下の教師にと推挙したのはフロステル伯爵だからね。念のためさ」

微笑を浮かべたまま、ごく軽い口調で告げるユハ。その内容の重さに、達成感と戸惑いが同時に胸をしめる。と同時に得心していた。無口がレーヴィと入れ替われたわけに。ずっと不思議だったのだ。本当のレーヴィを知る人が何故でてこないのかと。無口が成り代わる為に王都に姿を知る者がいない人間を選んだのか。

レーヴィの両手が後ろに回る時が近づいている。悔し涙を浮かべるレーヴィを見てガッツポーズをして喜びの雄たけびをあげるはずだったのに、

「そう、ですか……………」

私の口から出た声には多分に迷いが含まれていた。

86 乙女の憂鬱 (20) (前書き)

若干の性的表現があります。苦手な方はご注意ください。

「ねえ」

うるさいなあ。

「ねえ」

眠いんだから寝かせてよ。

「ねえ、そろそろ起きたら？」

機嫌の悪さを滲ませた軽薄な声音に飛び跳ねるようにして体を起こす。ベッドがきしきしと音を立てて弾んだ。

寝てしまった。

私は呆然として膝の上ののっていた掛布を掴んだ。ユハと別れて、それからどうしたんだっけ。ああ、そっだ。自室へ戻ったんだ。それから……胸の中でとぐるを巻く理解したくない感情から逃げるように布団の中へと潜り込んだ。子供の頃、怖いもの見たさからホラー映画を観てしまった後にしたように。

「おはよう。やっと起きたね」

「え？」

寝起きの呆けた頭に、あきれた声が響いた。何だかレーヴィの声に似ているような。

「なに？ 寝ぼけてるの？ あんたって、いい年して寝穢いね」

頭は何時までもぼけたままではいてくれない。活動を始めた脳は今度ははつきりと声の出所を把握する。ごく間近で発せられた言葉に、私は掛布の下で伸ばしていた足を勢いよく縮めて、恐る恐る声のしたほうに顔を向けた。

「よく寝てたね。色々と試したのにちつとも起きないんだから」

にいと口角をあげるレーヴィ。獲物を狙うように眇められた目に見つめられて、冷たいものが背筋をつたう。私は縮めた足を胸へと押し付けるように引きよせた。今の台詞は聞かなかったことにしよう。精神衛生のために。うん、忘却は実に重宝する機能だ。

「おはようございます。レーヴィさん、随分とお待たせしてしまっただよつで」

にじりにじりとお尻と足を交互に動かして、ベッドの上をレーヴィとは反対方向へと移動する。何とか端にたどり着くと、素早くベッドから這い出た。

「おはよう、目は覚めたみたいだね」

「ええ、おかげさまで」

これ以上はない程の最悪な寝覚めですが。

ベッドから降りた私はさらにレーヴィから距離をとるべくじわじわと後退を続けた。

そんな私を見て、レーヴィの眉が面白そうに持ち上がる。「よっ軽い声を発してレーヴィはベッドへと飛び乗った。泥の付いた編み上げ靴で弾むベッドの上を横切ると、すとりと私の眼前へと着地する。

あああ、マリヤッタが干してくれたばかりのふかふかの布団に泥



が！ 無残に残る靴後に目を奪われていた私は、次に目の前に立つ  
レーヴィへと視線を移し……………。

「なに、それ」

そう呟いたきり言葉を失った。冴えない教師レーヴィの今日も純  
朴な田舎青年そのものの地味な服には、どす黒い染みが幾つも浮か  
んでいた。

「ああ、これ？」

レーヴィが服の裾を引っ張ると、ふわりと風によって生臭い匂い  
が鼻をつく。

「け、け、けが、けがを？」

お願いだからイエスと言ってくれ！ 震える声で尋ねる私に、レ  
ーヴィは何でもないことのようにさらりと告げる。

「大丈夫。返り血だよ」

ぎゃああああああああ。やっぱりいい。ちっとも大丈夫じ  
やないわ！ 誰？ 誰？ 誰のなの？ 知ってる名前は口にしない  
ですよ。

「王子様の」

ひい。顔から血の気が一気に失せる。

「ではないから安心して」

にんまりと笑うレーヴィ。からかわれたのだと知って、引いたばかりの血が逆流する。怒りに、かあと顔に熱があがった。

「ぷっ、あはははは。面白い顔」

「なにがっ」

愉しそうに声を上げて笑うレーヴィ。

怒りのままに罵ろうと口を開いた私の足元に、がくりとレーヴィが膝をついた。

「……………え」

力なく伸ばされた腕が私の腰を捉えて、強く巻きつく。

「もう、最悪。自分が嫌になりそう」

私のお腹の辺りに顔をうずめると、レーヴィは唸るように呟いた。

「この血ね。依頼主の。まあ、正確には依頼主の上のやつとその護衛のだけど」

それって、黒幕のってこと？

「あの馬鹿が、リトヴァに窺見がいることも気づかずに店に入ったもんだから、マークされちゃって。で、すっかり上のが怖気づいてさ。僕に伯爵を始末させた拳句に、僕まで消そうとしたんだよ。それで仕方なく……………」

泣いて、いるのだろうか。腰に回された腕にますます力が込めら

る。私の体に顔を押し付けたまま、レーヴィは、はあと苦しげなため息を落とした。

依頼をされてもいない無益な殺しはしないと云っていたのは本当のことだったのだろうか。本人の言うように、真実殺人鬼ではなかったのかもしれない。生きるために、茨の道を選ばなくてはならない理由があつたのかもしれない。

「あんな、あんな………」

伏せられたままか細く震えるレーヴィの頭にそつと指を伸ばした。暖かな色味の髪を撫でれば思ったよりも柔らかな感触がした。

「最低な殺りかた！」

は？

「ああ、もう信じられないよ。いくら咄嗟のことだったとはいえ、あんな汚い殺しかたしちゃうなんて。ただ斬っちゃったんだよ。しかも一人一太刀だけとか。おまけに返り血まであびちゃってさ」

信じられないのはこっちだよ！ わけのわからぬ思いのたけを思う存分吐き出すレーヴィに深い怒りを感じたとしても誰も私を責められないだろう。髪に触れていた手を丸め硬く拳をつくる。せめて一発殴つてやらないと気がすまない。

「でも、まあ仕方ないよね。一撃で仕留めないところちが危なかったんだし」

ぱつと顔を上げたレーヴィは今にも振り下ろさんとしている拳をみつめると、にやりと笑みを浮かべた。

「なに、この手」

手首をつかみ、立ち上がるレーヴィ。くそう。距離をとってから  
と思っていたけれど、こうなれば仕方ない。屋敷の外に立っている  
はずのライアンとクリフトに聞こえるように悲鳴を上げようと私は  
大きく息を吸い込んだ。

「っ！？」

助けを呼ぶ声を発する寸前に、柔らかなものが口をふさぐ。空気  
を取り入れるために開けられていた唇に容赦なくぬるりとした感触  
を持つものが差し込まれた。こいつは！一度ならず二度までも！  
ロマンのかけらもないキスから身を引いて逃れようとしたその勢  
いを利用して、レーヴィは私を背後の壁に叩きつけるように押さえ  
込んだ。

衝撃に息がつまる。いや、息がつまっているのはキスのせいかも  
しれないけれど。

すかさずもう片方の手首もつかみ、壁に縫いとめると、レーヴィ  
は忙しく唾内に舌を這わせた。

掴まれた手首に、指が食い込み、骨がきしきしと悲鳴をあげる。  
目に溜まる涙は痛み of せいだろうか、息苦しさのためだろうか、そ  
れとも、悔し涙だろうか。

息をすることもままならない激しいキスにくらりと意識が遠のき  
かけたとき、舌の付け根に妙なものが触れた。丸みのある小さなお  
はじきのような、つるりと固い感触。

毒薬！？

嫌だ。離せ！

一気に高まる恐怖に、死に物狂いで足をばたつかせた。しかし、  
すぐに足と足の間膝を割り入れられ、スカートごと押さえつけら

れてしまう。

すでに唾内の奥深くにあったそれは、レーヴィの舌に押され、唾液に流されて、するりと喉を通っていった。

「んぐえっ」

車に轢かれた蛙が潰される間際にあげる断末魔のような情けない声もれる。

ようやく顔を離れたレーヴィは、薄い色の瞳を嬉しそうに輝かせ、塗れた唇をぺろりと舌でぬぐう。

「色気がないねえ」

うるさいわ！

「何を飲ませたんですか!？」

吐かなければ！ 解かれた手を喉に突っ込もうとするが、レーヴィの掌が私の口に覆いかぶさり押しとどめられる。

「もう、遅いよ。もう、ここで溶け始めてる」

レーヴィはとろけるような笑顔をうかべ、胸の中心を指先で軽く撫でた。

「依頼人は死んだんでしよう。なら、なぜ、こんなこと」

「なぜって、まあ意趣返しかな。リトヴァの事、もらったのあなたでしょ。あなたとは仲良くやれると思ってたのにな」

どういふ思考回路があればそう思えるんだ……………。

「でも、僕も鬼じゃないし。ちょっと仕置きをしたかっただけだしね。僕が逃げるまでの間、護衛を呼ばないでいてくれたら、解毒剤を分けてあげるよ。そうだな。今から目を瞑ってゆっくりと、100数えて。それから窓辺にきてくれたら、薬を結んだ矢を部屋の中に射てあげる」

「信じられない」

「でも、信じるしかないでしょ」

ぐっ、と言葉に詰まる私にレーヴィは満面の笑みを浮かべる。その純粹な喜びに満ちた危険な笑顔につい見入ってしまった自分に気づいて、心底落ち込んだ。

「100数えればいいんですね」

もつなるようになれ。

「そう、目を瞑って」

あきらめとやけくそ混じりのため息をつく、私はそっと目をとじた。と、その瞬間を待っていたかのように、ふわりと何かが唇に触れる。

「じゃあね。楽しかったよ。さようなら。」

足音はしなかった。ただ、離れていく微かな衣擦れの音にレーヴィが確かに去っていくのを感じた。

さようなら　　か。

安堵と共に感じる一抹の寂しさはきつと気の迷いだろう。ほら、なんだっけ。確かそう、ストックホルム症候群だったか。そんなの

に陥ってしまったっているんだ。すぐに消えるはず。私は胸に降り積もりつつあった感情をかき消すようにかぶりをふると、「いち」と小さく呟いた。

当初、ゆっくりと時間をかけて声に出して数えていた数字は、しかし50を過ぎたあたりから、やや早くなり、70を数える頃には駆け足ペースになり、80を超える頃には、アナウンサーも真つ青の超絶滑舌の早口言葉と化していた。

毒を飲まされているのに悠長に100まで数えられるほど胆の据わった人間じゃないんだ、私は。

息を切らして100の数字を口にする、ころびまるびつ窓辺に駆け寄り、両手をかけて足をふんばり重たい窓を勢いよくひいた。

ばんつと賑やかな音をたててぶつかる枠の音に、玄関口の前に立っていたライアンとクリフトが血相を変えて走り来る。

しまった。

二人のことを気にしている余裕もなかった私はライアンの愛嬌のある髭を見て、少し落ち着きを取り戻す。どうしよう。矢なんて飛んできたなら、薬を飲む前に大騒ぎになりそうだ。

あの変態め。こちらのことなど何も考えていないんだから。どうしろつてのよ。ぎりりと窓枠に爪をたて、ふと、落とした視線が指の間から窓枠につけられた黒い墨を捉えた。毎日アイラ達が綺麗に掃除してくれているのに。この汚れは？

もしかして!?

はやる心そのままに、ぱつと両手をあげてみれば、流れるような筆跡で書かれた短い言葉がそこにあった。

『それ、たんなる胃薬だから。またね』

「は、ははははは」 渴いた笑いが喉からもれる。胃薬、だと？

ライアン達がたどり着く寸前に袖でこすつ文字を消すと、私はへなへなとその場に座り込んだ。

最後の最後まで人を振り回しやがって！ あのだらめ！

ところで、またねって、なに………。



87 乙女の憂鬱(21)

重い鎧を打ち鳴らしながらやってきたライアンとクリフトは窓際  
にへたりこんだ私をみて困惑した表情を浮かべた。

「どうされましたか？」

口髭を動かしてライアンが怪訝そうに問う。

「えーと、ほら、鳥が」

「鳥？」

「ええ、鳥の鳴き声がしたのでエサをあげたかったのですが。窓が  
重くって、思いつきり力をこめたら、勢いあまってしまいました。  
すみません、驚かして。はは。自分でも驚いちゃいました。あ、ほ  
ら。さえずりが」

タイミングよく聞こえた軽やかな音に、私は木々の上を飛び回る  
鳥を指さしてみせる。

「そうでしたか。お怪我はありませんでしたかな？」

「ええ」

至極真面目な顔で案じられて、遠ざかる二人の後姿に、ちくりと  
心が痛んだ。

その日の夕食時、給仕を担当していたセバスチャンにエイノから  
の言付を伝えられた。

屋敷からでるな

簡潔で不親切で配慮の欠けた一言に、不安より先に怒りがわいた。ナイフを持つ手がふるふると震えるのを見てか、口数の少ないセバスチャンが珍しく言葉を付け足す。

大事がおきたようです。城内は………いえ、この王都は荒れるでしょう。しばしご辛抱を、と。

そして、私は目出度く3度目の軟禁生活を送ることになった。2度あることは3度あるとはよくいったものだ。

軟禁も3度目ともなれば慣れたもので、私は退屈ながらも心穏やかな日々を送っていた。なんてことがあるはずがない。

「ああ、もうどうなってんの」

外部と遮断されたエイノの屋敷の中を私は今日も落ち着きなく徘徊していた。

風呂場に厨房、食堂から玄関口を意味もなく覗いてまわり、主の不在が続くエイノの部屋の前で足をとめる。迷いに迷った末に、扉に手をかけた事もあったが、施錠されたドアノブの固い感触がかえってくるだけだった。

レーヴィがふざけた別れの挨拶に部屋を訪れてから、すでに20回は朝日を拝んでいる。その間、エイノの帰宅は5〜6回のみ。それも着替えや資料を取りに寄っただけという、ほんの十数分の短いものばかりだ。エイノと話をする機会もなく、屋敷を訪ねる者もなく私は孤立していた。大陸随一の大国の、富み栄えた王都にある煌びやかな城内で陸の孤島にいるかの如き日々を送っている人間がいるなどと、一体だれが考えるだろうか。

本日何度目かの屋敷巡回を終え、いつもどおり何の収穫もなく自室へと戻った私は、ベッドの上へと身を投げ出した。体を押し返すバネに抵抗するように、私は大きいため息をついて、顔をシーツに

押し付けた。静まり返った屋敷の中に、時折、がちゃがちゃという重い金属音が流れ込んでくる。窓の側を護衛の兵士が通る音だ。当初二人だった護衛はいつのまにその人数を増やし、今では常時5〜6人が屋敷の周囲に張り付いていた。

屋敷の外はどうなっているのだろう。セバスチャンの言葉が気にかかる。「王都が荒れる」とは、どういうことなのだろう。フロステル伯爵を操っていた人物はレーヴィに返り討ちにあったのではなかったのだろうか。内部分裂で潰し合って、下っ端らしいフロステル伯爵から黒幕まできれいに消えさり、結果オーライ、にはならなかったのだろうか。

息苦しさから寝返りをうち、仰向けになった時、扉が軽快な音をたてた。

コンコンコン。リズミカルに3度うち鳴らされたノックの音に、首をひねった。アイラやマリヤツタはいつも2度だけ、それもごく控えめに扉を鳴らす。

エイノだろうか？ 私は慌ててベッドから身を起こして、衣服の皺を軽くはらって伸ばすと、「どうぞ」と声をかけた。吉報がもたらされることを願って。

「なんだ、ユハか」

危うく口にしそうになった言葉を、笑顔を浮かべて飲み込んだ。紺色の近衛の制服に身を包み、腰に長剣をさげたユハが、こつこつと長靴を鳴らして部屋へと入ってきた。お決まりの爽やかな笑みが今日も胡散臭い。

「こんにちは、サカキちゃん。ご機嫌はいかがかな？」

ベッドの前に立ったままだった私の前まで足を進めると、ユハは手袋をはめた手で私の手を掬い取り、至極自然な動作で腰を折って、

唇を寄せる。

久々に訪ねてきたと思ったらしいきなり何をしゃがる。

「あまり良くないみたいだね」

「ええ、まあ」

いまひとつだったのが、今ので一気に悪くなりましたとも。

「相変わらずつれないね」

ユハは赤茶の髪を揺らして首をすくめてみせた。

「どう対応したらいいのか分からないだけです」

「そう？ サカキちゃんなら俺のような人間をあしらうなんてお手の物だろう？」

「かいかぶりすぎですよ」

そう言うと、ユハの掌の上に捕らわれたままだった手をそっと引き抜いて、緑の瞳から視線を外す。

「おやおや。今日は、サカキちゃんが一番ほしがっているものをもってきたんだけどね」

からかうようなユハの言葉に、私は弾かれたように顔を上げた。

「情報だよ」

優しい笑みを口元にきざんだまま、どこか冷たい光を瞳に宿してユハは私を見下ろした。首がつかれる。ソファに移動する気はないのだろうか……。

「フロステル伯爵邸が火災に見舞われた同じ日の夕刻、もう一邸、火の手が上がったお屋敷があつてね」

目が泳ごうとするのを私は上手く留める事が出来ただろうか。火の手が上がったもう一つの屋敷からは、レーヴィの手にかかって命を落とした人達の遺骸が出てきたことだろう。自業自得とはいえず、つとしない。

「誰の屋敷か聞かないのかい？」

「え？ ええ、そうですね。フロステル伯爵のお屋敷と同時に火事になったなんて気になりますね」

聞いたところで、この国の貴族に知り合いなんていないし、わからないと思うけど。

「セルミレ公爵のお屋敷だよ」

ユハは私の目をじっと見据える。私の反応を注意深く探るように。

「セルミレ公……」

やはり知らない名だ。と思うのにどこかで聞いた事があるような気もする。公爵様、か。相当なお偉いさんだよな。そういえば、随分と地位の高い父親を持つ人物がいたような。そつだ、思い出したぞ！

「エイノさんのお父さんですか！？ そんなつ」

私は思わず声を荒げていた。エイノの父親が黒幕だったとは。こ

れはエイノは相当まずいことになるんじゃないか。私にまで火の粉がかかりそうじゃないか。なんてことだ。

「……………それは、フランゼン公だ」

「へ？」

手袋をした手で額を覆い、ユハは珍しく苛立ちを滲ませた声でつぶやいた。

あれ？ そうだったか。一度や二度聞いただけの横文字な名前を覚えてられるか。

「すみません。公爵様というのでつきり。あの、セルミレ公を存じ上げないのですが、えーと、公爵といえば、その、地位の高い方なんですよね」

「リータ様の父上だよ。サカキちゃんと同じく乙女になられた方だ」  
すみません。知りません。乙女同期の名前はミーツェとヘリヤとアリツサしか覚えていません。

「リータ様は知っているだろう？」

額に置いていた手をどけると、ユハは小さくため息をついた。

「あ、ああ。そうそう。そうですね。リータ様の。うわー。それはびっくりです。父上を亡くされてリータ様はさぞかしお気を落としておられることでしょうね」

本性の染み出た苛烈な緑の瞳に睨まれて、私はあわてて相槌をうつた。

「リータ様は、ご兄弟のラウニオ伯爵と共に身柄を拘束されておられるよ」

ユハの口から飛び出た言葉に私は思わず眉をしかめる。

ラウニオ伯爵。その名は覚えている。乙女となるための儀式をつけた神殿で私のことを睨み付けていた青年……モスキートだ。どこかで聞いた響きだと思ったら、あの時にレーヴィに聞いたんだ。エイノではなくモスキートの父親だったのか。たしか先王の妹の孫だとかいう。思い出せてすつきりだ。それより、子供たちが拘束されるということは、

「セルミレ公爵が『黒幕』だったんですか？」

「それは、どうだろうね」

ゆっくりと瞬きをして、そう言ったユハの表情はいつもの爽やかな好青年のそれに戻っていた。

「まだ調べも途中のようだから、断定はできないな。けれど、少なくともフロステル伯爵共々、今回の件に深くかかわっていたのは間違いないようだね」

「そうですね……。リータ様とラウニオ様も共犯なのですか？」

犯人の生き残りがいるなら調べも楽だろう。しかし、跡取り息子でもあるモスキートはともかく、純真無垢そのものそうなあの少女が企てを知らされていたとしたら……軽く人間不審に陥りそうだ。

「いや、彼らは何も知らなかったようだね」

そうか。いや、そうだろうな。私が父親でも、イサークに目をかけられていた私に、あからさまに敵対心をぶつけてくるような短慮

な息子に国を左右するような謀を明かしたりしないだろう。

「セルミレ公は高潔の士と評判のお方だっただけに、驚いている者も多い」

ところがどつこい、表と裏の顔を使い分ける、狡いじじいだったわけだ。だいたい、いくら素晴らしい人間といわれても、息子があれだしなあ。モスキートは父親の行き過ぎた血統主義を嗅ぎ取っていたのだろう。「人の本心はわからないものですね」と気のない相槌をうちながら、傲慢で自尊心の塊のようなモスキートを思い出し、私は一人で得心していた。

「評判どおり、愛国心に溢れたご自身にも厳しい方だったと思うよ。俺がお言葉を交わしたのは随分と昔のことだけだね。どこかで曲がってしまったんだろうな。国を思うお心が……………」

私に向けられているはずの瞳は、私ではないどこか遠くを見ているような気がした。常とかわらぬ軽く穏やかな口調で語るユハの胸中が、その通りのものではないと気づいて返す言葉がみつからない。ユハにこうまで言わせるとは、その昔はいい人だったのかもしれない。それが権力の中枢で欲にまみれて驕れる悪党になりはててしまったのか。いや、聖域に自分の娘がいることを承知であんな騒ぎを起こしたんだ、私欲の混じらぬ、純粹に国を思う心が狂気と化したのかも知れない。そもそも、血統にこだわるなど馬鹿らしいという私の考えは間違っていないのだろうか？ 理の異なる異世界で、現代日本で培われた私の常識は正しいのか。王家の血に他国の血を混ぜぬというならわしに、何か特別な意味があったらどうなる。魔法があって聖獣が存在して、血によって受け継がれる能力が……………。



「さて、ここからが本題だが」  
「は、はい、どうぞ」

ユハの顔を凝視したまま胸の悪くなるような思考のどつぼに嵌りかけていた私は、かけられた声にあわてて返事を返す。

「フロステル伯爵邸は可燃性の液体をばら撒いた上に火をつけたらしい。火のまわりは非常に速く屋敷は全焼。証拠となるようなものは何も残らなかった。だが、セルミレ公爵邸は一部が燃えただけでね。色々面白いものが出てきたんだよ」

遺体とか？ 不謹慎じゃないかね、その表現は。

「血判状とか、ね」

あ、なんだ。血判状ですか。

「て、え？ 血判状、ですか？」

まあ、なんて素晴らしい証拠を残してくれたのでしょうか。それがあれば関わった人間から何から一網打尽じゃないか。それなのに何をこんなに手間取っているのか。

「えーと、それは無事発見できて良かった……………んですよね？」  
「将来的には、そうだろうね」

なんだよ、その思わせぶりな台詞は。

いつの間にか両手にはめていたグローブを脱いだユハは、左手に持っていたそれを、ベッド脇にある小机に向かって投げた。中身のない大きな皮の手袋が、ぱさりと軽い音を立てて机の上におさまる

のを目で追ってから、私はユ八に視線を戻す。

「何か問題でも？」

「大有りさ。何せ、国政に関わる、錚々たる面々の名が記されていたからね」

「それは、大掃除ができませんね……………」

「大掃除か。そうだね。粛清の嵐とでも言おうか。おかげで政は滞り、都の治安もままならない。ツイメンの姫は、バジエの動向を随分と懸念されているようだが、なるほど今攻められてはこの国は危ういだろう。君も、そう思うだろう？ サカキちゃん」

いや、黒髪 of 呪術師殿

皮肉げにゆがめられた唇から、ゆつくりと紡がれた言葉に、私が見開いてユ八の顔を見ると同時に、ユ八の腕が素早く伸びて私の手首を掴む。捻りあげるようにして、腕を引かれ、急激に襲う痛みに抗うこともままならず、私はユ八の腕が導くままに、ベッドの上へと身を投げ出していった。

ドサリと身体がベッドに落ちる重い音がした。ギツギツと続く木のしなる音。私の上に被さる赤い影。冷徹な光を放つ一対の眼。

掴まれた手首から、射抜くように見つめられた目から、息のかかる首筋から、どつと湧き出た恐怖が一気に全身を貫いた。震える体は一切の抵抗を忘れ、あつというまに両手首をとらわれて、軽々と左手一本で頭上に縫いとめられる。

「貴殿の目的をお聞かせ願おう」

そう言つとユ八は、腰の後ろにあいた手をまわした。次にその手が私の視界に現れたとき、そこには、抜き身の短刀が握られていた。

88 賢者と呪術師 前編 (上) (前書き)

最終章に入りました。  
若干の性的表現があります。

ユハは手にした刃物を見せ付けるように目線まであげると、ゆっくりとした動きで私の喉元にそわせた。

しかし、痛みもなければ、刃物の冷たい感触もしない。レーヴィの時とは違う。刃を皮膚に密着はさせていないようだ。脅すように刃をちらつかせたくせに、ユハの手つきはやけに丁寧に感じた。ひよっとして、私に傷をつけるのを恐れているのではないだろうか？もし、そうなら、なんとかなるかもしれない。

「ユハさん……どうしたんですか？ いったい何の話ですか？」

必死に絞りだした声は、滑稽なほどに震えていた。

「私、呪術師なんかじゃありません」

「呪術師でなかったら、君は何者だというんだ？」

笑顔の奥に潜んでいた獣が、そのするどい牙を剥き出しにしている。冷たい緑の瞳は、目を合わせるだけで、恐ろしく精神を消耗させた。

「ユハさん、言っていたじゃないですか。私が呪術師なら、街でいくらでも好機があつたはずだつて。あの時私はイサークと二人きりだったし、イサークは剣も持つてはいなかった。私が呪術師なら、そんなチャンスは逃すはずがないでしょう!？」

「そうだね。黒髪の呪術師が殿下のお命のみを狙っているのだとすれば、みすみす絶好の機会を逃すことはないだろう。だが、呪術師の狙いはそれだけではなかったとしたら？」

抗いもせず大人しく身をまかせているというのに、手首をしめつけるユハの力は些かも緩められることもなく、その顔には情けのかけらも見出すことはできない。

「呪術師の狙いがシルヴァンティエという国そのものだとしたら？」

問うユハの声はあまりに静かで、逆に恐怖をかきたてる。私は無言で、ただユハの瞳を見つめ返していた。私の答えなどはなから期待していなかったのか、ユハはかまわずに言葉を続ける。

「呪術師は子供の姿を得て侵入し、わざと囚われ哀れみを誘った。城内に居場所を確保し頃合をみて殿下と接触。そして籠絡。あとは掻き回せるだけ掻き回し、貴族達の離反を招き、国を混乱させた」

ユハは唇を吊り上げて笑みを浮かべる。爽やかさをどこに落とししてきたのかと、問い詰めたくなるような、蔑みしか感じられないその表情に目を疑った。恐ろしさに溢れそうになる涙を、こいつの前で絶対に見せるものかと唇をかみ締めて耐える私の耳元に、ユハは首を傾けてゆっくりと唇を近づける。

「見事な手腕だったね。呪術師殿」

ぞつとするような冷たい声だった。

違つ……………。

「さあ、話してもらおうか。君は誰と手を組んでいるんだ？ この国を欲しているのはどこだ？」

違つ……………違つ……………。

「バジエか？ キュイか？ ツイメンか？」

違う……違う……違う……

「それともフォルセルか？」

違う！

その言葉が耳に届いたとき、私の中で何かが音を立てた。フォルセル、フォルセル、まーたフォルセルか！ フォルセルの呪術師なんてのは千年以上に死んでいるんだよ！

「違うっていつてるじゃないですか！」

逸らさずに見つめていた緑の瞳から視線をはずして俯くと、私は叫ぶように答えた。顎をひいた瞬間に、一瞬、冷たい刃物が皮膚を掠める。しかしそれは素早く退かれて、また一定の距離を保って添えられた。やっぱり……。私は確信した。ユハは私を傷つける事を恐れている。

「いい加減にしてください。大の男が女子供に刃物をちらつかせてそれでも軍人なんですか。貴人を守るはずの近衛が無抵抗の人間を組み敷いて、丸腰の相手に刃を向けるなんて恥ずかしくないんですか！？」

言いたい事を言うと、私は顔を上げて再びユハを見た。俯いたまま捲くし立てたのは、もちろん顔を見たまま告げる勇気がなかったからだ。

少し驚いたように方眉をあげて、けれど静かに私を見つめたままのユハに、私は笑みを向ける。

「こんな事をして、イサークに知られたら困るのはどっちでしょうね」

怖くて少々歪な笑みになってしまったが、仕方がない。

ユハの話は全てが憶測だ。何の証拠もない。私は呪術師ではないし、ましてや国の転覆など狙うわけがない。証拠などあるはずがないのだから。

一転して強気に出た私に、ユハは目を細めるとふつと鼻で笑う。

「どうやら、俺はこの剣を使う気がないと思われているらしい」

え？ 違うんですか？

頬が一気に引きつった。

「使わせないようにしてもらえると、ありがたいがね」

そう言うとユハは首元から剣を離し、組み敷かれた私の頭の横へと置いた。鈍い光を放つ鋭い刃をチラリと横目で見やっごくりと唾を飲む。

「少し趣向をかえようか」

「えっ？」

ユハの言葉に、短剣に向けていた視線を戻した時には、緑の瞳が間近に迫っていた。深い森の奥の濃い緑、初夏の新緑の鮮やかな緑、様々な色合いが交じり合った不思議な色彩の瞳に吸い込まれるように見入ってしまう。ゆっくりと近づいてくるその中に、惚けたように薄く唇を開けた自分の姿を見つけた時、ハツとして首を捻った。間一髪頬を掠る唇の感触に、ほうと息を吐く。

危なかった……………。

「おや、随分と嫌われたものだ」

くっくつと喉を鳴らしたユハの呼吸が耳をくすぐったかと思うと、柔らかいものが耳朶をはむ。

背筋に震えがはしった。

小さく濡れた音を立てながら首筋におりてきたユハの唇が鎖骨の上の窪みに埋まる。暖かい舌がぬるりと肌の上を這う感触に、嫌悪と屈辱を覚えると同時に、ほんの僅かに快楽を得た気がして、それを否定するために私は激しく頭をふった。ぐるぐると視界が回る。どうしよう。どうしよう。本気ですか？ 女に不自由などしてないくせに。口を割らないなら身体にきいてやるってか。そんなことされたら処女じゃないと感づかれるじゃないか。……いやいや、何を考えているんだ私は。今となつては経験があるかどうかなどは瑣末な嘘だ。心配すべきはそこじゃないだろ！

「……………っつ」

繰り返して首筋を上下する唇が耳の付け根の辺りを強く吸ったとき、思わず小さく声もれた。音もなくユハがもらした笑みが吐息となつて耳にかかり、かあと顔に血がのぼる。違いますから！ 今のは感じたんじゃないからな！ こんな状況で感じるようなマゾではないはずなんだ。違うから、勘違いするなよ。このエロ狸。

かりつと耳をかじり、身体を浮かしてほんの少し距離をとったユハは自身の体重を支えるために使っていた腕を、私の胸元へと移動させる。

やはり手馴れている。

骨ばった長い指が些かのためらいもみせず器用にボタンをはずしていくのを何故か感心して眺めていた。

瞬く間に膺上までのボタンをはずし終えたユハの指が無遠慮にシ



ヤツの内側に潜りこむ。

「あのっ」

硬い指先が胸の内側の膨らみをなぞったとき、私は声をあげた。

胸元に落としていた視線を、乱れて額にかかった赤茶の髪越しに私に向けたユハは、小さく顎をあげて先を促す。

「私は、違います。呪術師ではありません。何と言われても、何をされても、答えは同じです。バジエもツイメンもフォルセルも、このシルヴァンティエにも、なんの興味もない。私は、呪術師ではありません。ただ自分のもといた場所に帰りたい、そう願うだけの力のない人間です」

声がかすれる。大きな声を出しているわけでもないのに喉が痛い。私を見つめるユハの顔には表情らしい表情もなく、彼が何を考え思っているのか、読み取ることはできなかった。

「言いたいことはそれだけです。抱きたいなら好きにどうぞ。けれど、ことを終えた後も気を抜かないでください。隙を見せたら、この」

そう言っただけ私は顔の横に置かれたままの短剣を見た。

「剣で首をかき切つてやる」

感情を消していたユハの顔に、笑みが戻る。ふうと息を吐いて、困ったように首をすくめて見せるその様子に、いつもの胡散臭い爽やかなお兄さん面を思い出して泣きたくなった。

「勇ましいね。しかし、震えながら言う台詞じゃないな」

うるさい腹黒狸。何歳になるうが経験があるうが、怖いものは怖いし、嫌なものは嫌なんだよ！ きざつたらしい台詞を吐いてないでやるならとつとやってくれ。

シャツの中で指が動いた。ユハが顔を寄せるのを見て、私は目を閉じた。唇に柔らかいものが触れたその時、ドンツという鈍い音と共に振動が部屋に伝わる。

驚いて目を開けた私の上から、ユハが素早く離れる。

開けた視界の先には、蝶番が壊れたのか、おかしい角度でグラグラと揺れる扉と　　上半身を簀巻きにされたイサークの姿。

イサークの登場に驚けばいいのか、簀巻きに驚けばいいのか、壊れた扉に驚けばいいのか、何が何だか分からない。

私の姿を見て、目を見開いて唇をかみ締めたイサークは、簀巻きのまま走りよってベッドに倒れこむように飛び乗った。自由のきかない両腕のかわりに肩をつき、弾むベッドの表面を膝で蹴って、イサークはユハと私の間に体をねじ込んだ。

人口密度の高くなった不安定なベッドの上で、私を背にかばうようにしてユハと対峙する。

事態を把握することも出来ずに、のろのろと身を起こした私は、イサークを簀巻きにしているものが柔らかな白い布であることに気づいた。どこかで見た覚えがあるような……………。

「拘束」

はい？

簡潔なユハの言葉に、布に向けていた視線をあげると、枕元に置いてあった短剣を仕舞いつつ、上着の止め具に手をかけるユハが目に入る。

え、ちょっと。まさかこの状況で続きをしようってんじゃないだろうな。そんな悪趣味な。顔から血の気が引いていく。

じりじりとベッドの上を後ずさり始めた時、どんつと肩に衝撃が

はしまった。バランスを崩した身体はあっさりとのめりにベッドへと倒れた。と、同時に手首を背後にねじり上げられ、肩へかかる重みが増す。どうやら、他にも人がいたらしい。

「やめる！ 手荒くするな！」

「ですが……………」

イサークの怒声に、戸惑ったような声が返された。

「拘束」

「ユハ！」

おい、こら！ 王子様の命令無視ですか！？

またもや簡潔な言葉で無情に告げるユハと、それを止めるイサーク。私を押さえつける人物の戸惑いが背後で膨らむのがわかった。そりゃあ、困るよな。

「何をしている！ 殿下の身を危険に晒すつもりか」

「はっ」

残念ながら軍配はユハにあがってしまったようだ。

両腕を背に回されたかと思うと、紐状のものが手首にまきついていく。しっかりと手首を固定すると、背後の人物は、丁寧に私の身をおこした。

目の前には射殺さんばかりの目つきでユハを睨むイサーク。その視線を介さず、腰帯に手をかけながら床に足をつけたユハは、ベッドを回り込んで私の傍らへと立った。

自然とイサークの目は私へとむき、途端に、ボンッと着火の音が聞こえそうな勢いで赤くなる。ああ、うん。胸元がスースーしてるもんな。何時もの反応でお姉さんは安心したというか、気が抜けた

よ。

「殿下、私にお任せいただけるのではなかったのですか」

肩にユ八の上着がかけられる。暖かい感触とともに、つい先ほどまで自分を組み敷いていた男の香りが立ち上る。非常に複雑だ。しかし、イサークの眼前で×××というハードなプレイじゃなくて良かった。本当に良かった。

「お前がっ！　ここまでするとは思わなかったんだ」

真っ赤な顔でユ八をねめつけるイサーク。

「エイノ」

「お止めしようとしたがかなわなかった。すまぬな」

批難をこめた声でユ八に名前を呼ばれた相手は、すまないとは全く思っていないであろう不遜な声音で答えた。

もう、ここまできたらエイノがいても驚かない。体を捻って振り向けば、厳しい顔で私を見つめるライアンと、冷たい眼差しを送るエイノの姿があった。ユ八の単独行動かと思っていたのに四面楚歌だよ。

それにしても……　エイノの腰にあるべきはずのものが無い事に気づいて私は眉をしかめた。イサークを縛っているものってひよっとしてエイノの腰帯ですか？　どうりで見た覚えがあるはずだ。自国の王太子を簀巻きとはどういう見だ。投獄ものでしょう。

腰帯がないせいかいつもよりも若干丈の長くなった神官服を絶妙な足裁きではらいつつ、エイノはイサークのそばにより体に巻きつけた帯をといっていく。

「殿下、申し訳ありません」

抑揚のないエイノの謝罪に、お前、微塵も申し訳ないと思ってないだろう！ と、この場に居合わせた皆が思ったことだろう。

拘束を解かれたイサークは慥然とした面持ちで肩をまわした。

「よい」

あ、いいんだ。

ちらりと私を見たイサークは、ばつの悪そうな顔をして、ベッドから降りる。一人ベッドの上に残された私は居心地の悪さに身じろぎした。何だつて今更、呪術師と疑いをかけられることになってしまったのか。

「さて、仕切りなおしといこうか。見てのとおり、殿下もご承知のうえだ。どうする？ 呪術師殿」

どうもどうも

「さつきも申し上げましたが、私は呪術師などではありません。諸悪の根源はセルミレ公でしょう？ 身内の反逆を私のような小娘のせいにするなんてあんまりです。何で私が呪術などという馬鹿げた話になったんですか。私が呪術師と思うに至った、納得のいく理由を聞かせてください」

「トウリだ」

「トウリ？」

エイノが口にした人物の名に、くらりと眩暈がした。

あの天然め。何かやらかしやがったのか？

「サカキ、お前はトウーリ、いやトウーロとかかわりがあるな？」  
「ありませんよ」

実際はない。と思うものの、トウーロからすれば、恐らく私は関係者なのだろう。理不尽な話したが、後ろめたさを覚えて、思わず目をふせてしまった。

「あの男が姿を消す前に語った言葉を、お前の口からも聞いた事がある」

え？

『馬鹿野郎』『変態』『阿呆』『馬鹿』お前が毒におかされた時、うわ言で呟いていた。耳にしたことのない言葉だ。これはお前達の言語なのではないのか？」

馬鹿野郎、変態、阿呆に馬鹿。確かに、あるときトウーロが口にしてた日本語だ。しかし私がそんな罵声を吐いたのか？ 生死の境を彷徨って、苦しくて、恐ろしくて、確か賢者の夢をみて、そして あらん限りの罵りをぶつける夢をみましたね。背中を冷たいものが伝う。言ったかもしれない。

「他にも……………根拠はある」

苦々しい口ぶりでそう言ったのはイサークだった。

「カツオだ。あれをお前への土産と進めたのはトウーロだった。キノスで流行っているからと手渡されたが、流行るところか、王都にあれを扱う店などなかった。サカキはどこにも売っていないあれを懐かしいと言ったな」

あの馬鹿。

「それに、以前夜半に俺がお前の部屋にいた事を覚えているか？  
あの日、窓の鍵をあけて手引きしたのもトウーロだ。俺にエイノの  
結界は破れても鍵は開けられん。お前がレーヴィに気持ちを寄せて  
いると俺に囁いたのもな」

大うつけ。

「まだある。君を気晴らしに街にだしてはどうかと涙ながらに訴え  
てきたのも彼なんだよ。慣れぬ生活に参っている。このままでは命  
を絶ちかねない。精神がもたないのではないか。とね。その街で、  
トウーロは我々の手元から君をさらい、君は偶然にも殿下に出会っ  
たわけだ」

………………。もう言葉もないわ。天然恐るべし。

私は深い深いため息をついた。仮面の男がトウーロだと露見した  
あの時から、私は疑われていたのか。ユハにもエイノにも、イサー  
クにも。

懇願しても近衛を退出させなかったイサーク。屋敷に戻らないエ  
イノ。着席しないユハ。そういえばユハが皮の手袋を私の前でも外  
さなかったのは何時からだっただろうか。私を警戒しての行動を、今  
まで全く気に留めなかった自分に呆れる。

なんだよなんだよ、そんな以前から疑いの目で見られていたのか。  
ユーンに怯えながら無理をして聖域になんか行くんじゃないよ。  
ん？ ちよつとまで、何かひつかかる。トウーロの仲間だと思い  
込み、限りになく黒に近い存在であった私を、何故聖域におくつた  
？ 聖獣ユーンがいて、イサークの妃候補である乙女達が集う場所  
に、私という危険人物を送り込んだのは何故だ。私が乙女として決



定していたから？ いや、他に候補が見つかったとでもいって辞退させる事も可能だっただろう。ああ、嫌だ。考えたくない。私をわざと自由にしたな。ちりりとしたむず痒い様な痛みが、首に走ったような気がした。

「エイノさん……また、私にサリの術を？」

「ああ」

緊張にごくりと唾を飲み込む間もなく、あっさりと肯定された。

こんの外道神官。かけるならかけると言ってくれ！ それにしても、いつ？ いつかけられた？

「元はといえばお前の身を守る為にかけたものだがな」

反省も後悔も感じられないエイノの物言いに、屈辱で頭がかき乱されるようだ。

「何から守るっていいますか！」

「仮面の男からだ。はっ、笑える話であろう？ 私はお前の身を、お前の仲間から守るためにサリの術をほどこしたのだ」

低い、低い声だった。感情も頭にはき捨てたエイノにユハが驚いたように片眉をあげる。天変地異の前触れだろうか。

って、ちよつと待てよ。ということはサリの術がかけられたのは、夕ピオの花を見に行く前だったのか。そう考えるに至って、私は思い出していた。食後に無性に眠たくなつたあの夜の出来事を。

「今も？ 今もかけたままなんですか？」

気持ちが悪い。首の後ろに何か張り付いているような気がして、

私は肩をすくめてがむしゃらに頭を振った。張り付いているものを落とすために。

「聖域で解いた。サリの術は負担が大きいわね」

聖域で……くそうっ！ 息も絶え絶えなエイノ・オブ・ザ・デッドは、仕事のしすぎではなくてサリの術のせいだったのかよ。何？ んじゃあ、あの時の抱擁は、吐息は、あれですかね？ 限界まで我慢していた自然の呼び声にトイレに駆け込んで、はあすつきり。みたいなものだったんですかね？ 神事で使う神木の枝をとりについたってのも出鱈目か。サリの術の維持の為に私と一定の距離を保たなくてはいけなかったと、そういうことですか。

ぎりりと奥歯をかみ締めて、ふと目を伏せているイサークに気づいた。視線を感じたのか、顔を上げたイサークと目が合う。かと思えばすぐさま視線を外すイサーク。ひくりと頬が引きつる。イサーク王子よ。気づいていたね？ そうだイサークが気づかないはずがないんだ。街で出会ったときは一目で気づいて解除してくれたのだから。貴方、確か首筋にキスマでしましたよね？ 口付けという気づかなかいわけないよねえ。気づいて解除しなかったのだ。恋する少年である前に、シルヴァンティエの王太子だということか。

所在なげにさ迷わせていた目をぐっと瞑ると、イサークは意を決したように私をみた。

「サカキ、話してくれ。本当のことを」

話して、信じてもらえるのだろうか。信じる気があるのだろうか。

「トウーロが語った言葉は私の国のものです」

けれど、もう切り抜ける手段が思い浮かばない。私はため息をひとつ落とすと話し始めた。さて、どこからどこまで話したものか。

「けれど、彼は私の国の人間ではありません。彼の容姿と私の容姿は違うでしょう？ 私は彼のことなど知らないのです。彼がなぜ私の国の言葉を知っていたのか、女のふりをして侍女になりすましてまで何をしたかったのか。私にはさっぱり分かりません」

「トウーロはお前になんと伝えた？ 『馬鹿野郎』とはどういう意味だ？」

「『馬鹿野郎』は馬鹿野郎、『変態』は変態、『阿呆』は阿呆、『馬鹿』は馬鹿です。彼は私に言葉を理解していると気取られるな馬鹿野郎。と、あと自分の歳はユ八さんと同じだと言って消えましたよ。私からすればトウーロのほうがよくばど馬鹿野郎ですけどね」

問うたエイノが呆れたように眉を顰めた。トウーロと私の実のな会話に呆れているのか、この期に及んで嘘をついていると呆れているのかは知らないが。

「お前の国はどこだ？」

「以前にもお話しましたが日本ですよ。ただし、地図にはのっていませんが」

眉間に寄せた皺を深くする美貌の神官長を見据え、私は疑問に答

えた。

「世界が違ふんです。私の祖国は今いるこの世界とは異なる場所にあります。私がいた世界にはシルヴァンティエなんて国はありません。そもそも理が違います。魔法も、聖獣も私の世界では御伽噺の中にしか存在しない。そんな世界で私は暮らしていたんです」

部屋の中は、水を打ったように静まり返っていた。それぞれに私の語った言葉の意味について思索しているのだろう。

「それは、術の確立していない他の大陸からきた。という事か？」

何とか自分なりに理解しうる範疇におきかえたのだろうイサークの言葉に、私は首を横にふる。

「違います。私のいた世界、地球とでもいみましょうか。地球には複数の大陸が存在しましたが、飛行機……えーと、数百人の人間を乗せて空を飛ぶ乗り物のことです……や、船などで人々は大陸間を行き来していました。未知の大陸などありません。信じられないでしょう？ 自分でも未だに頭がおかしくなってしまうんじゃないかと思うぐらいですから」

息もつかずに一気に話し終えると、私は皆の顔を見回した。当然のことながら皆の顔色は芳しいとは言いがたかった。

「世界はいくつも存在するそうですよ。平行して存在する世界は交わることなく独自の時を歩んできた。私は本来干渉するはずのない世界からこの世界にきたのです。わかりますか？ 私はあの日、庭園にきたあの夜まで、シルヴァンティエもキューイもツイメンもフォルセルも何一つ知らなかったんです」

後ろ手に縛られた手首は痛みこそないが、むず痒く、気分のないものではない。何より肩がこるのが難点だ。身じろぎすると肩にかけられたユハの上着の襟が頬をかすめた。鬼畜に徹すればいいものを、紳士面もかかさないのだから始末が悪い。

「干渉するはずのない世界から、お前はなぜこの国きた。いや来ることができた？」

「ルードヴィーグに拉致られました」

そう、全てはあの馬鹿のせいだ。私が答えた名前にエイノは瞠目すると「ルードヴィーグ………だと？」と小さく呟いたきり口を閉ざした。

「フォルセルの次はルードヴィークか。サカキちゃん、君はルードヴィーグが何時の時代に生きた人物か知っているのか？」

エイノに変わって尋問の音頭をとったのはユハだった。

「千年前でしょう？ 代替わりでもしてるんじゃないですか。それか名を騙ってでもいるのか。私を連れてきた人物が自分でそう名乗っただけですから、真偽のほどは知りませんよ」

愛想を振りまくのにも疲れてきた。というか、この男には最早必要ない気がして、口調は自然とつつけんどんなものになってしまう。

「そのルードヴィーグとやらの目的は何か？ なぜ君を城の庭園に連れてきたんだ？」

「知りませんよ」

本当に。こつちが聞きたいぐらいだ。

「探し物をしてほしいと言っていましたけどね。その為にノルティアで使われている言語を与えると。私がシルヴァンティエの言葉を話せるのはその為です」

「なに？」

しまった。言語の一言に反応して顔をあげたエイノに失態をさとする。古文書の解読を遅らせていたのがばれただろうか。

「そのルードヴィーグとはどういう人物だった？」

しかしエイノの興味は別なところにあつたようだ。

「どういう容姿をしていたと聞いている」

「えーと、確か、髪は金で目は青。何と云うか軽薄な印象をつける若い男性でした」

軽薄な兄ちゃんの賢者。どう考えても嘘くさい。いかにも物事を知っていてそんな白い髭をたくわえた老人だとも言っておけばよかった。

「にわかには信じがたい話だ」

そうでしょうとも

「だが信じよう」

正気ですか！？ エイノの言葉に私は耳を疑った。頭は大丈夫か？

「エイノ」

ユハが僅かばかりの非難を込めて呆れたように名を呼ぶ。

「嘘を吐くならもう少しましな話を考える。荒唐無稽なだけに真実味があるではないか」

なるほど、そういう考え方もあるか。

「俺も、信じる」

賛同の声をあげたのはイサークだった。

「サカキが呪術師ならば目的を遂げた今も城に居座る理由が分からん。サカキはルードヴィークを名乗る何者かに利用されているだけではないのか？ 俺にはどうしてもサカキに悪意があるとは思えない」

俯いたまま苦しげに眉をよせて語るイサーク。心の底から全てを信じているというわけではないようだが、仕方あるまい。

不法侵入したエイノに「シルヴァンティエから来た。魔法もつかえる」と言われ、摩訶不思議な技を見せられたとしても、私ならまづ信じない。奇術師な詐欺師が何かやってるわ。顔が良かったら何をしても許されると思うなよ馬鹿たれが。と、110番して叩き出す。それを心底でなくても信じようとしてくれているのだ。感謝しなくては罰があたるだろう。信じたいと悲痛な色をのせて私を見つめるイサークを見て、年齢詐称については黙っておこうと心にきめた。13歳には許されても、25歳には許されないことは多いしな！

「君はルードヴィーグを名乗る人間にさらわれて来た。トゥーロの事も一連の件に関しても何も知らないと言っただね？」

いい流れになりかけたと思ったのに、ユハは変わらず鋭い目で私を見る。王子が信じるって言ってるんだからそれでいいじゃないか。空気を読め。

「そうです」

真っ向から顔を合わせて私はきっぱりと告げた。

「そうか。ではなぜ、君はセルミレ公が亡くなっているのを知っていた？」

え？

ユハの言わんとしている事を察して、指先から血が引いていく。

「俺は、セルミレ公爵邸が火事になったと言っただけだ。それなのに君は公が亡くなったのをまるで知っているかのような口ぶりだったね」

「それは、火事と聞いたので。私の早合点でした」

冷たくなった掌をぐっと握り締めた。なんて迂闊な会話を交わしてしまったのか。これではトゥーロを馬鹿にできない。

「聖域で爆発があった時もそうだ」

まだあるんすか。

「君は犯人は捕まったのかときいた。そうだね？」



「爆発があつたのですから、そう思うのが当然では？」

「他の乙女たちは口を揃えてこう言っていたよ。やはり女神の怒りに触れたのだ。とね」

あの箱入りどもめ。あれだけ説明したというのに、まあだそんな世迷言をほざいていたのか。

「それは、私がこの国の人間ではなく女神そのものの存在を信じていなかったからで……」

「ならば、せめて何が起こったのかと訊ねるべきだったな。そう思わないかい？」

「こちらにきてから騒動続きでしたから、てっきり……」

ああ、もう。このKY狸が。いちいち揚げ足を取りやがって。

「乙女たちと随分楽しそうな話をしたらしいね。雌しべと雄しべか。以前に君は言ってたな。自分は子供ではないと。確かに君は子供ではないらしいな」

ああ、そう。そこまでちゃっかりお耳に入ってしまったているんですか。やる事なす事全てが裏目にでていくようだ。

「日本には性教育というものがありましてですね。間違った知識で困ったことにならないように教えられますよ。その、まあ、いろいろと」

どうする？ レーヴィのことをバラすか？ それにしてはタイミングが悪すぎる。今、余計なことまで話してはエイノとイサークの信用を完全に失ってしまうだろう。未だ迷いのみえるイサークと、無感情に成り行きを見守るエイノの様子をみて、そつと息を吐く。

握り締めたまま無意識に指をこすりあわせていた手を無骨な指が  
掬いとった。

「冷たいな」

睦言を囁くような甘い声だった。ざらりとした硬い感触をもつ親  
指が、指の付け根を掠めるように撫でていく。

「俺は迷っていると言ったね。今も迷いは消えないままだ。君が呪  
術師であるにしても、君の話を信じるにしても、どちらも辻褄が合  
わない」

繋がれた手に落としていた視線を上げると、ユハはその緑の瞳で  
私を見据える。

「君は真実を話しているのか？」

自分の容姿と、声と、瞳がもたらす効果を熟知している男だ。本  
性を知っていても立ち昇る色香にくらりとさせられる。

「俺に君を信じさせてくれ」

そう告げたのがユハでさえなければ、喋っていたかもしれない。  
生臭い、胡散臭い、怪しい。つい今しがた押し倒しておいてしゃあ  
しゃあと！ イサークが止めに入らなければどこまでするつもりだ  
ったんだ。

なんとか狸を退治する方法はないものかと、戸惑いに目を伏せる  
ふりをして室内を見渡した。狸に取られたままの手をぎゅっと眉根  
を寄せて睨み付けるイサークに、やっぱり無表情なエイノ。半眼で  
ユハを見つめるライアン。扉の前でおろおろとしているクリフト。

え？

おかしな方向に向けられた私の視線に気づいて室内の人間が一斉に扉を振り返る。

クリフト君、いつからそこに。

「どうした」

「客人がみえたと侍女が申ししております」

僅かに苛立ちを含んだ声で問うエイノにクリフトは申し訳なさそうに答えた。

「待たせておけ」

当然のごとく冷たい声で告げるエイノ。しかしクリフトは困ったように扉の外、廊下側へと視線を送る。その先からアイラがひよこりと姿を現した。室内の様子に目を丸くたアイラは気遣わしげにちらちらと私を見ながら頭を下げた。

「申し訳ありません。火急の用件と承り失礼いたしました。ルードヴィーグ様とおっしゃる方がお見えになっております」

そうアイラが告げた時の空気ときたら、なんとも云い難いものがあった。イサークはぽかんと口を開け、エイノは今まで見た中で一番深く眉間に皺をつくり、ユハは人の指を撫でながら呆然とアイラを凝視し……いつまで撫でてやがる……ライアンにいたっては何時もの生真面目な護衛兵士の顔できりりと直立しているものの、その瞳はどこか虚ろだった。さては理解する事を放棄したな？

「すぐに行くと言ってくれ」

漸く私の手を放したユハはベッド横の机へと歩みよった。

「殿下はエイノと城へ。ヨエルは俺と来てくれ。タイトはサカキちゃんと一緒に残るんだ。いいね。サカキちゃん」

机の上に置かれたままだった手袋を手に取ると、指を通しながら手際よく支持を飛ばすユハに合点承知とばかりに頷いた。ところでタイトってどっち？

「俺もここに残る。エイノはユハの援護にまわれ」

それは心強いと素直に喜べないです、殿下。イサークの身に万一の事があったらどうする気なんだ。ここは素直に従ってほしい。ユハが不敬にもため息をつきながらイサークを見る。

「ですが……………」

異は思わぬ人物からあげられた。アイラは身体の前で組んだ指に力を込めながらユハとエイノの間に視線をさ迷わせる。

「お客様は殿下の目通りとサカキ様の同席も望まれておりまして」「必要ない」

震えを帯びたアイラの言葉に手袋をはめ終わり腰にさげた剣を確認しながらユハは簡潔に答える。

「来ないと、この国滅ぼしちゃいますよ？」

はい？ アイラさん、あなた今何て言いました？

余りにあんまりなアイラの台詞に今度は自分の頭を疑った。

「あ、あの。今は私の言葉ではなくてですね。その、お客様が殿下が目通りを洗るようならこのように伝えるようにと。あ、あと、サカキ様も、ニホンに返せるのは僕だけですから、お忘れなく………と………」

優秀なアイラらしくもない、しどろもどろな口調に彼女の困惑を知る。

それにしても、馬鹿賢者め。イサークに用があるのは分かった。しかし、はったりにしても、ものには言いようつてもものがあるだろう！ まるつきり悪役の台詞じゃないか！ 私はがくりと頂垂れた。手首の縄を解いてもらえるのはまだまだ先になりそうだ。

90 賢者と呪術師 前編 (下) (後書き)

こんばんは。とうより朝ですね。UPしようとして手違いで90話を一度全消去してしまってます……。真っ白になりました。書き直してみたものの、なんか違う気がする……。ではでは、おやすみなさい。

私は拘束をといてもらえぬまま、応接室へと向かっていた。先頭をクリフト、次にエイノ、私と続き、後ろ手にまわされた私の両手首から伸びる縄を握るライアン、城へ戻り護衛をつけるようにとの進言を断り強制的についてきたイサーク、最後尾にユ八がついている。

応接室の少し手前まで来るとエイノに手振りで止まるように示される。歩を止めた私たちを追い越し、扉の前に立ったユ八は、左手でノブを掴み回すと、一気に足で扉を蹴り開けた。

ええー、そんな喧嘩腰な。穩便に話し合いって選択肢はないのか？ まあ、先に売ってきたのは賢者のような気もするけども。

長靴が扉にぶつかる音が消える前に、腰にはいだ剣を引き抜き、ユ八は部屋の中へと走り消える。揺れる扉を押さえて後に続くクリフト。

「……………くっ!？」

部屋の中には入らずに、腕をかがげたエイノの唇からつめき声とも驚愕の声ともつかぬ音がもれた。

思わず顔を見合わせる私とライアン。そしてその横を剣に手をかけつつ走りすぎていくイサーク。  
待て。

勇敢なのか無謀なのか、たんに若いからなのか……………。ライアンの制止の手をすり抜けて部屋の中に駆け込んだイサークの姿に、戦闘機にのりこんで宇宙船に突っ込んでいく某大統領が出てくる映画を思い出した。

トップが行っちゃいかんでしょうが。後のことを考えてくれ。  
部屋の中からは何一つ物音がしない。それがかえって不気味だっ

た。唯一姿の見えるエイノの額には汗がにじみ始めている。

「逃げなさい」

「え？」

ブツリという音がしたと思えば、ふつと腕が軽くなる。手首を戒めていたものが解かれたのだと知って、驚いてライアンを振り仰いだ。

私の顔を見つめ返したライアンは何も言わずに頷くとスラリと剣を引き抜く。

「待つ……………！」

止める間もなく、ライアンの姿もまた、扉の中へと消えていった。そして訪れる静寂。

何？ この、そして誰もいなくなった状態。いや、厳密にはエイノの姿は見えているんだけど、険しい顔つきで腕を掲げ、前方を凝視したままぴくりとも動かない。

どうしようと迷ったのは一瞬だった。どう考えても、にこやかにお茶を酌み交わすというような情景が部屋の何にあるとは思えない。まずいことになっていくんじゃないか。それも、相当に。丸腰の私が踏み入ったところで、どうにかなるはずがない。

ごめん、皆！ 助けを呼んで戻ってくるから！ いや、本当に。逃げる気は毛頭ないから、今のところは。

来た道を引き返すべく、右足をひいたそのとき、部屋の中から懐かしい声が響いた。

「恵子さん」

そう、私を呼んだのは、間違いなくあの馬鹿の声だった。



9 1 賢者と呪術師 後編 (上) (後書き)

あけましておめでとございます。本年もよろしくお願いいたします。

やっぱり逃げようかな。

賢者が……私を日本へと帰す事が出来るだろう人物がそこにいると分かっていても、剣をもった大の男が幾人も消えていった部屋の中に入るのは、魔物の住処に足を踏み入れるような得たいの知れない恐ろしさがあつて、しり込みしてしまう。出来れば兵士を呼びに行き、人海戦術でどうにか賢者を捕らえてもらい、がんじがらめにふんじばつた後に対面したい。

「恵子さん。こちらにどうぞ」

お茶に誘うような軽い口調だった。

逃げたい。でも、いくら兵士を呼んできたところで、世界を渡るような力を持ったあの男にかなうのだろうか。体は金縛りにあつたように、前にも後ろにも動かなかつた。

「恵子さん？ どうかしましたか？ 恵子さん」

部屋の中からは繰り返し私を呼ぶ声が聞こえる。

どうにも決断を下すことが出来ず、足元に落としていた視線を上げたとき、ふとエイノの姿が目に入った。

真つ直ぐに前を見据えたまま微動だにしないエイノの唇がわずかに動いている。

……………エイノ

私は息をのんでエイノの横顔を食い入るように見つめた。額に大粒の汗を浮かばせるエイノの顔は歪み、その身に尋常ならざる何かが起こっているのだらう事を容易に想像させる。そんな状態にありながら

逃げよ、サカキ、逃げよ

エイノの唇は繰り返し、その言葉を刻んでいた。  
じゃあ、遠慮なく！

せつかくの善意を無駄にしては罰があたるよね。ごめん、エイノ。今までさんざん、冷血どS蜥蜴神官なんて胸中で罵っていて。エイノの犠牲は無駄にはしないから。

逃げる決意を固めた私は、エイノに向かって頭をさげると、体の向きをかえる。

「お前、何やってんだよ」

途端に背後から、呆れたような声がかげられた。

賢者の声ではない。賢者よりも馴染みのあるその声に驚き、私は振り返った

「トウーリ……………」

「トウーロ」

ああ、そうだった。間髪いれずに名を訂正した人物、トウーロは見慣れぬ意匠の黒尽くめの服に身を包み、腰に手を当てて立っていた。

「どこに行くつもりだよ。さっさと入って来いよな」

掌を上向けに、指を曲げて手招く姿に、侍女であった頃の面影はない。どちらかといえば粗野な印象を与えるこの男に、よく侍女のふりが勤まったものだ。

「わかりました」

思えば過剰な女言葉は地を隠すためだったのかもしれない。

「なんて、言うと思ってるんですか？ この天然野郎！」

右足を思いきり突き出すようにけりあげれば、密かに踵を脱いでいた靴がトゥーリ目掛けて飛んでいく。

難なく身をひねって靴をよけるトゥーリ。その背後でエイノのうめき声がした。本当にごめんなさい……………。

「おいつ、いきなり何すんだよ」

「あんたがいらん事ばかりしてくれたおかげで、私まで疑われるはめになったんです。乙女のプライバシーを侵害した罪は重いんですよ」

「はあ？ 何の話だよ」

面倒臭そうに首をかしげるその様子に苛立ちがつのる。本気で分かってないな。こいつ。

「そんなんだから27にもなって女装してもばれないようなチビなんですよ！」

「何だと！？ 俺はチビじゃねえ！ 他のやつらがでか過ぎるだけだ」

「それをチビっていうんです！」

「あのー、もうその辺で……………」

唐突に割って入った、間延びした声に、トゥーロと私は同時に飛びのくように身を引いて口を噤んだ。

いつの間に傍に来たのか、金色の長い髪を垂らした柔和な笑顔の

優男、あの日ビルの中で出会った賢者ルードヴィーグが困ったように頬をかいて立っていた。

「お久しぶりです。恵子さん。お元気そうだなにより。またお会い出来て嬉しいですよ。」

タワー口との間に割って入ったルードヴィーグは、私に向き直ると嬉しそうに頬を緩めた、

「ご無沙汰しております。ルードヴィーグさん。おかげさまで何とか生き延びていますよ」

「あはは、冗談がお上手ですねえ。さあ、部屋へどうぞ。恵さんが来て下さらないと、皆さん、ずっとあのままですから」

生成りの、一枚布の服の下から現れた腕が、立ち竦む私に向かって伸ばされる。ユハのように太くも鍛えられてもいないその腕は、しかしとてつもない力を秘めているように感じられた。逆らうのは得策ではない。私がかろう相手でないことは嫌になるほど理解させられている。差し出された手に手を重ねると、私はそろそろと歩を進めた。タワー口の前を通り過ぎると、後から彼がついてくる気配がする。

歩き始めてすぐに、扉の前にいたはずのエイノの姿がない事気がついた。どきりと心臓が音を立てる。部屋の中を見るのが恐ろしい。手を引かれているのをいいことに、私は瞼を閉じた。誰のものともつかない高い足音が耳についた。

「……………サカキ」

こつこつという靴音に紛れて、掠れた低い私を呼ぶ。

そつと目を開けた先には、壁に背を預けて肩を上下させて荒い呼

吸を繰り返すエイノ、と

「サウルさん!？」

どういう経緯でか分からないが、消耗しきったエイノの腕をとり、手首に指をあてているサウルの姿があつた。どうみても脈をとっているように見えるその光景に驚き、眼を見張つた視界の中に、剣を手にしたままマネキンのように固まって動かないライアンの姿が映りこむ。ライアンに移した視線の先には同じく一時停止ボタンを押しされたかのようなイサークと、クリフトが。茶器と茶封筒の置かれたテーブルの横にはソファに向かつて剣を横なぎにしようと構えたユハが、やはりぴたりとその動きを止めてそこにいた。あまりの静けさにてつきり昏倒でもしているものと思つていた私は、皆の無事な姿にホツと胸をなでおろしかけて考えを改める。気絶させられているよりもこちらのほうがずっと恐ろしい。

「いつつつつ!？」

呆然と皆を見回していると、賢者と繋いでいた手が静電気をあびたように軽い痛みを伴つてしびれた。弾みで離れた賢者の手と私の手の間に、角度によつて色をかえる光る壁が出現していた。これは、幾度か目にしたその壁に、すぐにぴんときて、エイノを振り返る思ったとおり、エイノはサウルを払いのけ、こちらに向かつて手をかざしていた。自身の体重を支える力も残っていないのだろう、深く壁にもたれかかり、膝の辺りは小刻みに震えている。今にも崩れ落ちそうになりながらも、エイノの目には強い光が宿っていた。

「おや、さすがは希代の實力をお持ちと噂の神官長ですねえ。けれど、もうおやめなさい。体内の力の流れを乱しましたからね。それ以上の術の使用は命にかかりますよ。何より僕にこんなものは無

意味です」

賢者がパチンと指を鳴らすと、光の壁はあっさりと霧散する。

「ご安心下さい。危害を加えるつもりはありませんから。皆さんも、術を解きますので剣を置いてください。束になってかかった所で歯がたたないのはお分かりいただけただけでしょう？」

賢者は再度指をはじいた。途端にがくと膝を折る剣士一同。悔しそうに顔を歪めながら、しかし忠告どおりに剣を置くものはいなかった。

イサークは自由を取り戻すや否や真つ直ぐに私に駆け寄り、腕をひかれ、バランスを崩して胸に倒れこんだ私を力任せに抱きあげると、背後に飛ぶようにして賢者との距離をとる。すかさずイサークの前にクリフト、ライアン、ユハの三名が割り込んだ。

「おやおや」

賢者が眉を上げて愉しそうにつぶやく。

ぼわんと光る壁がイサークと私を包み込んだ。エイノの術だ。

「やめて下さい！」

気づけば悲鳴のような叫び声が口をついていた。

「やめて！ エイノさん、術を解いてください。皆さんもお願いですから剣をおいてください。この人は私を地球からここに連れてきた人です。世界を自由に渡るすべをもつ人間なんですよ。私たちに害をなす気があれば、とっくに実行しているはずです。ひとまず抵抗をやめて、話をさせて貰えませんか？」

私を胸の中に留めようと硬く押さえ込んだイサークの腕のなかでもがきながら、私は必死に懇願した。

「お願いします」

剣を下げるのを躊躇っていた一同は、「くそっ」とごく小さな声ではき捨てたユハが剣を引くのを見て、次々に手にした剣を鞘に収めていく。

「エイノさんも、いい加減にこれを解いて下さいよ」

無駄だとわかっているはずなのに！ しつこく光り続ける壁に、胸の下あたりが痺れるような感覚に襲われる。痺れは瞬く間に臓腑をぞわぞわと侵食して、耐え難いものとなった。早く。早く解除させなければ。

「解けつて言ってるんです。分からない人ですね。死ぬ気なんですか？ 庇われて死なれる身にもなってください！ こんなことしたって無駄なんですよ！」

怒声をあげているつもりなのに、こぼれ出た声は掠れてまるで泣き声のように弱々しかった。

「エイノ・ギルデン神官長。術を解け」

頭上から聞こえた声に、顎をあげて上を向く。私をしっかりと胸に抱えながらイサークは毅然とした声で告げた。

「どうした。君命が聞けぬのか！」



雷鳴のとどろきにも似たイサークの声に、ようやく壁が消えたのを見て私は胸の中に溜まっていた焦燥を吐き出すように長く息をついた。

良かった。死ぬのは、私の目に見えないところで、私に関係のない事柄で頼む。

落ち着きを取り戻すと、今度は体勢が気にかかった。堅い胸板に頬を押し付け抱えあげられているこの格好は何とも収まりが悪い。

「あの、イサーク。降ろしてもらえますか？」

胸に手をつき頭を離してからお願いすると、イサークはあっさりと私をおろした。そのままくるりと体をいれかえて、私を背後に庇う。

えーと。抵抗は諦めたんじゃないかったのか？

よくよく見ればユハやライアン達も剣こそ収めたものの、賢者の前に立ちふさがるようにかまえていた。

「お前らな。警戒を解けて。言っても無駄なんだろうけどよ。こいつはお前らの敵じゃねえよ」

今までどこにいたのか、張り詰めた空気を引き裂くように、部屋の中を横断すると、トウーロはどかりとソファに腰掛けた。

「まあ、正義の味方みたいないいもんでもないけどな」

「え？ 僕としては十分に正義の味方のもりなんですけど……」

心外だというように口を尖らせる賢者。お前は子供か。

脱力を誘うトウーロと賢者の会話に、シルヴァンティエ人は皆一様に面食らったようだ。

集中の途切れたその隙に、私はイサークの背後から歩み出ると、ユ八達に止められぬように部屋の中を大きく迂回して、トゥーロの斜め前のソファへと腰掛けた。

賢者は信用ならないし、その底の見えない力は怖い。

「探し物はみつかりませんでしたよ」

だからこそさっさと終わらせたい。終わらせて、すっきりしたい。

「おや？ そうですか？」

トウー口の横、飲みかけのお茶が入ったカップと茶封筒の置かれた場所へと腰を下ろすと、賢者は首をかしげた。

「当たり前でしょう。探し物が何かも言わずに、城に放り出して危うく拷問にかけられるところだったかもしれないですよ」

「うっ、その件については申し開きのしようもありません。恵子さんを御呼びするため、ちょっとこちらとあちらを繋げてみたら、古傷が疼きましてねえ。あの空間を維持できなかったばかりか、着地点がずれてしまいました。いやあ、僕とすることが。恵子さんにはご迷惑をおかけしました。あ、お茶いかがですか？ やだなあ、そんなあからさまに嫌そうな顔をしなくてもいいじゃないですか。これはアイラさんが淹れてくださったものですから、細工などしたりしていませんよ。安心してお召し上がりください」

飲めるか！ 頬をひきつらせる私におかまいなしに、賢者は陶器で出来たポットから、何故か人数分用意されていた空のカップへと琥珀色の液体をそそいでいく。白い湯気がゆらゆらと昇りふわりと室内にお茶の香りが広がる。アイラがお茶を用意したのは、私たちが呼びにくる前のはずなのに、時間の経過などまるで感じさせない熱々のお茶に手をつける気など起きるはずがない。

「僕の好みはミリラ産ですが、この口ハーのお茶もなかなかいけますよ。さあ、皆さんもどうぞ」

全てのカップを茶で満たすと賢者は皆の顔を見回した。

「女性であるサカキさんお一人を僕の前に座らせる気ですか？」

凍りついたように動かない面々をみて、賢者はくすりと馬鹿にしたような笑みをもらす。さすがに沽券に関わると思ったのか、賢者の言うように私を矢面にたたせるのを良しとしなかったのか、じわりじわりと距離を詰める男性陣。

まず足を引きずるようにして歩み寄ったエイノが、倒れこむように私の隣へと腰掛けた。真っ直ぐに体を起こす力も残っていないのか、傾く体を支えていると、反対隣に誰かが腰を下ろす気配がする。エイノを肘掛に押しやって体を固定させてから振り返れば、お茶を凝視しているイサークの姿があった。

待て。今度こそ待て。それに口をつけるなよ。

警戒心より好奇心が勝るのではないかと心配したが、さすがにそこまで無鉄砲ではないらしい。イサークは気味が悪そうに眉を顰めると、視線を上げた。

イサークの斜め前方の一人がけのソファにユハが座り、ライアンとクリフトはエイノ側におかれた椅子へとそれぞれ腰をおろした。

湯気の立つ、見た目には美味しそうなお茶のおかれたテーブルを囲んで、皆が腰を落ち着けた形となる。硬い表情を見せるシルヴァンティエ陣営とは逆に賢者はへらへらと笑みを浮かべ、トゥーロはずずつと音をたててお茶をすすったかと思えば、顔を顰めて舌を出している。猫舌なのだろうか。

どう話を運べばいいのだろうか。今まで雲隠れしていた賢者が何故突然姿を現したのか。あんな物騒な脅し文句をつけてまでイサークを同席させたのはどうしてなのか。見当のけの字もついていない。切り出す言葉に困って、ちらりとエイノに視線をやるが、苦しげな呼吸には合わない迫力の眼光で賢者を睨み据えているばかりで、気づく気配がない。では反対側のイサークはといえば、何時でも対処出来るようにか、体の隅々にまで緊張を漲らせ、瞬きさえも見逃す

まいと賢者を凝視しており、やはり私の視線に気づく様子はない。

「皆さん、僕に聞きたいことだらけでしょう。さてと、どこからお話しましょうかねえ」

会話の糸口を探っていた私の耳に、のほほんとした賢者の声が届いた。腕を組んで考え込む賢者。そこは悩まなければいけないところなのか。なかなか口を開こうとしない賢者を見かねてか、エイノが肘掛から揺らぐ体を起こした。

「貴殿はルードヴィーグと名乗られたが、あの、ルードヴィーグなのか？」

「ええ恐らく、その、ルードヴィーグですよ」

ぱつと顔を上げて頷く賢者。軽く肯定してくれるが、あのルードヴィーグということは、つまり。その言葉が示す意味に誰かが唾を飲み込む音が聞こえた。

「嘘か本当か知らねえが、こいつはこう見えても千年以上は生きてるんだとよ。んで、時々この国にちよっかいを出すんだそうだけ。」

シルヴァンティエもとんだ災難だよな」

「……………トウーロ。そんな身も蓋もない言い方をしないでください」

驚愕し、或いは疑いを抱き、顔を歪める皆の顔を見回して、悪戯が成功した子供のように楽しそうな笑みを浮かべていた賢者は、トウーロを見ていじけた様に呟いた。

「しかしまあ、つまりそういう事です」

何がそういう事だ。勝手に自己完結するな！ トウーロの言葉に便乗して一言で済まそうとした賢者に室内の人間が一斉に無言の圧力をかける。

「うーん、全て説明しようと思うと長いんですよ？ 何だか面倒になってきましたねえ。ああ、はいはい。お話させていただきますから、そんな皆で睨まなくても……………」

賢者はぐるりと、テーブルを囲む面々を見回してぽりぽりと頬をかいた。本当に長いんですよ？ と諦め悪く渋りながらも賢者は語り始めた。

「あれは千と何十年前でしたか。その時代、今では数えるほどしかいなくなった聖獣は数多に存在し、一部ではありませんが、人々は今よりもずっと強い力を持っていました。聖獣と人の絆は強く、神官はユーンの声を聴くことができた。神々が実在していたのかは僕にはわかりませんが、人々の信仰は狂信的とっていいほどに厚かった。ところが今日日ユーンは猛毒の血を持ったただの獣。神々も随分とその存在意義を変えたようですね」

千年は長い。しかし人と言葉を交わせる生き物が河豚的立場に墮ちるには随分と短すぎる気がする。たった千年の間に何がユーンに起こったというのだろうか。いや、それとも人が変わったのだろうか？

「かつてこの地にゴルドベルグという国があったのをご存知ですか？」

「……………フォルセルの呪術師に滅ぼされた？」

ゴルドベルグと聞いて私は思わず問うていた。誰を見るでもなく、口の端を吊り上げる賢者。その笑みが今までのそれとはどこか違う

気がして、背筋にぞくりと寒気が走った。

「ええ、そう」

賢者が唇に笑みを浮かべたまま私に顔を向けた。

「僕が滅ぼした」

硝子玉のような青い目が見えない感情を映して私を見る。賢者の発した言葉の意味を私が捕らえるよりも速く、ユハが剣の柄に手を掛けてソファから立ち上がる。と、一步目の足をテーブルにかけて抜き放ちざまに賢者へと剣を閃かせた。吸い込まれるように賢者の首へと向かう刃。それは一瞬で、流れるような動きだった。

「ゴルドベルグです」

しかし、賢者は微笑みを浮かべたまま語り続ける。

私の目には賢者の首を捕らえていたように見えたユハの剣は、あとほんの数センチの距離でぴたりと静止していた。ぎゃああ。何をするんだこの兄ちゃんは！こんな特等席で首ちよっきんなんて見たくないぞ。成功していたら位置的に血のシャワーを被っていたじゃないか。ここは穩便に。穩便にいこうよ！

強く力を込められた、皮の手袋と剣の柄が擦れる耳障りな音と、ぎりりと歯を食いしばる音が聞こえる。

「軍人さんというのは古今東西、手が早いものですな。人の話は最後まで聞くものですよ」

困ったように眉を寄せる賢者の声はひどく楽しげだった。

トウーロが同情するような視線を、動きを止めたままのユハに向

ける。

「こいつをどうしようしよなんて考えは捨てるよ。そんな事が出来たら俺がとっくに殺っちまってるよ」

「仲間ではないのか？」

物騒なトゥーロの言いようにイサークが首をひねる。

私は手下その1だと思っていました。

「仲間ですよ」

「違う。借りを返す為に手を貸しているだけだ」

二人の見解には大きな相違があるらしい。天然對自己中、どっちもどっちそつな気がするけれど。

「借り？」

「お前らには関係のない話だけだよ。ちょっとばかり世話をやいてもらったんだよ、黒……………」

「トゥーロ」

トゥーロの言葉を遮るようにして賢者が名を呼ぶ。

「貴方が口を挟むと、どうも話が脱線するような気がするのですが……………」

「わーるかったな。もう何も言わねえよ」

眉を上げてちらりと賢者を見ると、この場の話しなどどうでもいというようにトゥーロはまたお茶を冷ます行為に没頭し始めた。

「さて、ユハ・サリオラさん。無理やり体を縛られるのは辛いでしょうつ？ 僕にはここにいる皆さんを害する気など毛頭ありません。



どうか最後まで話を聞いてくださいませんか？」

そう言うと賢者はゆっくりと瞬きをした。それがユハをしぼるものの解除の合図だったかのように、ふっとユハの体の強張りが解ける。かと思えば、ユハが手にしていた剣は後退することなく賢者へと向かって押し出された。

ぎいいん。耳を塞ぎたくなる様な音が木霊する。

ふうふうとお茶に息を吹きかけていたはずのトゥーロが、逆手にもった短剣でユハの剣を受け止めていた。首の真前で交差される剣を見ても賢者は顔色一つ変えず、にこにこ笑みを浮かべて二人を見ている。

今のは力んだ体を制御出来ずに術を解かれた弾みでなったのか、それともわざとなのか……。

ぎろりと獯猛な獣のような視線をトゥーロに向けると、ユハは小さく息を吐いて、剣を引く。あ、わざとですね。意外と気が短い。

「えーと、どこまでお話ししましたっけ？」

剣を抜いた二人が、刃を鞘に収めて腰を下ろすのを待ってから賢者は口を開く。

「僕がゴルドベルグを滅ぼしたってところまでですね」

昨日の夕食の献立を話すような気軽な口調だった。

「ゴルドベルグの王族は国の瓦解と共に死に絶えたと言われましたが、実は王女が一人、生き残りまして」

「ちよつと待って下さい！」

さらりと次の話題に移ろうとする賢者に、たまらず私は声を上げ

ていた。

「ゴルドベルグを滅ぼしたのは

」

フォルセルの呪術師ではなかったのか？ この緩い笑みを浮かべる男は、千年もの時を生きているという男は、一体何だというんだ……。

最後まで言葉に出来なかった私を、賢者は小首を傾げて見つめてから、「ああ、そうそう」と呟いた。

「自己紹介が未だでしたね。僕の名は  
フォルセル」

ルードヴィーグ・

空気が凍りついた気がした。

低い驚きの声はエイノのものだろうか。ユハが息を吐く音が聞こえる。視界の隅に移るイサークは手で顔を覆っていた。

「奇跡の技で人々を助けた賢者ルードヴィーグであり、数々の悪行をもってゴルドベルグを滅ぼしたフォルセルの呪術師でもあります」

同一人物。

啞然とする意外にどうリアクションが取れるだろう。

フォルセルの呪術師はユーンの血を飲んだのではなかったのか。

あの洞窟に刻まれた名前の意味は何だったんだ……。

「長く生きていると色々な事件に遭遇するもので、適当に名乗っていたらいつの間にか、ルードヴィーグとフォルセルの名が独りで別れて歩き出しちゃいました。訂正するのも面倒なので放っておいたら、各地で色んな逸話がつきまして、各々それはそれは面白い伝説めいた話が出来上がっていったのですよ。まあどこまでが真実で、

どこからが出鱈目かはご想像にお任せします」

訂正しろ。むしろ名乗るな。私をこの地に飛ばしたのが目の前のこの男なら、この地に飛ばされた私がロリ服に身を包まなければならなくなつたのもこの男のせいだったのか。今、この腰に剣がさがつていて、ユハのように腕に覚えがあれば、無駄だとわかつていても切りかからずにはおれなかつたかもしれない。無力ばんざい。丸腰でよかった。私は全身から力を奪われるような疲れを感じて、背もたれに体を預けた。

「しかしサカキさんは、お気づきとばかり思っていましたよ」  
「え？」

いつ気づけと？ 不思議そうな顔で私を見ると賢者はテーブルに置かれた茶封筒を手を取った。

「ほら、ここに」

持ち上げられた茶封筒の裏には、滲みのないインクで文字が印刷されている。懐かしい日本の香りがした。この悪夢のような日々が始まりのあの日、希望と不安を胸に幾度も確認した住所と社名の記された封筒を賢者は私に手渡す。

(株)FOR。そう、あのドアさえ叩かなければ、私は今頃、就職できて……いたということにしておこう。それなのに、FOR社の門をくぐつたばかりに……。肩を落として過去を思い返していると、賢者がひょいっと封筒を取り上げる。

「まだ、お気づきになりませんか？」

どこから取り出したのか、手に持ったボールペンを、さらさらと

封筒に走らせる賢者。

(株)FOR……………SELL、と。

(株)FORSELL、カブシキガイシャエフオーアールエス  
エスイーエルエル、(株)フォルセル

気づくか！！

「いやあ、社名が長いと宛名書きが大変でしょう？ 領収書をもらうにも説明が面倒ですし」

殺れ。ユハ！ 誰が止めようと私が許可する！

与えられたヒントに気づかなかった自分にも腹が立つが、やはり賢者に怒りが向く。古傷が何だ！ 傷が開こうが血がにじもうが腸が飛び出そうが、説明ぐらい耐えてしろ！

憤る私にこやかな視線を向けていた賢者はその視線を隣へと移す。

「話を戻しますが、ゴルドベルグの生き残りの姫は、国の崩壊後とある術師と子をもつけました。その子孫が、シルヴァンティエの王族。つまりイサーク殿下、貴方です」

いきなり名を上げられてイサークは怪訝な表情を見せた。

「で？」

いきなり遙か昔に存在していたゴルドベルグ王族の子孫だと言われても、だからどうしたとしか言えないだろう。ゴルドベルグを滅ぼしたのがこの賢者にして呪術師たるルードヴィーグ・フォルセルだとしても、よくも祖先の国を滅ぼしたな！ と憤るにしては時が経ちすぎている。単に後から創られた寓話なのかもしれないのだとしたら尚更だ。

「ゴルドベルグの末姫は、王族の中でも強い力をお持ちでした。そして、子の父親の術師も奇妙な血と力の持ち主でしてねえ。子孫は代々特殊な力を有したのです。それも時代の流れとともに薄まりつつありましたが……近年このシルヴァンティエ王族の間では近親婚が続いていますね？」

「……………ああ」

「その結果血は濃くなり、失われつつあった力が蘇りました。殿下は特に先祖がえりと言っても過言ではないほどの力を有していらっしやる。自分では制御できぬほどの」

イサークは無言だった。ただ食い入るように賢者の姿を見つめている。

「このまま近親婚が続けばどうなるか、僕にもはつきりとは分かりません。しかし、近いうちに力を暴走させシルヴァンティエを、いや、ノルティアを壊滅へと導く人間が産まれるのではないかと危惧しているのです」

大陸の危機という途轍もない話にしんと静まり返る室内。そんな危険な血が流れていると言われたイサークの心情はいかばかりだろうか。

「そこで」

暗い雰囲気を一掃するように賢者は満面の笑みを浮かべた。

「僕が用意した花嫁がこのケイコさんです！」

は!?

今度こそ室内の空気は間違いなく凍りついた。花嫁って……………誰

が？ 誰の？

「いかがですか？ 彼女ならゴールドベルグの血はおるか、シルヴァンテイエの血も一滴も流れておりませんし、術師としての力も皆無！ 安心して子作りに励めますよ。殿下」

ぴきんと音がしそうな勢いで急速冷凍されていたイサークの頬が見る間に熱を持つ。

「あ？ ええ？ こ、子作り？ いや そんなことは、まず本人の意思があつてだな」「おや、彼女はお気に召しませんでしたか？」「いや！ そんなことはない！」「では、お気に召しました？」「え、そのまあ」「なら、問題ありませんね」「あるだろうが！ いやっ、俺はないが、いやないこともないが」「周囲の声を心配されているのですか？ その辺りは次期国王としても辣腕の見せ所というものでしょう」「それはっ、そうかもしれんが」

「ちよつと、トゥーロ。この馬鹿は何をふざけた事を言ってるんですか？ まさか本気じゃないですよね？」

真つ赤な顔で首を振り手を振り狼狽するイサークと、縁談を持ち込むお節介なおばちゃんと化した賢者を横目に、私は声を潜めてトゥーロに話しかけた。ようやく温くなったらしいお茶を口に含むとトゥーロは上目遣いに私を見る。

「残念ながら本気だ。目をつけられたのが運のつきと思って諦めるこつたな。同情するぜ」

トゥーロが街で私をさらいイサークに向かって投げたのも、私がレーヴィに好意を寄せていると吹き込んだのも、鍵を開けて手引き

したのも、この理由の為だったのだろうか……。

「日本に帰る方法知りませんか？ ほら、狭間に導けとか言って消えましたよね。あんな感じでこっそり帰れないんでしょうか？」

「ああ、ありゃあ、こいつの力を借りたんだよ。俺にや無理だ」  
「そう、僕以外には無理ですよ」

どうやらイサークを言い負かしてしまったらしい賢者がひよこりと会話に割り込んだ。

「誰もが羨む超のつく玉の輿じゃありませんか。何がご不満なんですか」

「不満も何も、おかしい事だらけでしょう！ 血を薄めるためなら、ノルティアの最果てにある国からでもお姫様を娶れば済む事じゃないですか。何だって態々別世界から連れてくる必要があるんですか。おかげで変態ストーリーカー術はかけられるわ、命を落としかけるわ、散々な目にあっただですよ！」

「そこは、僕なりにフォローしたつもりなんですが……。傷の為に体を動かすことも、トウーロと連絡を取る事も出来ませんでした。サカキさんに万一の事がないようにちゃんと見守っていたんですよ？」

動けないのにどうやって。

「ほら、あの鳥の目を借りて」

そう言って窓の外に向けられた賢者の指の先には、一羽の鳥の姿があった。美しい金の羽には見覚えがある。餌をあげようとしては逃げられた鳥だ。そういえば時々鳥の鳴き声を耳にしていた。

「解毒をしたのも僕です。あの時は僕も少々慌てましたよ。無理に毒を抜いたものですから、おかげでようやく塞ぎ掛けていた傷がまた開いてしまいましたねえ」

いや、それなら毒を飲まされる前に何とかしてくれたらいいじゃないか。夜だったから鳥目で見えなかった。とか言うんじゃないだろうな。

「まさかあのように毒を飲ませるとは」

見ていたのか！ 見ていたんだな！？ 消せ！ 脳内から今すぐあの時の記憶を消してくれ！

「血を薄めるためでしたら、丁度よい相手があります。ツイメンよ縁談がきておりますのでそちらを進めてはいかがですか。それともツイメンの姫では何か問題が？」

賢者が名乗りを上げて以来、横で何やら呻いていたエイノが珍しく良い事を言う。そうだ、もっと言ってみてやれ。

「文化も風習も全く異なるサカキのような無作法な人間に、王太子の妃が務まるとは思えませぬ。」

……………言い過ぎだ。しかも何だって態度が改まってるんだ。

「あー、そこはそれ、こちらにも色々都合があります」

「何ですか？ 都合って」

「え、言わなきゃ駄目ですか？」

ライアンやクリフトを含めたタワー口以外全員に鋭い目を向けら



れ、賢者ははあとため息をついた。

「以前にサカキさんにはお話ししましたが、この世界やサカキさんがいた世界だけではなく、数多の世界が平行して存在しています。一体どれだけの世界があるのか僕にも想像が付きませんが。それぞれの世界は他の世界とはある程度の距離を保っていますが、これは均等ではありません。これをこの世界、便宜上ノルティアと呼びますが、ノルティアの道筋だとします」

賢者はカップの中に指をいれると、テーブルの上に一本の線をひいた。

「そしてこれがサカキさんのいた世界　こちらは地球と呼びましょうか」

再び指をぬらすと、5センチ程の幅をあけてもう一本線をひく。

「そしてこれが、第3の世界」

そう言うと、今度はノルティアの横、地球の反対側にさらに線を描いた。ノルティアを真ん中に3本の線が引かれたかたちとなる。地球とノルティアとの間には5センチ程の距離しかない、しかしノルティアと第3の世界は10センチ以上離れていた。

「ご覧のとおり、ノルティアと地球の距離は他の世界よりも離れていません。そのせいかこの二つの世界は大変似通っているのです。生物の姿形、繁殖の方法、その他諸々、まあ多少の差異はありますが、こちらの第3の世界に比べると、ノルティアと地球の形態はほぼ同じといっても差し支えないほどのです。両者は近いところでありながらも一定の距離を保ち存在していました。ところが、今

からおよそ千年前、ノルティアが軌道を変え地球に向かって接近します」

賢者は茶を付け足すとノルティアの線を地球へと向かって書き足す。

「最接近したのが1000年程前の事でした。このまま二つの世界が交わって滅ぶのではないかと、あの時は本当にひやひやしましたよ。しかし、そうはならなかった。世界はそう脆いものではなかったのです。地球へと向かっていたノルティアは弾かれるように角度を変えます」

ノルティアの線はあとほんの僅かの距離を残して、反対方向へと伸ばされる。

「こうして、ノルティアと地球の危機は去ったかと思われたのですが、どうもこの角度がおかしいのです」

角度？ 賢者の言葉によくよく引かれた線を見れば、地球へと緩やかに向かったノルティアは方角を変えた途端、急角度で第3の世界へと向かっていた。

「近づきすぎたせいか、今度は大急ぎで離れようとしているようなのです。いわば自浄作用のような効果でも働いたのでしょうかね。このままではノルティアは、今度は第3の世界に急接近してしまいます」

「別にいいんじゃないですか？ 地球とノルティアがそうだったように、また弾かれてこう、ジグザグに線を描くんじゃないですか？」  
「良くないのですよ！」

二つの世界の間を幾度も折れるように指を這わせて見せると、賢者は途端に声を荒げた。驚いて顔を上げてみれば、賢者は青い顔で遠くを見つめていた。

「いいですか。ノルティアと地球は近い距離にあるからこそ似ていました。この千年で距離が縮まった事により、さらに似通うことになります。いえ、正確には本来の軌道を外れたノルティアが地球のありように惹かれた。術者は力の多くを失い。ユーンは言葉を失いました」

ああ、聖獣と神官が言葉を交わせなくなったのは、そのせいだったのか。通りで千年は短すぎると思った。「ちなみに」と賢者は言葉を続ける。

「殿下の力が危険なものになりつつあるのもこの為です。千年前のノルティア人ならば制御可能なものであったはず。しかし今の人の身体には余る力となってしまったのですよ」

なら地球から適度に離れることが出来ればイサークは力の制御に頭を悩ませることも血を薄める必要もなくなるのだろうか。

「とまあ、このように、ノルティアは近づいた世界に大きな影響をうけてしまうのですが、このままノルティアが第3の世界に近づけば、今度は第3の世界に惹かれてしまう。今はまだ距離があるせいで僕にもぼんやりとしか見えませんが、第3の世界はそれは恐ろしいところなのです」

そう言う賢者の顔は恐怖に歪んでいた。賢者がこんな表情を見せるなんて、第3の世界はどんなところだというのだろう。

「人はその姿を変え、二足歩行の巨大ウサギが斧を持って徘徊していたり、ケンタウロスのような化け物が実在しているのですよ！  
このままではノルティアの人々も……」

獣化？ するのか？ まあ、いいんじゃないの。地球には関係なさそうだし。ファンタジーに磨きがかかるんじゃないのか。

「恵子さん、貴女今、自分には関係ないし別にいいじゃないかと思いましたね？ 想像してみてください。ウサギ耳の生えたエイノさんや、下半身が馬のユ八さんを！」

それは!!!

「猛烈に嫌です」

嫌なのに、嫌なのに、ついちらっと想像してしまったじゃないか！ 思わずエイノを見て吹き出ししそうになるのをぐっと腹に力を込めてこらえた。

「……………サカキ」

いや、こらえたんだからそんなに睨まないでよ。

「話が大きすぎて想像がつかんのだが、賢者のその話が正しかったとして、それが、サカキを俺の妃に推す理由と結びつかんのだが？  
そもそもなぜ千年前にノルティアの軌道が逸れたんだ」

悩むのも馬鹿らしくなるような桁外れな話に、緊張が解けてきたのか、イサークは膝の上で指を組むと、些かではあるがインチキ臭いものを見るような目つきで賢者を見た。

「うーん、それはですねえ……………」

そうだ、今の説明では理由が分かるどころか益々分けがわからなくなるばかりだ。皆が疑問に思っていることだろう。しかし賢者の歯切れは悪い。

「お前な、さつさと全部話しちまえよ。いつまで付き合わせんだよ。いい加減バジエに戻してくれねえか」  
「バジエ？」

かったるそうに頬杖をついたタワーロの言葉にユハがぴくりと眉をあげた。

「そうか、その服。どこかで目にしたことがあると思ったが、バジエドールの黒騎隊か。これはどういうことだ。なぜバジエの人間がここにいる」

「タワーロ……………黙っていると聞いたではありませんか。また話がどこかに行きそうですよ……………」

「あー、悪い。俺は確かに黒騎隊の人間だ。だがこいつに関しては個人的な事情で動いている。国はこいつの存在すら知らねえよ」

敵意がないと示すためか、タワーロは両手をあげてひらひらと振ってみせる。

「黒騎隊といえば鬼神直属の騎士隊らしいじゃないか。その言葉を信じろというのか？」

「こいつに身動き取れなくなるような深手を負わせたのが、その黒鬼だとしてもか？」

黒鬼つてのは確か、百戦錬磨のバジエドールの騎士だったか。眉唾だと思っていたけれど、べらぼうに強いというのは本当だったんだな。ユ八達をまるで赤子を相手にするようにあしらう賢者に傷を負わせる事が出来るとは。ツイメン王の懸念はただの杞憂ではなかったのかもしれない。

「トウーロ、彼の名を出さないで下さい。ああ、また傷が………」  
「自業自得だ、阿呆」

よよよと、胸に手をあてる賢者にトウーロは冷たく言い放つ。

「今回のことにバジエも黒鬼も関係ねえ。俺達だって好き好んで戦をするわけじゃねえんだ。一昔前は武勲を立てて食い扶持を稼がなきゃいけないかったが、バジエも今はそれなりに豊かになった。平素でも十分に食っていける録は貰っている。黒鬼も俺も平民出の所詮は下っ端だ。真っ先に前線に送られるのが分かかっていて戦を望むと思うか？」

「南に北の干渉をさせる気は僕としてもありません。それに武器を持ってドレシャール山脈を越えるのは山に住まう者達が許さないでしょう。もつともこの千年で彼らの力もめつきり弱まりました。鬼神がその気になれば山脈越えも可能かもしれませんがね。その気にならぬように彼には首輪をつけてあるのですよ」

首輪、の一言に肩を揺らして反応したトウーロが横目で賢者を睨んで忌々しげに舌打ちをする。

「分かったろ。賢者はどつちかってえとシルヴァンティエ側の人間だ。黒鬼の敵になることはあっても、お前らの敵にはならねえんじやねえの。ほら、さっさと話を進めろよ」

「はいはい」

脱線の原因になったトウーロに小突かれて不服なのは分かるが、頬を膨らませるのはやめろ。

「千年前、とある男が地球からノルティアへと渡りました。なぜ男が地球からノルティアへと渡ることが出来たのか、原因は分かりません。やがて男はノルティアの女との間に子を為します。それがこの世界の未来を歪めるとも知らずにね。ノルティアの軌道が逸れたのは男と、その子孫達の血のせいなのです。彼らの血が地球と引き合いノルティアの軌道を歪ませました」

ふつと軽いため息をついた賢者はカップへと手をのばす。

「男の血を引く者を消してまわろうかとも思いましたよ。けれど僕には出来ませんでした。何の罪もない彼らを殺せなかった」

静かな声で言うと、賢者は掌を暖めるように両手で包み込むように持つ。揺れるカップの表面を見つめて再び口を開いた。

「なんて感傷に浸るような人間ではありませんので、少々迷いはしましたが実行に移そうとしたのですけどね。僕が彼らの血に原因があると気づいた時には、もうノルティアは再び軌道を変えた後だったのですよ。そうなると今度は彼らはノルティアを地球へ引き寄せる貴重な存在になるわけです。いやあ、早まらなくて本当に良かったです」

こいつ、人類の為に早めに抹殺しといたほうがいいんじゃないのか？

カップに口をつける賢者を誰もが頬を引きつらせてみていた。………とここでそのお茶、さっき指をつけていたよな。……

「ですが、ノルティアが反発する力は強く、今いる混血達の血だけでは到底不足しています。そこで僕は考えました。地球から新たに人を連れてきて子をなしてもらおうと」

「それじゃあ、探し物つていったい何だったんですか」

「はい。僕が探してほしかったモノは、恵子さんが生きる場所。そしてそれを与えてくれる者。子をなす者です」

誰か剣を貸してくれないかな？

「僕としては、それが殿下であつてほしいと思ひまして。だってほら、一石二鳥じゃないですか。殿下の身に流れる血と力を薄め、かつノルティアの危機脱出のためにもなりますから。異界渡りが出来る人間はね、実はそう多くないのですよ。大抵の人間は体が精神、又はその両方に異常をきたします。数少ない異界渡りに耐えうる体質の人間の中から、殿下の好みにあつてであろう女性を選んでこの国に連れてきたのですよ」

もう鈍器でもいいんだけど。ない？

「せめて見た目に違和感のない人種の人間を連れてこようと思ひなかつたんですか。どうみても私はこの国で浮いてるじゃないですか」  
「僕も当初は見た目に類似点の多いコーカソイドを連れてこようと思ひました。ところが水が合いすぎるのか極端に長命になる傾向が見られたのです。これではノルティアの民にとけて暮らしていきません。まあ、その話は置いておいて本題に戻りましょう。先ほど恵子さんは、探しものは見つからなかつたとおっしゃいましたが、僕の目にはそうは見えませんかよ」

つぶつぶと不気味な笑い声をもらす賢者に、とうとう我慢の限界



をむかえる。

「トウーロ、黒鬼さんと連絡をとりたいんですけど」

自分でも驚くほどの地獄の底から響くような低い声が出た。

「は？　なんでだ？」

「今すぐにも止めを刺してもらえるようにお願いするんですよ！」

鼻息も荒く捲くし立てる私に、トウーロはどろどろと手をあげる。

「あー、まあ、気持ちは分かるが、落ち着け」

「……………サカキ。ひとまず耐えよ」

袖を引くエイノの声も常のそれより数段低い。

「そうお怒りにならないで下さい。僕も人の心は操れませんし、気に食わぬ相手と添わせて心を壊されてはノルティアにお連れした労力も無駄になりますから、無理強いはしません。そうだ。殿下がお嫌なら、そこのお二人などがです？　剣技に秀でた逞しい男性に、美しく地位も権力もある男。乙女の夢ではありませんか。どうです？　選び放題ですよ？　不景気真つ盛りの日本よりもこのシルヴァンティエの方が余程住み心地がいいとは思いませんか。それでも、もしも、どうしても恵子さんが、地球に戻りたいとおっしゃるなら」

「帰してもらえますか？」

「もちろんです」

賢者は微笑を浮かべて頷いた。

「ですが、今一度お考え下さい。日本に帰ったところで、職もなく明日をも知れぬ」

「帰ります」

「いえ、ですからもう一度よく考えてですね」

「か・え・り・ま・す」

「ですが、職もないのですよ？ どうやって生きていくおつもりですか」

しつこく食い下がる賢者に堪忍袋の緒が切れた。私は勢いよくソファから立ち上がると賢者に指をつきつける。

「うるさいわ、このすつとこどっこい。帰るったら帰る！ こちとら年老いた両親を残してほしいほい蒸発できるほど薄情な娘じゃないんですよ！」

「えー、その辺は僕が責任をもって対処いたします。アフターフォロームも万全ですよ」

「黙れ、ひよつとこ。殿下の嫁だあ？ 殿下何歳なのよ！ まだ思

春期真っ盛りの子供でしょうが。年の差を考えろつての」

「たかだか10歳程度の差でくだくだ言うような狭量な人間ならば僕が一発殴つても更正させますよ。それに殿下はあなたにぞっこんではありませんか。10歳ぐらいどうつてことありませんよ」

「どうつてことないわけないでしょう！ 今だけ見て判断しないでください！ 10年後にどうなつていいると思つんですか。イサークが26歳の凛々しい青年時に、こっちは鏡と睨めっこして滲みや小皺と戦う日々を送つてるんですよ。20年後はもっとひどい。イサークは正に男盛りの36歳。対して私は白髪を染めるのに躍起になつている腹のたおばちゃんです。30年後はどうです。46歳。

男として自信がつき油のりまくる時期ですよ。渋い良い男になつたイサークが、閉経して更年期障害に苦しむ私を相手にすると思えますか？」

黙っていようと思っただけで、日本に帰れるならもういいや。イサークにもきつちりと現実を把握してもらおう。それに私が25歳だとわかれば熱も冷めよう。

「では、ユ八さんは？」

「嫌ですよ。こんな来るもの拒まぬ異性はいはい。病気でもうつされたらどうしてくれるんですか」

「で、ではですね、エイノさんは？」

「覗き魔と？ 冗談じゃない、いつ変態魔法をかけられるかと思うとおちおち背中も向けられませんよ。それに自分より数段見た目の良い男と毎日顔を突き合せたいと思うほど酔狂じゃありませんから産まれた子供が私似だったら、絶対陰口たたかれますよ！ かわいそうに、母親に似ちゃったのねって。ちよつとユ八さん

ソファを叩きながら笑いをこらえるのやめてもらえませんか」

「すまない。まさか殿下をふるのに閉経まで持ち出すとは思わなくてね。さすがに殿下が不憫になるよ……くっ」

苦しそうに身を擦ったユ八は耐え切れぬというようにとつとつ腹を抱えて笑い出す。不敬罪だ。

「さあ、分かったらとつと帰してください」

「どうしてもですか？」

「どうしてもです」

なみだ目で懇願する賢者をばさりと切り捨てた。つもりだった……。

「はあ、仕方ありませんねえ。分かりました。では半年後にお迎えにあがります」

「は？　はん、とじ？」

やれやれと頂垂れる賢者の放った強烈なカウンターに頭から血の気がひいていく。

「はい。半年後です。頻繁な異界渡りはそれこそ心身に異常をきたしますので、いくら体質が合うといっても限度がありますからねえ。恵子さんの場合は最低でもあと半年は間をあげなくては」

つまり、半年間私は……。両サイドからかかる冷たい圧力に冷たい汗が背筋をすべち落ちた。

「それでは恵子さん。半年後までお健やかに。次にお会いする時までに気が変わられていることを祈ってますよ。皆さん頑張ってますね。皆さんの心を射止めてください。ああ、そうだ。アパートの家賃やその他諸々は立て替えてありますから。その封筒にあちらでの恵子さんの現状を記した資料を入れておきました。殿下、サウルさんには恩赦をお願いしますよ。事情をお話してゴールドベルグの医療書と引き換えに協力してもらったからです。さあ、いきましょるか、トゥーロ」

「まあ、そのなんだ。頑張れよ。ああ、ベランダに干しっぱなしだった服は取り入れといてやったからな。そっぴやお前、下着は室内に干せよな。無用心すぎんぞ」

「は？　ちよつと待っ……………」

白い霧に包まれて、にこやかに手を振る賢者と哀れみの視線を私に向けたトゥーロが霞んでいく。

冗談でしょおおおおおう！　私も連れて行け！　しかもまた最後に余計な戯言を吐いていきやがって！

逃げるように姿を消した二人がいた空間を見つめて、私は呆然と

立ち尽くしていた。どうすんのこれ。どうすりゃいいの、これから。

「思春期真っ盛りの子供で悪かったな　そのように見られていたとは心外だ」

振り向くのが恐ろしい。イサークはどんな顔をしているのだろう。

「てつきり17、8とばかり思っていたが26とはね」  
「25です！」

女の一歳は大きいんだ。間違えるな。ユハの言葉に明後日の方角を見つめたまま訂正をいれた。

「そう二つ下か。まだ小娘だと手心を加えたが無用だったようだね。せつかく汚れ役を買って来たというのに惜しいことをした。もう少し役得を味わっておくんだったよ」

どこに！？　どこに手心があったというんですか。

「随分とさばをよんだものだ。よくも今の今まで騙してくれた。無論償いはしてもらえるのであろうな」

エイノの掠れて色気を増した声でそんな台詞を吐かれると、身体を要求されているような気になるが、そうじゃないんだらうなあ。

「解読が必要な文書を部屋に運び入れておく。期日を記すので遅れるな」

誰かいつそ一思いに私を殺してくれ……。助けを求めるべくライアンに懇願の視線を送る。しかしライアン

は静かに首を振った。

諦めなさい。とじじいじじい。

## 94 エピローグ

月明かりを遮る影に気づいて、私は解読途中の書物を置くと、煌々ときらめくこぶし大の玉に光を遮断するおわん形のカバーを被せた。

椅子から立ち上がり背後を振り返る。明るい光に慣れた目にそれは闇の中にわだかまる黒い塊となって映った。しかし静かな息遣いと微かな衣擦れの音が来訪者の存在を告げている。薄い銀色の光を背に、男はすべる様な足取りで近づいた。男が歩を進める度にこつりと固いものが床を叩く音がする。

「こんばんは。恵子さん」

「随分と早いお迎えですね。まだ心変わりなどしていませんよ」

ようやく闇に慣れてきた目が男の姿をぼんやりと捉えた。喪服のように真っ黒な一枚布を纏い、挟れた杖を携えた賢者ルドヴィグは小さく笑みを浮かべる。

「残念ながらお迎えにあがったものではありません。少し年寄りの昔話につきあっていただけないかと思ひましてね」

「嫌です。って言っても強制的に付き合わされるんですよ」

「さすが恵子さん、よくおわかりですね」

笑みを深めた賢者が、ふと耳をそばだてる素振りをみせる。

「邪魔が入っては興がさめます。少し場所をかえまじょうか。さあ、お手をどうぞ」

差し出された手にそっと指をのせると賢者は柔らかくそれを包み

込んだ。

と、途端にふわりとした浮遊感が身を包む。胃を押し上げられるような感触に気分が悪さを覚えたのは一瞬のことだった。

足の下にあつた石造りの床は毛足の長い下草に変わり、目に入る光景はエイノの屋敷にある見慣れた自室から見覚えのある森に囲まれた湖へと変わる。

月を写しこんだ湖を正面に、右手には切り立った崖が聳え立っている。岸壁に穿たれた穴は月光の侵入を拒みばかりと黒い口をあけていた。

#### 聖域

懐かしい景色に思わず首を廻らした。そういえば、ミーツェは元気にしているだろうか。そろそろ国に着いただろうか。美しい蜂蜜色の巻き髪を思い浮かべていた私に「こちらに」と声をかけると、賢者は下草を踏みしめて湖へと歩き出した。葉についた夜露が衣を濡らしていく。

「千年前、僕は乗っていた船の上から海へと投げ出されました。気づくと全身濡れ鼠で見たこともない木々が生い茂った森の中を流れる川の側に倒れていたのです」

真つ直ぐに前を見詰めたまま、後に続く私に賢者は語りかける。

「数日間は辺りを散策し魚や木の実を食べて過ごしました。4、5日程たったある日、一人の若い娘に出会います。近くに小さな村がありましたね。娘はその村民だったのですよ。突然現れた僕を村人は随分いぶかしみましてね。苦労しましたよ。何せさっぱり言葉が通じないのですから。けれど若い男というのが幸いしたのですよ。僕に害意がない事が分かれると村人達は貴重な働き手として歓迎してくれました。戸惑いばかりの生活にもやがて慣れて、僕を見つけてくれた娘を娶りもしました。幸せでしたよ。息子にも恵まれ



ましてね。いつしか故郷を懐かしむこともなくなっていました。妻と共に歳をとり、孫に囲まれてこの地で死ぬのだと、それも悪くないと、そう思っていました。けれどそんな穏やかな生活は長くは続きませんでした。村に悪い病が流行り、まだ7歳だった息子はあっけなくこの世を去りました。それから僕の地獄が始まったのです」

大きな岩が二つ、並び立つその前まで来ると、ルードヴィーグはゆっくりと振り返る。

「驚かないのですね」

「白人種は水が合いすぎて長命になると聞いた時に。なんとなくですが……」

千年前、地球から渡って来た男によって始まったノルティアの異常。千年の時を生きているという賢者。共通する時間の単位に引っかけかりを覚えているのは私だけではなかっただろう。そしてもうひとつ、千年前に起こった出来事があったはず。

「その分だと、ゴルドベルグの末の姫が子をなした相手が僕だという事も気づかれていますのでしょう」

私は頷く代わりにそつと目を伏せた。生き残りの姫との間に子をなしたという奇妙な血と力を持った術師。賢者が地球からやって来た人間だと思えば自然と答えに導かれる。イサークはこの男の子孫なのだ。賢者がバジエドールが北に干渉するのをよしとしないのは、北側に賢者の血を引くものがいたから。彼らがいなくなればノルティアの変異は加速することになる。

100年前にノルティアが軌道を変えていなければ賢者は自らの血を引くシルヴァンティエの王族を殺していたのだろうか……。

「この岩、何に見えますか？」

起きていたかもしれないこの国の暗い結末に沈み込んでいた私は、唐突に投げかけられた言葉に眉を潜めて顔をあげた。傍らに立つ賢者の横顔に視線を向けたとき、それまでうつすらとその姿を照らしていた月の明かりが消える。雲が月を隠してしまったのだろう。小さな星の煌きだけでは賢者がどんな顔で目の前の岩に目を向けているのか知る事はできなかった。

湖のほとりに立つ二つの岩。四角く削られたそれは明らかに人工物で、この森のあちらこちらにある遺跡の一つに見えなくもない。けど、この岩を初めて目にしたとき、確かこう思ったはずだ。

「お墓のように見えます」

「やはりわかっていただけましたか」

そう零した賢者の声は僅かに震えを帯びているように聞こえた。

「ノルティアにはね、墓の概念がないのですよ。多くの国では死者は灰にされ川や海に流されます。中には農地に撒いて糧とするという珍しい地域もありましてねえ。墓を建立し死者を弔い懐かしむ風習がない。ですから今までこの下に人が眠っていると気づくものなごいませんでした」

誰が眠っているのか、一つは想像がつく。

「ゴルドベルグの姫がここに？」

右手に立つ墓を示して賢者は頷く。

「ええ、こちらがゴルドベルグの末の姫イリス様の墓」

「そして」と賢者は左手の墓を示した。

「こちらが賢者ルードヴィーグ・フォルセルの墓です」

風が吹いた。ざわざわと音をたてて葉が揺れ、二つの岩を月明かりが照らし出す。

見上げた賢者の顔には不思議なほど穏やかな笑みが浮かんでいた。

「楔の窟の奥に刻まれた名はご覧になりましたか？」

「……………ラーティノヤ・ノルタ トル フォルセル。と」

「ラーティノヤ・ノルタ トル フォルセル ユーンの血により処刑された大罪人フォルセルの呪術師。それこそが僕です」

理解が追いつかない。生前に墓を作ってみたら思いのほか長生きしてしまった、というわけではないのだろうか……………。この男は賢者ではなかったと、そういうことなのだろうか。

「賢者ルードヴィーグ・フォルセルと僕は別人です。フォルセルの呪術師とは賢者ルードヴィーグ子飼いの術師という意味の僕の俗称でした」

奇跡の技をもって人々を助けたという賢者と、数々の悪行をもってゴルドベルグを滅亡へとおいやったフォルセルの呪術師。一度は同一人物と思われた二つの名がまた分かれた。

墓を見つめていた目を一度閉じてから、賢者は首を傾けて私を見る。と、すうと息を吸い込んだ。

「我は此処に警告する。歴史の闇に身を潜める魔物あり。ゴルドベルグ暦496年。魔物は白髪の賢者ルードヴィーグ・フォルセルの

従者として姿を現した。幾年の年月を経てその容姿衰える事なく、人ならざる強大な力をふるい、神をも恐れぬ悪鬼の如き所行の末に繁栄の極みに在った我が祖国、ゴルドベルグを滅亡へと追いやった」

浪々と歌うように紡がれた一節に目を見張る。それは、エイノが持っていた古文書に書かれていた文ではないのか。

「ルードヴィーグや、僕について残っている伝記には嘘八百が書かれている事も多いのですが、あの書はなかなか正確でしたよ。書き手はおそらくゴルドベルグの神官職にでもあつたのでしょうか」

そこは、嘘であつてほしかった。「あんな書が残つていたとは知りませんでしたよ」と何がおかしいのか声を漏らして笑う男にぞつと寒気が走る。

「話を戻しますが、息子を亡くしてから僕と妻の間は冷え込んでいきました。妻は日に日によそよそしくなつていき、僕に怯え始めます。それもそのはず、出会つたときから僕の容姿が全く変わらないのですからね。村人達も僕の異質さに気づき始め僕は追われるようにして村を出ました」

淡々と自らの過去を語る男を、私は凍りついたように見つめていた。

「ただ生きていくのに必死でした。とてもお聞かせできないような悪事に手を染めながら生き延びました。仲間を集め力や恐怖で支配してみても、結局一つ所に長居はできません。幾度も名を変え各地を渡り歩きながら僕はどんどん堕ちていった。生きるのに疲れ、それでも生への執着はすてられず、檻褸雑巾のようになっていた時に出会つたのですよ。彼に。いや、拾われたと言つた方が正しいです

かね。当時、その名は既に世間に知れ渡り、力も知識も僕とは比べ物にならなかった。彼は招かれてゴルドベルグへと向かっている最中でした。望めばいくらでも質の高い従者が名乗り出るというのに、裏切ろうと足蹴にしようとい向に僕を捨て置こうとしなかったのです。ルードヴィーグはそれはそれは豪気な爺でねえ。僕が何かしでかす度に　お前は気を引きたいが為に悪さをする愛に飢えた子のような。その歳でちと恥ずかしいぞ。と笑っていましたっけ」

再びルードヴィーグの墓に目を移した賢者の視線は慈しみの溢れた、見ているこちらまで心が温かくなるようなものだった。だが、どこかに陰を感じる。

「今思えば、ゴルドベルグへと向かっていたあの日々が息子を亡くしてから初めて得た安らぎの時間だったのかもしれない。何かと騒がしい道中を経てルードヴィーグと僕は、とうとうこの地へと足を踏み入れました」

そして、イリーナ姫と出会った。と。子を設ける程の相手の祖国であるゴルドベルグをこの男はなぜ

「なぜ、ゴルドベルグを滅ぼしたのですか」

その質問をまっていたというように賢者は私を見て目を眇めた。

「腐っていたからです」

一言、そう言うと賢者は墓に視線を戻した。

「ゴルドベルグはノルティア北部の殆んどの国々を傘下に置いた大國でしたが、その末期はそれは酷い状態ですね。力ある王族と神

官達によって、繁栄に繁栄を重ねたかの国は、熟れた果実が腐るように、内部から崩れつつありました。汚職が公然と蔓延し、富は偏り、豊かであるはずが、貧困が深刻な問題となっていました。やがてパイにありつけなかった者は他所から奪って己が物とすればいいという考えを持ちはじめようになり、治安は悪化、人心は乱れに乱れていきましたねえ。さらに悪いことにある村で新種の疫病が発生していたのです…………… ルードヴィーグが招かれたのも疫病を封じる手段を講じるためでした。ルードヴィーグと僕は村人を救おうと奔走しました。しかし有効な治療法は一向に見つからなかった。その間にも村は疫病に侵されていき怯えた一部の村人が村を捨てて逃げ出そうとする始末。病が外に漏れては、ゴルドベルグどころかノルティア全土の危機だ。だというのに、腐りきった中央はまとも機能せず、全てをルードヴィーグに押し付けていた。とうとう打つ手がないと分かって追い詰められた時、俺は村に火を放った。女子供関係なく皆焼いたよ。数は違ったがこれまで散々やってきた事だ。俺にとっては何てことはない……………」

いつしか男の口調は変わっていたが、その声はどこまでも静かで、湖のさざめきに飲み込まれては消えていく。

「村に火をつけたのが俺だとルードヴィーグはすぐに気がついた。烈火の如く怒ったな。今でもあの時の声は鮮明に耳に残っているよ」

ルードヴィーグは未だ村人を救う事を諦めていなかったのだから。男とて苦渋の選択だったはず。微笑を浮かべてルードヴィーグの墓を見つめる姿に、たまらず「貴方は悪くない」と口にしようとして、飲み込んだ。私が口に出来る程軽い言葉ではない。

「村に火を放った事実は、当然ゴルドベルグ側に露見した。奴らは自分達がろくに疫病の対処をとらなかつた事を棚に上げて俺を重罪

人として扱った。拷問を受けた拳句に俺は罪人としてユーンの血を飲まされたよ。苦しみ抜いて死ぬ猛毒の血だ  
俺がこの世界の人間なら死んでいたんだろうな。だが聖域の隅に掘られた穴の中に落とされて、体内で暴れ狂う血にのた打ち回って苦しんだが死ねなかった。それでも衰弱して虫の息だった所を、結界に侵入したルードヴィーグに助けられたんだ。ルードヴィーグはイーリス姫の力を借りて俺を匿ってくれた。俺の今のこの力はユーンの血が混じったせいだ。絶大な力を得た俺は………」

つと目を伏せると男は空に浮かぶ月を見上げる。涙を見せるのではないかと思っただが、男は最後まで穏やかに笑んだままだった。

「後は想像がつくでしょう？ 力づくで止めようとするルードヴィーグを振り切って僕はゴルドベルグを滅ぼしました。全てが終わって命を絶とうとした僕にルードヴィーグは己の名を与えたのです。賢者ルードヴィーグ・フォルセルの名に恥じぬ生き様を見せよ。俺の名前に泥を塗ってくれるなよ。そう笑ってね」

くるりと私に向き直った賢者の顔に浮かんだ笑みは、いつもの人食った飄々としたもの変わっていた。

「厄介な男でしょう。おかげで僕は千年もの間死ぬ事もできず、ノルティアに囚われたままですよ。全く、何だっただの時彼の名を継ぐ約束などしてしまっただけでしょうねえ」

腕を組んで、うーんと唸った賢者は大きくため息をつく。

「何故、私にその話を？」

「何故でしょうね。自分でもよくわからないのですよ。さしたる理由はありませんが、ただ、誰かに知っておいて貰いたかったのかも」

しれません。歳をとると気が弱くなるのですかねえ」

少し、肩が軽くなった気がしますよ。と笑いながら賢者は芝居がかった動作で首を回す。

「で、まあお決まりのロマンス等がありまして、イーリス姫と僕の間の子が産まれます。これがよせばいいのに新しく国を興すんですね。その国の名がラウヴァラといいます。あ、これも僕が滅ぼしました。けれど、また生き残りがいたんですね。その人間が起こしたのがヴィルヤ。これも僕が滅ぼしまして、次に生き残った人間が起こしたのが……と、まあ、幾度かそんな事を繰り返して、最後に興ったのがこのシルヴァンティエなのですよ」

滅ぼしすぎじゃないか？ ひくりと頬をひきつらせる私に、賢者はいやあと頭に手をやるとへらへらと笑いかけた。

「ゴルドベルグの最後の姫の願いでしてね。二度とゴルドベルグのような国をこの地に興させないでと。こちらもついつい二つ返事で承諾してしまいました。いやいやピロートークって恐ろしいですね」

寝物語かよ！ イーリス姫って実は一番の食わせ物なんじゃないのか……………。

「シルヴァンティエは今までで一番巧くいつているんですよ。まだまだこの国には踏ん張ってもらわなくては僕も休息がとれません」

この男は……………怒りを通り越してため息が漏れた。

「だから、今回の企てを思いついたんですか」



「おや、そこまで気づかれていますか。恵子さんにはかないませんねえ」

賢者はぼりぼりと頭をかいて惚けた素振りを見せた。

「イサークの好みを連れて来たと言いましたよね。それは容姿の事ではないでしょうか。私がイサークのコンプレックスを打開すると考えた。つまり貴方は私の性格を知っていた。なら日本の法律に拘る私が、15歳のイサークの想いに応えられないと見抜いていたのでしょうか。せめてあと3年……イサークが18歳の時に会っていたら、私の気持ちも変わっていたかもしれない。けれどその3年を待たずに、貴方は私を連れてきた」

「ええ、先王の時代に甘い蜜を吸っていた、現王とイサークを快く思わない者達がきなくさい動きをみせていましたからね。しかしその勢力は小さく纏まりがありませんでした。一つ一つ潰すのは大変手間がかかります。そこでセルミレ公という大きな明かりを用意しました。後は明かりに群がる虫を明かり共々叩き潰して一件落着というわけです。イサークの成長にも一役勝っていただけ僕としては大変満足です」

私としては大変迷惑ですよ。

「それにねえ。もしかしたらという期待もあつたのですよ。彼はいい男になると思いませんか？」

なるだろう。今でも十分にいい男だと思うが、これからますますその魅力に磨きがかかり誰もを惹き付ける王になるだろう。そんな予感がする。口を引き結んで黙り込んだ私に賢者は人の悪い笑みを浮かべた。

「僕の不出来で可愛い子孫である彼の為に、ひとつ貴方にも枷を与えましょう」

やめる。聞きたくないぞ！

「彼の中に流れるユーンの血。あれは想像を絶する力をもたらします。が、この世界の人間には毒にしかありません。彼はユーンの手を濃く受け継ぎ、僕の血をそれに見合うほど受け継がなかった」

耳をふさいでしまいたい。そんな話を聞いても、私は……

「彼には地球の血が必要です。次代かその次の世代か、はたまたその次か。それは僕にも分かりません。しかしこのままこの世界の人間と婚姻を結び続ければ、やがて破滅が訪れるでしょう」

あ、何だ。まだ猶予があるんじゃないか。

賢者の言葉を耳にしてしまったが最後、逃げられなくなるのではと恐々としていた私は、ほっと息を吐いた。そんな先のことにまで気を配っていられるか。

「あ、何ですか！？ そのほっとしたような顔は。まだ時間があるから自分でなくても大丈夫と思いましたがね……。恵子さん、貴方って僕が思っていた以上に薄情だったんですねえ……」

がくりと肩を落とした賢者は、しかし、思い出したように含み笑いをする。

「しかしまあ、まだ半年ありますからね。彼の猛攻に恵子さんが耐えられるか、楽しみにしておりますよ。もう始まっているようですね」

賢者はにやにやと蹴りをいれたくなるようないやらしい目つきで、ちらりと私をみてはくつくつと笑いを漏らした。

こいつ、また見てやがったのか。そう、もう始まってるとんだ

「サカキ様。殿下がお見えになられました」

それは、賢者とトウ一口が現れ、私を置いてまた姿をくらましてしまったあの日から10日程後の事。

イサークの来訪を告げるアイラの声に、口に含んでいたお茶を目の前の机に散乱する書類に噴出しそうになって慌てて飲み込んだ。

「げっほげほぐふっ」

苦しさに目尻に涙がにじむが、なんとか嚙下に成功した。書類にお茶をこぼしたりなどしては、後でエイノに何と言われるかわかったものではない。

「大丈夫か？」

入室の許しの言葉も口にしていないというのに、二人の近衛を引き連れてずかずかと部屋へ足を踏み入れたイサークは、どかりとソファに腰を下ろすと、指を伸ばす。

そう言って頬を伝う雫に指を這わせた。

……………ワンコよ。お姉さんは色々とショックだ。

背後に控える近衛の一人が唇を吊り上げて、そんな私達を見下ろす。隣に立つ近衛よりも頭半分高い長身に、目立つ赤茶の髪。そう、何故か今日イサークの近衛として姿を現したのはKYエロ狸、ユハ

だった。

愉しげな緑の瞳と目が合い、私は慌てて眉根を寄せて俯いた。そんな私をイサークがどこか冷ややかな目で眺める。どんな羞恥プレイなのよ。これ。

「近衛の一人がセルミレ公の間者でな。空席が出来たから王太子の近衛に昇格させてやった」

それじゃあ、何か？ これからこの二人はセットで現れると？  
お前ら私の胃に穴をあけるつもりか！

「さて、サカキ。お前の処遇だが、このままエイノ神官長預かりとあいなった。神官見習いとして、エイノの補佐にあたり古文書の解読に精を出すように」

あいあいさー。私はげっそりとした顔で机を占領する書類に目を落とす。

「というのが王からの御達しだ」

ん？

「ルードヴィーグの存在は伏せられることになった。公表などしては俺の頭が疑われるからな。セルミレ公の謀反があり、それを平定した。それだけだ。王は……………」

言葉を切ったイサークは長い足を組むと盛大にため息をもらした。

「王は全てご存知だったよ」

鬱陶しそうに首もとの金具を外すと、イサークは美しく整えられた髪に指を差し入れて乱す。

「あんの、くそ親父。ルードヴィーグと通じていやがったんだよ。どうりで俺に指揮をとらせたわけだ。「枕元にかの大賢者様がたれた。賢者様の言葉にはさからえぬ」とかなんとかぬかしやがって。ああくそっ！」

ああ、そうですか。どおりで影の薄い王様だと思った。イサークも大変だね。

「そんなわけでお前を俺の妃とするにあたり、障害はひとつ減った」

は？ 親子喧嘩など他人事と、書類を片付けながら適当に相槌をうっていた私は、イサークの言葉にぴたりとその手を止める。

「ちょーっと、お待ちください。ミーツエ様は？ ミーツエ様はどうなさったんですか。身分も教養も血を薄めるにしても彼女ほどの適材はいないではありませんか」

「国に帰した。唇を奪おうとしただけで他の男の名を呼んで震える女など抱けるか」

ぎゃあああああ。誰ですか。誰ですか！？ イサークをこんなにしちゃったのは！ つーかミーツエの根性なしめ。青ざめる私をイサークは挑むように睨み付けた。

「俺は、お前を逃がしてやるつもりだったんだ」

強い 強い 口調だった。

「お前が王族を、城の生活を好まぬのは出会ったときに聞かされていたからな。乙女としたのは……………それは多少の下心がなかったといえは嘘になる。だが、あれはお前の身の安全が第一の目的だったこと。危険が去れば逃がしてやるつもりだった。俺の身勝手でお前をしばるつもりはなかった」

どこまでも真つ直ぐで真摯な瞳に見つめられて、私は言葉に詰まる。

「それを、お前は……………」

もう、謝罪の言葉もありません。土下座でも腹踊りも何でもさせていただきますよ！

「俺は確かに、凡庸で腑抜けで後世に渡って語り継がれるような筋肉馬鹿で、どうしようもない餓鬼かもしれんが、高々100年の差で気持ちを変えるような骨なしではない！」

あの時の言葉、根に持っておられたのですね……………。

「歳を偽っていたからといってお前の全てが偽りだったとは思わない。悩むのはやめることにした。俺はお前が好きだ。もう逃がしてやるつもりはない。わかったな」

一皮剥けたというよりも、螺子が一本飛んでいってしまったかと思えないイサークを私は返す言葉もなく見つめていた。

「用件はそれだけだ。また来る」

そう言って席を立ち背を向けたイサークの耳が、ほんのり色づい

ている事に気づいて、少しだけ胸を撫で下ろした。わんこはまだまだ狼にはなりきれないらしい。

「失策だったね」

扉へと向かうイサークを見送る私に、ユハがそつと近寄り耳打ちをする。おい、近衛業はどうした。

「あそこで逃げては追いたくなるのが男の性というものさ」

だったら縋り付いておけば良かったとでもいうのか。

「まあ、青臭い餓鬼に飽きたら俺のところにおいで。サカキちゃんなら何時でも歓迎するよ」

うるさい。オールオーケーのくせに。くつくつと耳元で笑うユハを振り返ったイサークがぎろりと睨みつける。

「そういう台詞は俺がいない時に吐け」

うん、まあ聞こえますよね。てかわざとですよ。ユハさん。

「そんな暇が出来ぬようにこき使ってやるがな。行くぞ」と長靴の音も勇ましく去っていくイサークに愉しげに笑むユハが続き、青い顔で細い息を吐く近衛その2が後を追う  
可哀想に、針のむしろだろうな……。あれほど腹立たしく思っていた金魚の糞に、密かに親近感を抱いていた。

そついえばあの時、窓の外に鳥の鳴き声を聞いた気がしたな。

湖面に落ちた揺らめく丸い月を見ながら、私はため息を漏らした。

「さて、冷えてきましたね。秋も近くなってきたようだ。そろそろ帰りましょうか」

杖をもった手をこすり合わせる賢者に私は声をかけた。

「ひとつ、お聞きしたいことがあるのですが」

「何ですか？」

「トウーロは……彼も賢者さんの子孫なのですか？」

これは驚いたと、賢者は眉をあげて口をすぼめる。

「彼はとても27には見えません。声変わりもしていないのでは…

……」

「いやはや、鋭いですねえ。そう、彼も私の子孫です。不憫にも長命という特性を継いでしまった。もっとも彼の場合は少しずつではありますが変化が見受けられますから、私ほど長い時を生きずにすむでしょうが。トウーロはまだ気づいていませんからね。彼には秘密ですよ」

殺されてしまう、と賢者は朗らかに笑うが、ばれるのは時間の問題だと思っぞ。

「ああ、そういえば彼から貴方に謝っておいてほしいと言付かっていました」

そうか。あの天然も自分の間抜けさに気づいたのか。今更謝られても許さんけどな！

「黒髪の呪術師の噂を広めて悪かった、と」



………何だつて？ 思いもよらぬ言葉に私は唾然として賢者に目を向ける。

「彼も悪気があつたわけではないのですよ。彼はほら、バジエの間ですから。あの国にはねゴルドベルグ末期に中央から逃れるために決死の思いで山脈を越えた人々の子孫がいるのですよ。彼らにとつては自分たちを苦しめる悪しき国に牙をむいたフォルセルの呪術師は英雄のようなものでして、バジエでは今もちよつとした偉人扱いです。フォルセルの呪術師に連なるものだと思われれば、城の人々も貴方に一目置くと思つたのでしようねえ」

あんの超絶天然め………怒る気力も最早果てた。目を閉じて首を振る私の肩に賢者が慰めるうに手を置いた。「子供服も似合つておられましたよ」と言われて、すぐさまその手を払い落としたけれど。しかし、彼にもゴルドベルグの最後の姫の血が流れているわけだ。とてもそうは見えないが。

「彼は何なんです？ ゴルドベルグから続く王族の落としたね、ですか？」

いえいえ、とんでもない。と賢者は首を横に振つた。

「彼は僕がルードヴィーグに拾われる前に出会つた女性との子孫です。ですから彼はユーンの血も持つてはおりません」

ちよつと待て。子供つて亡くなつた息子と、イーリス姫との間に出来た子だけじゃないのか？

「………何人いらつしやつたんですか………お子さんは」

そう問う私の目は据わっていたと思う。

「それがですねえ……ほら、何せ若いころはやんちゃだったもので、しかもずつとこつ男盛りの身体年齢を保ったままなわけですから。あ、いやいや、ゴルドベルグの姫との間に出来た子が最後ですよ？　ですが、それまでは。まあ、色々と」

はははと、頬をかいて空を見つめる賢者に私は詰め寄る。賢者は身を反らせながらじわりじわりと後退していった。

「で、何人いたんですか？」

「正直に申し上げますと……わかりません。ですが、2桁には収まるはず、って恵子さつ」

「こんの節操なしがっ!!」  
「わあああっ」

私の放った蹴りは見事に賢者の鳩尾にヒットし、静かな森の中に派手な水音と共に盛大に水飛沫が上がった。

びしょ濡れになった賢者は、腕の一振り衣服を乾かすと、私の手をとる。瞬きをした次の瞬間には私は一人でエイノの屋敷にある自室に立っていた。

机の上には解読途中の書類。光玉ひかりだまの明かりが被せた椀の縁に筋と成ってはりついている。月明かりを頼りにソファに座ると私は全身の力をぬくように息をついた。ついさっきまで賢者と聖域にいたのが夢の中の出来事のように感じる。ソファの端に置かれた柔らかなクッションに身を沈めようとした時、小さなノックの音が耳に届いた。

「どうぞ」

声をかけると、取ってが回り扉の影からカップを二つ手に持ったエイノが姿をみせた。

「話はすんだか」

結界への侵入者を感知でもしたのだろうか。私の前に腰を下ろすとエイノはカップを差し出した。ふんと甘い湯気を立ち上らせるサルミにはパロの香りが混じっている。

「ええ、まあ」

「そうか」と言ったきりエイノは何も語らずにカップ　おそらく中身はパロだろう　に口をつける。

私の歳がばれてから夜の解読は食堂で行われるようになった。エイノなりに気を使っているらしい。だからこんな風に夜に部屋に二人きりというのは随分と久しぶりの事で少々緊張する。

「どうする気だ？」

エイノが口を開いたのは私がカップに入れられたサルミを殆ど飲み終えた頃だった。

「半年待って帰ります」

当然と、答える私にエイノは薄闇の中で金に光る瞳をむける。

「半年後に賢者が迎えに来ると思うのか？」

「それは……………」

分からない。あの軽薄馬鹿のことだから、すっかり忘れられそうな気もするし、故意に来ないような気もしないでもない。傷が悪化してあっけなくこの世を去ってしまう可能性だってあるわけだし。

「殿下の妃となるか」

「なると思えますか？」

「思わぬな」

なら聞くなよ。何が言いたんだこの男は。何だか疲れた。ベッドの温もりが恋しくなって、私はぐいと残っていたサルミを飲み干した。

「私にしておけ」

え？ 低い艶のある、けれど甘さを感じさせない感情の見えない声でそう言つとエイノは私を見る。

「子供にしか見えぬ25歳の女に需要があると思うか？ 悪いことは言わぬ。私で手をうつておくのだな」

その心は……

「解説が進まなくなったら困るから……ですか」

もう、色恋沙汰は十分だ。私の言葉にエイノはくつと喉をならした。

「お前のそういうところを好ましく思っておるのだが」

熱の籠らない目でそう言われて喜ぶ女がいると思ってるのか？  
唇に笑みを浮かべたまま空になった私のカップを手にとると、エ  
イノは腰を浮かす。

今夜は何も考えずにゆっくりと眠りたい。見送りがたら鍵をかけ  
ようと、私は席を立ちエイノの後に近づいた。

扉を潜る間際、くるりと振り返ったエイノの指さきが私に向かっ  
て伸ばされる。と、するりと頬を撫ぜた。

「返事は急がぬ。お前が望めば良い夫になろう」

固まる私に、艶やかな笑みをみせてそう言つと、エイノは自室へ  
と戻っていった。

……………心臓に悪い。

ぎこちない手つきで扉を閉め鍵を閉め 何度も何度も鍵  
が閉まっているのをチェックすると、私はよろよろと室内を横切り  
うつ伏せになってベッドに倒れこんだ。

「やあ、久しぶり」

途端に聞こえる不吉な声に、ベッドの上を転がり上を向けば。

「何でいるのよ」

「ご挨拶だねえ。危険を冒して会いにきたつてのにさ」

金に煌く髪を垂らしたレーヴィが両腕をついて体の上にまたがっ  
ている。二人分の重さにベッドが音をたてて沈んだ。

「逃げたほうがいいいんじゃないですか？ セルミレ公派は一掃され  
るそうですし」

「網にも掛からぬ小さな魚はどこにでもいるものだよ」

「なら、私が吊り上げてシルヴァンティエに差し出しますよ」

レーヴィは眉を上げると、馬鹿にしたような表情を浮かべた。

「立場が悪化すると思うよ？ あんた男つてものをわかってないよね。僕みたいな暗殺者と通じていたのみならず、どうやって薬を飲まされたか聞かされたら殿下の心情は悪化すると思わない？ それとも何？ 僕が喋らないでも思うわけ？」

尾ひれも背びれも胸びれもつけて吹聴しそつだな。

「半年は長いよ。どうせなら快適に暮らしたいでしょ」

にっとう唇を吊り上げるレーヴィ。どうして半年の件を知っているんだ。

「あの人はさ、誰でもいいと思っているみたいだよ。あんたを留める事ができればね。僕の話は当て馬にでもなれば上等と考えてるんだろっけどさ。まあ、僕はそれでもいいし」

レーヴィは目を細めると舌先で自身の唇をなぞる。

「異界の女か。どんな味がするんだろっね」

それは、性的な意味ですか！？ それとも猟奇的な意味ですか！？

「どうやら、今日はまだまだ安眠させてもらえないらしい。エイノに結界の強化を嘆願しようと心に決め、私は愉しそうに笑う変態暗殺者の撃退方法を捻り出すべく頭を巡らせた。」

薄暗い森の中。風が木々を揺らす音が絶え間なく耳をくすぐる。男は切り立った崖の中腹に穿たれた穴に腰をすえると、ぶらぶらと足をたらししていた。目の前に広がる湖には銀に輝く月が写しこまれ、さざ波が立つ度に目まぐるしくその形を変えている。きらきらと揺らめく湖面を眺めていた男は静かに目を閉じた。

何故だ！ 何故火を放った！ 俺はお前にそんな事をやらせる為に従者にしたのではない！ お前がやった事は、お前がやった事は 俺がやらねばならなかった事だ！ 俺はこんな重荷を背負わせるためにお前を側に置いたのではない。そんなつもりではなかったのだ。……… すまない……… すまない。俺がやらねばならなかったのだ……… すまない……… すまない

繰り返して謝罪を口にしながら、わんわんと咽び泣く男の姿を思い出して、男はふつと笑みをもらす。

「その言葉だけで十分だ。俺は後悔などしていない。……… お前の名を継いだのは失敗だったかな」

## 94 エピローグ（後書き）

「賢者の失敗」以上をもって本編完結とさせていただきます。

一年以上もの長い間、待っていてくださったかた、感想をくださったかた、拍手をおしてくださったかた、全ての読者様に本当に感謝しております。

えーとですね。どこの打ち切り漫画だよ！ と言いたくなるような、俺たちの冒険はまだまだこれからだ的ラストでございます。はい。

本当にすみません。

中途半端でイライラする！ 半年後どうなるんだ！ という白黒はつきりさせたい方の為に（私がこのタイプです）半年後を番外編として書かせていただきましたとおもっております。ですが、この番外編。とある男の抜け駆けともいえる行為によって始まる物語ですので、その人物以外は本編主要人物はほぼ出番なしです。

それでもいいという方はいましばしお待ちいただけますようお願いも申し上げます。

では、これにていったんではございますが。完結とさせていただきます。

本当に本当にありがとうございます。



頂いたイラストです（前書き）

灯様から頂いた素敵なイラストです。

イサークの甘いマスクに、柗の戸惑ったような表情がいい！です。

## 頂いたイラストです

苦節一年と数ヶ月。素敵なイラストを頂きました。ありがとうございます！

「サカキ様！ お早くしてください。殿下との食事会に遅れてしまわれますよ」

アイラの急かす声に私は重い腰をあげた。

「はいはい。また、着せ替えごっこをするんですか？………っ、この美少女以外お断りなピンクのドレスは！？」

ふあさと広げられたドレスに私は目を丸くした。無理です！

「あー、アイラさん。別のものに変えていただくわけには？」

「いえ。本日はこちらをお召しになっていただきます」

「そうですね、サカキ様。このドレスはイサーク殿下からの贈り物なんです。今日の食事会のためにわざわざお作りになられたそうですよ」

ちよつと待て。私は受け取った覚えがないぞ！ というか作っただとどういう事！？ サイズをどこで知ったんだ！

「さあ、お早く服を脱いで下さいませ」

「さあ、さあ」

> i30400 | 3067 <

イサークとの甘い会話を書くはずが、何故か侍女さんズに占領されてしまいました。

何気に胸元のドレープが紳の………をフォローするデザインな気がいたします。ないすちよいす。

頂き物いらすと(その2) (前書き)

灯様にいただいた、もう一枚のイラストです。  
日常の—こま的イラストで、ほんわかします。

## 頂き物いらすと(その2)

素敵なイラストを頂いておきながら、イサークの髪の毛の長さに異を唱えてしまうという愚行を犯してしまったのに、もう一枚頂いてしまいました！

その節は本当にすみませんでした。ちょっと舞い上がりすぎておかしくなっていったんです……。多分現在進行形でおかしいです。

題名をつけるとしたら「トゥーリーー！ お茶！ お茶！」でしょうか。

「サカキ、何を読んでいるんだ？」

「うーん、難しくよく分からないんですが(ウソ)恐らく保健体育？ みたいな感じでしょうかね」

「ふーん」

「なにか？」

「いや、そのまま続けてくれ。邪魔して悪かったな」

「いえいえ。あの？ まだ何か？(……………)分かりやすい、視線を感じるですけど。どうしよう」

「いや、何も無いぞ。そのままが良い」

「そ、そうですね。それじゃあお言葉に甘えて……………」

> i30862 | 3067 <

以下蛇足。トゥーリーとトゥーロの眩き。

こいつ、さっきから熱心に何を読んでやがるんだ？

あー、ヴィルヤの古書じゃねえか。何々？

.....  
.....  
.....

こいつ。

こいつには女としての恥じらいつてもんがねえのか!?

いくら王子には読めねえからって、目の前で堂々となんてものを読んでやがる!

大体こいつは、王子の気持ち分かってんだろっな? 分かってるよな。分かってて目の前でソレを読んでんだろっなあ。かぁー、いい性格してやがるぜ。

くそっ、俺がこんな格好までして、くっつけようと苦心してるっのに!

くおー、腹立つ! さっさとくっつけよ! 俺をバジエに帰してくれよ!

げげっ、茶が! やべえ、またアイラのお小言じゃねえか.....。

### 蛇足の蛇足

サ「ところで、イサーク。髪が(一枚目の絵より)随分伸びましたね?」

イ「そうか? 成長期だからかな」

ユ「むっつりは伸びるのが早い.....そうですよ。殿下」

エ「殿下、よもや精力剤につづいて育毛剤に手を出されてはおられないでしょうな。街中で売買されるものは云々」

イ「どちら俺には必要ないわ!」

## 01 北の地にて

寒い。

重い観音開きの扉を押し開けると、途端に冷たい風に全身を包まれる。私はかじかむ両手の指を擦り合わせると白く色づいた息を吐きかけた。

東の空を仰ぎ見れば、濃い緑の葉を茂らせた木々の頂上から朝の光が滲み出ではじわじわと夜の闇を侵食していくところだった。

ここシルヴァンティエの朝は早い。人々は夜明けと共に起き出し、日の入りと共に家路に着く。それは夜に明かりをとるのが困難な為だった。城やエイノの屋敷を照らす光玉は一部の術師としての資質のある者（その多くは神官職につくらしい）にしか作り出せぬものらしく、一般庶民は火に頼るしかない。当然、燃料が必要だし管理にも手間がかかるし、火災などのリスクも生じる。人々が太陽と共に生活を送るのは当然の成り行きだろう。

夜は遅く朝はそこそこの生活をしていた私には、シルヴァンティエにやって来た当初、健康的すぎる生活サイクルは何かと辛かった。しかし、ここに来て一年がたとうかという現在となつては、すっかり体が馴染んでしまっていた。

私は指を頭上で組んで、大きく伸びをし、清々しい朝の空気を肺いっぱい吸い込んだ。

今日もいい天気になりそうだ。

ぼきぼきと音を鳴らして首をほぐすと、今、出たばかりの扉をくぐる。

黒い色合いの石床の上に、ばかでかい長靴が散乱していた。

たくさんの長靴の中から、金の金具も眩い、特に質の良い皮を用いた靴を2、3足ばかりつまみあげると外に出る。

きよろきよろと辺りを見回して、大きな木の根元に残る雪をみつけると、とても芳しいとはいえない匂いを発しているそれらを、並

べていく。

さて、数分時間をつぶさねばならない。

私は懐かしいリズムミカルなメロディを口ずさみ、大きく腕を回し始めた。

寒さに縮こまっていた手足も、ラジオ体操第二を終える頃にはすっかり温まり、靄がかかったようにぼんやりとしていた寝起きの頭もすっきりと冴えていた。

「うっし」

25歳のうら……若くもない女があげるにしては、些か野太い声を出して気合を入れると、先ほど放置した靴の回収に向かう。

手にした革靴はせっかく温まった指先から再び熱を奪う程度には、よく冷えていた。

よしよし、今日もいい冷え具合だ。私は冷たい靴を前に一人ほくそ笑んだ。

さあ、忙しい朝の始まりである。

靴を抱えて、再び建物の中へ戻ると、散らばった重たい長靴を手早く整えていく。先ほど冷やした靴を中央に配置して一つ目の仕事の終了だ。

ぱんぱんと手についた汚れを掃っていると、タイミング良く、どかどかという騒がしい足音が聞こえてきた。

廊下の角を曲がる一団を目にすると、さっと身を壁際へと寄せて頭をたれる。姿を現したのはいずれも筋骨たくましい武張った男達だった。

「し」苦勞」

私の方をちらとも見ず、しかし私にかけたのだと分かる言葉を発

したのは、短い金の髪をきつちりと後ろに撫で付けた銀縁眼鏡の男で、名をレオニードという。

だらしなく衣服を着崩したこの集団の中にあつて、ただの一度も乱れた格好をしている所を見たことがない。

今朝も、ぴんと糊の効いた薄いグレーのシャツをきつちりと襟までとめて、清潔な匂いがする暖かそうな厚手の上着を羽織っている。いかにも神経質そうなこの男を私は密かに会長と呼んでいた。企業的な意味ではなく、生徒会的な意味で。一度、年齢を尋ねてみたところ32歳との答えが返ってきたから、生徒会はないかと思つたけど、そうなるやと神経性胃炎ぐらいしか呼び名が思い浮かばなかつたので、会長でよしとした。

私がそつと目だけをあげて会長を見ると、彼はちらりと眼鏡ごしに視線を寄越す。鋭く冷たい目つきをした酷薄そうな男であつたが、この会長が、私が今、唯一信じられる人間なのである。

すぐに視線を戻すと、会長は並べられた靴に足を入れる。微かに眉を寄せるが、何も言わずに黙々と紐を縛り始めた。

その隣で、この寒い中、艶かしい臍を含む腹部を、乱れたシャツの隙間から惜しげもなく晒している男が、むくつけき男達のボス、イヴァンだつた。

広い肩に長い手足、殴ればこちらの手が捻挫してしまつがちがちの筋肉に覆われた厚い胸板。その鍛えられた肢体はユハにも引けをとらないだろう。

イヴァンは大きく口を開けて欠伸をしながら、靴をはこうとし、足先が触れるや否や、あからさまに顔を歪めて舌打ちをした。

「つめてえなあ」

イヴァンは少々垂れ気味の目を私に向けた。

「お前が来てから、随分と朝の冷え込みがきつくなつたようだ」



「寒の戻りですかね」

威圧感のある横柄な声音に内心でびくつきながら、私はしれっと答えた。

「ほおう、俺はとんだ女狐を拾ったらしいな」

イヴァンの垂れ目に剣呑な光が宿る。と、すいと第三者の影が私とイヴァンの間を遮った。

「イヴァン、バフィット達がお待ちかねですよ」

流石に私が見込んだだけはある。会長は正しく弱者の見方だ。

「ふん、レオニード、お前はこれに甘い」

分かりにくい窘めをつけて、イヴァンは面白くなさそうにレオニードを見る。しかし、レオニードは紐を縛り終わるとイヴァンにもくれず、さっさと出て行ってしまった。(ちなみにバフィットとは馬のことだ。彼らは朝起きると身支度もそこそこに、馬の世話をするのを日課としていた)

「あれも変わらんな」

イヴァンはぼさぼさの髪をかき上げて、どっかとその場に腰をおろして紐をきつく引き始めた。

「お前も、いつまで意地をはるつもりだ。従順にしている。根城に帰ったらそれなりの生活をさせてやると言っているだろう」

連れて帰られたら困るから、こつやって地味に逆らっているんだろっが！

私は目の前で揺れる、白い頭をねめつけた。寝癖のついた髪が朝日を浴びて新雪のように光っている。その頭を見ると、私の中にも微妙な感情が生まれる。レオニードよりかなり若そうなのに、一体彼に何があったのか、イヴァンの髪の毛は真っ白だった。

これがレオニードなら、相当苦労したんだろうな。と同情することしきりなのだが、イヴァンだし……俺様だし……。

「俺の機嫌をとれ、餓鬼でも女だろうが、ちつたあ媚びてみせる」

やっぱり同情出来ない。

けっ、と悪態をつきたいところをぐつとこらえてそっぽを向いた。

「おーおー、イヴァンがふられてるぞ」

「いい気味だぜ、郷で何度お前に女を取られたか」

男達の殆どは、少々大げさに映るほどイヴァンに服従しているが、幾人かはこうして軽口を叩く者がいた。言葉遣いこそ丁寧だが、レオニードはその最たると言えるだろう。

「黙れ」

そう吐き捨てて、腰をあげるイヴァンに続いて、次々と靴を履いた男達が出て行くと、ようやく元の静けさが訪れた。

朝から疲れた。

私は足を踏ん張って、無駄に重い扉を閉めると、朝食の支度をしに厨房へと向かった。

今、私は三度……あれ？ 四度目だったかな？ まあ、どちら

でも大した違いはないか。とにかく日本から、ここシルヴァンティ  
工に来て数度目の軟禁生活を送っていた。

神官見習いとして、何より王子の想い人として、堅く守られた城  
で生活していたはずの私が、なぜこんな目に合っているかという  
と、そう長くもない話になるのだが、これだけは言える。

全部ロニのせい。

戻ったら、……………戻れたら、絶対にただではすみませんぞ。あの工  
口餓鬼め。

02 一日目 昼（前書き）

申し訳ありません。ちよいと加筆しました。そんな訳で例の男はま  
だ分かりません・・・。

「お仕事ですか」

「そ。ずっと受けてなかったから。そろそろ動かないと、せつかく売り出した名を忘れられちゃ適わないからね。失敗して野垂れ死んでると思われるのも癪だし」

肩で切りそろえられた、真っ直ぐな金の髪が背に下ろされたフードの上を滑る。目をすっぱりと覆い隠す前髪の隙間から、薄い青色の瞳が覗いていた。

レーヴィという蓑が被れなくなってから、男は下っ端の神官にその身分を変えて姿を見せるようになっていた。男が現れるタイミングは様々で、大抵は今日と同じように窓から部屋へ、鍵を破って勝手に侵入し、私の肝を潰してくれるのだが、時には同僚として堂々と神殿にやってきて、共に仕事をこなして帰る事もあった。ずっと王都近くにいるようだから、暗殺家業も随分と暇なものだ。平和でよろしい。と迷惑ながらもどこか安堵していたのだが、どうやら本格的に復職する気になっただけらしい。

「はあ、そちらの業界も色々大変なんですね」

アイラが入れてくれた食後の熱いお茶をずっとすすり、気の無い相槌を打てば、横から伸ばされた手がひょいとカップを掠め取った。

「相変わらずアイラが入れてくれるお茶は美味しいね」

奪い取ったお茶を口に含んで、目の前の男は満足そうに笑んだ。ほんのりとしたお茶の温もりを残す空の手を見つめて、私は眉を

寄せる。

「知ってた？ マリヤッタがレーヴィだった僕に入れてくれるお茶は飲めたもんじゃなかったんだよ。よっぽどレーヴィがあんたに近づくのが気に入らなかつたんだろうねえ。なにせ、あんた僕に首つただけだったし？」

私は頬を引き攣らせながら唇を吊り上げた。

「ええ全くそのとおり。私はレーヴィさんに夢中でしたからね。お人よしで、善良で、ちょっと野暮ったいレーヴィさんにね！」

誰か今からでも本物を連れてきてくれないかな。等という考えがこの半年の間、幾度頭をよぎったことが。

「どうだかね。あんな人がいいだけの男。実際に会ったら1時間で飽きるよ」

それは自分だけでしようよ。

男は気だるげに首を回すと、片手を突き上げて伸びをする。

「さあてと、そろそろ行くこうかな。寒いのは嫌いなんだけどなあ。

せつかく春になると思ったのに僕だけ冬に逆戻りだよ」

「え？ どこへ行くんですか？」

無口の仕事のことなど、関心もないし、知らないに越したことはないのに、冬に逆戻りという台詞に興味をひかれて、つい疑問が口を衝いてしまった。

「キユイ

銀の狼が支配する雪に閉ざされたところさ」

「キユイですか」

数十年前まで、シルヴァンティエと小競り合いを繰り返していたという、北の国境を接する国だったか。ここシルヴァンティエの王都キノスでは、もうすっかり雪解けを迎えたというのに………。確かにせつかく迎えた春に背を向けて、寒い北へ向かわなければならぬとなると気が滅入るかもしれない。

それにしても、銀の狼とはさすが魔法が存在する世界。ファンタジックで恐れ入る。一体どんな姿をしているのだろうか？

私はふと、一面の銀世界に君臨する孤高の狼に思いを馳せた。木々の枝には雪が重なり、まるで光輝く白い葉を茂らせているように見える。エメラルドグリーンの湖面は厚い氷に覆われ、魚達が短く遅い春を待ち望んでいる。月光を受けてきらきらと光る粉雪の舞う真つ白な丘に、静かに佇む銀の毛皮を纏う狼。幻想的だな……。

「銀狼をね、一匹仕留めにいくのさ。ああ、楽しみだな」

さつきまで狼が立っていた雪原にぱつと鮮血が広がった。うつとりと目を細める無口に私は全身全霊で引いた。

「狩人の真似事もするんですか？」

「狩人？ まあ、そんなところかもね」

無口は空になったカップを私の目の前に置かれた皿の上に置く。

「まあ、そんなわけだから。あんたが帰る日には間に合わないかもしれないな」

そうか。もうそんな時期か。指折り数えて待っていたはずのその日がいざ近づくと、私は段々と残りの日数を気にしなくなっていた。

……気にしないようにしていた。

「そうですか。それじゃあ、お元気で」

立ち上がって、真っ白な神官服の上に羽織った白いローブを被った無口に、私は笑顔を向けた。こいつが元気じゃないほうが世のため人のためなのだろうが、今度こそ、本当に、絶対に、確実に、最後なのだと思えばそれなりに感慨深いものである。

「うん、あんたもね」

振り返った無口の顔は、フードと長く伸びた前髪に遮られて見えない。

窓から差し込む光を背に、無口は私へ歩み寄る。

つとつと無口の指が顎先に伸ばされた。そのまま少しかさついた長い指が私の顔を持ち上げ……る前に渾身の力でもって叩き落とす。

「今度は何を飲ませる気ですか」

ぷつと可笑しそうに噴出す無口を睨み付けて、素早く後退る。

「やだなあ。今日は何も含んでないよ。お別れのキスぐらいさせてくれてもいいじゃない。流石に別の世界に逃げられたんじゃないか、追いかけてようがないしね」

と言って無口は唇の端を上げた。

「キスはもう十分嫌になるくらい味わわせていただきましたから」



丁重に辞退したというのに、無口は「そう?」と首を傾げると、せつかく作った間を一瞬で詰めて、ぐいっと私の右手を捕った。

「くっ」

相変わらず容赦のない力に手首がきしむ。

眉を顰めて、つんのめりそうになった体を立て直そうとした次の瞬間、腕の内側に生暖かいものが這い、さらに薄く堅い何かが肌に立てられた。

「ひっ」

臀部から首まで背筋を伝って一気に震えが走り抜ける。全身がぞわぞわと粟立った。

舐められて、噛まれた。

そう理解して、悪寒が全身を包む。

「結局、異界の味も分からず仕舞いか。残念だな」

「いつ………っつ。ちよつと！ いい加減に離してくださいよ。噛み千切る気ですか！」

もう一噛みとばかりに噛み付いた無口の歯が食い込み、私はたまらず悲鳴をあげた。アイラに聞こえたら心配をかけてしまうとか、その結果イサークにはれたら気まずいとか、色々と考える事もあるが、今にも肌を突き破らんとするするどい歯にぞつとして耐えられなかった。カリバリズムなんて冗談じゃない！

「大げさだね」

最後にペろりと舐められて、ようやく放された腕にはきっちり

鬱血の跡があつた。今が長袖の季節で良かった……。

目尻に浮かぶ涙を、ぎゅっと目を瞑つて誤魔化し、痛む腕を擦る。そんな私の様子を、乱れてふわりと持ち上がったフードの下から眺めていた無口は、徐にそれを引いて目深に被りなおした。

無口の体が一步、遠のく。

「じゃあね」

白い衣の裾を翻し、ひらりと棧を乗り越えると、彼は一度も振り返ることなく去っていった。

「闘技会……………ですか」

私は長い足を嫌味たらしく組み変えた男を見上げて呟いた。

それは無口と別れの挨拶を交わした日の夕方の事だった。

本日の仕事場である神殿からの帰り、近道にと整備された歩道を逸れて、葉の落ちた寒々しい木立の間を通り抜けていると、ふいに肩を叩かれた。

振り返れば、鮮やかな緑の瞳とぶつかると。精悍な目鼻立ちの顔には相も変わらぬ爽やかな笑顔がはりつけられていた。

「話があるんだ。少しいいかな？」

ここが校舎で、私がセーラー服に身を包む十代の少女で、相手がユハでなかったら、「告白？ きゃあ、どうしよう！？」なんて胸をときめかせたかもしれない台詞を甘い笑みを浮かべてさらっと吐くと、ユハは踵を返して歩き出す。

ここがシルヴァンティエで、私がいい歳で、相手がユハである以上、「告諭？ きゃあ、どうしよう」と動悸がするだけのこの状況にがつくりだ。

私は聞こえぬように小さくため息をつく、広い背中をすくすくと追った……………。

「ちょっと、いいかい？」と、疑問形を装った命令形の声かけから始まるこの場面。実はこの半年の間に幾度も繰り返されてきた光景である。

と言っても世に言うところの恋敵である、イサークやエイノに隠れての逢引やら逢瀬やらなんて色っぽい話ではない。

公の場での私の失態に、重箱の隅をつつくような指摘を入れるのが第一の目的である、と私は思っている。

ここでいう公の場というのは、神官見習いとしてではなく、あのシマウマの世話役 ユーンの乙女としての公務のことだ。

……そう、ミーツエが狙われ、あれだけのごたごたがあったにも関わらず、私は何故か未だに今代の乙女だった。

慣例に従えば乙女は総入れ替えのはずだった。ところが王子様が殊の外頑張りを見せる。慣例をとっばらい、ミーツエとセルミレ公の娘リータ嬢の変わりを補充し、他の乙女は続投にしまったのだ。

たまらず、最凶のカードを切った私にもなんのその。過去の文献を読み漁り、今の乙女の選考基準が形骸化された実のないものであることを突き止めると有無を言わせず私もまた乙女のままとした。権力者がいらぬ気概を持つと本当にややこしい。

総入れ替えであると、高を括ってセバスチャンに教えられた作法諸々を、綺麗すっかり頭から消し去っていた私は大いに焦ったが後の祭りというもので、大礼及びそれに伴う公務での作法はぼろぼろもい所だった。

それでもセバスチャンは頑張ろうとしてくれたが、所詮は付け焼刃。詩歌といえば五・七・五、楽器といえばリコーダー、踊りとくればマイム・マイムな私に、生粋の貴族に混じって何かやれというのが土台無理な話なのだ。

エイノは当初こそ青筋を立てていたものの、やがて諦めたように全く関知しなくなり、イサークは私よりも緊張した面持ちで、発表会の子供を見守る母親のごとく私の一挙手一投足を看視し、一部始終を王太子の近衛という特等席で見っていたユハは、ことあるごとにチクチクズバズバと笑い混じりに諭しにやってくる。

大礼が終わって随分と経つ現在も、乙女としての行事は後を絶たず、開き直って投げやりにこなす私に、いい小舅ぶりを発揮してくれている。

ならば何故、小言大王のユ八に大人しくついて行くのかというと、第二の目的（ユ八に言わせればこちらが第一らしいが）

下心を持って接してくる人物達の、よからぬ思惑や企みをこっそり耳打ちしてくれるからに他ならない。

イサークはイサークで私を守ろうと奮闘してくれているようだったが、王太子である彼には皆いい顔を見せるもので、そんな人物達の裏の顔を覗くのは、やはり彼には難しいところなのだろう。エイノとはいえば、そういった機微からは程遠い独自の感性をお持ちなのではなから当てにしていけない。無口は言わずもがな。結局情報を得るのに一番頼りになるのはユ八だったのだ。

そして第三の目的は………これだ。私は腰に回された手にげんわりとして息を吐いた。

三歩後ろを慎ましかに歩いていたはずなのに、ユ八はすつと私の横に歩調を合わせて並び、こちらが勘違いしてしまいそうな何とも自然なさりげなさで腰に手を回していた。

触れるか触れないかの絶妙なタッチは丁重にエスコートしてくれているようにも感じるが、小枝や石などの障りがあると、ここぞとばかりに引き寄せて、苦情を申し立てるには足りない程度に腰を撫でて放される。

何なの。この生殺しは。

変則的に歩調を変えたところで徒労に過ぎず、颯爽と歩を進めるユ八にストレスも最高潮！ という頃になって着いたのは、いつぞや話をした二区の東屋だった。

あの時と同じように、ベンチの上にはっとハンカチを広げると、ユ八はその上に私を座らせた。

「闘技会………ですか」

私は長い足を嫌味たらしく組み変えた男を見上げて呟いた。

「ああ、リザラスで毎年開かれるものでね、周辺諸国からも出場者を募っているんだよ。お忍びの王族から庶人まで、誰でも参加が可能だね。身分立場抜きの、剣の技量のみを競うものだから、それは盛り上がるらしいよ。この国からも毎回、腕の立つものを一人二人送り出すんだが」

が？

「王や王太子の近衛から選出される事は今までなかったんだけれどね……。今年は、どういうわけか、俺に御鉢が回ってきたのさ」  
どういふわけだろうな？

「何か問題でもおこしたんですか？」

上司の奥さんに手を出したとか、同僚の新妻にちょっかいをかけたとか、部下の恋人を寝取ったとか。

ユハは苦笑を浮かべる。

「サカキちゃんが何を想像しているのか、大方見当がつくよ」

だつてなあ……。身分に関係なくだなんて言うが、実際のところ、お忍びの王族に怪我を負わせたら厄介そうだし、庶民に負けたら立つ瀬がない。そんな気骨が折れる大会、誰も出たくないだろう。不祥事を起こした者、それも表立って裁けない案件でとなると、これ程押し付けやすい相手はいないではないか。

「残念ながら、俺はそんなへまをやらかした覚えはなくてね」

肩をすくめてみせた後、ユハはちらりと流し目に私を見た。

「君のこと以外は」

途端に艶っぽい空気をかもし出すユハにたじろぐ。

足を解いたユハが、耳の上を流れていた髪を手に取り顔を寄せ、のを、思いつきり体を反らして避けようとする、あるうことがエロ狸は体を押し付けるように寄ってくるではないか。

前に行けばユハの胸に捕まり、後ろに引けば押し倒される。

ここは、ひとつ横に、つまりベンチの下に転がり出るべきか！？でも石造りの床はかなり痛そうだ……と逡巡した時には、伸びてきたユハの手に肩を押されて、容易く引っくり返っていた。

頭に来るべき衝撃は、素早く敷かれたユハの大きな掌に防がれる。

近づく緑の瞳よりも、ユハの体の隙間から見える光景に私は慄いた。

聞き耳を立てられる事がないようにと、以前選んだこの東屋は、木立などの視界をふさぐものがない。ということは、覗き見が出来ないということではあるが、見ようとしなくてもいたる所まで余すところなく見えてしまうということだ。

何をしてくれとるんじゃ！ このエロおやじは！

王子の花嫁候補である乙女に、日の沈まぬうちにこんな屋外で堂々と迫るなよ。とぼっちりを食ったらどうしてくれる。

「視界にないね……」

寸前まで迫っていたユハの唇からぼそりと零れた言葉と吐息は、すぐに楽しげな笑い声に変わった。

さっと体を起こし私を引き上げても、ユハはまだ笑い声をたててい

る。

「ああ、サカキちゃんといると本当に愉快だよ」

こっちはその上に不がつきますけどね。

体を振り目尻に涙を溜めるまで思う存分笑い転げると、ユ八はすつと居住まいを正して私を見た。

「実際に闘技会が始まるのは十日後なんだが、公賓扱いになるから、開催前には饗宴が催される予定でね、明日の朝にはキノスを発つ。トーナメント方式で負ければそこまでだが、勝ち残れば日を要するし、上位入賞者は祝勝会に招待されることになる。だから」

だから

私は鮮烈な緑の瞳を真っ直ぐに見た。

「帰ってきたときには、私はもういないかもしれませんね」

ああ、そうだね。とユ八首を傾けて頷いた。

「もちろん早々に負ければ、十分に間に合うのだからうけれど」

「負けるつもりで臨むのではないのでしょうか？ 健闘を祈っていますよ」

負けるつもりがないのが、腹立たしい。この自信家め。

「短いようで長い間でしたが、お世話になりました」

別れの挨拶にと手を出すと、ユ八はぷつと吹き出した。



「まいったね。強がるでも拗ねるでもなく、本心から言われてしまつてはたまらないな。嘘でも少しは惜しんでくれてもいいんじゃないかい？」

「もう散々、他のご令嬢方に惜しまれたんじゃないのですか」

まあね。

そう言つてユハは立ち上がる。

続いて腰を浮かしかけた私を制するように、さつと私に向かつて跪いた。

「お元気で。俺なりにお慕いしておりましたよ」

その真摯な声音に、私は目を見開いて呆然とユハを見た。さつと取られた手を振り払えなかつたのは、緑の瞳がただ静かに澄んで見えたからかもしれない。ユハは恭しく手の甲に口付けると、すつと起立する。

「滞りなく運べば、なんとか駆けつけられるとは思つただけだね」

茶化した笑顔でそう告げると、来たときと同じように、紳士然とした動作で腰に手を回して、私をエイノの屋敷へと送り届けたのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3112j/>

---

賢者の失敗

2011年9月29日16時38分発行